
猫又と色情狂

遠堂 沙弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫又と色情狂

【Nコード】

N3216J

【作者名】

遠堂 沙弥

【あらすじ】

幼い頃から幽霊や物の怪が見える猫又ねこまた 君彦きみひこは、アメショーもどきの猫又に取り憑かれていた。一方、異性から異常なまでにモテまくる志岐城しぎじょう 響子きょうこは色情霊に取り憑かれたせいで男性不信に陥っていた。

そんな二人が出会って、果たして恋は芽生えるのか？
作者にとって初めてのドタバタラブコメディー、一応ほのぼのを目指していたりな・・・そんなお話。

猫又と青年（前書き）

この小説の主人公は、二人です。

話の展開によつては視点が変わったりしますので、出来るだけ誰の視点かすぐに

理解出来るように配慮するつもりですがそれでも読みにくかったら申し訳ありません。

猫又と青年

正直なところ、オレは『変な人』である。

変な人ではあるが決して『変態』ではない、あくまで他人より少し変わった人だ。

変な所、その1。

オレの名前は『猫又ねこまた 君彦きみひこ』という。

幸い名字を理由にイジメられたことはなかったが、からかわれたり笑われたりするのほうはもう日常茶飯事である。

今ではすっかり慣れたということもあって、猫又という名字のせいで特に思い悩んだりとか、そういうのはなかったりする。

変な所、その2。

物心つく前から普通の人には見えないモノが見えたりする、いわゆる『幽霊』とか『物の怪』・・・そういった類のモノだ。

幼い頃から『そういうモノ』が普通に見えていたので、それが『死んだ者』だという自覚が子供の頃にはなかったのだ。

生きている者と死んでいる者の区別がつかず、どうしても他の人には見えないのか幼い頃には不思議に思っていた。

今となってはそういう区別は一応ついてるので、出来るだけ見ないように・・・見えないフリをしようと試みる。

しかし、・・・幽霊というものは随分と自己顕示欲が強かったりした。

誰もが幽霊となった自分に目もくれない中、自分のことが見えている、存在を認識しているとバレたからさあ大変。

こぞって自分の存在をアピールしてくる幽霊達に、毎日ストーキ

ングされる始末。

おかげで幽霊が見えない回りの人達は、まわりつく幽霊を払いのけているオレの姿を見て、『危ない高校生』だと認識されてしまったのだ。

正直、猫又なんて名字でほんの少しだけ悩んでいた昔の自分がバカらしくなってくる。

だがしかし・・・！

オレには『その2』をも上回る、もっと迷惑極まりない変な所があるのだ！

ぶっちゃけこいつに比べたら『頭のおかしい危ない青年』だと思われる方が、どんだけマシか・・・っ！

『なあゝゝにをさつきからぶつくさ言ってただよ、君彦』

無視だ、むしムシ無視！

『おい、君彦つてばよう・・・返事位しろよなあ』

馴れ馴れしく話しかけるな！ 猫なで声出したって無駄だ、オレには通用しないからな！

『・・・おつ、あそこに見えるは愛しの黒依くろいじゃねえか？』

「なあにいゝゝ！？ 黒依ちゃん！？ どこだよどこだよ、カワイイ黒依ちゃんっ！！」

ハッ！

・・・オレの、バカ。

『ほんと、お前は可愛いやつだよ・・・』

うるさい、オレの頭にまとわりつくな！ あっ、バカ！ カバンを持ち上げるな、通行人が見たらどうすんだよ！

・・・そう。

オレの頭に、脇腹に、足元にまとわりつくぽっちゃりとしたこのアメシヨーもどき。

尻尾が2本・・・、つまり二又の尾を持ったこの猫。

何かの冗談か、シャレのつもりか？ 座布団やれねえぞこのレベルじゃ。

そう・・・私こと猫又 君彦は、どういっわけか猫又という物の怪に取り憑かれているのだ！

『けけっ、いいじゃねえか……。一人っ子のお前にゃ、オレ様みたいな愛玩動物は心の癒しだろ？』

うるさい、黙れ、普通の猫ならまだしも小生意気な言動が目立つお前なんぞ願い下げだ！

黒髪のショートヘアにメガネ、背格好は至って普通の平々凡々、趣味は料理と……。どこからどう見ても世間で言う『草食男子』な猫又君彦。

見た目はアメリカンショートヘアだが、本人（本猫か？）曰く血統書付きだと言い張る、雑種の『猫又』との奇妙な共同生活。

この数分後、君彦はある女子高生と出会っことになる。
果たして猫又に悩まされる君彦に、幸せは訪れるのか……。？

猫又と青年（後書き）

見切り発車のように始めてしまったこの小説。

他にも連載を多数抱えていますがいまいち付いたら即執筆！・・・という、いい加減な作者ですがどうぞ読んであげてください。

悩める女子高生（前書き）

今回はもう一人の主人公、響子の視点です。

悩める女子高生

ぶっちゃけ、あたしはものすごくモテる。

あつ！ 今のセリフでカチンと来たからって、足元に転がってる石を投げつけないでよっ！

理由は・・・もとい、それがあたしの意志とは程遠いものだってことを今から説明するから・・・っ！

あたしの名前は志岐城しぎじょう 響子、どこからどう見ても至って平凡な女子高生。

特に美人というわけでも、ものすごくブスってわけでもない。

家が金持ちってわけでもないし、・・・正直自分でもあまりに平凡過ぎてウンザリする位。

・・・にも関わらず。

回りの男共はあたしに言い寄って来る。

ナンパしてくる。

痴漢してくる。

ストーカーしてくる。

あたしが急にモテ始めたのは、12歳の時。

当時片思いだった男の子に卒業式の日に告白して、それからあたしの人生は一変した。

全然あたしに興味のない素振りを見せていた彼だったのにあたしの告白に即OK。

当然ビツクリしたけど、初めて出来た彼氏にあたしは舞い上がっててそんな些細なこと・・・その時は全く気にならなかった。

それ以降、あたしは自分でも頭がおかしくなる位・・・突然モテ始めた。

中学生になって新しいクラスメイトの男子生徒全員から、なぜか毎日のように告白されるようになったわ。

違うクラスの男子生徒からも。

先輩からも。

果てには先生からも！

その時からあたしの不幸は始まっていたわ・・・。

回りの態度が絶対おかしいってことを彼氏に相談したら、よりもよってこんなことを言ってきたの！

「オレの彼女がモテないわけがない、そんなこと気にしないでいいから早くやろう！」・・・って！

顔面パンチしてソッコー別れてやったわよ。

でも事態はどんどん悪くなる一方・・・。

最初は学校内だけだったのに、町ですれ違う通行人からも猛烈なアタックを受けるハメに・・・。

いや、確かに異性からモテたいなあ～っていう願望はあったわよ？だからといってどうしてここまでモテるのか、あたし自身理解に苦しんだわよ。

何度も鏡を見て、どこも変わった所はなかったし・・・。
自分で言うのもなんだけど・・・。

顔はホント普通だし。

モデルみたいに細いわけじゃないし。

胸だって言う程大きくないし（あ、ホント自分で言うってショック）

性格も・・・おしとやかじゃないし、癒し系でもないし・・・ど
ちらかと言えば凶暴な方だし。

異性にモテそうな要素をどんなに探しても、これといって全く手
掛かりなし！

かえって自分が落ち込む結果を引き起こしただけだったわ！

そんなこんなで、あたしは78回目の痴漢に遭った時点でボクシ
ングを始めた。

全ては身を守る為・・・、自分の身は自分で守るしかないってよ
うやく悟ったのよ。

なんでボクシングかって？

勿論最初はオーソドックスなところで、空手とか柔道とか合気道
とか・・・そういった道場に通った時期もあったわ。

でもね・・・それらはあたしには向いてなかったの、てゆうかあ
まり意味がなかったの。

相手に触れる、もしくは密着する技がある限り・・・身を守るこ
とに繋がらないってわかったから。

練習相手が寝技ばかり仕掛けて来たモンだから、相手の股間に蹴りを入れてやめてやったわ。

試行錯誤した結果、ボクシングに至ったというわけ。

これなら女性専用のジムもあるし、相手が男でもこっちから先にパンチ入れてやれば近付かれることもなかったし、あたしにはこれが一番向いてたのよね。

それからというもの・・・、あたしは必要以上に接近してくる相手には容赦なく抵抗する「防衛本能」が芽生えてしまったわ。

でもあたしの不幸はそれだけでは終わらなかった。

あまりに男を避け続けるものだから、あたしはだんだん「男」自体に嫌悪感を抱くようになってしまったの。

男はみんな敵、男はみんなケダモノ・・・！

防衛本能があたしに刷り込みしてしまって、あたしは男性不信に陥ってしまったわ。

だからといって恋愛対象が女になるわけでもない・・・、あたしはノーマルなもの。

ただ・・・何気なくクラスの子と恋バナに発展した時に、あたしが発した言葉で回りを凍りつかせたことがあったわ。

その時の話題は、好きな男の子のタイプ。

普通だったら「スポーツが出来る人」とか、「優しい人」とか、そついう感じで盛り上がる所なのにあたしは本音を言ってしまった。

「あたしに興味がない人」

あの時の沈黙は忘れない、でも今でもそれは変わらないわ。

あたしの好きな男の子のタイプは、あたしに全然興味がない人！
これに限るの。

モテるということは、それはあたしに興味があるからであって・
。

あたしに対して興味がなければ、執拗に言い寄って来ることはない！

痴漢して来ることもない！

無理矢理キスだの体だの求めてくることもない！

だって、「興味がない」んだもの！

何度聞かれてもあたしがそう答えるモンだから、その場にいた女子全員があたしに向かってこう言ったわ。

「あんたの好みのタイプって、絶対自分を不幸にするだけよ！？」

・・・今まさに不幸よ、なんだったら代わってよって言いたい。
でも仕方ないじゃない！

毎日ストーキングされたら、誰だってそうなるわよ！？

電車に乗る度、満員でもないのに100%の確率で痴漢に遭えば
誰だってそうなるわよ！？

痴漢をとっ捕まえて連行しても、痴漢被害者の常連となってしまう

ったあたしの方が実は誘ってんじゃないかって、逆に痴女扱いされたら誰だってそうなるわよ！？

あたしは公共わいせつ物か！？

そんなこんなであたしは出来るだけ目立たないように、誘ってんじゃないかって思われない為に努力してるわ。

回りから「暗い」って印象を与えるように、目元ギリギリでパツツンパツツンに切った前髪。

ホントは茶髪が地毛なんだけど、わざわざ黒髪に染めて天然パーマのロングヘアはダッサダサのおさげにして。

学校以外で外を出歩く時は必ずと言っていい程、上下ともジャージで・・・しかも紺！

スカートどころか、足が出るだけでもアウト。

出来るだけ肌を露出しないように、誘ってるように見えないように・・・。

あたしだって・・・ホントはオシャレのひとつもしたいわよ。

普通の女の子みたいにオシャレして、可愛い服着てメイクして町の中を歩き回りたいわよ。

でも今のあたしにはそんな行為は許されない、・・・てゆうか自殺行為。

高校へは女子高を希望したかったけど、あたしが14歳の時に両親と他界。

他に身を寄せる所もなくて遺族年金から出せるお金は公立高校が限度だった、なので結局地元の高校へ行くハメに・・・。

いつまでこんな状況が続くのかはわからない、でもあたしをナン

パしてくる男がいる限りあたしの戦いは終わらない。

あたしは原因がわからないまま、今も孤独な戦いを続けている。

ある日、あたしは買い物をする為に町へと出かけた。

いつものようにダッサダサな格好で、出来る限り人目を避けて大通りを歩かないようにしてたら・・・一人の男の子があたしに話しかけて来たわ。

バラ色と言われた高校生活を満喫出来ずに、苛立ちが募っていたせいかもしれない。

ただ単に間が悪かっただけかもしれない。

あたしは自分に話しかけて来た男の子に奇声を上げながら、気付けば思い切り殴り飛ばしていた。

彼があたしを・・・このモテモテ地獄から救い出してくれる運命の人とは知らずに・・・。

悩める女子高生（後書き）

最初この話を思い付いた時は、「君彦サイド」「響子サイド」として別々で投稿しようと思っていました。

でもそれじゃ二重投稿になるかもしれないだったので、各話で視点を变えることにしました。

どうしても君彦は君彦の、響子は響子の思いや考えなど、二人の心のすれ違いを書きたかったので、視点をそれぞれ固定させることに・・。

後に猫又視点も登場します、楽しみにしててください。

君彦と響子、出会う？

君彦は人通りの多い場所などを避ける傾向があった。

猫又に取り憑かれてからというものの浮幽霊などが君彦にくっついて来ることは少なくなったのだが、それでも出来るだけ目撃を避ける為に自然と通行人の少ない道を選ぶ習慣がついてしまっていたのだ。

幽霊は人通りの少ない寂しい場所を好むように思われているが、実は案外人通りの多い場所を好んでいたりする。

人混みに紛れ、あわよくば誰かに憑いて行こうという『念』が強いせいだと、君彦は猫又に教わったのだ。

君彦は新しいバイトの面接を終えてアパートの自宅に帰る途中で、目の前を歩く一人の女性に注目する。

足元をぼてぼてと歩く猫又も、君彦と同じタイミングで見つけた。

『おいおい、こりやまた大層なモンに憑かれてるみたいだな』

君彦は足を止める。

黒髪で長いおさげを結ったジャージ女性には、まるで白蛇が全身に絡まってまとわりつくようにしっかりと憑いていたのだ。

しかし白くて半透明な幽霊は蛇ではなくいつの時代の女性なのか、妖艶な笑みを浮かべながら君彦の方を向いてにっこり微笑む。

目が合った瞬間、君彦は全身に奇妙な感覚を覚えた。

金縛りとは違う……。

まるで全身に電気が走ったような痺れを感じて、ジャージ女性の後ろ姿を見ただけでも胸が熱くなって来る。

心臓の鼓動が速くなり、全身が火照った時・・・突然猫又が君彦の顔の辺りまでジャンプして強烈な猫パンチをかました！

『しっかりしやがれ、君彦っ！ ツツシャア ツ！』

「いだあ つつ！」

左頬に猫パンチを喰らった時、一緒にメガネも飛んで行く。悲鳴を上げて・・・左頬の痛みに君彦は我に返って猫又を見据えた、今さっき自分が一体どうなったのかよく覚えていなかった。

片手で血の滲んだ爪痕つめあとに触れながら、君彦は舗装された道に落ちたメガネを拾い上げて割れていないか確認する。

「いきなり何するんだよ、お前は！」

出来るだけ小声で猫又に文句を言いながら、無事だったメガネをかけた。

猫又の姿は君彦にだけ、・・・もとい霊力の強い人間にしか見えないらしい。

しかしテレパシーなどで会話が出るわけではないので、どうしても猫又と話するには声に出さなければいけなかった。

外で猫又と会話する姿を何人かに目撃されて、君彦が『変人』だという評判が広まってしまった原因のひとつでもある。

『何言っただ、オレは惑わされたお前を助けてやった恩人だぜ？ 君彦・・・あれはな、一種の色情霊ってやつだ』

鋭い眼差しで猫又が言った。

君彦は少し驚いた表情になり、もう一度ジャージ女性の方へと視

線を走らせる。

しかしさっきのような奇妙な感覚はもうなく、まとわりついている幽霊と目が合っても特に何も感じなかった。

「色情霊って・・・、確か人間を・・・その、違う意味で『襲う』悪霊のことか!？」

『一般的な色情霊は人間を犯すモンだがな、あいつは逆タイプみたいだぜ!？ 取り憑いた人間の色香を高めて、周囲の人間に犯させる・・・。一般のヤツに比べたら質がワリーな。君彦、お前も色情霊の色香に惑わされて危つく痴漢に成り下がるトコだったんだ、気を付けな』

「でも、今は全然平気だけど？」

『そりゃオメー、このオレ様が憑いてんだから影響が少ないだけだ。オレ様に感謝すんだな！ それより・・・、さっさと行こうぜ！ オレ腹減っちゃった！
って君彦!？ お前

どこ行くんだったよ!!』

「あんな^{もの}霊に取り憑かれたままだなんて、・・・放っておけない！ 色情霊の存在をあの人に教えてあげて、早くお祓いするようにしなきゃダメだ！」

『だからそういうお節介はいい加減にしろって言ってんだろが、おい君彦っ!？』

猫又の制止も聞かず、君彦は真っ直ぐと色情霊に取り憑かれている女性の元へと歩いて行った。

君彦の接近に気付いた色情霊は、なおも君彦を誘惑するが通用し

ない。

「あの・・・、すみません！」

そう言つて君彦がジャージ女性を呼び止める為に、背中を叩いた時だった。

勢いよく振り向いた女性の瞳の奥には炎が燃え盛っており、齒を食いしばりながら怒りを露わにしている。

そして・・・。

「ナンパされんのもいい加減ウンザリしてるって、・・・言つてんだろうがあああ
つつ！！」

右ストレートが見事君彦の頬にクリーンヒットして宙を舞う。

突然の出来事に何が何だかわけがわからない君彦は、愕然としたまま倒れ伏してしまった。

そして猫又も二本足で立ち尽くしたままガ
ンと・・・、
口をあんぐり開けている。

『き・・・っ、き・・・っ、君彦

つつ！？？』

君彦と響子、出会う？（後書き）

幽霊・物の怪に関する知識は、実際のものとは多少設定を変えていますのでご了承ください。

あと基本的には今回のような書き方で物語は進行していきます。ご了承くださいほしいことばかりですが、どうぞこれからも続きを読んでもらってください。

物の怪の世界へようこそ

紺色のジャージを着た黒髪のおさげ娘、もとい志岐城 響子に殴り飛ばされた君彦はそのまま気を失ってしまった。

ハッキリ言って君彦はケンカが弱い、運動神経も鈍い、ボクシング経験のある響子の右ストリートを避ける反射神経などを持ち合わせているはずもない。

完全に伸びてしまった君彦の回りを二本足でちよろちよると走り回りながら猫又は、前足をバタバタとバタつかせて慌てふためく。

『君彦っ!？ 君彦

っ!！ しっかりしろ、傷

は浅いぞっ！ 不死鳥の如く蘇りやがれえ

っ！

それで早く家に帰ってオレ様にメシをたらふく食わせるんだああ~~~~っ!！』

所詮猫の考えることなど、飼い主(?)より食い扶持である。

響子は伸びた君彦を毛程も気にすることなくそのまま立ち去ろうとしたので、猫又の目がキランと殺意に満ちてると二足歩行で追いかける！

ぼてぼてとお腹を揺らしながら！

『おいテメー、待ちやがれいっ！ オレ様の食い扶持に何てことしやがんだ、しかもそのまま見捨てて立ち去ろうたあどっとう見だクラアッ!』

びしいつと左前足を突き付けるが、当然響子に猫又の声どころか姿すら見えていない。

響子にまわりついている色情霊はクスクスと含み笑いを浮かべながら、冷たい眼差しで見据えている。

『カッチ
ン！ 完全にキレたぞ・・・このオレ様を
馬鹿にしたらどうなるか！ 身を以て教えてやるぜ、ツツシャアア
ア
！！』

牙を剥き出しにして威嚇すると猫又は全身の毛を逆立てて、ぽっ
ちやりした体とは思えない程高く高くジャンプした！

その優雅で華麗なジャンプはフィギュアスケートのようにとても
しなやかで、猫又は多少自分に酔ったような表情を浮かべながら大
股を広げて、160センチはある響子の頭の上を軽々とまたいで行
く。

それから見事に四本足で着地して、満足げな笑みを浮かべた。

『ふっ・・・、華麗に決まったぜ！』

猫又にまたがれた響子は突然、持っていたエコバッグを落として
そのまま硬直していた。

まるで金縛りにでもあつたかのようにじっと立ち尽くしたまま、
怪訝な表情を浮かべて視線をきよろさせる。

（え・・・、今のは何！？ 何か急に全身が軽くなったような・・・
、なんだか頭がスツキリしたような？？）

言葉ではうまく説明出来ない奇妙な感覚に頭を悩ませていると、
自分の目の前に立っているものがふいに目に入った。

毛色はアメリカンショートヘアを思わせるが、模様はマーブル状
ではなくトラネコそのものである。

子猫とは到底思えないそのふてぶてしい顔はどうひいき目に見て
もせいぜい7、8歳といった所、メタボ気味なぼってりとした体型
と普通の猫とは思えない巨大な体。

小型犬にすら匹敵する・・・いやそれ以上かもしれない大きさであり、響子はこれ程までに大きな猫を今まで一度も見ることがなかった。

なぜか挑戦的な眼差しでこちらを振り返ったポーズのまま、響子をじっと見据えているではないか。

そして何より・・・体型や大きさ以前に、その猫は今まで響子が見て来た猫とは明らかにオカシイ所があった。

（え！？ 何・・・え！？ 尻尾が・・・、
尻尾が2本生えてる！？
ええっ！？）

奇妙な沈黙が流れた。

響子は商店街の裏道でナンパしてきた男の子を殴り飛ばした後、変な猫と一触即発な雰囲気にも直面している。

と、まさにその時だった。

「うう~~~~ん・・・、いたたあ・・・。」

響子の後ろで気を失っていた君彦が意識を取り戻して、呻きながら起き上がった。

それを確認した猫又が声を上げる。

『情けねえぞ君彦、女のパンチで伸びるなんざ男じゃねえぜ！』

「えっ！？」

響子は耳を疑った。

後ろを振り向いた途端、猫がいた方から声がしたのだ・・・おっさんみたいな声が。

そしてもう一度瞬時に振り返るが、目の前におっさんなどどこにもいない。

いるのはブサイクな猫だけ。

まさか・・・と思いつつも、響子は顔を引きつらせながら冷や汗をかいている。

響子が震える手で猫又の方を指さし、口を金魚のようにパクパクさせているのを見た猫又は面白げに、悪巧みを思い付いた笑みを浮かべた。

動物が笑ったり怒ったり出来ないと思うことなかれ、特にこの猫又は・・・。

君彦は殴られた頬をさすりながら呆然とした仕草で目の前の光景に目をやる、そこには色情霊に取り憑かれている女性・・・響子と猫又が向かい合っていたのだ。

事情がうまく飲み込めない上、猫又の姿は普通の人間には見えなさと理解していたので、余計に向かい合っている光景が不思議に思える。

「・・・え？ 何この風景。 何が一体どうなってるんだ！？」

君彦がこちらの状態に気付いたのを合図に、猫又はひょうきんな笑みを浮かべながら軽くジャンプすると二本足で着地して、この間テレビで見たビートたしのコマネチを完コピして見せた！

『コマネチっ！！』

それをバッチリ目撃した響子は悲鳴を上げる。

同時に君彦は響子の絶叫を聞くなり、この女性には猫又が見えていると瞬時に把握した。

物の怪の世界へようこそ（後書き）

基本的に他の小説と違って、こちらの方では短めの掲載といたします。

ギャグ・コミックス感覚で書いているので気持ちの方をリラックスさせて、頭の中の方もゆるゆるにして読んでいただけたらと思います。

ちなみに、猫又のモデルは作者が現在飼っている愛猫をそのまま描写しております。

今年の夏で15歳、猫は10歳を超えると猫又の修行期間に入り人語も理解することのこと。

うちの猫も猫又の修行中、現在人語を（一応）解しておりますが猫集会には参加していないので試練を受けることはないと思われます（・・・ほっ）

第一印象から決めてました！（前書き）

今回は響子視点を中心に進められます。

やっぱりコロコロ視点が変わるのは忙しく感じられますね。

第一印象から決めてました！

なぜかあたしは喫茶店に来ていた、あたしの向かいにはさつき殴った男の子。

フザけているのかからかっているのか・・・、自分の名前を『猫又 君彦』だなんて・・・。

このあたしが見知らぬ男と喫茶店！？ 全く・・・冗談じゃないわよっ！！

それもこれもぜんぜんぶ、この奇妙な猫のせいだわっっ！

この尻尾が2本ある不気味な猫は、猫又君彦の隣の椅子に座って後ろ足で首の付け根あたりを掻きまくる。

やゝめゝてゝっ！ 猫の毛が飛び散ってるから！ ノミとかいないでしょうねっ！？

「あ・・・あの、さつきも言ったと思うけど」と、猫又君彦が改まった口調で切り出してきた。

「あゝ、あたしに霊が取り憑いてるってヤツ！？ 残念だけどそんなナンセンスなナンパ法じゃ、このあたしは引つかかないから。

っ！かそれ以前にあたし、男に全く興味ないし？ むしろ大嫌いだし？ 侮蔑の対象だし？」

どうやらこの男、あたしに霊が取り憑いてるから面倒なことになってるとかなんとか・・・忠告しに来たみたい。

それ以前にあたしはこの不気味な猫について説明してほしいんだけど！？

大体このあたしがわざとわざと時間を割いて大嫌いな男の誘いを受けてまで、この不気味な猫について聞いてやるうとついて来てやつ

たつてのに。

あたしが猫又君彦に目もくれずカフェラテを飲んでたら、こいつ・
・あたしの目の前で猫と会話をし始めたっ！

目の前で内緒話っ！？ 天然か、こいつわっ！！

「をい猫又・・・。どくくしてお前の姿は見えてるのに彼女、肝
心の色情霊が見えてないんだよっ！？ 色情霊を見えるようにしな
いとどれだけ説明しても信じてもらえないじゃないか、一体どうす
んだよ！」

『あのなあ・・・、そもそもお前。見える見えない以前にこの女
に忠告してやろうと意気込んでたんじゃねえのかよ！？ こういう
時だけオレに頼ってんじゃねえって、その辺はお前が何とかしろよ
な』

「でも彼女・・・、二足歩行で言葉を喋るお前に興味津々みたいじ
やないか。ほら、さっきからお前の方をちらっちら見てんぞ！？
カフェラテ飲みながらちらっちらと何か言いたげだぞ！？ お前
から説明してやれば納得するんじゃないのか！？ お前、物の怪の
親玉みたいなモンだろうが」

『やだよメンドクせえ・・・、大体オレあ誰が何に取り憑かれてよ
うがどうでもいいんだよ』

「無責任なことやってんなよ、彼女がお前のことを見えるようにし
たのはお前の仕業なんだろうが！？ ちゃんと責任取ってだなあ・
・っ！」

「あのさあ！？ 特に用事がないんならあたし、もう帰りたいんだ
けど！？」

我慢出来なくなったあたしは、イライラとした態度を隠しもせず
に言い放ってやった。

すると猫又君彦は慌てるように両手をバタつかせながら何かを訴
えようとしている、動きがほんとバカっぽい。

猫について話す気がないのなら、こんなもやしつこに用はない！
あたしは引き止めようとする猫又君彦のことを思い切り無視して
席を立ち上がった、すると・・・。

「よお姉ちゃん、そんないかにもな童貞君は放っておいてこのオレ
と遊ばね？」

「・・・はあ！？」

金髪のリーゼントにグラサン、ここはハワイかって格好をした、
いかにもチャライ男があたしに話しかけて来る。

どうやらこいつ・・・すぐ近くの席で食事中だった所にあたしが
店に入って来て、席を立つまでずっと狙ってたみたい。

あたしはあからさまに嫌悪感たっぷりな表情を浮かべて睨みつけ
てやる、こういう手合いは攻撃系で対処するに限るから！

チャラ男があたしの方に掴みかかろうとした時・・・。

「
っ！？」

チャラ男の腕を掴んだ猫又君彦は、怖がる様子もなくあたしをか
ばうように立ち塞がった。

当然自分に逆らった相手に怒りを隠せないチャラ男の顔がみるみ
る赤くなっていく、ヤバイ・・・こいつ下級不良タイプだわ！？（
見た目からそうだけど・・・）

自分よりも明らかに弱い相手に限って、生意気な行動を取られた

らすぐさま戦闘態勢に入るといふ弱い者いじめタイプっ！！

「すみません、彼女は今オレと話をしてるんです。用事があるなら後にしてもらえませんか？」

何なに！？ 何なのその余裕っ！？ 何、実はケンカが強いとか！？ さっきあたしに殴られて伸びてたじゃない！

明らかに弱かったじゃない！ なのにどうして自分よりケンカが強そうなチャラ男に向かつてそんな強気な態度ワケ！？

やっぱバカ！？ こいつバカなの！？

・・・う、動揺してるのはあたしの方みたい、とにかく！

「ちよつとあんた・・・、無理してんじゃないわよ。あたしのことは大丈夫だから、巻き込まれない内にさっさとどっか行つてよね！」

「そうはいかないよ、だってこの人・・・君の色情霊の力に惹きつけられて惑わされてるだけだから。悪霊に惑わされた人間はすぐに根源から引き離さなくちゃ大変なことに・・・」

ん？ それってちよつと待つて！？

猫又君彦の言い回しに引つ掛かったあたしは懸命に湧き上がって来る怒りを抑えながら、こいつの胸ぐらを掴んだ。

「それってなに？ つまりあんたが止めに入つたのってあたしを助ける為とかじゃなくて、このチャラ男が大変なことにならないように、あたしから引き離そうとしてるだけってこと！？ 今言つた根源って・・・、諸悪の根源はこのあたしの方だってか！？」

「え、だって・・・君のパンチって結構スゴかったし、オレが助ける必要性を感じなかったわけで・・・。それにオレが言いたいの
は諸悪の根源ってのは君に取り憑いてる色情霊のことであって、別に君がどうこうってわけじゃないよ！」
あつ、

ホラ！ 今、色情霊がこの人のこと誘惑してるっ！！ 惑わされて自我を失う前に早いとこ何とかしなくちゃ！」

こ、こいつっ！

あたしのことは・・・、アウト オブ 眼中っ！？

今までこんなことは有り得なかった。

いやいや、別に自意識過剰とかそういった意味じゃなくて・・・っ！

あたしが自分の意志とは関係なく周囲からモテ始めてからと言うもの、あたしに注目しなかった男は今の今まで存在しなかったという意味であって・・・っ！

え・・・？ なに、ってことはもしかしてこいつ。

もしこいつの言う『色情霊』っていう話が本当だったとして、最初からこの人・・・。

あたしに興味があって近付いたんじゃないってこと？

むしろあたしに取り憑いてるっていう『色情霊』を何とかする為に、あたしに声をかけて・・・お被いしようとしてただけってこと！？

あたしの心臓が大きく跳ね上がる。

急に鼓動が早くなって、顔がだんだん熱くなって来るのがわかった。

瞬間。

『ぎにやああああああああああっつつつ！！』
「ぎゃああああああああああっつつつ！！」

あたしとブサイク猫との絶叫が綺麗に八モる。

猫又君彦は何を思ったのか、椅子で毛づくろいしていたブサイク猫の首根っこを掴むとあたしの頭の上に乗せて来た。

重くはなかったけど、ブニャブニャにたるんだお腹と肉球の湿った臭いが、あたしの顔を襲う。

第一印象から決めてました！（後書き）

平々凡々な草食男子である君彦くんが、ヤンキーに堂々と立ち向かう姿。

やはり違和感ですか？（笑）

なぜ彼が恐れることなくヤンキーに逆らえたのか、それは後日近い内に語られることとなります。

あ、前話でも書きましたが君彦くんが「ケン力が弱い」って設定は変わりません。

ですから「実はケン力が強かった！」みたいなことにはならないので、ご安心を！

猫又活用法（前書き）

今回は君彦視点でございます。

「書く」分には慣れましたが、続けて「読む」と違和感があります。もう少し工夫するべきかもしれませんが、まだしばらくの間この手法でお付き合い願います、すみません。

猫又活用法

とりあえずオレは勘を頼りに、椅子で無関心を決め込んでいる猫又の伸びきった首根っこを捕まえて、色情霊に取り憑かれている女性・・・志岐城響子さんの頭上にいる（ヤンキー風の男を今まさに誘惑している）色情霊目がけて猫又を突き付けてやった。

殆ど、志岐城さんの頭の上に乗せる形になっ
てしまったが。

だがしかし、案の定・・・！

猫又の霊力は他の霊を鎮める力があるのか、霊界に関する知識が特に詳しいわけでもないから本当の所はよくわからないけど。

とにかく志岐城さんにまわりついている女性の姿をした色情霊が、猫又の存在によって苦しそうな表情を浮かべるとそのまま志岐城さんの体から離れて行くのがオレの目には見えた。

いつもならあれだけハッキリ見える霊だと声や悲鳴が聞こえて来そうなものなんだけど、あの色情霊は姿が見えているオレに対して何も言わなかったな・・・。

生きている人間に取り憑く霊の大半が、大体何かを訴える為に人間に取り憑くものなだけで・・・。

オレがそんなことを思いながら猫又の体重が志岐城さんにかからないように、ずっと首根っこを捕まえて頭の上にソフトに乗せていた時だった。

色情霊の力によって惑わされていたヤンキーは、我に返ったように志岐城さんのことを上から下へ確認するようにつめてている。

もっともグラサンをかけているからどんな目つきなのか、本当に見つめているのかオレには確認のしようがないけど・・・。

ようやく自分が惑わされていたことに気付いて、頭をぼりぼり搔

きながら嫌悪感を露わにした表情を浮かべる。

「チツ・・・、なんだよこのイモくせえ女は！　なんでこのオレがこんなダセエ女を口説かなきゃなんねえんだよ、胸クソワリー！」

渋谷系のような喋り方で文句をたれると、男はそのまま不満たつぷりにブツブツ呟きながら喫茶店を出て行ってしまった。

・・・勿論、ちゃんとお金は払って行ったようだが。

とりあえず良かった、何事もなく済んで。

だがしかしホツとするのも束の間、オレは安堵していて猫又を志岐城さんの頭の上に乗せっぱなしにしていたのを忘れていたのだ！　志岐城さんと猫又が大声を張り上げた後にオレの名前を何度も叫ぶのが聞こえるまで・・・、オレは不覚にも全く気付かなかった。

また志岐城さんを怒らせてしまった・・・。

とりあえずヤンキー男の態度の豹変を見て不審に思った志岐城さんは、改めてオレの話を聞く気になってくれたみたいだ。

そのままオレ達を置いて喫茶店を出て行かず、志岐城さんは再び椅子に座ると両手を組みながら今度はカプチーノを注文する。

「
で？」

ぶすつとしかめっ面をしながら、志岐城さんはたった一言・・・オレ達に事情説明を求めた。

オレは不意に右隣の椅子に座っている猫又の方に視線を送るが、さつき首根っこを掴まえたことをまだ怒っているのか・・・。

こっちの方はふくれっ面をしながらそっぽを向きやがった。

ともかくまずはさつきのことを謝った方がいいよな・・・理由を説明しながら。

「あの、さっきのはホント・・・ごめんなさい。志岐城さんをナンパしようとした男の人が色情霊に惑わされているのを見て、猫又を使えば色情霊の誘惑を断ち切ることが出来るのかと思ったから・・・、ついあんなことを」

「あ、そう・・・それで？ その色情霊とか言うやつは退治出来たわけ？」

「いや、オレは別に霊媒師とかそういうのじゃないから靈魂を鎮めたり成仏させたりする能力は持ってないんだよ。オレに出来るのはこの世に彷徨っている幽霊とか、猫又みたいな物の怪が見えるっただけで・・・。さっきのはあくまで、猫又で一時的に志岐城さんから引き離れたっただけなんだ！ 多分・・・、志岐城さんの周辺に猫又の気配がなくなればまた戻って来ると思うけど」

重い沈黙が流れる。

オレの話をちゃんと信じてくれてるのだろうか？ それとも頭のおかしい奴だと疑われてるんだろうか？

突然オレの脳裏に、昔の記憶がフラッシュバックする。

中学生の時、幽霊が見える話をクラスの友達にしまつて・・・避けられたことを。

その時オレのことを助けて、かばってくれた黒依ちゃんの笑顔を。

黒依ちゃんの笑顔を思い出したら、勇気が出て来た。

「でも、諦めちゃダメだよ！ きちんとした霊媒師の人に相談してお扱いしてもらえば、今みたいなことはもう起こらないから！ オレも手伝うからさ、だから志岐城さんも一緒に頑張ろうよ！」

だが志岐城さんはオレを睨みつけたまま・・・、まるで値踏みするような眼差しで無言を貫いている。

やっぱり会っていきなり「悪霊に取り憑かれていますよ」って言うても、信じられるはずがないよな。

でも・・・オレは諦めたくない、目の前で困ってる人がいるのに。しかも霊絡みで悩んでる人ならなおさら、霊を見ることが出来るオレが何とかしてあげなくちゃ！

と、オレがもう一度説得しようとした時だった。

「・・・あんたが言ってること、どうやら本気でホントみたいね」

深い溜め息をこぼしながら、志岐城さんは観念したような口調で肩を竦める。

ちょうどその時志岐城さんが注文していたカプチーノが来たわけだが、必死で説得したせいで声が大きくなったオレの台詞をカプチーノを持って来たウェイトレスが聞いていたようだ。

微かに笑いをこらえて、しかもオレを見る目は変人扱いする眼差しそのものだった。

・・・まあ、今更変人扱いされるのは慣れてるからオレはいいとして・・・志岐城さん、変人ワールドに巻き込んですみません。

オレはウェイトレスが完全にどっかへ行ってしまうのを横目で確認してから、さっきの志岐城さんの言葉に感謝の言葉を述べた。

「オレが言ったこと、信じてくれるんですか!？」

「信じるも何も・・・、その不可解な猫が存在している時点で疑いようがないでしょ!？　ここの喫茶店、ペット入店お断りの看板をする位ペットの出入りを厳しくしてるってのに・・・誰一人とし

てその猫の存在に気付かない上に、注意すらして来ない。そいつがあんたとあたし以外に『見えてない』って、そう思っしかないじゃないの。だからその・・・何だっけ、色情霊？それがあたしに取り憑いてるってのも、一応・・・百歩譲って信じてあげることにしたの！」

志岐城さんがオレの言うことを信じてくれたことに、思わず嬉しくなつてオレは思い切り安堵の笑みを浮かべた。

あれ・・・？ 志岐城さんの顔が赤い、どうしたんだろ・・・。
オレが不思議に思っていると、すかさず猫又の奴が茶々を入れて来る。

『だから言つたろー、オレ様の姿を見えるようにすりゃどんなに頭の固いやツだつて、お前のすつとんきょーな話を信じざるを得なくなるってな・・・！』

「そんなこと一っ言も言つてないけどな！」

相変わらず偉そうな態度をしている猫又の丸まった背中を、オレは片手で逆撫でしてやる。

・・・と、猫又の相手をしている場合じゃなかった！

オレはすぐに志岐城さんの方に向き直つて、早速色情霊を抜う為の話題に切り換えようとした。

しかしまして猫又が口を挟んで来やがる！

『君彦、意気揚々としてる所ワリーけどな・・・。その女に憑いてる色情霊の浄霊を、そんじょそこのインチキ霊媒師に依頼しようとしても無駄ってモンだぜ？』

「何でっ！？ 一体どういうことだよ、猫又!？」

オレだけでなく志岐城さんも猫又の方に注目した。

しかも鈍感なオレは、志岐城さんの目の前で思い切り動揺した態度を取ってしまう。

一番不安で心配しているのは彼女の方なのに、本当に全く

オレのバカ！

猫又活用法（後書き）

今回出て来た「浄霊」について。

そもそも霊を祓う用語（方法）として、除霊と浄霊という2種類の言い方が存在します。今回私が選んだ浄霊というものは、除霊に類似した言葉として使われることが多いらしくその場合、除霊も浄霊も、人に取り憑いて災いをなす霊（悪霊や怨霊、水子の霊など）を除去するための霊能力、または儀式のことを指します。

この2種類の違いとして除霊の方は、悪霊や怨霊などと「対決」して「強制的」に排除しようとする霊能力の事だと、この小説ではそういった扱いをさせてもらっています。

そして今回猫又が言っている浄霊というのは、憑いている霊の不浄な部分を浄化させることで清めて、向上・・・または納得させることで災いを止めさせ、解決しようとするもの、として扱っています。

基本的に争い事を好まない君彦に対して、響子に取り憑いている霊が例えばタチの悪い悪霊と言えども「除霊」という荒々しい方法は選ばない。

そんな猫又の、君彦に対する「愛」から選び取った救済方法だったのかもしれませんが。

純粹過ぎるのも、かえって罪

猫又が放った言葉に君彦だけではなく響子も少なからず驚いていた、君彦はともかく響子については『霊』に関してはテレビで『本当にあつた怖い話』や『怪談モノ』をたまに見るだけという程度の知識なので、全然詳しくないと言っても過言ではない。

かくいう君彦は『霊が見える』と一口に言っても、霊に関して詳しい知識を持つているわけでもなく、ましてや霊に関して調べたりした経験もない。

むしろ『霊が見える』だけにテレビで怖い話や幽霊モノをしていたら、怖くて見る事が出来ないという……。

君彦にとってそれはテレビの中での話ではなく、実体験に基づく内容でもあつたりするので悪霊に対する恐怖感は『霊が見えない人』に比べたらその上をいった。

もしかしたら響子よりも霊に関する知識は乏しいのかもしれない。そんな状態の二人に向かって猫又は、響子に取り憑いている色情霊を抜うことが出来ないと言ってるように聞こえて動揺していたのだ。

「ちょっと……それどういうことよ!? こいつの話じゃお被いすればあたしは色情霊から解放されるんじゃないの!? 話が違くない!」

不安で一杯なんだろうと心配していた君彦は、響子の口調がより一層強くなっているのを聞いて少しだけほっとしていた。

てつきりシヨックが強くて落ち込まれるかと思っていたのだが、これだけ声を張れるなら君彦が思っている程そんなに傷付いてるわけではなさそうだと思ったのだ。

猫又がテーブルの上に乗ると、左手を舐めて顔を洗う仕草をしな

がら説明し出す。

『オレ様が見たところ・・・、お前に憑いてる色情霊は相当根強い念を持つてる。そんな手強い悪霊相手にだぜ？ 適当に転がってる霊媒師をぶつけたところで、どうせ時間が経てばすぐに戻って来るだろうつてだけの話よ』

「・・・そんなに質の悪い霊なの！？ あたしに憑いてる奴って・・・」

響子の顔色が悪くなる、それもそうだろうと君彦は内心想った。ただでさえ自分が悪霊に取り憑かれていることを知ったばかりなのに、それが普通の霊媒師では歯が立たないと言われてしまう。

やはり不安にならないはずがないのだ、ほんの少しでもほつとした自分にムカツ腹が立った。

『まあ、大抵の色情霊は自分が取り憑いた相手を犯すモンだからな。同性の霊つてのもあるかもしれないが、それでも取り憑いた相手に被害が及ぶよう周囲に悪意をばら撒くってパターンはオレもそんなに聞いたことがねえよ。それだけお前自身か、それとも先祖代々が恨みを買ってるか・・・。どっちにしろこれだけの念はよっぽどだぜ？ だから諦めな、凄腕の霊媒師なんざ稀だ』

再び沈黙が走った。

響子は口をつぐんでうつむいている、ぎゅっともの上に置いてる両手を握りしめた。

（・・・あたしが異常に異性を刺激していた理由、これだったんだ。それなら納得いくかもしれない、あたし自身が特に変わった所なんてないし・・・そう考えたらこいつらの言ってることを信じても

いいかもしれない。あたしがおかしくなったのは、その色情霊っていう悪霊のせい……。そいつのせいであたしの人生は狂わされた……。あたしがこんな風になったのも、全部こいつに取り憑かれていたせいだったんだ！）

そう思うと悲しみより怒りの方が増して来る。

しかし原因が分かってても対処法がどうしようもないならお手上げ状態である、
とその時。

君彦がハツとした顔つきに変わると沈黙を破った。

「……方法があるかも！」

君彦の言葉に響子は目の前に座っている男の子の方へと視線を送る。

これまで……、色情霊に取り憑かれてからと言うもの響子が異性を真っ直ぐと見つめたことはなかった。

原因がわかったからかもしれない、もしかしたら君彦にだけは色情霊の影響がないからかもしれない。

それでも響子が異性のことを真っ直ぐに見つめたのは、12歳以来だった。

君彦もまた響子の瞳を真っ直ぐと見つめ返して屈託のない笑みを浮かべる、途端に響子は視線を逸らした。

「猫又だよ！」

「は！？」「はあっ！？」

またも二人の声が八モる、もしかしたら二人は意外にも息が合うのかもしれない。

そんな二人の奇妙な反応に臆することなく、君彦は突破口を見つ

けた喜びに自然と声が弾んだ。

「ほら、さつき志岐城さんに猫又をくつつけたら色情霊の誘惑効果が相殺されたじゃないか！ それなら色情霊を祓うことが出来る霊媒師を見つけるまでの間は、志岐城さんの側に常に猫又を常備させれば色情霊の力を弱めることが出来るんじゃないかな！？」

『お前な、オレのことを装備品か何かと勘違いしてねえか！？』

「あたしにこの猫飼えって言うわけ！？ 言っておくけど保護者が猫アレルギーな上に、あたしのマンションはペット禁止なんだけど！・・・あ、こいつ他の人には見えないんだっけ？」

しかし他に方法がない、君彦は二人の文句には耳を貸さずに何とか押し通そうとする。

「今まで志岐城さんが色情霊のせいでもんな目に遭って来たのか、オレには想像するしか出来ないけど・・・。男性不信に陥る位ヒドイ目に遭ってるってのはわかったつもりだよ。それならせめてほんの少しでも、どんなに小さくても試してみる価値はあると思うんだ！」

『お前・・・、ひょっとしてさり気なく厄介払いしようとしてねえか！？』

猫又が疑わしそくに君彦を睨みつける、しかしこの屈託のない笑顔と確信した強い眼差しは裏も何もない・・・。

本音から響子のことを案じて、そして提案しているんだと猫又は察した。

『わかった・・・、お前の言いたいことはよくわかったけどな！ 残念だけどそれも無理だ、オレはお前に取り憑いてんだぜ？ 他の奴に取り憑こうモンならそれは二重契約と一緒になっちまう、だから駄目なの』

君彦が猫又の目と鼻の先まで詰め寄って反論した。

「何だよその二重契約ってのは！？ 言っとくがオレはお前に取り憑いて欲しいなんて頼んだ覚えはないぞ！？」

『霊界の何たるかも知らないド素人がオレに反論か？ お前に覚えがなくても、オレはお前に取り憑くようになってんの！ とにかく！ オレが四六時中この姉ちゃんの側に居憑くことは出来ねえ、どんな理由があろうともな』

万策尽きた、と誰もが思った。

しかし君彦は全く諦めておらず、それなら仕方ないなという程度に肩を竦めると最後の方法と言わんばかりのテンションで告げる。

「それじゃ・・・、猫又に取り憑かれてるオレが志岐城さんの側にいるしかないな」

「えっ！？」

響子の心臓の鼓動が早くなった、目をぱちくりとさせて金魚のよう口をぱくぱく。

君彦の爆弾発言に響子が言葉を失っていると、猫又は野次馬根性ならぬ野次猫根性でにやりとしていた。

君彦のモットー（前書き）

君彦のモットー

君彦の何気ない言葉に、猫又と響子は口をあんぐりとさせながら絶句していた。

猫又に関しては絶句と共に含み笑いすら浮かべているが、二人のそんな反応を見て自分が何かおかしいことでも言ったのかと全く自覚がない態度で君彦は首を傾げている。

『をいをい、エライまたスピーディーな展開じゃねえか。まさか会っていきなり交際宣言たあ、お前も隅に置けねえなあ・・・って黒依はどうすんだよ？ ああ、二股？ 二股君彦ってか？』

「お前は一体何の話をしてんだよつ！ オレが言いたいのはそのいうことじゃなくてっ！！ 猫又に取り憑かれてるオレが志岐城さんと一緒にいることで、その間だけでも色情霊を何とか出来ないかって意味でだなあ！ 全く・・・オレはともかく志岐城さんに失礼だろ」

君彦からハッキリとそう訂正されて、何とも複雑そうな表情を浮かべる響子。

本来ならばこんなぞんざいな扱いをされる方が響子にとっては願ってもないことなのだが、ここまで眼中にない扱いをされるのも色情霊に取り憑かれて以来滅多にないことであつた。

とりあえず君彦の言いたいことはわかったのだが、どう考えてもその案が無謀かつ有り得ないという事実だけは否めない。

「言つとくけどそんなのあたしは絶対お断りだからね！？ ただでさえ男が大嫌いなのに、何で今日初めて会ったばかりのあんたこれから先もずっと一緒にいなきゃなんないわけ？」

「確かにそうかもしれないけど・・・、せめて凄腕の霊媒師が見つかるまでの間だけでもさ」

「却下！」

『もうやめとけて君彦、本人がイヤだっつってんだから放っておきやいいんだよ』

「あんたは黙ってなさいよ！」

響子が苛立ちを猫又にぶつけると、猫又もまた響子に向かって『フーッ！』と威嚇した。

このままでは埒が明かれないと思った響子は君彦を睨みつけながら、本当の目的を尋ねる。

やはりどうしても君彦のことが信用出来ない。

自分に色情霊が取り憑いているという点に関しては認めるとしても、響子と全く関わりがない上に放っておいても君彦自身に何か災いが降りかかるわけでもない。

響子を助けることに何の利益も発生しないのに、なぜ君彦はこうまでして響子を助けようとするのか理解出来なかったのだ。

ましてや君彦はれっきとした『男』だ、『オス』だ、『male』だ。

色情霊に取り憑かれている限り響子が戦い続けなければならない最大の敵である。

だから響子は、君彦ですら心から信用することが出来ずにいたのだ。

「・・・ひとつだけ聞くけど、何であんたはあたしなんかの為にそこまで必死になって助けようとするの？ あたしを助けてあんたに

何か得があるわけ？ 仮にあんたのお陰であたしが色情霊から解放されたとしても、あたしがあんたにお礼をするとは限らないのよ。だってあんたが勝手に一方的に助けようとしてるだけだもの。先に言っておくけど、あたしに見返りを求めているつもりなら全くの無駄だから。さ、どう？ あたしなんかを助ける気持ちなんて綺麗さっぱりなくなっただでしょ？」

かたくなに拒絶する響子の姿を見て、君彦は真っ直ぐと・・・真剣に見据えた。

響子もまた、これで君彦が男としての本性を現わして自分の前から去ってくれることを願っている。

見返りも何もなしに、自分のような敵対心剥き出しの女なんかを助けようとする男がこの世にいるわけがない。

どうせ結局は・・・最終的には見返りを得ようとするはずだ、男はみんなそうなのだから。

響子はまるで自分にそう言い聞かせるように、心の中で何度も繰り返した。

「オレのお祖父ちゃんが・・・」

「・・・え？」

君彦の声が囁くように小さくて、響子は思わず聞き逃す所だった。

「オレのお祖父ちゃん、すごく靈感が強くて霊媒師みたいなことをしてた人だったんだ」

突然身の上話を語りだした、響子は少し動揺しながらも君彦の言葉に割って入ることが出来ずにいた。

祖父の話をする君彦の表情がとても寂しく、孤独を感じさせるよ

うな・・・そんな物憂げな雰囲気を感じたからだ。
猫又は顔を洗うフリをして、窓の外に目をやる。

「別に商売として悪霊退治をしていたわけじゃないけど、お祖父ちゃんも幽霊や物の怪のことで困ってる人達を放っておけない性分だったみたいでさ。たまに知り合いから悪霊退治みたいなことを頼まれたりして、それでたくさんの人達を幽霊や物の怪から助けて来たんだよ。オレ・・・ずっと幼い頃に両親を事故で亡くしてて、以来ずっとお祖父ちゃんとお祖母ちゃんに育てられたんだ。

色んな人達の頼み事を聞いて、そして感謝されてるお祖父ちゃんを見て、とても尊敬してた・・・。

困ってる人を見たら助けてあげること。

自分に出来ることなら、最後まで頑張ってみること。

お祖父ちゃんからもらった最期の言葉なんだ、・・・結局オレが10歳の時に亡くなったんだけど。だからオレはお祖父ちゃんみたいに誰かの役に立ちたいって思うようになったんだよ、助けてほしい。見返りとか、お礼とか・・・そういうのは関係ないよ。だって言い変えてみればこれはオレの自己満足のようなものだし、そんなものを求めるものじゃないからね。志岐城さんが困ってるから助けてあげたいって思った。自分に出来ることがあるから、最後まで諦めないで頑張りたいって思った。・・・ただそれだけだよ」

本当の気持ちを告げた、包み隠さずに・・・ありのままを。

ただ、『信じて欲しい』から。

だから君彦は祖父のことも話して聞かせた、今まで友達の誰にも・・・君彦が想いを抱いている黒依にすら話していないのに。

目の前にいる女性を助けたい一心で、君彦は自分の過去を話して

聞かせたのだ。

言うべきことは全て伝えたつもりだ。

あとは・・・、響子次第。

響子が君彦を信じてくれるかどうか、全てはそれにかかっていた。

君彦のモットー（後書き）

響子がなかなか君彦のことを信じてくれないので話が進みません
（泣）

余談ですが、お互い自己紹介はきちんと済ませております。一応本名をフルネームで明かしておりますが響子に至っては住んでる所を始めプライベートな内容は一切君彦に話していません。いつの間にやら君彦が響子のフルネームを知っている状態からスタートしていたので、不思議に思っている方へ参考までに。

響子のクセ

響子は迷っていた。

これ程かたくなに響子が、異性に対して心を開かないのもちゃんとした理由があった。

しかし今ここでその理由を会ったばかりの君彦に話す気には到底なれない、響子が心の狭い人間であると君彦に誤解されても別に構わないとさえ思った。

それだけ響子にとって異性から受けた仕打ちは、深く心の傷として刻まれていたのだ。

勿論君彦の熱意が伝わらない響子ではない、それでも相手が異性というだけでどうしても萎縮してしまう。

拒絶反応が出てしまう。

彼だけは他の男と違うと・・・、そう頭でわかっていても・・・心がついて行かなかったのだ。

だがいくら君彦のことを拒絶しようとも、彼がこのまま黙って響子を放っておいてはくれないことだけは理解出来る。

そこで響子は妥協することに決めた。

大きく溜め息をつきながら、頭を抱えるように渋々折れてやる。

「・・・わかった、とりあえずあんたが言いたいことはわかったわよ。生活に支障が出ない程度にはあんたの案に乗ってあげるわ、だからと言って四六時中あんたと一緒にいるのだけは勘弁だけだね。だって・・・、普通に考えても当たり前でしょ!? のび太とせずかでさえ一日中一緒になんていないんだから。そうね・・・とりあえず学校内だけとか、人通りの多い場所を練り歩く時とか・・・その程度でしようね。・・・って、よくよく考えてみりゃやつぱ限度があるじゃない!? あんたにだって自分の生活があんだから・・・、あたし一人に合わせるなんて出来っこないわよ」

君彦の案に乗ってはみたものの、口に出してみればやはり無謀な策であることに変わりはない。

身内とかならともかく全く生活環境が異なる他人同士が、常にお互い側にいる生活など出来るはずもない。

しかしそれがわかった響子はむしろホッとしている、異性と一日中一緒にいることが不可能と分かった途端、肩の荷が下りた気がした。

気持ちも幾分か楽になったおかげで、都合の良い時だけ君彦を利用することが出来ると・・・プラス思考で捉えることが出来るからだ。

安心している響子とは裏腹に君彦は難しそうな表情を浮かべながら、何かを考えている様子だ。

何がそんなに不満なんだろうと響子が首を傾げていると、君彦がおもむろに響子の方に視線を走らせて尋ねて来た。

「志岐城さん・・・、今学校がどうのって言ってたけど・・・。もしかしてオレが通ってる高校を知ってるんですか？」

「え？ ああ・・・だってあんた風詠かぜよみ高校の生徒でしょ？ 日曜の真っ昼間から風詠の学ラン来て何してんのか知らないけど・・・、あたしもその高校に通ってるの」

「も、もしかして先輩でした？」

年上相手にタメ口をきいてたかもしれないと、君彦は少し冷や汗をかきながら聞いてみる。

だが響子自身はそんなこと全く気にしていないのか・・・、しれっとした態度で答えた。

「今年入学した1年生よ、1 - B」

「あ・・・、隣のクラスだったんだね・・・よかった先輩とかじゃなくて！ オレも今年入学したんだよ、1 - A。ビックリした、志岐城さんって大人っぽい雰囲気の人だから本当は大学生位じゃないのかなって思ってた・・・！」

心底ほっとしている君彦の様子に、響子は呆れた顔になりながら心の中でつつこんだ。

（そもそも大学生が、こんな紺色のジャージを着てうろろするか？）

『んで？ 話はまとまったのかよ。 オレとしてはさっさと家に帰ってメシを食いてえんだけどさ・・・』

つまらなさそうに猫又がそう言うのと、君彦も同意して二人（と一匹）は喫茶店を出て行った。

すると君彦は何のためらいもなく響子に向かって右手を差し出し、それを見た響子は思い切り不快な表情を見せる。

あまりに堂々とした拒絶に、君彦はたじろいだ。

「・・・何、これ？」

「えと、一応これからもヨロシクって言う・・・握手のつもり、なんだけど」

当然、男嫌いの響子が君彦と握手をするはずもなかった。

差し出された右手を見送ると、響子の視線が・・・自然と下の方へと下がって行く。

まるで汚らしいものを見下すような、そんな視線に君彦が気付
き・・・そして背筋が凍った。

（な・・・、なんか・・・視線で犯されてるような気がするっ！）

苦笑いしながら君彦は何とか響子の視線から逃れようと、手に持
っていた学生カバンで響子の視線の先を隠そうとしてみる。

響子が釘付けレベルで凝視していたのは、君彦の股間周辺であっ
た。

勿論・・・、響子の男性不信に大きな関わりを持つこの行動は、
彼女にとっての防衛手段の一つでもある。

響子に求愛行動を示してきた異性は、大きく分けて3種類に分類
出来た。

1つ目は、内気な一目惚れや、ナンパタイプ。

これらの症状を示した異性は、一目惚れタイプの場合は交際以前
にまず親しくなろうと試みるので、すぐさま抵抗の意思を見せれば
案外脆く崩すことが出来る。

続いてナンパタイプの場合は、最初から交際目的ではなく、一種
の火遊び感覚を楽しもうとするだけなのでこれも前者と同じくすぐ
に抵抗の意思を見せれば割と危険度が低く、適当にあしらっておけ
ば特にどうということはない。

それでもその人物の人物の人物によっては危険度が増したりするのだが、
自己防衛の手段を持つ響子にとっては大きな問題にはならない。

2つ目は、積極的に交際を求めて来る、もしくはストーカータイ
プ。

これは厄介、適当にあしらおうとしてもしつこく交際を迫って来
るので長期戦を余儀なくされるパターンが多い。

響子が最も疲れるタイプである、あまりにしつこくストーカーしてくる男がいたので、響子は過去に一度しつこいストーカーを正当防衛の名の元に半殺しの目に遭わせて病院送りにしたことがあった。

3つ目は、繁殖期タイプ。

響子が最も嫌悪感を抱くタイプである、彼等はよつぽど女に飢えているのか。

今思えば色情霊の靈力に強く惑わされたせい、彼等は響子を見るなり欲情し性欲全開で近付いて来る。

いわゆる痴漢や変態、強姦といった犯罪タイプであり、見分けるのは簡単。

その男の股間を見ればいいのだ。

彼等のほぼ半数以上が、響子を見て勃起している。

・・・とまあ、響子は自己防衛をする為とはいえ無視することが困難となる異性に対して、自然と視線が下の方へと向かってしまうクセがあるのだ。

当然、響子のそんな悲しいクセを知らない君彦は、股間を真剣に見つめられて恥ずかしくて仕方がない様子である。

結局、君彦と握手を交わすこともなく・・・響子は君彦の股間を凝視したまま、その場を去ることとなった。

響子を見送るように喫茶店の前で立ち尽くす君彦、そして彼の足元で響子の背中を見送っている猫又が一言漏らす。

『・・・変な女と関わっちまったな、お前。ま、類は友を呼ぶって言うし・・・明日からお前の学校生活が随分と楽しいものになりそうだな』

猫又の発した言葉に、君彦は少しだけ不安になった。

最後の彼女の行動から本当に一筋縄ではいかないかもしれないと、君彦は力一杯覚悟を決める。

響子のクセ（後書き）

別に読まなくても物語に支障がないコーナー。

猫又君彦のプロフィール。

猫又君彦、16歳、4月12日生まれ、A型、172センチ。

趣味は料理、好きな食べ物は和食で嫌いな食べ物はない。

特技は幽霊や物の怪が見えること（一部の人間は知ってる）、料理がプロ並。

性格は至って温厚、人付き合いが良く他人に優しい、天然、猫又に對しては辛辣な態度で接する。

黒髪ショートヘア、視力が少し悪いのでメガネを愛用、日本人の淡白な顔立ち。

肌の色は普通（白くも黒くもない）、運動は苦手だが逃げ足・・・一直線に走るだけなら普通より少し早い方、勉強は比較的苦手な方で成績は良くも悪くもない。

君彦が3歳の頃に両親を交通事故で亡くし、父方の祖父母に育てられる。

その後君彦が9歳の時に祖母が亡くなり、翌年には祖父も他界。

15歳まで施設で暮らすが中学を卒業後、両親と祖父母が残した財産で施設を出て一人暮らしを始める。

現在は安アパートで暮らしており、近所付き合いもそこそこなす。将来のことはあまり深く考えていないが、出来るだけ早く社会に出て働きたいと思っている。

料理を作るのが嫌いではないしそれなりに自信があるということもあって、将来希望する職業にコックや板前を目指すのも悪くないと考えている。

猫又に取り憑かれたのは中学生の頃。

このことに関してはまた後ほど本編にて語らせてもらいたいと思います。

初めまして今晚は（前書き）

今回新キャラが登場します、かなりのキーマンです（笑）
これから重要人物が登場しますので、楽しみにしてください。

初めまして今晚は

響子がマンションへ帰る途中、相変わらず不審な男に付け回され、ナンパされ、何度も道や時間を尋ねられた。

いつものように適当にあしらってようやく自宅に辿り着く。

独身用のマンションの5階、一応セキュリティシステムが万全にされているので不審者はここまで来れないようになっていいる。

特にこの5階は響子の保護者の知り合いが部屋を借りて住んでるので、気兼ねなく出入りすることが出来るのだ。

つまり響子に言い寄って来る不審な男がこの5階をうろつけば、すぐさま管理人や警察に通報されるという寸法になっているのである。

マンションの鍵を開けて中に入るなりリビングの方を覗く、時計の針は6時。

まだ早いがシャワーに入ろうと、響子はもう一度室内の戸締りを厳重にチェックしてから着替えを取り出しシャワー室へ行く。

ジャージや下着を脱いでシャワーに入るが、響子は普通の女の子とは少し違っていてもものすごく入浴時間が短い。

最短記録で3分、最長でも10分程度しか入らないのだ。

テキパキとシャンプー、リンスを済ませると、花のせっけんを泡立てたスポンジで全身を磨き、あとはサッとシャワーで流す。

「はあゝゝ、サッパリした！」

満足気にシャワー室から出て、バスタオルでロングヘアの水気を取る。

「それにしても・・・、ホント今日は変な一日だったわ。まさかこのあたしに向かって悪霊が取り憑いてる・・・なんて言ってくる男、

今までいなかったからね。・・・悪いヤツじゃないみたいだけど、男であることに変わりはないし。一応警戒だけは怠らないにしても・明日から面倒臭いわね、ずっと一緒にいるって・・・・もしかして登下校とか弁当時間とか休み時間とかも一緒ってわけじゃないわよね・・・・!? でも、本当ならどこにしようと声をかけて来る男が後を絶えなかったのに・・・・今日あいつと一緒にいる間はそれ程声をかけられたりしなかった。もしかして本当にあの猫又っていう化け猫と一緒にいることで、あたしに取り憑いてる色情霊って奴が退いてたことになるのかしら・・・・!?」

本当の所はどうかかわからないが、あの猫又が普通の人間に見えていない事実だけは否定しようがなかった。

大きな溜め息をつきながら響子が顔を上げて洗面台にある鏡で自分の姿を見た時・・・・。

「
つつ!」

シャワーの湯気に紛れて響子の顔のすぐ横に、まるで平安時代かそこらの古めかしい雰囲気をした花魁風の若い女が、鏡越しに響子に向かって微笑んでいるのがハッキリと目に映った!

半透明でうつすらとしているが、見間違いでも何でもなく・・・・まわりつくようにしっかりと響子の背後にしがみつく形で取り憑いている色情霊を目にした響子は悲鳴を上げた。

「きゃあああああああああああああああああつつ
つつ!」

すぐさま鏡の前から身を隠し、しゃがみこむ形で腰を抜かした響子は恐怖の余り自分の足で立つことが出来ずにいた。

手に持っていたバスタオルを力一杯抱き締めるようにして、湯気

で曇る鏡を涙目で見つめながら震える。

「そ・・・っ、そんなっ！！ あれが・・・あれが幽霊、嘘でしょ！？ 本当にこのあたしに悪霊が取り憑いてるって言うわけ！？ 冗談じゃないわ・・・あんなのがあたしのすぐ近くにずっといるなんてっ！！」

殆どパニック状態に近い形で響子が脅えていると、どこからか響子の名前を呼ぶ声と共にまるで牛が突進して来るような騒音と振動が近付いて来た。

ドドドドドッともものすごい足音が近付いて来る、それと同時に野太い声が響子の名前を叫びながら迫って来ている。

「ど したの っ！？ きよお

おおおおおおおおおおおおおおおっっっ！！！！」

響子のマンションのドアがものすごい音を立ててこじ開けられて、『何』かが室内に侵入して来た。

ドスドスと大きな足音を立てながら近所迷惑などお構いなしに声を荒らげる。

「きよおおおおおっっ！！？ どこなの！？ 一体どこにいるのっっ！！？ 無事なのっ！！？ どこか怪我でもしたのっ！！？ またストーカーに襲われたのっ！！？ イタズラ電話がかかって来たのっ！！？ 下着を盗まれたのっ！！？ この間みたいに5階で足の踏み場すらないのに響子のお風呂を覗こうとする、随分と根性の座った変態ストーカー野郎がまた覗きに来たのっ！！？ 返事なさい、響おおおおお 子おおおおお っっ！！」

早く出て行かなければすぐさま警察に電話をするかもしれない勢

いに、響子は急いで用意していた着替えを着て出て行った。

リビングの方へ歩いて行くとそこには身長190センチ、盛りに盛りまくった茶髪のヘアスタイル、がっしりとした体型にも関わらず着ている衣装は豪華絢爛な着物。

「・・・蘭子さん、あたしなら平気だから」

懸命に何事もなかったかのような笑みを作って、響子はその巨大な物体を安心させるように落ち着いた口調で声をかけた。

響子の声を聞いた物体はものすごい反射神経で振り返ると、目に涙を一杯浮かべながら唇を噛み締めている。

「んもう！ 驚かせないでちょうだいよ、響子ちゃんっ！！ 私ったら・・・本当に心配してたんだからね！」

「ホント、ごめんなさい蘭子さん。ただ・・・その、体重が増えて思わず悲鳴を上げちゃったって言うか・・・何と言うか・・・。」

蘭子と言う名の物体が響子の手を握り、涙を流しながら再度確認する。

響子は何とか納得してもらう為に説得し続け・・・ようやく安心すると蘭子は気を落ち着かせて、笑顔を取り戻した。

「響子ちゃん、私はい・つ・で・も・響子ちゃんの味方だからね！
？ 可愛い姪っこを傷付ける奴はこの私が絶くっ対に許さないんだから、安心していいのよ。それじゃ私、もうお店に行くから・・・
私が出た後はしっかり鍵をかけて、ね？」

「はいはい、ありがと蘭子さん。それじゃお仕事頑張ってね！」

まだ後ろ髪引かれる様子であったが、響子は大きな背中をぐいぐい押して部屋から出した。

パタンとドアを閉めて鍵をかけようとするが蘭子の馬鹿力によって壊されたドアの鍵を見て響子は絶句する、しかし以前にも同じことがあったので響子は平静を保ちつつ玄関の靴箱の中に隠し持っていた換えの鍵を取り付けて、何とかその場を凌ぐ。

先程の巨大な隣人、名前は蝶野^{ちようの} 蘭子^{らんし}（本名・志岐城 則雄^{のすけ}）

響子の母親の実の兄であり、現在はゲイバーのママをしている。

響子の両親が他界した後、彼女の身元引受人・・・もとい保護者として面倒を見ている人物だ。

男性不信の響子がなぜ彼（彼女？）だけ受け入れることが出来るのか・・・、それは蘭子が伯父（伯母？）という理由もあるが・・・それ以上に蘭子は全身の工事を全て済ませている、いわゆる完全なニューハーフなのだ。

故に心は真正銘完全なる『乙女』なので、さすがの響子でも蘭子に対しては『女性・同性』として接することが可能なのである。

「はあ・・・、あたしこれからどうしたらいいの!？」

幽霊に取り憑かれている。

それはまるでストーリーカーのように、自分の生活の全てを覗かれているようで実に気分が良くない。

ストーリーカーや変態を撃退する方法ならある程度心得ているのだが、幽霊だけは専門外だった。

どうすればいいのかわからない響子はこの時だけは心底、幽霊が見えるという君彦の存在がとても有り難く感じられた。

「・・・ムカつくけど、明日あいつに幽霊を気にしないでやり過ご

す方法でも聞いてみよ」

余談であるが、この晩・・・色情霊の存在がずっと気になっていた響子は結局一睡もすることが出来なかった。

初めまして今晚は（後書き）

別に読まなくても物語に支障がないコーナー。

志岐城響子のプロフィール。

志岐城響子、15歳、8月23日生まれ、O型、160センチ。

趣味はオシャレすること、買い物、一人カラオケ。

好きな食べ物はフライ系、嫌いな食べ物はホルモン系。

特技はボクシング。

性格は本来は心根の優しい女の子なのだが色情霊のせいで極度の男性不信に陥ってる為、若干凶暴性が増している。男相手だと口が悪く、暴力を振るうこともある。

現在は黒髪に染めているが、本来は茶髪でウェーブがかつており腰の辺りまで長い。視力は良い方、少しハーフっぽい顔立ち。勉強や運動は比較的得意な方だがコミュニケーション能力が劣っている。

響子が14歳の時に両親と他界、その後ニューハーフの蘭子が保護者になりマンションで一人暮らしを始める。蘭子は響子の隣の部屋。同じ階には蘭子の知り合い「ニューハーフや、キャバ嬢達が暮らしている。

響子の詳しい過去は、本編で明かしますので今回はこの辺で・・・。

毎朝の洗礼（前書き）

1話からその存在が謎に包まれていた美少女が遂に登場です。

実は彼女もメインキャラ、さて・・・彼女のキャラが吉と出るか凶と出るか。

今後の活躍からその性格が明らかになって行きますので、楽しみに
していてください。

毎朝の洗礼

朝、風詠高校では新入生が入学してから2週間が過ぎようとしていた。

通学路には新品の制服に身を包み楽しそうに通う生徒も少なくない、そんな中・・・一際幸せそうに登校する男子生徒が一人。

風詠高校の校門に入って行こうとしている艶やかな黒髪をした女子高生に向かって走って行くと、明るい声で挨拶をした。

「黒依ちゃ～～～ん！ おっはよ～～～！！」

黒髪の女子高生が振り向くと、にっこりと微笑んで挨拶する。

「君彦くん！ おはよう！」

くりっとした大きな瞳、雪のように白い肌、サラサラのストレートロングの髪の毛は背中の中まであり、線の細い黒髪は動く度になめらかなツヤを出しながらサラリと揺れる。

天使のような微笑みに可愛い声で挨拶をされた衝撃と感動で、君彦はそのまま卒倒しそうな位の勢いでクラクラしていた。

（超～～～～～～～っ、カワイイんですけどぉ～～～～っ！！）

もはや君彦ビジョンから見る黒依は、後光が差す程の輝きを放つ女神のように映っていた。

中学の時から全く変わり映えのしない君彦の反応に、足元で呆れ顔をしている猫又。そんな猫又の反応もお構いなしに君彦は一日で最も楽しいひと時『黒依との会話』を楽しむ気満々である。

「そういえば君彦クン、日曜日にバイトの面接に行くって言ったよね。面接の結果はもう出たのかな?」

「うん、何か普通に面接した後になぜか厚焼き卵を作ってみろって言われてさ。普通に家で作るみたいに作ったら、何かよくわからないけど採用だった。」

「あれ? 確かお料理屋さんのホール係とか雑用で面接受けに行ってたんじゃない?」

「黒依ちゃんもそう思うでしょ!? オレも何でかなって思ってたんだけど、でもオレに作れって言った人・・・お店の店長みたいでさ。ものすごくいかつくて怖そうな感じだったし、お店のコックさんもチーフとかもその人に逆らえない雰囲気たつぷりだったんだ。よく意味がわからなかったけど・・・、でももし厚焼き卵のおかげでバイトの面接通ったんならラッキーだったかもね」

「そうだね、君彦クンのお料理ものすごく美味しいもん! もしかしたら君彦クンのことをコックさんにするつもりでテストしたんじゃない?」

普通に両手で学生力バンを持ちながら歩いて行く黒依とは異なり、君彦は全身に力が入ったように・・・まるで軍隊の行進のようにしやきしやきと歩きながら黒依と楽しそうに会話をする、二人がそのまま校舎の中へと入って行こうとした時だった。

後方から地鳴りのような音が聞こえて君彦は何かと思いながら後ろを振り向く、すると校門の方から土煙を上げながら何かの集団が校舎に向かって突進してくる光景が目に入る。

「な・・・っ、何だ一体!」

驚く君彦に、黒依が校舎の出入り口の端の方へと逃げながら教えてやる。

「あれ、君彦くん知らないの？ あたし達が入学してから毎日この時間になると繰り広げられてる光景だよ。1 - Bにものすごい美人の生徒がいて・・・、あの集団はその人を毎朝追いかけて回してるんだって」

「1・・・の、B？」

聞き覚えのあるクラスだった、君彦は顔を引きつらせながら集団の先頭を走っている人物に向かって視線を凝らす。

ウェーブがかった黒髪を振り乱し、必死な形相で興奮しまくった男集団から逃れようと全力疾走で向かって来る女子高生。

昨日見た格好とは随分異なるがそれでも殺気に満ちた顔つきだけは決して忘れない、そして彼女にまわりつくようにしっかりと取り憑いている女の色情霊、それを見れば一目瞭然であった、見間違うはずもない。

「ね〜こ〜ま〜たあ

っ！！

さっさと色情霊こいつを何とかしなさいよ

っっ！！

「し・・・っ、志岐城さんっ！？」

響子はものすごい脚力で、あっという間に校舎の前で立ち尽くしていた君彦に追いつくや否や、君彦の足元に隠れていた猫又を拾い上げるように手を伸ばす！

『うおおおお〜っ！ 乱暴に掴むな、ソフトに優しく抱き上げ……っ、ぐはあっ！！』

二本足で慌てふためく猫又の両脇を鷲掴みするようにむんずと抱き上げた瞬間、響子に憑いていた色情霊が不快な表情を浮かべるとそのままずりりと響子の体から離れて行った。

色情霊が空へと消えて行った瞬間に、響子を追いかけ回していた男性陣が色情霊の色欲から解放されて我に返って行く。

彼等の殆どがまるで自分を失っていたかのように、首を傾げながら辺りを見回す。

目の前にいる響子をちらりと見るも、さっきまでの欲情がなくなっているのもそのままぞろぞろと校舎の中へと大人しく入って行った。

響子は彼等の変わりようを目の当たりにして、やはり今自分が両手に抱き抱えている猫又が自分の近くにいれば、色情霊による効力がなくなっただけで周囲の男達も平常心を保つことが出来るのだとハッキリ認識する。

難を逃れた響子であったが、問題は少しだけ残っていた。

「ねえ……、君彦くん。その人と知り合いなの？」

きゅっとなぐった片手を口元に当てて、君彦と響子を交互に見つめながら少し困った表情を浮かべた黒依が質問をした。

そう……、響子が口走った『猫又』とは当然……君彦の足元にいる猫又のことを指している。

しかしこの猫又は靈感の強い人間、もしくは猫又にまたがれて強制的に霊力を付けられた者だけ目にする事が出来るのだ。

君彦はとっさに響子との関係を黒依に誤解されていると勘違いして、急激に青ざめる。

慌てる君彦を尻目に、響子は君彦と一緒にいる黒依が一体誰なの

か・・・状況が掴めていない様子でぽかんと突っ立っていた。

毎朝の洗礼（後書き）

別に読まなくても物語に支障がないコーナー。

狐崎こやま 黒依くろいのプロフィール。

狐崎黒依、15歳、12月12日生まれ、B型、156センチ。

趣味は、お菓子作り、洋裁など。

好きな食べ物は甘いもの、嫌いな食べ物はドリアン。

特技は裁縫。

性格は良く言えば人懐こい、悪く言えば八方美人。人見知りや物怖じすることなく誰とでも仲良くなれる。反面鈍い所もあり非常にマイペース。

君彦とは中学生の時に会った、その頃から友達となり高校も同じ風詠高校へと進学する。両親と黒依との三人家族で、中流家庭。

黒依に関することは、今後本編で明かします。

無駄な努力

黒依から質問されたまさにその時だった、始業ベルが鳴った瞬間に黒依は自分の質問を即座に抹消して君彦の手を引っ張った。

「大変、授業始まっちゃうよっ！！ 君彦くん、早く教室に急がなくちゃ！！」

そう言うなり黒依は君彦の腕を取ると急いでクラス別に区切られている下駄箱がある方へと連れて行こうとする、しかし猫又と響子のことが気になったのか君彦は少し戸惑いながら一人と一匹の方へと視線を走らせた。

「そんじゃ話は後でね、猫又こいつはあたしが預かつとくわ」

「はあああっ！？ おいお前、何勝手なこと抜かしてやがんだよっ
！」

しっかりと両脇を抱えられている猫又は体をよじらせて抵抗するものの、響子の束縛から逃れられない様子である。

「ご、ごめんね志岐城さん！ それじゃ1時限目が終わった後の休み時間にでも僕の方からBクラスに行くから・・・っ！」

『くおら君彦っ！！ 何あっさりと見捨ててんだテメーっ！』

猫又の絶叫もむなしく・・・結局響子に抱えられたまま猫又は君彦から引き離されて、響子のクラス1 - Bへと連れて行かれる羽目になってしまった。

響子は猫又をしつかりと抱えながら教室へと入って行く、すでに始業ベルがなっていたということもあり教室に辿り着くまでの廊下では誰からも声をかけたりはしなかったが、それでも内心ハラハラしながら教室のドアを開けた。

開けた瞬間教室内にいた生徒の何人かが響子の方を振り向いたが、特に気にする様子もなくすぐにまた視線を逸らせる。

そんな彼等（特に男子生徒）の様子を確認した響子は小声で呟いた。

「ふ〜ん、やっぱりあんたがあたしの側にいることで色情霊とやらの効力はなくなってしまうてみたいね」

『つかお前のそのイモい格好見れば誰だって興味を示さねえと思うけどな・・・』

猫又は響子に抱きかかえられたままの状態で上から下まで眺めながら指摘する、響子は髪型こそ三つ編みをほどこしているがセーラー服のスカートの下には春だというのにジャージをはいている。

「あのね・・・、色情霊がべったりとあたしに取り憑いてる間はどうんな格好をしていようが男共がそりゃもうわんさか群がって来ちゃうとっつしいっただらなかつたんだからねっ!？」

響子が文句を言うように猫又に食ってかかっている途中で、何か引っ掛かった。

「……ん？ 待てよ！？ ということは、いくらあたしがイモい格好をしていようが……結局のところ意味がないってことになる？ あたしに発情した男共が群がって来てたのが全部色情霊の仕業だったんなら、あたしがどんなにダサイ演出をしようが効果がないも同然なわけで……」

まるで推理小説で犯人を探すように響子はゆつくりと順序良く、自分が今置かれている状況を整理し始めた。

そんな時担任の先生が教室に入ってきたのでとりあえず席に着いてからゆつくりと推理の続きを始める響子に、猫又はやっと『抱き抱えられ状態』から解放されると大人しく響子の足元に待機しながら、響子の推理に参加する。

『ま、お前がどんな努力をしようが全部無駄だったってワケだわな。お前に群がって来たって言う男共はお前の外見に惹かれてたワケじゃない、色情霊の誘惑に惑わされてただけだし』

猫又の無情な発言に響子は愕然とした。

口をあぐりとさせて顔面蒼白、それから急にめまいがしてくる。クラクラと揺らぐ頭を押さえながら響子は机の上に伏せつつうなだれた、ぶつぶつと何かを呟きながら響子は今までの苦労人生が走馬灯のように脳裏を駆け巡っている。

そんな響子のショックに、我関せずを決め込んでいる猫又は毛づくろいをしながらぼんやりしていた。

『はあ……、今頃君彦のやつどうしてつかなあ？』

遠くを見つめるような眼差しで猫又は、今夜の晩ごはんを思いを馳せていたのは言うまでもない。

無駄な努力（後書き）

どんどん私の頭の中で物語が広がって行く半面、それをなかなか文章として表現出来ず、唸っている間に数日過ぎてしまいました。これからの展開には、シリアスあり！ 笑いあり！ お涙あり！ なものを構想中なので、ぜひともよろしくお願いいたします。まあ、基本「ほのぼの」を目指しておりますが・・・。

相性、最悪！？（前書き）

相性、最悪！？

ようやく1時限目が終わり、早速君彦は隣のBクラスへ向かおうとした。

終業ベルが鳴った途端に席を立って出て行くとする君彦に、斜め前の席に座っていた黒依が気付き声をかける。

「あれ？ 君彦くん・・・どこ行くの？」

「隣のBクラスだよ、ほら今朝志岐城さんとの会話が途中になっちゃったからね」

黒依に声をかけられすっかり緩んだ顔になった君彦は、満面の笑みで答える。

一瞬だけ君彦の答えに首を傾げた黒依は、にっこり微笑むと席を立って君彦について来た。

「ねえ、あたしも一緒に行っていいかな？」

「うんうん勿論！ 全然構わないよー！」

何の疑いもせず憧れの黒依に付き添われ全く悪い気のしない君彦は、天にも昇るような思いであっさりと承諾してしまう。

君彦と一緒に教室を出て、そのまま向かって左隣のクラスへと向かう。

教室はすぐ隣なので時間がかかることなくすぐに到着するが、その間にも二人は会話を交わしていた。

「君彦くんって今朝会った志岐城さんって人とお友達だったの？」

あたし全然知らなかったな」

「実は昨日初めて知り合ったんだよ、それまでは志岐城さんが同じ学校に通ってるってことも知らなかったんだけどね」

ガラッ！

君彦がBクラスのドアを開けようとした瞬間、突然ドアが勢いよく開いて思わず驚く。

すると目の前には響子が立っていて、当然その足元には猫又が眠そうな顔をしながら座り込んでいた。

ぎろりと君彦を睨みつけて来る響子に君彦はたじろぎながら、片手を上げて挨拶をする。

（ 怖っ！ ）

響子はいかにも不満たっぷりの顔で君彦を凝視して来るので、君彦は猫又が何か余計なことをしたのかと思い・・・呑気にあくびをしている猫又に向かってしゃがみこむと、思い切り睨みつけて問いただした。

「猫又・・・、お前まさか志岐城さんに何か迷惑をかけたんじゃないだろうな!？」

両手で顔を掴まれ、そのまま顔の皮膚を横に引っ張られた猫又はあられもない表情になる・・・（猫又はオスだが）

『何もしてねえって、むしろ大人しくしてたっつーの!』

「じゃあ何で志岐城さん、こんなに怒ってたんだよ!」

「別に怒ってないわよ、ただ1時限目の間ずくずくと自分の今まで
の人生の空しさを振り返って腹が立っただけ。大体こいつが足元で

」

「わあゝゝ、もしかしてここに猫又ちゃんがいるの!?!」

急に空気が乱された。

響子の話の途中に割って入った黒依の黄色い声が響き渡り、一瞬
Bクラスの教室内にいた生徒がこちらを振り向く。

それでも黒依は気にすることなく君彦が掴んでいるであろう場所
を見つめながら、につこりと羨ましそうに微笑んでいた。

突然会話を中断させられて、響子は呆れた表情になりながらしゃ
がんでいる君彦に向かって話しかける。

「つか、この子誰!? 確か今朝もあんたと一緒にいたようないな
かったような……??」

そう問われ、君彦は頬をピンク色に染めながら黒依を響子に紹介
しようと立ち上がる。

急に君彦の態度が急変したように感じた響子は、眉根を寄せた。

「ああ、彼女はオレと同じクラスの狐崎黒依ちゃんって言うんだ。
黒依ちゃんとオレは……、その……」

「単なるお友達だよ!」

可愛い声で断言する黒依に、君彦は少しだけ……ほんの少しだ
け肩を落としてがっかりとしていた。

それから再びしゃがみこんでぶつぶつと独り言を呟き出す。

「友達・・・、そう・・・友達だよ。そうんだけど、何だろ・・・この寂しい気持ち・・・」

『まあまあ、所詮お前はイイ人止まりなんだからあんま気にすんなつて、な？ 君彦』

苦笑しながら寂しげに涙を堪える君彦の肩にぽんと片方の前足を乗せて、慰めるポーズをする猫又。

そんな君彦と猫又のことは無視して、響子は黒依のことをじろじろと見つめた。

すると黒依は始終笑みを浮かべたままで、響子に向かって片手を差し出し声をかける。

「初めまして、志岐城さん！ あたしのことは黒依って呼んでね、良かったらあたしともお友達になってほしいな」

唐突な申し出に響子は当然戸惑う、しかし全く物怖じせずに握手を求めて来る黒依の姿に響子は押されて思わず頷いてしまう。

そして初めて友達になろうと言って来た黒依に対して、握手に応じようとしたその瞬間だった。

再び2時限目の授業が始まるベルが鳴り出し・・・。

「あつ！ 次の授業がもう始まっちゃう、君彦くん・・・教室に戻る！」

そう叫ぶと黒依はしゃがみこんでいる君彦の腕を引っ張って、Aクラスの教室へと戻って行った。

当然・・・片手を差し出したままで固まっている響子、ひくひくと笑顔が引きつる。

「何・・・あれ、

わざとかつ!？」

急に怒りが込み上げて来た、そして狐崎黒依とは気が合わないかもしれないと瞬時に悟った響子に・・・猫又は興味のない顔でアドバイスらしきものをした。

『気にすんな、黒依は大体いつもあんな感じだから』

「大体あんな感じって、どんな感じよ! 向こうから友達になろうって手え差し出して来たのに、ベルが鳴った途端置き去りにして行くか普通っ!？」

『だから気にすんなって、あれが黒依にとっての普通なんだよ。興味の無い話には未練がないし、人の話も・・・まあ大体聞いちゃいねえけどな。でもそんなに悪い女じゃないぜ? 扱いに慣れさえすれば・・・だけど』

響子はまだ腑に落ちない様子で席に戻ると、まだもやもやとした感情がなくならずに悶々としている。

それから急に、突然に・・・なぜ君彦が黒依と共にこの教室へやって来たのが気になって来た。

（・・・あの二人、一体どういう関係なわけ? さっきさっぱりと友達って断言してたけど、猫又君彦の方はそうでもない素振りだったし・・・。大体なんで猫又迎えに来んのにあの子も一緒に来るわけ、意味わかんないんだけど・・・あれ? そういえばさっきあの子、猫又の存在を知ってるっぽくなかった? まあ見えてなかったみたいけど、何であの子は猫又のこと知ってんのよ・・・。あゝ全然わけわかんない! てゆうか、何でこんなにイライラす

るわけ！？ 何かよくわからないけど無性に腹が立つ！ すっごいムカついて来た！）

完全に黒依に対して拒絶反応が現れた響子は、その後も授業の合間の休み時間に教室に訪れて来る君彦と黒依をあしらう度に苛立ちがどんどん募って行ったのは言うまでもない。

そして遂に、昼休みになったら一緒に弁当を食べようと誘われた響子は、ムカつく気持ちとは裏腹に猫又や色情霊に関して話したいことがあったのも事実なので、結局誘いを断ることが出来なかった。

相性、最悪！？（後書き）

基本的に今回のような日常的な学園生活が繰り広げられます、この小説は。

猫又やら物の怪やら幽霊やら出て来ますが、決して霊界探偵モノではないのでバトルとかそういった展開にはならないと・・・思われます、きっと。

友達宣言

昼休み、三人と一匹は学校の中庭にあるベンチに座って弁当を食べることにした。

真ん中に黒依が座り、左側には君彦が、そして右側には響子が座り、猫又は響子の足元でばかばかの日差しを気持ちよさそうに浴びながらゴロゴロと寝返りを打っている。

三人が殆ど同時に弁当箱を開けると、なぜかみんなして互いの弁当を見せ合っていた。

「うわぁ〜！ やっぱり君彦クンのお弁当はいつ見てもすっごく美味しそうだね！ 本当に自分で作ってるの？ それにしては本格的だよ、本当に料理が上手なんだね君彦クンは！」

黒依のベタ褒め攻撃にまんざらでもない君彦はくねくねと奇妙な動きをしながら、照れまくっていた。

「そんなことないよ〜、あ・・・ほら！ 黒依ちゃんのそのきんぴらごぼうなんてとっても美味しそうじゃないか！」

「これ、冷凍食品だよ」

「そ・・・、そう」

悪びれた様子も、傷付いた様子もなくあっさりと笑顔で認める黒依に君彦のテンションは少し下降する。

そんな二人のバカッフルぶりを横で見ていた響子は、全身に鳥肌を立てながらドン引きしていた。

（・・・何これ、何なのこの壁は！？ 明らかにあたしと狐崎さんとの間に言葉では言い表し難い、分厚い壁が立ち塞がってんだだけ！？ これは一体何のプレイなわけ！？ 置き去りプレイ？ 放置プレイ？ 村八分プレイ！？）

顔を引きつらせながら硬直していると、響子の様子が目に入った君彦はすかさず気を使って言葉をかけて来た。

黒依に見せるようなメロメロな笑顔ではなく・・・、親切そうな無垢な笑顔だ。

「あ、志岐城さんの弁当もすごく美味しそうだね。お母さんの手作り料理とかかな？」

突然話題を振られた響子がハッと我に返ると、思わず素直に返事をしていた。

「え！？ ああ、一応自分で作った弁当だけど？
それが何・・・。。。」

「うわぁ〜っ！ 志岐城さんも手作り弁当なんだあ！ すっごくいいっ！」

響子が最後まで言葉を発する間もなく黒依の黄色い声が響子の鼓膜を刺激した。

そんな黄色い声が響く度に、響子の苛立ちが徐々に募っていく。ひくひくと笑顔を引きつらせながらとりあえず我慢し続ける響子であったが、すでに我慢の限界は近いのかもしれないというのは当然、
言うまでもないことだ。

（つか、この女さっさと黙らせろや猫又君彦っ！ いつまでもこんな調子が続けてたら、幽霊に関するアドバイスとかが聞くに聞けな

いじゃないのよっ！)

だがしかし幾度となく訪れた休憩時間の時の黒依に対する君彦の態度や言動をずっと傍から見ていたことから、君彦が騒がしい黒依を諭して大人しくさせるなんて奇跡は決して訪れたりはないのだから、心の中で絶望していた。

結局40分しかない昼休みの約20分位は弁当に関する話題で盛り上がりながら食事する、という行動しか取れなかった。

ようやく昼休みの残り時間があと10分を切ったところで、さすがに響子の目が虚ろになって来ていることに気付いた君彦がものすごく遠慮気味に黒依を大人しくさせることに成功。

約30分もの間よく我慢したと、響子は自分で自分を褒めたかった位だ。

そしてやっと・・・、響子は君彦に向かって幽霊に対するアドバイスや猫又に関する話を聞けることになった。

君彦からまず何が聞きたいのかを聞かれた響子は、とりあえず猫又が側にいない間・・・色情霊が自分にまわりついていていることに関して聞くことにする。

響子にとって幽霊という存在を目にしたのは昨夜が初めての体験だったので、どうしても色情霊と目が合った出来事が頭から離れずに一晩中気になって一睡も出来なかったのだ。

普段から幽霊が見える君彦が、一体どのように対処しているのか・・・とにかくまずはその話を響子はどうしても聞きたかった。

「あたし・・・靈感とか全然ないタイプだから、幽霊なんてものを見たのは昨日が初めてだったわけ。だからこれから先も幽霊を気にしないで生活するにはどうしたらいいのか、それを聞きたいんだけど・・・。あんた確か普通に幽霊が見えるって言ってたわよね？一体どういう風にしたらそんな普通に出来るわけ！？」

「うゝん、オレの場合物心ついた頃にはすでに幽霊とか見えてたから・・・あまり意識したことはないんだけど。普段見えないものが急に見えたりすると、やっぱり気になるもののかな」

「あつたり前でしょ！？ あんたの場合はどうだか知らないけど、あたしなんか女の幽霊がべつたりとまとわりついてんだから・・・っ！ それを考えただけで気持ち悪いわ、気になって仕方ないわ、とにかく気が散ってしょうがないのよっ！」

「いいなあ・・・、あたしなんか靈感全然ないから幽霊なんて見たことないし・・・。てゆうかあたしの場合は幽霊が見えるようになりたいんだけどな」

「・・・悪いけど、今はちよつと黙っててくれない！？ こう見えて本当に深刻に悩んでんだから、休み時間も残り少ないんだし・・・」

これ以上黒依のペースに巻き込まれないように、響子はすかさず口止めた。

拗ねた表情を見せながら「えゝゝ」と言っていたが聞こえないふりをする、君彦に至っては本当に申し訳なさそうに謝っていたが。

「確かに家でくつろいでる時位、幽霊にまとわりついてほしくないって気持ちはわかるけどね・・・オレは幽霊がハッキリ見えるから直接出て行くように言ってるんだけど、志岐城さんの場合は勝手が違うしなあ」

「・・・ハッキリ言うんだ、出て行けって・・・、幽霊に」

少しイメージと違っていた。

響子はつきり部屋の四方に幽霊を退散させるお札を貼っているとか、何か霊的なもので幽霊を退けているものとかばかり思っていたのだが、どうやら君彦の口ぶりから・・・まるで近所の子供に言い聞かせる程度の、注意をする的な行為で幽霊を追いつけているだけという事実を知って響子はほんの少しだけ、君彦にアドバイスを求めたことを後悔している。

「間違ってもインチキ霊媒師から買った札を、部屋中に貼り付けたりなんかすんなよ？ あれは素人がやつちまったら幽霊を逆に刺激するだけになるからな、ま・・・幽霊に喧嘩売っちゃうようなものだ」

「え・・・、そうなのか？」

「あんた、知らなかったの？」

「まあ、オレはお札に頼らなくても大体の幽霊は口で言ったら言うこと聞いてくれるから・・・でもお札がダメとなると・・・、やっぱり幽霊の存在を忘れるようにするしかないんじゃないかな。志岐城さんは幽霊が常に見えてる状態なの？」

響子の悩みに対して真剣になつて相談に乗る君彦の姿勢だけは買っていたが、それでも確実な方法を考え出してくれないことにはどうしようもない。

「え〜っつと・・・あたしが見たのは鏡ごしだけだったけど、それ以外は別に」

「それじゃ、鏡ごしにだけ気を付けて・・・それ以外は幽霊の存在

を忘れるようにすることは出来ないかな？ 最初は無理かもしれないけど、慣れればどうにかなるかもしれないよ」

猫又を借りるわけにはいかない、そう考えたらやはり慣れるまで我慢するしかないのかもしれない。

響子は眉根を寄せながら難しそうな顔をする、同じように君彦も両手を組んで必死に考える、黒依に至っては二人の顔を交互に見つめながら首を傾げているだけだった。

「ねえ、やっぱりほんのちよつと話すだけじゃ解決方法を見つけないのは難しいんじゃないかな？ これからもお話しする機会を増やしてみんなで考えて行けば、もしかしたらもっと良い方法が見つかるかもしれないよ」

「・・・狐崎、さん」

響子はとても意外なものを見た気がした。

まさか黒依が自分の為にほんの少しでも、何か良い方法がないかを考えてくれたとは思っていなかったからだ。

しかしこの言葉に誰よりも賛同したのは他の誰でもない、

君彦だった。

「さっすが黒依ちゃん！ その通りだよ、うん！ 志岐城さんに何か困ったことがあったらオレや黒依ちゃんがいつでも力になるし、これからも友達として一緒にいれば話す機会もどんどん増えるよね。だから諦めないでこれからも色情霊をどうしたらいいのか、一緒に考えて行こうよ！」

さっきまでイヤでたまらなかった黒依が響子に向かって笑顔を見せ、君彦は真っ直ぐな瞳で宣言した。

この二人が自分の為にここまで親身になってくれていることに、響子は不覚にも感動してしまっている。

しかし長い間他人との交流をあまりしてこなかった響子は思わずそっぽを向くと、唇を尖らせながら不服そうな口調で君彦の言葉を受け入れた。

「ま・・・まあ、そこまで言うなら・・・別にあたしはそれで構わないけど」

響子の言葉になぜか二人は異常に盛り上がると、勝手に友達宣言をされてしまった。

しかし悪い気のしない響子は苦笑いを浮かべながら初めて黒依と握手を交わす、当然君彦には触れることさえ出来なかったが。

そんな光景を他人事のように見つめていた猫又是呆れたような表情を浮かべながら、ぼそりと呟いた。

『お前等・・・、中学生の青春日記じゃあるまいし・・・熱いねー』

それからタイミング良く始業ベルが鳴ると、三人は仲良く教室へと戻って行く。

当然猫又是、学校にいる間は君彦ではなく響子の方へと付き添うことになっていた。

猫又だつてキレル

響子が君彦と黒依について悶々としていると、猫又が机の上に飛んで来て面白げに話しかけて来た。

『よう、お前もしかして黒依にヤキモチとかやいてんのか？』

「はあ！？ 何言つてんのあんだ、酔っ払いの親父かその発想」

出来る限り小声で響子が反論する、回りの生徒には猫又の姿が見えないという面倒なルールがあるせいで響子は変な目で見られない程度に話さなければいけない。

しかし当の猫又は響子が大きな独り言を話す変人に見られようがどうしようがお構いなしで、顔を洗いながらにやにやしていた。

『まあ安心しな・・・つてのも変だが、ありやあ完全に君彦の独走だからな・・・気にすんな。オレ様としてはどっちかつーとお前の方を応援してやってもいいんだぜ？ 色情霊に関してはオレ様が君彦に憑いてる限り害はないし、むしろ抵抗力のある君彦しかお前にや望みがねえかもな』

生意気なことを口走る猫又を睨みつけながら響子は苦虫を噛み潰したような顔になり、完全否定する。

「だ・か・ら！ なんでそうなるのよ！ あたしは別にあんなやつ・・・、何とも思っていないんだから！ 色情霊を何とかする為にあいつを利用してただけなんだかね、その辺勘違いしないでよっ！？」

『ほお〜、ま・どうでもいいけど。んなことより実際どうすんだ

よ、お前・・・毎日こんなこと続けるつもりか？　べつたりと君彦に付き添ってもそれ以外のプライベートじゃ何の進展もないんだぜ。

四六時中、君彦の側にいるつもりかよ。　っーかそれ以前にオレ様の方がお断りだぜこんな毎日、本当なら今頃屋上でのんびり昼寝してる頃合いなのに・・・」

ぶつぶつと猫又が文句をたれるが事実を突き付けられた響子の耳には、猫又の言葉が半分程度しか届いていなかった。

そうだ、結局のところ何の解決策も見出せていない響子は学校以外のプライベートをどうするのか何も考えていないのだ。

猫又に改めて言われなくてもそんなことはわかってる、だからこそ確実な解決策が見つかるまで君彦達とアイディアを出し合うという方向で乗り切ろうとしていたのだ、しかし・・・。

「そう言うけどね、それじゃあ聞くけど！？　本っ当にあんた・・・色情霊の被い方を知らないわけ！？」

聞かないフリをしているのか、響子のツツコミにそっぽを向くような仕草で猫又は毛づくろいをし出した。

そんなあからさまに不審な態度を取る猫又に、「こいつ絶対何か隠してる！」と疑いの視線を向けているとようやく本日最後の授業が終わり、全員が帰り仕度を始めてしまった。

『お！　ようやく終わるか、あゝゝゝ疲れた。普段ならこの時間は昼寝タイムなんだが、慣れない場所だと落ち着いて昼寝も出来やしねえ。そんじゃオレ様は君彦ん所に戻るぜ、あばよ！』

そう捨て台詞を吐くと猫又はぴょんつと机を飛び降りて足早にAクラスへ向かおうとしたので、響子は慌てて猫又を追いかけた。

当然帰り仕度をさっさと済ませてから走って行く。

Aクラスの方も帰り支度をして部活へ行く者、そのまま残ってダ
べる者などすっかり放課後の風景になっていた。

君彦も帰り支度を終えて帰宅しようとした時に猫又が走って来た
ので思わず声を上げてしまふ、先程も説明したが猫又の姿はAクラ
スでは君彦にしか見えていない……。

なので当然周囲にいた生徒は「また猫又が何か叫んでる」という
目で見つめていた。

「お前……っ！ 志岐城さんは一体どうしたんだよ、一応学校に
いる間は志岐城さんの側にいるって約束だったろ!?」

せっかく愛らしい飼い猫の如く飼い主の元へ舞い戻って来たとい
うのに、まるで厄介者扱いするような君彦の口ぶりに猫又はぶすっ
とした表情に変わると、拗ねた口調で文句を言った。

『なんだよお前は、しきじょしきじょって……。あゝやだ
やだ！ オレ様飽きた！ もうヤダね、これ以上あの女と一緒にい
んの！ 明日っからは自由にさせてもらうから、もう付き合っ
たらねえよ。』

じゃあな、君彦！ アリー・ヴェデルチ

~~~~~

本当に怒ってしまったのかと思った君彦は慌てるように猫又を追  
いかけようとするが、猫又は教室を出て行く生徒達の合間を縫うよ  
うに素早い動きで走り抜けて行ったので、あっという間に姿が見え  
なくなってしまった。

「あ……っ、ちょっと待ってて

猫又あつ!!」

「おゝゝい、猫又が猫又呼んでるぞゝゝっ！」  
「あっはははっ！！」

君彦の叫びを聞いたクラスメイトがからかうように笑い飛ばした、そんな君彦の様子が気になった黒依が心配そうに近付くのと響子がAクラスに飛び込んで来るのと、  
それは殆ど同時の出来事だった。



## 猫又だってキレル（後書き）

こちらの小説では出来る限り主要となる登場人物を、極力少なめにしようと思っています。

どっかの超長編異世界ファンタジー小説のようにどんどん思い付く限りキャラクターを出していったら、その分どんどん話が膨らみ過ぎてしまって收拾がつかなくなってしまうので・・・（私が）なのでこちらの小説ではシンプルで書いて行きたいので、ご理解の程よろしくです。

まあそれでもすでに私の脳内では現在登場している主要人物も含め、合計１１人位登場する予定になってますが・・・（意味ねえじゃん！）

## 春山竜次

響子は君彦がイジメに遭つてると思つていた、しかしそれがただの勘違いであつたことはすぐに理解することが出来た。

まだ教室に残つていた何人かの生徒から笑われている時でも君彦は照れ臭そうに、「あ、聞こえちゃった？」程度の反応で呑気に頭を掻いていたのである。

このクラスではこれが日常茶飯事なのかひとしきり笑い終わると他の生徒達は君彦から興味がなくなつて、再び友達と会話の続きをしようとした時・・・せつかく場の空気が和もうとしていた矢先に一人の男子生徒が君彦の方へと歩いて行つた。

見た所                   あからさまな不良タイプ、髪は茶髪に軽くパーマをかけており拗ねた顔つき、学ランのボタンは止めずに中に着ている派手なシャツを見せびらかしている状態の・・・そんな生徒である。

彼は君彦に向かつて文句を言うのかと思いきや、回りの生徒達に向かつていきなり怒声を浴びせた。

「テメーらぁーっ！   今こいつのことをバカにしやがっただろぉ！  
」

当然しんとなる、呆氣に取られている響子も思わず猫の方の猫又を追いかけていたことを忘れて呆然としていた。

何が何やらわけがわからないまま、その後も場の空気を全く読めていない不良の怒りは続く。

「初日ん時からと言つただろうが、もしこいつのことをバカにした  
り笑ひ者にしたり・・・ましてやイジメなんぞしやがったらこのオ  
レが黙つてねえってなぁ！」

「えーっと・・・春山、違うんだよ」

「てゆうかあ、誰も君彦クンのことバカになんてしてないと思うけど？」

一人で勇んでいる不良

春山に向かって、君彦が苦

笑いを浮かべながら仲裁に入る。

黒依は黒依でのほほんとした口調のまま春山の暴走を面白がるように見つめていた。

「だけどよお！ さっきこいつら・・・っ！」

「あれはいつもの冗談みたいなものじゃないか、別にイジメとかそんなじゃないって。だから落ち着けよ」

君彦の言葉に大人しく従っている不良、そんな光景を眺めながら響子はますますわけがわからなくなっていた。

そんな響子の存在に気付いた黒依が駆け寄って来る、君彦はまだ春山を落ち着かせようと必死な様子だった。

「あ、志岐城さん・・・一体どうしたの？ そんな所で」

「え？ あ、いや・・・何かわけのわかんない展開が繰り広げられてるなあーって思っで。てゆうかあの不良と猫又と、一体どういう関係なわけ？」

響子が春山と君彦の方に指をさして怪訝な表情を浮かべる、黒依はそれを見て納得したのか笑顔になって説明した。

「あゝ春山竜次クンのこと？ 大丈夫だよ、あれって別にケンカとかしてるわけじゃないから。春山クンはね、施設で君彦クンと一緒にだったんだって。あたしはよく知らないんだけど最初春山クンは君彦クンのことをイジメてたらしいのね。でもある時、春山クンが心霊体験で悩まされてたことがあって・・・それを君彦クンに助けてもらってからは、イジメるのをやめて君彦クンとお友達になったみたい。今ではすっかり君彦クンのボディガード気取っちゃって、ああやって事あるごとに勝手に首を突っ込んで来るようになったの」

「  
え？」

黒依の説明の中にいくつか聞き捨てならない内容が含まれているような気がした。

どこか言葉の中に棘があったような・・・、そんな気が。

「ま・・・まあともかく、あれはいちやもんつけられてるかかそういうんじゃないんだ」

「そ！ だからそんなに心配しなくても大丈夫だよ？」

そう返され、響子は飛びのくように後ずさりすると顔を真っ赤にしながら否定した。

「なっ！ 別にあたしはあいつがどうなろうと知ったこっちゃないわよっ！？ 心配とかなんて全然してないんだから！」

しかし黒依はそんな響子のオーバーリアクションにも動じずにっこり微笑んだままだ。

昼休みに友達宣言されたとはいえ、どうにも黒依といると調子が

崩れてしまうように感じる響子は口をへの字に曲げて視線を逸らす。

「・・・っか、あたし猫又探しに来たんだっただ・・・」

ようやく用件を思い出した響子はそのまま問答している最中の君彦の元へ歩いて行くと、威風堂々とした態度で声をかけた。

「ちょっと！ 猫又君彦！ あんたの猫又探しに来たんだけど、一体どこにいるわけ！？」

なぜこんなに偉そうな態度を取ってしまうのか、響子自身にもよくわからなかった。

ただどうしても媚びるような態度や友達感覚で話しかけることに抵抗を感じていた響子は素直になれず、どうしても君彦・・・異性の前では壁を作るような態度を取らずにはいらなかったのだ。そんな響子の態度に当然、君彦至上主義である春山竜次も黙っていない。

「ああん！？ どの誰か知らねえが何だその口の利き方わあっ！？」

勢いよく振り向いた先に仁王立ちで立っていた響子を見るや否や、春山竜次の時が止まる。

目をぱちくりさせて動きが完全に止まっている春山に、君彦が一体どうしたのかと声をかけるが何も反応しなかった。

響子は無意識に異性から間合いを取るクセがついていたので、勿論一定以上の距離を保ちながら  
もうひとつのクセである股間凝視も発動させている。

だが響子の視線に気付くことなく春山の体温は急激に上昇していき、顔は真っ赤になっていた。

(ビ・・・ビ・・・、ビュリフオオオ

ツツ!!)

春山の鼓動は最高潮に達し、完全にハートを射抜かれてしまった様子である。

そう・・・春山竜次はものの見事に響子に一目惚れしてしまったのだ。

## 正当防衛の果てに・・・

響子のことをじつと見据えたまま微動だにしない春山竜次に怪訝な表情を浮かべるも、すぐさま響子は君彦の方に視線を移して更に問い詰めようと声を荒らげようとした。

響子の勢いに君彦は慌てて両手でガードするような仕草をしながら笑顔を取り繕って説明する。

「ちょ・・・待って、落ち着いて志岐城さん！？ 猫又のやつならさつき来たんだけど、何て言うか・・・すぐに教室を出て行っちゃってさ。今追いかけてようとした所にこの騒ぎだったもんで、猫又を見失ったって言うか・・・」

「はあ！？ それじゃ猫又は一体どこに行ったってのよ、心当たりとかないわけ！？」

猫又がいなければ再び色情霊が戻って来て響子に悪影響を与える、それを恐れている響子は怒り心頭な顔つきで今にも君彦のことを殴り倒しそうな勢いであつた。

「まあ、どうせ先に家に帰ってると思うんだけどさ・・・オレもちょうど今帰宅しようとしてたところだし、良かったら志岐城さんもオレの家に・・・」

「行くわけないでしょ！ 猫又がいらないんじゃないじゃない、これ以上あんたに詰め寄っても意味ないし。」 と

もかくどうせ今までの状況と何も変わらないだけなんだから、ここは我慢したげるわよ」

これ以上君彦を責めたところで彼が悪いわけではない、それだけ

はちゃんとわかっている響子は不服ではあるが怒りを抑えて君彦から距離を離れた。

しかし本当はそれだけではなく、猫又に言われたことも響子の中に重くのしかかっているせいでもある。

いつまでも猫又が付き添うわけじゃない、だからと言って君彦にべったり付きまとうわけにもいかない。

他の解決方法を見つけない限りは結局のところ何も変わりはない、しかしそれは決して君彦が悪いわけじゃない。

あくまで響子自身の問題なのだ。

それを十分に理解している響子は、これ以上君彦に迷惑をかけるわけにはいかないと自重することにしたのである。

がっかりと肩を落として落ち込んでいる様子の響子に、君彦が元氣を出させる為に声をかけようとした時だった。

我に返った春山竜次が突然しゃきんとした姿勢になって・・・、わざと顔つきが凜々しく見えるようにしている姿に君彦と黒依は、春山がどこかで頭でもぶつけたのかと怪訝な表情で見つめている。

「あの・・・、オレの名前は春山竜次って言います！」

面と向かって響子に自己紹介をする。

突然の改まった自己紹介に響子は虚ろな眼差しになりながら、漏れるような返事をした。

「へっ・・・、だから？」

「あなたのお名前は何て言っんですか、さ・・・さぞや美しいお名前なんでしょうねっ！」



「春山？ 一体どうした、顔が真っ赤だぞ！？ てゆうか何だよその喋り方、変なものでも食ったのか？ おくくいつ！？」

春山の奇妙な言動に不審さを感じた君彦が、春山の目線を遮るように手を振って見せるが春山の視線は完全に響子に釘付けになっていた。その様子を見ていた黒依は面白そうな表情に早変わりすると、君彦にそつと耳打ちをする。

「邪魔しちゃダメだよ、君彦くん。春山くんってば、きっと志岐城さんに一目惚れしちゃったんだよ・・・！」

「ええっ！？」

推理小説でもものすごく意外な人物が犯人だったように驚愕した顔で君彦が低い奇声を上げた、そして再び春山と響子を交互で見つめる君彦であったが・・・響子の方は明らかに面倒臭そうな、迷惑そうな顔で凝視していたのでわずかに危険な空気を感じ取る。

（ まずい、あの顔は許容範囲内に近付いた獲物を捕らえる時のハンターの顔つきそのものだ！ 放っておいたら春山のやつ、確実に志岐城さんの強烈なストレートパンチを食らってしまう！ ）

そう咄嗟に判断した君彦が春山に注意を促そうとした瞬間、突然背筋が凍る程の悪寒に襲われて背後を振り向いた。

「あ・・・っ、あれはっ！」

君彦がその声を上げた時には遅かった、君彦が感じた悪寒の正体・・・それは響子に取り憑いていた色情霊が、猫又の気配が消えたこ

とを察知して再び取り憑こうと戻って来ていたのだ！

花魁風の若い女性は妖艶な笑みを浮かべながら宙を漂うように、しかし真っ直ぐに響子の方へと向かって行く。

君彦は懸命に響子に取り憑かせまいと両手を振って色情霊を捕まえようとするが、相手は当然実態のない幽霊。

いくら霊の姿が見える君彦といえども幽霊を直に手で掴むという芸当は出来ない、騒がしく両手を振って暴れている君彦の姿を見たクラスメイトが再び笑い出す。

何もない場所で両手を振って踊っている君彦の滑稽な姿

、しかし彼は周囲から笑われようがどうしようが・・・そんなことはどうでもよかった。

この色情霊を再び響子に取り憑かせないように懸命に戦うも、・・・結局は君彦の惨敗に終わってしまう。

再びすると響子の体にまとわりつくように取り憑いた色情霊の瞳が怪しく光り、くすくすと笑って周囲の男達を惑わせる。

それまで君彦のことは見て大笑いしていた男子生徒が急に笑うのをやめて、教室にいる一人の女性に視線が釘付けとなった。

教室内の空気が一瞬にして変わる。

色情霊の姿を見ることはおろか、気配を察知することも出来ない響子であったが 回りの雰囲気が変わったことにだけはさすがに気付いた様子である。

「え、なに!？」

自分を見る男達の視線が、いつも感じている視線へと変わっている。

響子の体を舐め回すような視線、 響子は色情霊に

ではなく男達の視線に鳥肌が立った。

「志岐城さん、色情霊が戻ったから気を付けて!」

君彦が必死に叫ぶ、すると響子は焦ったように周囲を見渡すといつの間にか教室内にいた男子生徒が立ち上がり・・・響子の方へとゆっくり近付いて来ていた！

色情霊に惑わされた男がどうなるか、君彦はその全容を実際に目にして来たわけではない。

初めて会った日に入った喫茶店で響子をナンパしてきたチンピラ風の男の例を見たことがあるだけで、それ以外には響子が一体どんな被害に遭って来たのか君彦は想像するしかなかったのだが・・・今まさにその実例を目にしようとしている。

焦ったように身構える響子、いつ襲いかかって来てもすぐに対処出来るように  
ファイティングポーズを取るように構えると自分と最も近くにいた春山にも注意を払った・・・が！

「  
つつ！！」

響子の凝視スキルが発動する、当然その視線の先は・・・春山の股間。

彼の股間を目にした瞬間に響子は汚らしいものを見るような顔つきへと変わり、やがて闘争心剥き出しの野獣へと変貌する。

そう、ただでさえ色情霊の効果がない状態で響子に惚れてしまった春山は更に色情霊の効果までも浴びてしまって、自我を抑制出来ないまでに性欲を全開にされてしまったのだ！  
皆まで言うこともないが、当然ながら春山の股間は相当大変なことになる。

「ぎゃああああああああっ！！　こんのド変態がああああ  
つつ！！」

力一杯、相当な憎しみを込めた響子の右ストレートが春山の左頬を見事に捉えた！

そのまま机や椅子をなぎ倒し、春山の体は2回程床を跳ねながら教室の隅にあった清掃器具用のロッカーに背中からぶつかる。

「春山っ！！」

君彦が慌てて春山の方へと駆けて行く、それを息を切らしながら見つめていた響子は愕然とした眼差しで固まっていた。

それから春山を殴り飛ばした時に落としたカバンを拾い上げると、そのまま響子は教室をまるで逃げるように走って出て行く。

「あっ、志岐城さん！？」

その様子を見ていた黒依が響子に向かって声をかけるが、響子の耳には届かない。

黒依の目の前を走り去った時に一瞬だけ見えた響子の横顔

、気のせいかその瞳は濡れているように見えた。

## それぞれの思惑

嫌われた！ 絶対に今ので嫌われたっ！！

響子は涙目になりながら廊下を走り抜ける、響子の元へ戻って来た色情霊の効力ですれ違う男子生徒が群れをなすゾンビの如く、響子に近付こうとして行く手を阻んでいたが、響子はなんなくそれらをかわしてそのまま校舎を出て行ってしまった。

靴を履き替えることすら頭になく、全力疾走で駆ける響子。

今も響子の目に焼きついて離れない光景、彼は君彦の友である・・・その彼を響子は殴り飛ばし、そして君彦は友の方へと駆けつけた。

君彦は何の迷いもなく、魔の手が響子に忍び寄っていたにも関わらず君彦は響子ではなく友を優先したのだ。

少なくとも響子はそんな風を感じ取ってしまった、春山の方が悪いんだと。

しかし我に返った頃には、時すでに遅し。

少しずつ冷静さを取り戻していった響子は失速し、やがて立ち止まる。

（何やってんだろ、あたし・・・。別にあの春山つてのが悪いわけじゃないじゃない、あいつは単に色情霊の力に惑わされてただけなんだから。前までなら男はみんなケダモノだ、男がみんな悪いんだって決めつけることが出来たけど・・・今は違う。あたしに取り憑いてる色情霊があたしの回りにいる男達を惑わしているだけなんだ、男達が悪いわけじゃない。）

り、男なんて信用出来ない！

でも！ それでもやつぱ  
怖い！ どうしても

頭ではわかっていても心や体が拒絶しちゃうの、抵抗しなきゃって相手を拒むの！ でもそんなの・・・アイツは知らない、だから春山って奴の方を心配して・・・あたしのことなんか全然眼中になくって！）

春山の方へと駆けつけた君彦の姿がどうしても頭から離れない響子の目に、再び涙が溢れる。

目頭が熱くなって止めどなく溢れて来る涙に、響子自身が驚き戸惑っていた。

どうして自分は、泣いてるのか

？

なぜこんなにも苦しいのか、わからない。

それが『誰かを好きになる』ということに響子自身が気付くのは、

まだずっと先のことであった。

一方、1 - Aの教室内では。

響子が教室を出て行ったことによって色情霊に惑わされていた男子生徒は全員我に返って、先程の不思議な感覚に戸惑っている様子だった。

そんな中・・・大きなダメージを食らってまだ床に伏せている春山を抱き抱えるようにして声をかけ続ける君彦、ようやく意識を取り戻した春山は腫れ上がった左頬に触れ・・・そして君彦に訴えかけるように、春山は涙目になりながら一生懸命弁解した。

「猫又・・・信じてくれ、オレは・・・違っただっ！ オレは別にやましい気持ちがあってあんな風になっただんじゃ・・・、ないんだ

っ！ オ・・・オレの中に潜む別の生き物が・・・っ！ オレのだけれどオレの意志とは関係なく暴走・・・をつ！」

春山が何を言いたいのかわかる、  
男として。

しかし本当の所・・・春山の性欲が活発に活動してしまったのは、言ってみれば響子に取り憑いている色情霊のせいであることに間違いない。

だが春山の過去の心霊体験以来、  
彼は霊に対して異常なまでのトラウマを抱いてしまっている。

よって君彦は春山に面と向かって色情霊の話をすることが出来ずにいた、霊に関する話を春山にしたら彼はその恐怖によって更にパニック状態に陥ってしまうからである。

君彦は苦笑いになりながらも、春山に向かって大丈夫だと言って聞かせた。

「わかってるよ春山、だからさっきのことはもう忘れた方がいいよ。左頬ものすごい腫れてるけど保健室に行くか？ 今ならまだ保険医の先生もいるだろうし」

そう言って君彦が春山に手を貸して立たせる、それから教室を出て行こうとした時に響子のことを思い出した君彦は目の前で心配そうに見つめている黒依に尋ねた。

「あ、黒依ちゃん！ オレ今から春山を保健室に連れて行くから、どれ位時間がかかるかわからないし・・・悪いけど先に帰ってくれるかな？ ホントごめんね、それと・・・志岐城さんどこに行きたか知らない？」

黒依はじつと君彦を見つめ、それから人差し指を口元に軽く触れさせながら  
ふっと視線を逸らす。

随分と考え込んでいる様子に君彦が怪訝に感じて眉根を寄せた時、黒依はすぐさま満面の笑顔になると君彦の質問に答えた。

「志岐城さんなら急ぎの用事があるとかで先に帰っちゃったみたいだよ？」

「そっか・・・、春山のこと誤解してなきやいいんだけど」

「大丈夫なんじゃないかな？　だって原因が何なのか志岐城さんの方がもつとずつとわかってるはずだし、また明日お話すればいいだけじゃない」

響子に殴られた左頬が相当痛いのか、君彦と黒依の会話が全く耳に入っていないらしく春山はうんうんと唸ったまま響子の話をしているも何の反応も示さなかった。

君彦に至っても黒依の話を聞いて少し安心したのか、挨拶だけ交わすとそのまま春山を連れて教室を出て行ってしまう。

そんな二人に片手を振って見送ると、途端に黒依の顔から無垢な笑みが消え失せた。

「ごめんね、君彦くん。でも志岐城さんは君彦くんにとってあんまり良くない存在だから、  
悪く思わないで」

ぼそりと、誰にも聞こえない程度の小さな声でそう漏らすと

黒依は再び作り笑いを浮かべ、カバンを手に下校した。

そんな光景を校舎の屋上から全て覗き見ていた猫又は、イライラと後ろ足でアゴを掻いてから怒鳴り散らした。



『うがぁ

っ、そうじゃねえだろ君彦

っっ

！！ このオレ様がせっかく氣い利かせてやったのに、お前は  
何でヤローの方に付き添ってやがんだよぉっ！！』

両前足で頭をぐしゃぐしゃと掻き乱し、それから息を切らしな  
がら再び座り込む。

『あいつマジで何も氣付いてねえのな……。響子に取り憑いた色  
情霊の効力が君彦にだけは効かない、んでもって色情霊がどんだけ  
響子のヤツに悪影響を与えてるのか。オレ様がいなくっても自分で  
打開策見つけられるように、プラスそれがきっかけて二人に発情期  
が芽生えるようにオレ様がお膳立てしてやったのに……。まるで  
子ちゃまだなアイツら。しゃーねえ、こうなりやオレはもう何も言  
うまい。

腹減ったし帰るか！』

見切りをつけた猫又はすぐに開き直るとそのまま校舎の屋上から  
優雅に飛び降り、君彦と一緒に住んでいるボロアパートへと足早に  
帰って行った

が。

勿論君彦は春山の手当てに最後まで付き添っていたので、結局猫  
又はすぐに夕飯にありつくことが出来なかった。

## それぞれの思惑（後書き）

今「猫又」を書くのが楽しくなってます。

というのもこの先の話を早く書きたくてウズウズしているせいですが、相変わらず毎日更新というわけにはいきませんがどうぞこの先もよろしく願います。

\*しばらく一人称視点はご無沙汰になりそうです。

## 暴たー（前書き）

今日はずっと前からやりたかったネタをやっと披露出来ました。  
皆様に笑ってもらえたいのです。・・・。

ちなみにタイトルの正しい読み方は「あばたー」です、さて一体誰  
のことでしょう？

## 暴たー

春山竜次の手当てに付き合って少し帰りが遅くなってしまった君彦は、響子のことにも気になったがとりあえず黒依の言葉を信じてこのまま家に帰ることにした。

それ以前に響子のことになった気になっていても彼女の連絡先どころかどこに住んでるか分からない君彦には、これ以上どうしようもなかったのが本当の所である。

下校の時に猫又の機嫌を損ねてしまったのを少しだけ気にしながら、君彦は急いで走った。

築30年以上はありそうなボロアパート、一応風呂やトイレは個別に付いてるれっきとした1LDKである。

アパートを取り囲むようにセメントで出来た塀が見えて来ると同時に小柄な中年の女性も目に入った、彼女はこのアパートの大家であり話によると君彦の祖父と親しい仲だったらしい。

祖父母が亡くなり君彦が施設へ行くことになった時、祖父が遺した家財道具などの一部を保管してくれていたのだ。

おかげで君彦が施設を出て一人暮らしを始めることになった際に、大家さんがこのアパートを紹介してくれた。

それと同時に預かってくれていたタンスやテレビなどの家財道具も一緒に君彦が引き取ることが出来たので、また一から揃える必要がなかった君彦にとっては大助かりだった。

故にこの大家さんは君彦が自立してから、一番最初にお世話になった人物でもある。

「あら君彦くん、お帰り！」

いつも元気で明るい大家さんはこうして君彦が学校から帰るまで、毎日のようにアパートの塀の前で待っていてくれる。

君彦もいつものように笑顔で挨拶した。

「君彦くん、空き巣対策もいいけど・・・テレビの音量なんだけどねえ、もう少しだけ小さくしてもらえるかい？ ほら電気代が高く付くといけないだろ」

「あ、はい・・・すみません大家さん。すぐに音を小さくして来るんで！」

猫又だ、君彦は瞬時に悟り表情を歪める。

君彦が学校に行ってる間、猫又は24時間ずっと君彦の側にいるわけではない。

学校で特に面白いことがないと思えば猫又は好き勝手に、自由気ままに町中を歩き回っているのだ。

度々君彦が家にいないのにテレビが付いたり電気が付いたりするのを大家に知れ、苦し紛れに空き巣対策だと言い繕っているのだが大家のこの様子だともうそろそろこの手が利かなくなる頃合いだと君彦は察する。

急いでカバンの中から鍵を取り出しドアを開けるなり、目の前でバラエティ番組を見ながら大笑いしている猫又を発見した。

一応猫又の姿は普通の人間には見えないので急いでドアを締めることなく普通に帰宅しているのを装う。

玄関のすぐ横がキッチン、そして奥がお風呂。

キッチンにある硝子戸を開けるとすぐ目の前が六畳間の和室になっている、その和室で猫又は座布団の上に親父のように座りながら呑気に笑い声を上げていた。

君彦はすぐにテレビのチャンネルを掴むとボリュームを急激に下げてやる、するとそれを見た猫又が更に大声を上げた。

『あつ！ せっかく今イイとこだったのにっ！』

「何がイイとこだ！ お前は・・・相変わらずコロコロと態度を変えやがって！ お前が教室を出て行ってから色々大変だったんだぞ、わかってんのか！？」

『ふん、知ったこつちやないね！んなことより早い所メシにしようぜ、お前が帰って来んのずっと待ってたんだかな！もうオレ様、腹減って死にそうだったっの！』

「お前の頭ん中はご飯とお笑い番組のことしかないのかっ！？」

『あ、あと散歩も忘れずに！』

そんな問答を約5分位続けてから、ようやく君彦は夕飯の準備に取り掛かる。

今日は帰りが遅くなったこともあり在り合わせのものをいくつか適当に作って、早速食事となった。

勿論猫又には猫用の缶詰である。

メタボ気味な猫又の為に君彦が食事の量を制限しているが、この辺はやはり妖怪。

君彦が見てない間に缶詰の残り半分やキャットフードを勝手に開けてはつまみ食いしているので、全く意味を成さないのだ。

それでも君彦はいつものように缶詰を半分だけ皿に取り分けて猫又に差し出す、それを不服そうな目で見つめる猫又。

「何だよその顔は、そんなイヤそうな顔したってこれ以上やらないからな！？ お前自分の腹を見てみるよ、だるだるのぶよぶよじゃないか。いくら妖怪だからってメタボは全国共通・・・もとい、全生物共通で健康に良くないぞ」

『いや、この際は量はどうでもいい。それより今日の・・・じゃない、昨日の朝ごはんも晩ごはんも今日の朝ごはんもだ！ 何で猫用缶詰の中でよりにもよって一番マズイ、安物の「ミヤオ」なんだよ！』

猫又のツツコミに、君彦は気まずそうになりながら視線を逸らすと  
小声で答える。

「いや、大安売りしてたから」

『大安売りしてたから、じゃないだろっ！ 安いマズイって公式がお前の頭では成立しねえのか、オレだってたまには「モンプティ」が食べたいんだよっ！』

二又の尻尾をばしばしと畳に叩き付け、同時に怒りを表現する為に前足をばんばんとテーブルに叩きつけながら訴える。  
しかしこれにはさすがの君彦も反論した。

「仕方ないだろ、出来るだけ食費を削らなきゃいけないんだし！ それに何だよ「モンプティ」って！ それ猫用缶詰の中で一番高いヤツじゃないか！ 贅沢言っくな！」

『モンプティ                      つ！    モンプティが食べたい』

っ！！    こんなパサパサのツナじゃオレ様の腹は満たせない  
つつ！！！！

だだをこねるように畳の上で仰向けになると、そのまま前足後ろ足をバタつかせて暴れる猫又。

そんな猫又の暴挙に君彦はたまらず怒鳴り散らす。

「子供みたいにワガママ言うなよ！ 大体お前が毎日毎日つまみ食

いするから、買い置きの缶詰やらキャットフードやらがすぐになくなるんじゃないか！ 結局またお前のごはんを買い足す羽目になつてんだから、安物の缶詰しか買えなくなつてんのは一体誰のせいだと思つてんだ！」

『モンプティ

っ！ 君彦のケチ

っ！

モンプティが食べたいのお

っ！』

「あ        っ！        もううるさいっ！        知らん知らん！        一人で勝手に叫んでろ！」

愛想を尽かした君彦が最後にそう怒鳴ると、猫又は本当にしばらく一匹で叫んでいたが        本当に相手にしてもらえなかったので叫ぶのをやめて、途端に静かになる。

そして叫んで疲れたせいか・・・結局あれだけマズイと言つてた『ミヤオ』を勢いよく、綺麗に全部たいらげた。



## 暴たー（後書き）

どうでしょうか、猫又の舌の肥えようわ。

こんな感じで今後それぞれの日常生活を紹介していきますので、楽しみにしていてください。

## カマ騒ぎ（前書き）

今回君彦も響子も黒依も猫又も出ません、そんなとんでもない回になってしまいました。

少々下品かもしれませんが、ご了承ください。

## カマ騒ぎ

「響子おおおおお

っ！ どうしたのおお

っ！？ 一体何があったのよおおおお

っ！」

夜7時

、響子の伯父（伯母？）である蝶野蘭子がもうすぐ出勤時間だと言うのに、独身用マンションの5階にある響子の部屋の前で野太い声を張り上げていた。

金髪に近い茶髪に盛りに盛りまくった髪型、スパンコールをふんだんに使ったきらびやかなワンピースに身を包んでいる身長190近くの大男（大女？）が、カー杯響子の部屋のドアを叩きつけている。

ドアが変形しそうな位の力で叩きつける音と蘭子のパニック状態になった奇声は完全に近所迷惑となっており、周囲の隣人達が次々と部屋から出て来て蘭子の状態を見に出て来た。

「ちょっと、一体どうしたつてのよ蘭子ママ」

オレンジ色の縦ロールヘアにチャイナ服を着込んだ女性、

もといオカマが迷惑そうな顔で蘭子の周囲に集まって来ている女性達に声をかけた。

するとすぐ側にいた黒髪のショートボブをしたキャバ嬢が答える。

「それがね、学校から帰った響子ちゃんがママの携帯に出ないってんでこの騒ぎよ。いや、私もあんま事情とか知らないんだけどさ。どうせまた男絡みとかなんじゃない？ ほら、響子ちゃん美人だし私程じゃないけどね」

「何言つてんのよ、あんたみたいな銭ゲバと響子ちゃんを一緒にし

「ちや蘭子ママから怒りの鉄拳が飛んでくるわよう!？」

「そうよそうよう! 蘭子ママにとって響子ちゃんはアナルに入れても痛くない位カワイイんだからっ!」

「目でしょ!？」

顔が汚けりや言葉も汚いと言わんばかりに、侮蔑を込めた眼差しでキャバ嬢が訂正した。

蘭子の騒ぎがやがて回りにいた住人達にも感染していった時、耐えかねた蘭子が一喝する。

「んもう! あんた達うるさいわよおおっ!! 近所迷惑になるじゃないっ!」

「あんたが一番うるつせえんだよ、このイボイノシシがっ!」

「誰がイボイノシシよ、ちよつと今言つたの誰!? あたしちよつと傷付いたかもっ!」

両目にたつぷり涙を浮かべながら両手を胸の前に組んで傷付いてる素振りをする蘭子に、チャイナ服のゲイが事情を聞く。

「そんなことよりママ、響子ちゃん一体どうしちゃったの? 多感な年頃なんだからあんまり干渉するのは良くないんじゃない?」

「そうよねえ。ただでさえママったら響子ちゃんにべったりなんだから。そりゃこんな化け物にべったりまわりつかれちゃグレたくもなるわよ」

周囲にいる男女殆ど全員が大きく頷くと、蘭子は心外とばかりに首を大きく横に振って否定する。

「響子ちゃんはグレたりなんかしないわよっ！ このあたしが子供の頃からちゃくくんと愛情たっぷり注いで育てたんだから！」

「いやだから、近頃の子供は愛情過ぎもかえって逆効果なのよ？」

「んもうあんた達ッ！ こんなんじゃ話がちつとも前に進まないじゃないのさ！ 蘭子ママ、詳しく教えてよ。もしかしたら私達にも何か助けてあげられることがあるかもしれないわ！ なんとってここにいる娘達はみんな苦労ばかりしてきてるからね。三人寄れば文殊の知恵って言うじゃないっ！（何より早いとこ蘭子ママ黙らせないと本当に警察とかに通報とかされそうだもの）」

チャイナ服のゲイが宥めるように蘭子に声をかけるとようやく落ち着きを取り戻した蘭子が話し始めた。

「・・・ごめんねみんな、実はあたしもよくわかってるわけじゃないのよ。ただあたしがお店に出勤する時にはいつも毎日響子ちゃんに欠かさず携帯で行ってきますの電話をするんだけど、今日に限って響子ちゃん・・・全く電話に出てくれないの。もしかして何かあったのかと思って部屋に來たら鍵がかかってるし、でも部屋にいるのは間違いないの！ 響子ちゃんがものすごい勢いでドアを閉める音があたしの部屋にまで聞こえて來たし・・・。耳を澄ませてみたら気のせいかな泣き声みたいなのが聞こえて來て、あたし・・・心配になってきちゃってっ！」

泣き出す蘭子にキャバ嬢がハンカチを差し出すと思い切り鼻を噛

まれてべつとりとした半液状のスライムが出現した、それを小汚い雑巾を持つように手に取るとキヤバ嬢の表情が歪んだ。

その横でチャイナ服のゲイが状況を整理する。

「つまり学校、あるいは下校途中に何かあった響子ちゃんが急いで帰宅して・・・部屋で一人泣いてると？ ママの携帯に出ない位ひどく落ち込んでるんじゃないかと思ったママは、響子ちゃんに何かあったのか聞いただす為この騒ぎを引き起こしたと・・・そういうわけね？」

「あの子とっても我慢強い娘だもの、外で痴漢に遭って帰って来ても決して辛い顔をあたしに見せるようなことはなかったのよ。それが今は何があったのか知らないけどあたしからの電話に出ない位、玄関の前でこんなに訴えかけても出て来ない位ひどく落ち込むなんて今までになかったんだから。きつとてつもない目に遭ったに違いないわ！ 男絡みよ、それしかないもの！ 血も涙もない鬼畜生野郎に痴漢以上の何かをされてショックを受けたに違いないのよっ！ 可哀想な響子ちゃん・・・！」

蘭子の被害妄想のようにしか感じられない隣人達は互いに顔を見合せながら、何とか蘭子を落ち着かせようと努めるが・・・自分達も響子の性癖を知らないわけではなかった。

男を親の仇のように毛嫌いする響子、そしてそんな男相手にも全く引けを取らない強さを持つ響子・・・。

そんな彼女が男に何かされたからという理由だけで、今までにない行動を取るだろうか？

遂にキヤバ嬢がある推測をする。

「もしかしてさあ、響子ちゃん・・・男に恋してショック受けた、とかじゃないかしら？」

「はあっ！？ 何でそうなるのよ、あの響子ちゃんよ！？ 男なんてミトコンドリア以下の存在にしか感じないあの響子ちゃんよ！？ そんな響子ちゃんがどうして男なんか恋するって言うのよ、頭オカシイんじゃない！？」

まるで『恋』自体を否定するかのようになり、蘭子が食ってかかって反論してきた。

「だって、今までにないことって言ったらそれ位じゃん？ 響子ちゃんも男にイヤなことをされてきたなんて日常茶飯事でしょ。でもそんな響子ちゃんが今までにない位ショックを受けるって言ったらさあ、やっぱり自分が毛嫌いしてきた男を好きになっちゃって・・・そんな自分に戸惑ってるって風にしか考えられないじゃん」

キヤバ嬢の言うことに一理あると踏んだチャイナ服のゲイも頷き、賛同する。

「恋したことない響子ちゃんが、初めての恋に戸惑い・・・動揺する。うん、それ有り得るかも！ 私だって自分が男を好きなんだってわかった時、ショックで涙が止まらなかったもの！」

「それは種類が違い過ぎるでしょ、誰だって同性に恋心芽生えたら驚き戸惑うでしょうが」

周囲の隣人達が何の根拠もなく肯定していく中、ただ一人だけかたくなに否定する人物がいた  
蘭子である。

「有り得ないわ、あんた達・・・響子ちゃんのことを何も知らないからそんなことが言えるのよ。『あんなこと』を体験した響子ちゃん

んが、異性に対して好意を持つなんて・・・天地が引っくり返っても有り得ないんだから」

「だーかーらー私達、響子ちゃんの過去だの何だの聞いたことないんだから知らないに決まってるでしょ！？ 大体聞いたってママ教えてくれないじゃん」

「教えられるはずないわ・・・、あんな外道な出来事・・・っ！  
口が裂けても言えるはずない・・・っ！」

肩を震わせながら悲しい表情を見せる蘭子にただならぬ空気を感じて、いよいよどうしていいのかわらなくなってくるオカマ達に一人の若い新米キャバ嬢があっけらかんとした口調で空気をぶち壊した。

「あ、そういえばあたしいゝこないだの日曜に響子ちゃんが知らない男と喫茶店で仲良くお茶してたの見たわよおゝ？」

「え！？」

一瞬にして空気が変わるが、新米キャバ嬢はそれにも気付かず淡々と甲高い声で続けた。

「なんかあゝ響子ちゃんと同じ高校の制服かなあゝ？ メガネかけたもやしっ子と一緒にいて楽しそうだったわよあゝ！？ あたしそれ見てえゝ、あゝ響子ちゃんカレシ出来たんだあゝって思ってたんだけどおゝ。もしかしてもう別れたとかゝそんなんじゃない？」

新米キャバ嬢の言葉に一同凍りついた、特に蘭子は顔面蒼白になり完全に石になっている。



そんな蘭子を見た黒髪のショートボブのキャバ嬢が咄嗟に新米キヤバ嬢の腕を引っ張って、蘭子の視界に入らない場所へと連れて行ってしまった。

「あんたっ！ 最近ここに越して来たばかりの娘よね、今から私の言うことをよく聞きな！ このマンションではあの蘭子ママが全ての実権を握ってるようなモンなの！ いい？ ここでは蘭子ママに逆らう者は全てお水業界で働けなくなるのと一緒になのよっ！？」

「え〜、そうだったのお！？」

「そうだったのお！？ じゃないわよっ！ あ〜全く、余計なことをしてくれたわねアンタ！ あの蘭子ママにとって響子ちゃんって娘は世界そのものの、蘭子ママの命そのもののよ！ だからこのマンションに住む住人・・・もといこの町のお水業界で働く者にとっても響子ちゃんは大切な存在になるわけよ、まあそんな邪な考えなくてもこのマンションの住人はみんな響子ちゃんのが好きなんだけどね。響子ちゃん強いからしつこい常連客や、借金の取り立てに來たチンピラから助けてもらったキャバ嬢も少なくないし。とにかく蘭子ママの目の前で響子ちゃんの交友関係を無闇に口にするのはタブーよ、わかった！？」

「・・・何かよくわかんないけどお〜、とりあえずわかったかもお〜」

「それより、さっきの話は本当に本当？ 間違いないわけ？」

「うん、だってこの辺で響子ちゃんみたいな美人で目立つ娘って他にいないしい〜」

「相手はどんな男だった？ 痴漢っぽい奴？ ストーカーっぽい奴？」

「本当に普通の男の子だったよぉ？ なんかぁいかに草食男子って感じでえゝ冴えない感じだったかなぁ？」

ショートボブのキャバ嬢がそれだけ問い詰めると、そのまま新米キャバ嬢を部屋に追い返してから一息ついた。

思い悩んだように難しい顔になりながらタバコを吸い始める、とりあえず落ち着きを取り戻してから考え込むキャバ嬢。

「響子ちゃんについて本当に私達は何も知らないけど、もしさっきの話が本当だとしたら・・・大変なことになるわよ。相手の男が誰であろうとこのことが蘭子ママの耳に入ったりなんかしたら・・・そいつ、ヤバイことになるわね」

結局その後、お店に早く行かないといけないという理由をつけて響子の部屋の玄関前から蘭子を引きずるように連れて行ったゲイ達。当然玄関前の騒ぎは響子の部屋の中まで筒抜け状態であり、一部始終蘭子が恥ずかしい行動を取っていたことはわかっていた。

最初の内は確かに君彦のことがどうしても頭から離れない響子は、その苦しさからずっとベッドに伏せて泣いていたのは事実であったがその後は  
蘭子が部屋の前で騒ぎ出してからはほとんど隣人達も集まって収拾がつかない状態になり、響子自身も焦っていたのだ。

しかし響子は泣き腫らした目でみんなの前に出て行くのを躊躇い、そのまま事が治まるまで沈黙を保っていたのであった。

（  
ごめんなさい、蘭子さん。明日ちゃんと謝るから・・・だから今日はホント、あたしのことは放っておいて）





## 忍び寄る悪意

「あたしの好きなタイプは、あたしに興味がない人！ これに限るわ」

本当に？

だったらどうしてこんなに苦しいの？

アイツはあたしのことなんて最初から眼中にないし、それ以前に暴力を振るったあたしなんかより親友である男友達の方を選ぶに決まってるんだから・・・気にするようなことなんかないじゃない！

『恋しいの？ あの男のことが』

わからない。

『自分を見て欲しいのね？』

違う、あたしを見る男はみんなケダモノよ。

『だったらなぜ泣く？』

そんなのあたしの方が知りたいわよ！

『・・・そう、まだ気付いてないのね。 自分の本当の気持ちに・・・芽生え始めた感情に』

わからない、知らない、気付きたくない、知りたくない、理解したくもない。

『ふふ……、それでいいのよ。お前に恋や愛など語る資格はないのだから……。この私が憑いてる限りお前に言い寄る男など皆、下心を持った性欲の固まりのみ。お前が「女」になった時から、「私」という怨念が蘇ったのだ。私が受けた仕打ち……。そう、この恨みを晴らす為に』

私はお前に取り憑いたのだから』

翌朝、結局響子の様子が心配で仕事から帰った後も一睡もすることが出来なかった蘭子は目の下に大きなクマを作ったまま、虚ろな眼差しで窓の外を眺めていた。

何度も何度も携帯の履歴を確認するが、やはり蘭子から響子へかけた履歴以外何もない。

響子から蘭子への電話は一度もかかって来なかったのだ。

「  
はあ」

切ない溜め息を漏らしながら蘭子は洗面所の方へと重い足取りで歩いて行くと、伸びかけていたヒゲを剃り始める。

そんな時、隣の 響子の部屋のドアが開閉する音が聞こえて来て蘭子は即座に反応した。すぐさま顔をきれいに洗い流すと大きな足音を立てて部屋から飛び出る。

すると目の前には学校のセーラー服に身を包んだ笑顔の響子が立っている、蘭子は一瞬間でも見ているような感覚になりながらも瞳を潤ませて名前を呼んだ。

「響子ちゃんっ！」

蘭子は嬉しさの余り響子に抱きつこうと両手を広げて接近したが、素早い身のこなしで回避されてそのまま顔面からコンクリートの床に倒れてしまった。

『おはよう、蘭子さん』

熱烈なハグを拒否されても蘭子は嬉し涙を流し、床にぶつけた衝撃で鼻から血を垂れ流しながら立ち上がる。

「んもう、昨日は一体どうしちゃったのよ！ あたしものすごく心配してたんだからねっ！？」

『ごめんなさい、昨日は少し疲れてたから早めに休んでいたのよ。でも今はもう大丈夫だから心配しないでちょうだい。それじゃ私、今から学校とやらへ行って来ます』

「？」

奇妙な違和感を残したまま、蘭子は片手を振って見送った。ゆっくりと、優雅な足取りで歩いて行く響子の後ろ姿に蘭子は言葉では言い表し難い不自然さを感じていたのだ。

「あの子、いつもあんな風に笑顔を見せたことがあったかしら？ いつもならもつと子供らしい無邪気な笑顔で笑ってたのに、さっきの響子ちゃんは何ていうか・・・妙に大人びてるって言うか、艶っぽさがあるって言うか・・・」

「恋に目覚めた女は雰囲気変わるって言うしね！」

突然背後から太い声が聞こえて驚いた蘭子は反射的に相手を殴りつけていた、そして周囲から悲鳴がこだまする。蘭子が殴り付けた相手は同じ階に住んでいるオカマバーのメグミだったのだ。

「ちよっ！ 後ろから急に声をかけるからでしょっ！？ 大丈夫メグミ！？ おい救急車！」

「蘭子姉さん、声太過ぎ！ 朝だから仕方ないかもしれないけど、今のトーンは完全に男入っちゃってるわよっ！」

上品に、しやりしやりと歩く姿に周囲の視線は熱かった。響子自身は鏡で見る自分の姿がとても平凡な女の子だと信じ込んでいたが、それは一般的な美的感覚からではない。

実際響子の外見は生粋の日本人ではなく、ハーフっぽい外見をしていた。腰まである髪はウェーブがかっており、すらりとした体型に白い肌。少しキレ長だが瞳は大きくハッキリとした二重でまつ毛も長い、意志の強さを感じさせる眉に鼻筋も綺麗に通っている。

淡いピンク色のふくらとした唇は周囲の視線を意識してか、始終笑みを絶やさなかった。

学校へ向かっているはずの響子だが、その足は徐々に学校へ続く道から逸れて行く。まるで最初から別の場所へと向かっているかのように・・・。

だが時折交差点や十字路など、道が分かれる場所まで来ると急に足を止めて何かを探るように考え込む。そして目的の方向が決まると瞳を開いて再びゆっくりと歩き出す。それを何度も繰り返しながら、響子はどんどん住宅街の方へと入って行った。



やがてコンクリートの塀に囲まれた古めかしいアパート、『トキワ荘』という看板を掲げている場所へと辿り着く。

響子がトキワ荘に近付くと突然何かに弾かれたかのように後ろへと飛び退った、瞬間

響子の顔に苦渋が滲み出てト

キワ荘を睨みつける。

そしてもう一度、今度はトキワ荘のコンクリートの壁にそつと片手で触れようとした。

刹那、まるで感電したかのようにすぐさま壁から手を離すと指先がほんの少しだけ火傷したように傷付いている。

『チツ、小癩こじやくな・・・！』

小さく罵りの言葉を口にする響子であったが、そんな彼女に声をかける人物がトキワ荘から出て来た。

「・・・あれ、志岐城さん！？」

響子に向かって声をかけて来た人物の方へ視線を走らせると、そこには学ランに身を包んだ君彦が学生力バン片手に学校へ登校しようとして来た所であった。

君彦の姿を見つけるなり、すぐさま周囲を見渡す。

君彦の周囲に猫又の姿がない。

響子がすぐに辺りを見渡したので、彼女が猫又を探しているんだと察した君彦はいつもの屈託のない笑みで教えてやる。

「ああごめんね志岐城さん、猫又に用事があつてここまで来たんだよね？ 実は昨夜つまらないことで喧嘩をしちゃって・・・猫又の奴、またいつものプチ家出をしちゃったんだよ。まあどうせ食事時

になったら戻って来るとは思うけど」

猫又が不在と聞いた響子は、まるで好都合とも言つように妖艶な美しさを醸し出しながら、君彦に向かって微笑んだ。

（志岐城響子、お前がこの男を欲するといふのなら

私はその望みを叶えてやろうぞ。私の色香でこの男を快楽に酔い痴れさせ、思う存分この体で抱かせてやる・・・嬉しいだろう？　そしてまた地獄を見るがいい、お前を心から愛する男なんぞこの世のどこにも存在しないということを！）

## 忍び寄る悪意（後書き）

「昨夜つまらないことで喧嘩しちゃってさ」 さて、どんなことで喧嘩してしまったのでしょうか？ 「理由がつまらなさすぎるだろ」

さて、私個人としましては蘭子さん非常にお気に入りだったりします。描写がヘタなので外見のイメージとしては、「北斗の」に出て来そうな濃ゆい感じで想像してくれたらよろしいかと・・・（笑）

狙われた童貞（前書き）

君彦、逃げろおお

つつ！！

## 狙われた童貞

猫又が側にいない君彦に向かって響子は一っこりと微笑む。

『ねえ、少し話があるんだけど・・・いい？』

どこか媚びるような甘い声でそう聞かれた君彦は腕時計を見てから少し眉根を寄せるが、すぐに笑顔を作ると返事をした。

「学校までまだ時間があるし・・・、構わないよ。それじゃオレの家でいいかな？」

『ダメッ！！』

君彦の言葉に響子の顔は一瞬にして恐ろしい形相になるとドスの効いた声で拒絶する、そんな響子の余りの変わりように君彦は少し驚いたせいか一瞬目を丸くした、すると響子はハッと我に返ったようになつて顔色を悪くする。唇をつぐんで視線を下に逸らす姿はどこか挙動不審に見えた。

「えっと・・・、それじゃ学校に行きながらじゃ・・・ダメかな？」

『・・・いえ、いい所があるわ。私について来て』

そう言うなり響子は素早く君彦の腕を掴むとぐいぐい引つ張つて歩き出した、まるで女性の力とは思えない程の握力の強さに君彦は不審な眼差しで響子の後ろ姿をじっと見つめる。

（ いつも螺旋を描くようにまわり憑いてる色情霊の姿

が、見えない！？)

響子に引つ張られながら辿り着いた先は君彦達が通う風詠高校<sup>かぜよみ</sup>からさほど離れていない工場地帯の、建設中止となった廃工場であった。周囲には他の工場へ出入りするトラックや従業員の車が通って、工場地帯ではどうしても浮いて見える高校生二人に工場関係者達はこぞって不審そうな眼差しで見つめていた。

だがそんな視線に構うことなく響子は堂々と廃工場に張られたブルーシートの、一部分だけ一人が出入り出来そうな場所を見つめるなり中へと入って行く。

「ちょ　志岐城さんっ！　勝手に入ったらさすがにマズイんじゃないかな！？　それにこの廃工場って飛び降り自殺する男の子の幽霊が出るっていう噂だし、・・・まあオレは見たことないんだけど。とにかくやめといった方が・・・っ！」

『いいから来て』

君彦の言葉に耳を傾けることなくブルーシートの隙間から誘うような眼差しで君彦に手招きする響子、手を差し伸べる姿にこのまま抵抗するわけにもいかないと観念した君彦は溜め息を漏らしながら渋々中へと入って行った。

ブルーシートをくぐるとそこには鉄筋や廃材などが置き去りにされていて君彦と響子以外には誰もいない、まるでブルーシートをくぐった先は別世界のように周囲の工場から聞こえてたはずの機械音やトラックのエンジン音などが、今では遙か彼方で鳴っているようにすごく遠くに感じられた。

外界から閉ざされた空間に、今では君彦と響子しかおらず

さすがに不安が増して来る。

しかしそれでも響子はどんな鉄筋で組み立てられた途中の廃工場の中へと入って行った、慌ててついて行く君彦であったが廃工場の中へ入った途端にぞくりと悪寒がして全身鳥肌が立った。

足を止めた君彦に響子が振り向くと、ウェーブがかった長い髪が顔に半分だけかかり      その姿がとても艶っぽく見える。

そんな状態の響子が妖艶に色っぽく微笑んで来るものだから、君彦は思わず頭の芯がとろけるような感覚に陥った。

響子に見つめられてる間、君彦の心臓が早鐘を打ち全身に熱を帯びていく。先程感じた悪寒はいつの間になくなっており今はただ響子の視線に心地良ささえ感じていたのだ。

響子が一歩君彦に近付くと、君彦は一歩後ろに下がる。

『どうして逃げるの？』

「あ・・・えっと、その

」

君彦が返答に困っていると響子はこちらからかうようにくすくすと笑いながら手を差し伸べる仕草をして、それから君彦の頬に触れた。

（      なんて冷たい手なんだ）

優しく撫で回すように頬に触れて、それから親指を君彦の唇に押し当てる。君彦は響子の異常に気付きながらもその場から動けずにいた。すぐ目の前で自分を求めるように見つめて来る響子の瞳から逃れられないように。

顔を真っ赤にして直立不動のまま固まっている君彦を見て、響子は面白がって君彦の耳元に囁いた。

『そんなに固くならなくてもいいのよ、

あなたが求める

ままにしていんだから。私があなたを求めるように』

君彦の顔に響子の柔らかい髪の毛がかかり、芳しい<sup>かぐわ</sup>香りが鼻をくすぐる。そんな甘い匂いに更に頭の芯がボーッととして来て、君彦は思わず生唾を飲み込んだ。

すると響子は挑戦的に見える上目使いで君彦の目と鼻の先まで顔を近づけながら、セーラー服のボタンをひとつ・・・またひとつと外して行く。パチン、パチンという音から君彦は直感的に響子がセーラー服を脱ごうとしているんだと察した。

わずかに残っていた理性で君彦が響子の誘いを断り、セーラー服を脱ぐのをやめさせようと思いつて声に出そうとした時・・・響子は君彦が拒絶してくることをいち早く察知したのか・・・すぐさま君彦の硬直した片手を掴むと、そのまま自分の胸へと誘導した。



狙われた童貞（後書き）

さて、君彦の運命やいかに！？（笑）

## 予想通り

妖艶に、妖しく微笑む響子の                      たわわに実る胸  
へと誘導する手を掴むと、君彦が真っ赤な顔で声を張り上げた。

「やっぱり駄目だよ、こういうのはっ！」

力一杯拒絶しようと奮闘する君彦に、響子は更に自分の体をすり寄せて君彦を求める仕草をした。

『                      駄目じゃないわ、私がこんなに貴方のことを  
欲しているのに・・・』

しかし君彦の意志は固く、響子の両肩に手を置いてぐいつと自分から体を引き離す。それから真っ直ぐに響子の目を見つめながら君彦は真剣な眼差しで告げた。

「だってあなた、                      志岐城さんじゃないんでしょ  
？」

君彦の迷いのないハッキリとした言葉に響子は両目を見開き、固まった。その表情にはどうしてそれがわかったのか・・・疑問に満ちたものへと変わっている。

「志岐城さんはオレに、                      男に触れることを極端に嫌う  
んだ。こんな風に平然とした態度でオレの手を引っ張ったり近付いたりするなんて有り得ない、・・・ずっとおかしいと思ってた。でもこれでようやくハッキリしたよ。今オレの目の前にいるのはオレの知ってる志岐城さんじゃない。志岐城さんに取り憑いている色情

「霊なんだって」

凶星だったのか、君彦が断言した言葉に舌を打つと響子は乱暴に君彦の手を振り払うと後方に飛び退った。セーラー服のボタンが外されたままで響子の白い柔肌と下着を纏った胸が君彦の目にちらついて、咄嗟に視線を逸らす。

『ここまで誘惑されながら、なぜこの女を抱こうとしない！？ 私の色香が通じないわけじゃないだろう！？』

そう真剣な面差しで問われ、君彦は顔を真っ赤にしながら口ごもる。全く効果がなかったわけではない・・・むしろ何度欲にかられたか、それを認めると自分が凄く穢れた人間のように思えて仕方がなかったのだ。君彦は話題をすり替えようと響子の体に乗っ取っている色情霊に向かって懇願した。

「何の目的があつてこんなことをしたのかわからないけど、早く志岐城さんの体を返してあげてください！ その体はあなたが自由にしたい体じゃありません。あなたはとくに・・・亡くなってるんです。どうして志岐城さんに取り憑いているのかその理由はわかりませんが他人を呪つても決して幸せになんてなれませんよ。あなた自身の為にも、どうか安らかに成仏を・・・っ！」

そう言いかけると響子の顔が恐ろしい形相に変わり、怒りを露わにした。まるで目の前で突風が巻き起こったかのように君彦は色情霊の威圧感に押されて思わず足元がよろけてしまう。

『勝手なことを抜かすな、汚らわしい男めっ！ お前なんぞに私の気持ちがあわかつたまるものか！』

しかし君彦も負けてはいられなかった、猫又がいけない以上響子を救えるのは自分しかない……君彦は懸命に色情霊を鎮めようと一歩……また一歩と近付いて行く。距離を縮めようとする君彦の姿に色情霊はなぜか恐れを感じたのか、差し伸べようとする手から逃れるように後退していく。

『私に触れるな……っ、やめろっ！ 私は成仏なんてしない！ この者を使って私は……私は……っ！』

叫ぶ色情霊に君彦が触れた瞬間、さっきまでの突風が止んで辺りが急に静まり返る。それからぐんつと倒れるように響子の体がふらついたので慌てて君彦が抱き抱えた。意識を失っている響子を見るなり、恐らく色情霊が響子の体から出て行っただと察してほっと一息つく。

「よかった……、一時はどうなるかと……」

響子を抱き締めたまま君彦が安堵していると、響子はすぐに意識を取り戻して目と鼻の先にいる君彦とバチツと目が合った。自分を抱き締めている君彦、そしてゆっくりと自分の胸元を確認するとそこにはセーラー服のボタンが外されてブラジャーをした胸が露出しているのに気付く。

「あ、志岐城さん……気がつい……」

「ぎゃあああああああ

っつ、ヘンタ

イっ！」

胸を隠す前に君彦を思い切り殴り飛ばす響子、君彦は内心こうなるんじゃないかと予想だけはしていたが結局響子の強烈なパンチを避けることも出来ずにノックダウンされてしまった。

そんなやり取りを遠くから見つめる瞳があった。遠くの廃材の上から虚ろな眼差しで・・・半ば呆れたように見つめる一匹の猫。

『はぁ・・・結局こうなるわけか、アホらし。こんな調子じゃ君彦にメスとの交尾なんて当分の間は無理だな』

それだけ呟くと猫又は廃材から飛び降りるとそのまま君彦のことを見捨てて、いつもの散歩コースへと戻って行った。

## 散歩コース

猫又は季節の中で一番春が好きだった、ぽかぽかと暖かい陽射しの中

散歩も昼寝も、どちらも気持ち良く過ごせるからである。朝から君彦と響子によるドタバタ劇を目にした猫又は、恐らくこのまま一緒に居ても何か文句を言われるのではないかと思つて今日一日は君彦や響子に近付くことをやめることにした。

君彦と口喧嘩をして猫又が一時的に家出をするのは日常茶飯事であつたが、そのタイミングにまさか色情霊に体に乗っ取られた響子が現れるとは猫又ですら予想出来ていなかった。自分がその場に居れば色情霊を響子の体から追い出すことは朝飯前であつたが、つい・・思わず君彦が一体どうするのか？ という好奇心がわいてしまつたのだ。

結果的には君彦自身の力で響子の体から色情霊を追ひ出すことに成功したのだが、その後に自分が姿を現したらどうせ「こんな時にどこ行つてたんだ」とか何とか・・面倒臭いことを言われるのかと思つたので、そのまま見て見ぬフリを決め込んだのである。

猫又は天気の良いぽかぽか天気のお陰で上機嫌だつたので、鼻歌交じりに歌いながら家々の塀の上を歩いて行く。そんな時・・。

『やあ、猫又さん！ 今日随分と機嫌がよろしいようで、何か良いことでもあつたんですかい？』

近所の野良猫達が2、3匹程たむろしており、猫又の姿を見つめるなり話しかけて来た。猫又の姿は靈感の強い人間にしか見ることが出来ないが、動物や他の幽霊達には当然猫又の姿を目視することが出来る。

『うんにゃ、ただ天気が良いから絶好の散歩日和だと思つてな』

塀の上から猫又が答えると、ブチ猫が何かを思い出したかのように話しかける。

『あ、そういや3丁目の猫娘さんが最近猫又さんが来てくれねえつてんで寂しがってましたぜ？ 上等なお酒用意してるからたまには顔を見せて欲しいってさ、いよっ！ この色男！』

『大人をあまりからかうんじゃねえよ、でも・・・そういや最近酒飲んでねえからな。今夜辺りにでも顔見せに行くかな』

『そんな時はオレっち達にも声をかけてくださいね、おこぼれおこぼれ！』

『ったくお前等はホント調子良いんだからよ、やっぱやめた！ 抜き打ちで行くことにする！』

(・・・それなら毎晩猫娘さんの所にお邪魔するだけさね)

ぷいっとそっぽを向いて再び猫又が散歩コースに戻って歩を進めようとした時だった、遠くの方から半透明の物体が飛んで来たのでそれを野良猫達がいち早く気付き、その存在を猫又に教えてやる。

『猫又さん、浮幽霊のカナちゃんだぜ』

『あ？』

野良猫達の言葉に猫又が上を見上げると慌てた様子で10歳位の姿をした女の子が、真っ直ぐに猫又の方へ飛んできた。

『猫又ちゃ

ん！ 大変だよ！』

『ありや君彦のダンナに何かあったんじゃない？ カナちゃんてほら・  
・確か君彦のダンナのことが大好きだったかね。その気持ちを  
利用して猫又さんがダンナの監視役を・・・』

『おーおー、猫又さん鬼だねえ』

『猫の風上にも置けない畜生だねえ』

『怖いこわい』

『だあ

もう、お前等うるせ

つつ！』

猫又がシャ

ツと威嚇すると、野良猫達はだら

しなく笑い飛ばしながら毛づくろいなんかをし始めた。

『どうしたんだよカナ、言っとくが君彦のことならわかってんぜ。  
どうせあの色情女にいいように振り回されてんだろ？』

『今日はお兄ちゃんのことじゃないよ、全く・・・昨日の夜は一体  
どこに行ってたの！？ あたし猫又ちゃんのことずっと探し回って  
たんだからね！』

『わかったわかった、とにかく一体どうしたってんだよ！？』

猫又が面倒臭そうに適当にあしらいながらカナに続きの話を早く  
するように急かした。するとカナは何かを怖がるような表情で話し  
始める。



『1丁目の野良さん達に聞いたんだけど、最近この町にとっても怖い人が来たんだって！ あたしが見たわけじゃないんだけど、その人・・・この町の物の怪とか幽霊とかを苛めて回ってるの！ 逆らった物の怪さんの中には返り討ちに遭ってそのまま除霊されたり大怪我させられたり・・・、それ三日前の話でね！？ 昨日の夜には2丁目にその人が現れて・・・、2丁目の物の怪さんや幽霊さんは喧嘩っ早いのかばかりだからたくさん怪我人が出たって！ だんだんこっちの方に近付いて来てんの！ 猫又ちゃん、どうしたらいい！？』

早口に言葉を並べ立てるものだから話の内容をすぐに理解することが出来ず、猫又は一旦カナに落ち着くように宥めようとした。他人の家の屋根の上に上がり、そこでもう一度順を追って話を聞く。その場にいた野良猫達も興味からか一緒になって聞いていた。

『つまり・・・そいつがだんだんこの4丁目に向かって来て、物の怪退治してるってんだな？』

『うん、でも退治されちゃったのはその人に喧嘩を仕掛けた人達だけなんだって。でも・・・何かを探してるみたいでその質問に答えられなかったら結局暴力を振るわれて、怪我させられちゃったみたい』

怯えるカナを見て猫又は安心させるように左前足で背中を撫でてやった、しかしせっかく猫又がカナを宥めているすぐ隣で完全にパニック状態に陥った野良猫達が慌ただしく逃げる準備をしている。

『やっべ、そんじゃオレ達もさっさとトンスラしねえと！』

『怪我はイヤ〜！ 暴力反対〜っ！』

『どうしよオレ、もうすぐ子供が生まれるんだけどな・・・』

『ッシャ

ッ！ お前等うるっさいっつつてんだ

ろうがつ！ とにかくカナ、お前は心配すんじやねえよ。この4丁目にはオレ様がいるだろうが。この町内仕切つてんのは一体誰だと思つてんだよ、そんな物騒な奴が現れてもこのオレ様が返り討ちにしてやんぜ。でももしまだ怖いってんならお前は今夜からウチに來な、君彦が側にいれば安心だろ、な？』

（カナがいれば君彦もオレ様に向かってあれこれと口うるさく言わなくなるかもしれないし・・・）

そんなことを考えながら猫又は今から町内パトロールを強化することに決めた、カナには学校に行けば君彦がいるから自分が戻るまでは君彦の側にいるように指示して、それから謎の人物に襲われた物の怪がいるという2丁目へと出かけた。

## 散歩コース（後書き）

何やら不穏な空気が・・・、はてさて猫又達は一体どうなってしまっただろうか？ 戦闘シーンの描写が苦手なのでバトル突入だけはしてほしくないものです（笑）

## カナちゃん

「はぁ~~~~」

授業中のみならず休み時間も教室の自分の席で深い溜め息をつく君彦に、黒依は首を傾げていた。聞いてみたところ今朝方志岐城響子に色々と誤解をされてしまい、そのまま喧嘩別れをしたということとで君彦は落ち込んでいる様子だった。

黒依はおもむろにノートの切れ端に何かを書き、それをすぐ隣の君彦へと手渡す。君彦はきょとした顔で四つ折りされた紙切れを広げてそこに書かれているメッセージを読んだ。

『きちんと話せば誤解はすぐ解けるから、元気出してね。黒依』

（黒依ちゃん・・・っ！ 君は何て心優しい女の子なんだ・・・これぞまさしく地上に舞い降りた天使っ！）

自分が落ち込んでいる姿を見て心配してくれているのだと察した君彦は感激の余り嬉し涙を流す、それから隣で自分に微笑みかけてくれる黒依に向かって能天気な笑みを浮かべながら手を振った。

しかし誤解を解くと言っても廃工場での出来事の後、響子は君彦を殴り飛ばしてそのまま走り去ってしまった。当然君彦は遠のく意識を必死で堪えながら響子を追いかけたが結局のところ見失ってしまった、学校で会ってから改めて話し合おうと思ったが響子のクラスに行くとは欠席してると言われてしまったのだ。

（・・・よっぽどショックだったんだろうな、無理もないけど。てゆうかあれってオレの方が襲ったことになってんのかなやっぱり！？早い所誤解を解きたいけどオレまで学校を欠席するわけにいかな

いし、志岐城さんの担任の先生に聞けばどこに家があるのか教えてもらえるかな・・・？）

そんなことを考えながらふと窓の外に視線を向けたら、思わず吹き出してしまった。窓の外にはここが2階であるにも関わらずワンピースを来た女の子が宙に浮いたままこちらに向かつて手を振っているではないか。それを見た君彦は思わずその女の子の名前を呼びそうになるが、今まさに授業中であることを思い出して言葉を飲み込んだ。

カナはスウィーツと窓ガラスを通り抜けて君彦の元へと到着し、笑顔で話しかけて来る。

『君彦お兄ちゃん、カナ邪魔しないから今日はずっとお兄ちゃんの側にいてもいい？』

突然そう聞かれ、君彦は驚きながらも周囲に視線を走らせ小声で問う。

「　　って、いきなりどうしたの！？　今オレ学校があるからカナちゃんと遊んであげること出来ないんだけど・・・」

しかしそれで全然構わないのか、カナは無垢な笑みを浮かべながら大きく頷いている。

『カナ、大人しくしてるから！　猫又ちゃんも今日はずっと君彦お兄ちゃんの側にいろって言ってくれたし！』

（猫又の奴・・・、また余計なことを・・・っ！　てゆうか一体何を企んでるんだ、あいつわ！）

それからカナは休憩時間以外は君彦の教室の中を沈黙のままふわふわ浮かんだり、一緒になって授業を聞いたりと

本当

に約束通り大人しくしていたことに君彦はほっとしていた。以前カナが授業中の君彦の元へ遊びに来た時は色々とイタズラをしていたので、君彦が軽くカナを叱ったことがあった。それを覚えていいのかどうかはわからないが、ともかく何の問題もなく今日一日授業を無事に終えることが出来て安心する君彦。

黒依に関しては、君彦が幽霊が見える体質であることやたまに知り合いの幽霊や物の怪なんかが君彦にちょっかいをかけてくることをあらかじめ話しており、それを理解してくれているので君彦にとってはこれ程有り難い存在はなかった。

カナのこともあったのでとりあえず今日も黒依と下校することが出来なくて残念そうな君彦であったが、黒依はそんなことを気に病む様子もなく満面の微笑みを浮かべて別れたことに少なからず寂しさを感じていた。

家に帰る途中に君彦はどうして急にカナが君彦の元へ来たのか直接本人に聞いてみたが、カナは思い切り何かを隠している様子でも話そうとはしない。まるで誰かに口止めされているようにあからさまに言葉を濁すだけであった。

『あたし・・・、久しぶりにお兄ちゃんと一緒にいたかった・・・それだけだよ？ ホントだよ？ だから猫又ちゃんが帰って来るまではお兄ちゃんと一緒に居てもいいでしょ？・・・ダメ？』

「いや、それは構わないけど。ただカナちゃんが猫娘さんの所に帰らないのが珍しいなっと思ってただけだよ。カナちゃんってお母さんを恋しがっていたから、その母親代わりに猫娘さんになってくれてすごく喜んでいたからさ・・・」

『お姉ちゃんはお店があるから・・・、あそこは物の怪や幽霊のた

まり場だし・・・狙われやすそうだからって猫又ちゃんが・・・」

「・・・え？ 猫又がどうしたって？」

思わず口が滑ってしまったカナは慌てて誤魔化そうとする。

「な・・・っ、何でもない！ そんなことより、早く帰ろ！？ お外が暗くなる前に早く帰った方がいいよ！ 危ないよ！」

どうにも拳動不審なカナに違和感を感じながら、これ以上カナを追及するのは可哀想だと思って何も聞かないことにした。続きは当然猫又に聞くことにして、君彦はカナと一緒に家路を急いだ。

## 猫目石

3丁目のとある一角、人通りが少なくさびれた路地沿いに古めかしい飲み屋が一軒あった。木造でかなりガタが来ているその飲み屋には赤いのれんがかかっており、それには『猫目石』と書かれている。まだ午後の3時なので準備中なのだが、ガラリと硝子戸が開いて1匹の猫が入って行った。その猫を見るなりこの店の主が嬉しそうな笑顔を見せる。

艶のある黒い結い髪に真っ白い肌、キラキラとガラス玉のようなキレ長の瞳は緑に金色がかかっている。舞妓のようにうなじや肩を大胆に露出した着物を着た妖艶な女性、外見で言えば20歳前後の美しい彼女こそ3丁目で最も美しい物の怪とされている通称猫娘こと、名を涼子という。

『あら、猫又さんいらっしやい！でも残念、まだ開店してないんだけど・・・でも猫又さんなら特別だわ』

涼子に歓迎されながら猫又はひょいっとカウンターの椅子に飛び乗ると、両前足をテーブルに乗せてくつろぐ。

『いや、今日は遊びに来たんじゃねえよ。カナの奴から気になる話を聞いたんでな、ちよいとパトロールのついでに立ち寄っただけだ。涼子は何か知らねえか、最近ここいらを荒らし回ってる退治屋について・・・』

飲み屋をしているなら情報が早いはずだと踏んだ猫又であったが、涼子はきよとした顔でコップを拭き拭きしている。

『退治屋？さあ・・・この辺りは平和そのものだけど、猫又さん



のお陰で。でも退治屋だなんて穏やかじゃないわね。一体何なの？」

猫又は念の為、涼子にカナから聞いた話をそのまま話した。すると涼子は怯えるでもなく、かといって猫又の話を冗談だと思ってる風でもない余裕の笑みを浮かべるだけだった。

『随分物騒な話だけど、ようするにその退治屋が現れたら相手にしなきゃいいだけの話でしょ？ 何か聞かれても適当にあしらうわよ』

全く危機感を見せない涼子の態度に、猫又は少し呆れた声で注意した。

『おいおい、そんなのほんとした状況でもねえだろうが。相変わらずお前は危機感ねえというか何というか・・・』

涼子の樂觀ぶりに猫又は頭痛を堪えるような仕草をして、左前足で頭を押さえて首を左右に振った。すると涼子はくすくすとかうように笑うと、にっこりと微笑んで猫又に顔を近づけ

危機感のない理由を言って聞かせた。

『だって、いざとなったら猫又さんが助けてくれるんでしょう？ ウチは信じてるもの、猫又さんのこと』

妖しい色気をかもしだしながら猫又の耳にふうつと息を吹きかけると、猫又はぞくつと全身の毛を逆立てて息を吹きかけられた方の耳をパタパタさせた。それからすぐにカウンターの椅子から飛び降りるとまるで逃げるように入り口に向かう。

『と・・・とにかく！ 退治屋のことが片付くまで店は閉めときな！ 物の怪や幽霊の溜まり場になってるここが一番狙われやすいん

だからな！』

猫又の言葉に涼子は突然樂觀的な表情からプライドを傷付けられたような表情へと豹変し、声を荒らげる。

『お店は閉めないわよ！？　ウチの入れる熱燗を楽しみに来てくれるお客さんがいるってのに、営業は続けるからね！？　何かあったら猫又さんが来るまでウチがお客さんを守るわよ！』

『涼子・・・、だから危ないって・・・』

『ふん！　気が向いた時にしか来てくれない猫又さんにはウチの店の良さがわからないのよ！　わかつたらさっさと出てって！　町内パトロールでも何でもしてくればいいじゃないのさ！　猫又さんのバカっ！！』

拳げ句に熱々のおしぼりを投げつけようとする涼子の勢いに、猫又は急いで店を出て行った。

## 仲直り（前書き）

なんか、これでいいのか？って位に短いですが・・・今後ともこんな調子でお付き合いお願いします。

読み手側に出来るだけ苦痛や疲労を感じさせない程度の量で提供していこうと思っておりますので。

逆効果だったら更にごめんなさいです。

## 仲直り

その夜

、君彦は自宅で浮幽霊のカナと一緒に過ごしていた。カナは幽霊なので食事をする事が出来ないが、君彦と一緒にテレビを見ながら大笑いしている。一緒に喋ったりテレビを見て笑ったり、君彦はカナの笑顔を見て少しホッとしていた。

（昼間に来た時のカナちゃん、少し様子が変だったけど・・・今は大丈夫みたいだな）

家の用事、そして学校の宿題をこなしながら君彦はふと

猫又のことを思う。

（それにしても猫又の奴・・・、まさか今夜も家に帰らないつもりなのかな。二日連続で家出するなんて今までなかったのに。それに今やってるバラエティ番組はアイツが大好きなコントだから、今日は家に帰って来てテレビに釘付けになると思ってたんだけどな。本当にアイツは・・・どこで何をしてるってんだよ！このオレに心配させるなんて！）

そんな風に憎まれ口を心の中で叫びながら、君彦は眠りにつくまですつと猫又の帰りを待っていた。

翌日

、昼間の間は平気なのか・・・カナは君彦に挨拶だけすると一旦母親代わりである猫娘の涼子の元へ帰ると言いだした。君彦は気をつけて帰るようにカナに言々とそのまま何の変わりもなく学校へ登校する。

「猫又っ！」

その言葉に君彦は思わず周囲を見渡し、猫又の姿を探した、しかしそれは誰かが猫又を見つけた掛け声ではなく自分に対して放たれた言葉であつた。周囲を見渡した時に後ろを振り向いたらそこには響子が仁王立ちしており、少しバツの悪そうな顔で君彦を見据えている。君彦は響子とずっと気まずい別れ方をしていたことを思い出す、今まで忘れていたのは

家に帰らない猫又のこと

を考えていたからであつた。

「志岐城さん                      っ！ えっと、おはよう」

「おはよう・・・じゃないっ！」

乱暴に足を踏みながら君彦の近くまで来るも、やはりそれなりに一定間隔の距離を空けてはいる。男のことを極端に避ける傾向にある響子の今の行動から、君彦は目の前に居る人物がこの間のように色情霊に体に乗っ取られているわけではなく、真正銘響子本人であることを察した。

しかし当の本人は色情霊に乗っ取られた記憶がないのか、君彦の周囲に視線を走らせながら何かを探している様子である。君彦は響子の仕草を見て猫又を探しているんだと瞬時に判断し、少しだけ顔色が曇ってしまった。

「あ・・・ごめん、猫又の奴・・・今いないんだ。ちょっと色々あつて・・・」

抑揚のない声に響子は怪訝な表情を見せる、それから再びバツの悪そうな顔に戻るとあからさまに視線を逸らしながら話しかける。

「えっと、その・・・こないだはゴメン」

「

え？」

響子の唐突な謝罪に君彦は目を丸くした、まず何のことで謝罪しているのかわからなかったのが一番の理由であつたがそれと同時に気の強い響子が君彦に向かって素直に謝罪する姿を初めて見たので、驚きを隠せなかったのだ。

「ほら、昨日の！ あの後家に帰った時に蘭・・・っ、親戚の人に教えてもらったの。あたしの様子がおかしかったって。あたし・・・昨夜寝てから学校に登校するまでの記憶がなくて、登校する時の親戚とのやり取りを直接聞いて・・・あたしの記憶がない間に何かあつたんじゃないかって昨日ずっと考えてたわけ。あの場所であんなことになつたのって多分だけど、あたしに取り憑いてる色情霊が何かやらかしたってことじゃないの！？・・・別に何やらかしたのか知りたくもないけど、ちよつと気になつたから」

それを聞いた君彦は少し安心した、響子自身に大事がなくて良かったと胸を撫で下ろす。

「オレもずっと気になつてたんだよ、志岐城さんに何かあつたらどうしようって！ でもオレ志岐城さんの家がどこにあるのかわからないから様子を見に行くことも出来なかつたし、ごめんね。結局何も出来なくて。でもホント良かった！」

君彦の素直な反応に響子は顔を真っ赤にさせながら突然否定的な態度を取る。

「ばっ・・・、別にあんたがどうか・・・あたしは別につ！ただあのまま何事もなくするのはあたしの気分が悪いってだけで！」

「うん、志岐城さんは優しいもんね」

（や・・・やめろおおお　　っ！　純粹無垢な眼差しであたしを見つめないでよ、自分がものすごく汚れて見えるじゃない！）

君彦のこの「誰も何も疑わない真っ直ぐな心」に当てられて、響子は自分の屈折した心がひどく醜く思い知らされるようでもたつても居られなかった。すぐさま君彦を振り切るように早足で学校に向かう。それを見て君彦は全く自覚がないのか、一緒に登校しようと響子を追いかけた。

## 仲直り（後書き）

徐々に、しかし確実に魔の手が忍び寄る・・・。  
うまくいけば（？）次回には新たな展開へと突入いたします。



## 名前を呼んで

学校にいても相変わらず君彦は上の空であった、ぼんやりと窓の外を眺めたり溜め息をついたり何度話しかけても反応がなかったり・  
・ここまで来ればさすがの黒依も少し心配になって来て、猫又について訊ねてみる。

「ねえ、もしかして猫又ちゃん・・まだ帰って来てないの？」

「うん、小さいことで喧嘩するのはしょっちゅうだから特に気にしてなかったんだけど、今回はさすがにちよつと・・ね」

いつもならどんなに失礼なことでも空気を読まない行動に出る黒依であったが・・・、今回はかりは少しだけ空気を読んでみた。すると君彦は思い詰めたように真剣な表情で  
後悔したように呟いた。

「アイツがそんなにモンプティを食べたがってたなんて・・っ！  
家出する位ならオレ・・・1個位フンパツして食べさせてやれば良かった・・っ！ ああ・・、オレの馬鹿                    っっ！」

黒依は満面の笑みを浮かべながら黙って自分の席へと戻って行った。

昼休み、黒依は屋上で弁当を食べるように君彦を誘った。まだ落ち込んだ風であったが青空を見ながら美味しい弁当

を食べれば少しは気が紛れるかもしれないという黒依の心遣いである。いつもの君彦ならそんな心遣いに気付かないわけないのだが、猫又を心配する余りどうにも思考がうまく働かない様子だ。黒依は懸命に明るく振る舞いながらスキップするみたいに階段を駆け上がつて勢いよく屋上へ続くドアを開けた。

「  
げ」

一瞬、黒依の清廉潔白な可愛い顔からは想像もつかないような声が聞こえたような気がした。君彦はぼんやりと黒依の背中を見つめながら一体どうしたのかと同じように屋上を見る。するとそこには響子が一人で弁当を食べている姿があつて、君彦は一体どうしたのかと声をかけた。

「あれ・・・志岐城さん、そんな所に一人で一体どうしたの!？」  
声を掛けられて響子が顔を引きつらせながら振り向く、そこにはきよんとした顔の君彦と笑顔が引きつる黒依を見つけた。

「どうした・・・って、見りゃわかんでしょ!？」 お弁  
当食べてんじゃない」

「え〜? こんな所で一人で食べてるの!？ 寂しくなあい?」

極上の頬笑みで可愛らしく黒依が聞く、当然一人で弁当を食べて楽しい人間がいるとは思えない響子はその言葉がイヤミにしか聞こえず、返事をするのも億劫になった。そもそもどうしてこの二人が揃ってこんな場所まで来るのか予想だにしていなかったので、響子はすっかり居心地を悪くしている。しかし君彦は少しぎこちないが笑みを作つて響子の隣に座つた。

「な                      何よ!？」

「オレ達も屋上で弁当を食べようと思つてたんだ、志岐城さんさえ良かつたら一緒に食べようよ。ね。黒依ちゃん!？」

黒依の顔は笑顔を保つたまま蒼白になる、それでも君彦の嬉しそうな顔を見て                      少しでも笑顔が戻つて良かつたと思う

気持ちに嘘はなかつた黒依は、ひくひくしながら従つた。

君彦を真ん中にして座りお弁当を食べながら、響子は今朝の話を思い出したのもう一度君彦に聞いてみる。

「それよりさあ猫又、あんた・・・猫の方の猫又は一体どうしたのよ!？    色々あつてとか言われても、あたしは猫又がいなきゃこの色情霊に憑きまとわれて迷惑でしょうがないんだけど。ま、まあ・・・別にあんたのせいとか言つてゐるわけじゃないんだけどさ!？    ただちよつと                      猫の方がいないとどうにも調子が狂うと言うか・・・」

響子がたどたく訊ねてる途中で、突然目を丸くして大声を張り上げた。

「                      つて、猫又あつ!」

「え・・・何、突然?」

しかし今度は君彦のことではなく本物の猫の方であり、後ろを振り向くと猫又がすました顔で座っていた。当然それを見つけるなり君彦はお箸を握り締めながら響子以上に大声を張り上げる。

「猫又あつ！ お前今までどこほつつき歩いてたんだ、危うく心配するところだったじゃないか！」

精一杯強がるも、その顔は心底ほつとしている顔でどこか嬉しそ  
うでもあつた。しかし当の猫又はしれつとした態度で二又の尻尾を  
ふりふりしながら君彦達の方へ歩いて行く。

『オレだつてたまには、ぶらりと旅をしたくなるんだよ。 お前もど  
こその過保護な母親みてえなこと言つてんじゃねえよ』

「な・・・何を

っ!？」

（心配して損した、損しまくりだつ！ こいつ全つ然反省してない  
じゃないか、むしろ何だこのふてぶてしさはっ！ このすました顔  
が余計に腹立つっ！）

『んで？ お前等随分仲良しになつてゐてえじゃねえか、三人一  
緒に昼飯つてか。青春なこつて』

猫又のイヤミつたらしい台詞に響子は猫又の首根っこをつまんで  
持ち上げようとする                      がしかし、子猫程度ならこれで  
持ち上がるものだが猫又は相当なメタボだつた為これ以上持ち上げ  
ようとしても皮が伸びるだけで無駄だつた。

『いてえ                      っ！ 皮をつまむな！ 引つ張るな！ 持ち上  
げようとするな！ オレの体はお手軽に出来てねえんだよ！』

「うるさいっ！ 大体あんたがこいつの側にいないせいでエライ目  
に遭つたんだから、あんたも猫又ならちゃんと猫又に取り憑いてな  
さいよっ！」

「志岐城さ〜ん、何を言ってるかさっぱりわからないんだけど〜？」

響子が「猫又」という名を連発するものだから、君彦のことなのか猫又のことなのかわからない黒依がたまらずツツコミを入れた。しかしこの何気ない一言が大きな問題へと発展していく。

「つまりい〜、志岐城さんが君彦クンのことを『猫又クン』って呼ぶか・・・猫又ちゃんの方を『猫又ちゃん』って呼ぶか。呼び方をハッキリ分けた方がみんな理解しやすいと思うのよね」

黒依の言葉に異論がないのか、君彦自身も響子に呼ばれる度にどっちの方に向かって呼んでるのか時々わからなかったので、ナイスアイデアだと思っている。猫又に至っては全く興味がないのか太陽の日差しを満面に受けるように屋上で淫らに仰向けになっている。しかし響子はなぜか反論していた。

「あ・・・あたしがこいつのことをクン付けで呼べって!?　じ・・・っ、冗談じゃないわ!　こんなヤツ呼び捨てで十分よっ!」

その言葉に君彦は泣き笑いを浮かべながらがつくりと肩を落とすて落ち込んでいた。

「だったら猫又ちゃんのことをちゃん付けで呼べば、どっちのことかすぐにわかるわよね!」と、黒依。

「このふてぶてしい猫のどこが『ちゃん』なんて可愛らしいものになるってのよ!　こいつもせいぜい呼び捨てレベルだわ!」

『ワガママ言うんじゃないよ、色情女』

「誰が色情女だ、このメタボ猫っ！」

「ま、まあまあ落ち着いて二人とも！ と、とにかく・・・オレはともかく黒依ちゃんに關して言えば猫又の姿が見えないわけだから志岐城さんがオレと猫又のことを同じ呼び名で呼ぶからややこしいだけってだけなんだから。そうだな・・・、それじゃこうしない？ 猫又に名前を付けるんだよ！」

『はあっ！？』

君彦の思いがけない提案に猫又は仰向けのまま、頭が引っくり返ったままの状態で驚愕していた。そんな猫又の反応とは裏腹に黒依と響子の方は異論がない様子である。

「あ、それいいかも！ 猫又ちゃんに可愛い名前を付けてあげれば、君彦クンのことはそのままでもいいもんね！」

「・・・あんま可愛くない名前でもいいんでない？ こいつを体现する呼び名であれば・・・」

かくして弁当を食べ終わった後の君彦達の暇つぶしは、猫又の名付け親大会となってしまうた。そこで黒依がにこにこ楽しそうな笑みを浮かべながら思いついた名前をどんどん並べて行く。

「フランソワーズ、ジャスティン、リッチー、マイコー、エヴァンジェリン、ウルシズヴォワセノーズとか・・・」

次々と外国の名前を出していくので当然、猫又の姿がバツチリ見えている君彦と響子はそれらの名前が全く猫又に当てはまらないので苦笑いを浮かべていた。猫又に至ってはなぜかムキになって名前を付けられることを拒絶している。黒依はこの中から猫又の名前を決めようとしているので、とりあえず危険だと判断した響子はさり気なく却下した。

「長過ぎるわよ、・・・」たま『でいいじゃない』

「ええゝゝつ、それじゃありきたり過ぎるよ！ それならケンコバとか、ツツチーとか・・・」

どこかで聞いたことのある名前に、響子は疑わしそうな眼差しで黒依を見つめながらとりあえず聞いてみる。

「あんた、もしかして昨夜アメトーク見てたわね？」

図星だったのか黒依は否定することもなく、満面の笑顔のまま大きく頷いた。

「あ、わかった？ 昨日はアメトーク家電芸人SPだったの！ 君彦くんも見てた？」

「えー？ いや、テレビのチャンネルをずっとコント特集にしていたから・・・」

『あ つ、しまったあ つ！ コント特集見るの忘れてたあ つー！』

話が脱線してしまい、再び戻そうとする三人に遂に猫又がキレ出

した。

『オレに名前付けようとしてんじゃねえよ、オレは猫又のままでいいんだよ！』

2本足で立ちながら君彦と響子に向かって文句を言う、しかしそれを聞き入ってしまったら響子は君彦のことを名前かクン付けで呼ばなくてはいけなくなってしまうので、負けじと響子も反論しようとした矢先だった。

猫又は全身の毛を逆立てて両目を大きく見開くと牙を剥き出し、君彦達に向かって猫又が本気で怒った。

『オレ様に名前を付けていいのは、オレが認めた主人だけだっ！勝手に名付けようとしてんじゃねえっ！！』

その余りの迫力に、君彦と響子は思わず息を飲んで黙りこくってしまった。すると猫又はまるで我に返ったようにハツとすると、バツの悪そうな顔になり

ぶつきらばうに謝った。

『わりい、今オレ　ちつと機嫌良くねえから・・・もつかい散歩して来るわ。君彦　オレの帰りが遅くても心配する必要ねえからな・・・』

君彦達に背中を向けて歩いて行く猫又の姿が、どことなく孤独を感じさせたので君彦は余計に心配になった。

「あいつが　、あんな風に怒ったの・・・そういえば初めてだな」

猫又が何で機嫌が悪いのかわからない、そして先程の台詞



猫又の主人について何も知らない君彦はなぜか無性に胸騒ぎがして仕方がなかった。

## 猫集会

その夜、君彦が帰宅したのを他人の屋根の上から確認すると猫又は再び巡回を始めた、昨日は謎の退治屋が現れなかったということもありもう一度3丁目を回ってみることにする。

夜の10時、猫目石の女主人である猫娘の涼子は4丁目の猫集會に参加していた。というより殆ど野良猫や浮幽霊達の溜まり場と化している空き地でいつもならお酒を飲んだり踊ったりの宴会騒ぎをするだけの集まりであるが、今回に限っては謎の退治屋の件で町に住む物の怪や幽霊達が脅えているのでその情報交換や注意を促す為に緊急で集まっていた。

涼子は力の弱い物の怪達に身の守り方を教えてやる、といってもせいぜい身を隠すか退治屋に逆らわないようにアドバイスをするというだけであつたが・・・。

『とにかく猫又さんがこの退治屋を何とかするまでの間だけでいいから、みんな自重してくれないかしら。不満もあるでしょうけど命を狙われるよりはマシでしょう、とにかくこの退治屋が何を探して回っているのかわからないけど抵抗だけはしないようにね!？』

涼子の言葉にみんなが互いに視線を送り合いながらざわめく、猫又がこの町を仕切ってからというもの平和が保たれていたせいで危機感を感じていないのか、それとも必要以上に怯えているせいか・・・どちらにしるみんなの反応はまちまちだった。

『でも涼子さん、退治屋って物の怪を退治するのが仕事なんですよ？ 抵抗しないから助かるってのもおかしい話じゃないかい?』

『そうだよ、普通は抵抗しなかったらそのまま浄化や成仏させられちゃうじゃん』

『大体探し物つてのが何なのかわからないんじゃ、それが見つかるまでそいつがずっとこの町をうろつくことになるんじゃないの？

いくら猫又さんでも物の怪の天敵である退治屋相手じゃ、さすがにヤバイと思うけど・・・』

『はあ、あ、こんな時・・・征四郎さんせいしろうがいてくれたらにやあ・・・』

一匹の猫が溜め息を漏らしながら口にする、するとその場にいた野良猫や物の怪、幽霊達がこぞって注目した。突然周囲から視線が集まったことに気付いた猫は瞳を大きく見開いて失言だったことを謝罪する。眉根を寄せて悩ましげな顔になりながら涼子が頭を押さえていた。

『全く・・・この場に猫又さんがいなかったからいいものの、二度とその人の名を口にするんじゃないよ！？』

『はい、ごめんなさい・・・つい』

そんな時、話が見えない別の猫が隣に居た物の怪に小声で話しかける。

『ねえ、今の人ってだあれ？ 猫又さんとどういう関係なの？』

すると老人の姿をした物の怪が周囲に視線を走らせながら小さく答えた。

『いいか、ワシから聞いたことは誰にも言うなよ？ 征四郎さんというのは、まあ一言でいえば猫又の好敵手<sup>ライバル</sup>じゃな。人の身でありながら妖怪の中でもトップクラスの実力を持つ猫又と幾度となく戦い続けて来た仲で、征四郎さんとはある凶悪な妖怪との戦いで命を落としてしまったんじゃ。それ以来猫又は征四郎さんの遺志を継いでこの町を守護する役目を一手に引き受けたんじゃ』

『ふゝゝん、人間の中にも凄いのっているんだねえ』

猫集会を始めておよそ30分、なかなか收拾がつかずに涼子が困り果てていると突然カナが蒼白な顔を更に青くさせて涼子に寄り添って来た。

『・・・どうしたの、カナちゃん？』

『涼子さん、怖いよ！ 強い気が近付いて来る！』

カナの言葉を聞いた涼子が顔色を変えて立ち上がり、空き地一帯に注意を払った。すると突然近くから悲鳴が上がった！

『ぎにやあああああゝゝっ！ た、助けてゝゝゝっ！』

見るとそこには一人の若い男が立っており、三毛猫の首根っこを掴んだままこちらを見据えていた。全員がその男の殺気に当てられて一目散に逃げ出した。まるで蜘蛛の子を散らすように一瞬にして殆どの妖怪や野良猫達が逃げ惑う中、涼子はカナを背に男を睨みつける。

『あんた一体何者なんだい！？ その子を離しておやり、可哀想だ

ろっ！』

すると男はあっさりと掴んでいた猫を解放すると、同じように鋭い眼光で涼子に狙いを絞っていた。男の異常なまでの威圧感に涼子は足が震えて今にも腰を抜かしそうだったが、同じように腰を抜かして逃げる事が出来ない物の怪や野良猫達を見捨てるわけにはいかず、何とか気丈に振る舞っていた。すると男は低い声で涼子に話しかけてくる。

「お前、猫娘という妖怪だな。どう見ても『娘』には見えないが、まあどうでもいいか。そんなことより聞きたいことがある」

静かな口調で訊ねて来る男に、涼子は噂通りだと思った。猫又の話では退治屋は探し物の在りかを聞いて回っているそうで、いきなり攻撃を仕掛けて来るわけではなくまずはその探し物に関して尋ねて来るそうなんだと、そして今まさに男は涼子に訊ねて来ている。

しかしこれにうまく対応しなければ、

怪我人が出

てしまうことに間違いなかった。

（あの格好、君彦さんと同じ制服ね。ということとは少なくとも君彦さんとさほど年齢が変わらない、しかも同じ学校に通う生徒ということになるわ。どうしてそんな奴がいきなりこの町の物の怪達を襲うような真似を？）

「質問は単純明快だ、誰だ」

この町を仕切っている妖怪は

『                    つっ！！』

涼子は思わず動揺してしまった、強い衝撃を受けたように心臓が

跳ね上がる。しかし周囲に居る物の怪達を見て、何とか必死に恐怖心を取り払おうと努めた。

『はっ、そんな奴知らないよ。あたし達はちゃんとルールを守って静かに暮らしているだけさ。町を仕切るだの何だのと、随分物騒な話じゃないの。そんな大層な奴、この町にいないわね!』

そう勇んだ瞬間、目の前に居る男以上の恐怖が涼子達を襲った。暗闇の中に何かがいる。野獣か何かの唸り声のようなものが聞こえて来て、男の背後に居る何かに目を凝らす。するとそこから現れたのはとても大きな犬、ライオン程の大きさはありそうな巨大な柴犬が牙をむき出しにして涼子達を威嚇していたのだ。それを見て腰を抜かしていた物の怪の老人が震えた声で叫んだ。

『そいつは まさか、犬神かつ!? お前・・・犬神使いだっただのか!?』

『犬神使い?』

涼子が繰り返す、すると物の怪の老人は腰を抜かしたまま後ずさるように答える。

『数多の物の怪、妖怪、魑魅魍魎ちみせうりょうをその鋭い牙で葬って来た上位妖怪だ、そんじょそこらの妖怪じゃ歯が立たん!』

すると犬神使いの男が一步、涼子達の方へと距離を縮めて来た、それに合わせるように涼子達も無意識に一步ずつ下がる。男の殺気だけでも相当な威圧感があつたと言うのに、その後方に犬神が控えていたことで更に圧倒的な力の差を見せつけられて成す術もなかった。

（た　　、助けて・・・猫又さんっ！）

犬神使いの男がすぐ近くで震えている猫に向かって睨みを利かせた、するとそれに応えるように後方に控えていた犬神が唸り声を上げながら3匹で固まって震えている猫に先程の質問を浴びせた。

『ひいっ！　命だけはお助けをっ！』

ブチ猫が震えながら叫んだ。

『如果说え、この町をおさえてる妖怪は何者で今どこにいる！？』

犬神が叫ぶと涼子はその場に動けなかったが、何とか目線で野良猫達に訴えかけた。

（あんた達、絶対猫又さんについて何も口にするんじゃないよ！？猫又さんのことを話したら猫又さんだけじゃない、一緒に住んでいる君彦さんにまで危害が及んでしまうんだから！　それだけは絶対に  
絶対にさせちゃダメなんだからねっ！？）

『この町を仕切ってるのは猫又っていうアメリカンショートヘア的な毛並みをした妖怪ですうっ！』

『猫又さんは4丁目のボロアパートで猫又君彦っていう人間と一緒に住んでますうっ！』

（バカ

つつっ！！）

あっさりと白状してしまった野良猫達に心の中でツッコむ涼子、

今すぐにでも3バカ野良猫達を締め上げたい所だったがすでにそんなことをしても意味がないことはよくわかっていた。見ると男は無愛想な顔のまま、探している者を突き止めたのか・・・空き地に居る物の怪達に興味を無くして、犬神と共に涼子達に背を向けて去って行った。

へなへなと地面に腰を抜かして倒れ込んだ涼子は、その男の背中を見送り・・・それから全身の力が抜けてしまう。

『あいつの狙いが猫又さんだなんて・・・っ！ 今すぐ逃げてちようだい猫又さん、さすがの猫又さんでもあの犬神使いには勝てっこないわ。怪我だけじゃ済まない』

住宅街を歩きながら犬神使いの男は鋭い三白眼の瞳で夜空を見上げた、それから自分が探し求めていたものに関して小さく呟く。

「猫又・・・、そいつがこの町を仕切っているのか。それにその妖怪に取り憑かれているであろう男、猫又君彦。・・・奇縁だな」

『  
どうした慶尚<sup>けいしょう</sup>？』

犬神使いの男、慶尚という名の男に向かって犬神が声をかける。  
すると慶尚は無愛想な顔に少しだけ笑みを作り、鼻で笑った。



## 響子と無愛想男

朝、響子はいつものように学校へ登校していた。以前なら出来るだけダサく見えるように腰まで伸びた長い髪を三つ編みにしていたのだが、どんなに外見をダサくしても色情霊のせいで全く効果がないことがわかって以来ずっとウェーブがかった髪をそのままにして学校に通っている。

色情霊の力が絶好調に発揮されていた頃、登校時間も他の生徒より早めにマンションを出ていた。なぜなら登校途中で色んな男達に言い寄られたり痴漢まがいなことをされたりで、それらを振り払っているとは完璧遅刻してしまうからだ。しかし君彦と猫又に出会ってからは気のせいか以前までの周囲の男達の発狂ぶりが少し鎮静化されているので、普通に登校しても間に合うようになっていた。

学校近辺に近づくにつれて響子に興奮し後を付けて来る男達が一、また一人と増えながら響子は徒歩で登校していたのがいつの間にかダッシュになっている。いくら鎮静化されているとはいえ、やはり完全に目立たないようにするには無理があった。

響子は鬱陶しそうに全速力で駆け抜けて行き角を曲がった瞬間

、安全確認をせずほぼ直角に方向転換したせいでゆっくり歩いて通学していた男子生徒にぶつかってしまう。かなりの勢いで走っていたがその男子生徒は190近い長身で体型も結構がっしりとしていたこともあって、響子にぶつかっても体勢を崩して倒れることもなく逆に響子の方がぶつかった衝撃で跳ね返り尻もちをついた。

「いったあゝゝっ！」

男子生徒の背中に顔面をぶつけた響子が顔をさすっていると、反

応が鈍いのか・・・ぶつかつた男子生徒がワンテンポ遅れてから振り返り、響子に向かって手を差し伸べて来た。

「大丈夫か？」

年齢の割に低く渋い声で言葉をかけて来る男を見上げる響子、黒髪の短髪に少し日に焼けた肌、目つきが非常に悪い三白眼で表情は全く変わることのない無愛想であつた。ぶつかつて来たのは響子なのだが長身の無愛想男が手を差し伸べている姿に、あからさまに拒絶的な眼差しで無視する響子。

自分で立ち上がってセーラー服のスカートに付いた砂を払い、そのまま声をかけることもなく通り過ぎようとした。そうこうしている内に後方から響子を追いかけていた男共が追いついて来たので、響子は舌打ちしながら再び走ろうとした

その時だ。

「おい、ちょっと待て」

一本調子な低い声で響子に話しかける、当然男性不信の響子が無愛想男の相手をするはずもなく無視して逃走の続きをしようとした時、突然男が響子の肩を掴み背中を軽い力で叩いた。

男に触れたことで頭に血が上つた響子が理性を失つたように振り返つて、自分に触れた男を殴り飛ばそうとしたが、なぜかそんな気が一瞬にして吹き飛んでしまっている。

（え？　これってどういうこと！？）

まるでずっと重くのしかかっていたものが取れたような感覚になつて、男の方を振り返つたまま呆けていた。わけのわからない展開に響子が言葉を失っていると、後方から追いついて来た男に気付い

て再び逃げようとしたら無愛想男に再び声をかけられる。

「色情霊なら被ったから大丈夫だ」

「え!？」

信じられない言葉を聞いた気がした、目を丸くして固まっていると自分めがけて追いかけていたはずの男達が普通に歩き出し・・・自然なテンションで響子の前を通り過ぎて行く。展開に全くついて行けない響子が自分を通り過ぎて行った男達と、自分の背中を軽く叩いた無愛想男とを交互に見つめて絶句している。

すると無愛想男は響子に一言だけ声をかけた、変わらずの一本調子な低い声で。

「完全に被ったわけじゃないから時間が経てばまた元に戻る、だが今日一日位は色情霊に付きまとわれることはないはずだ。

じゃあな」

それだけ言つと無愛想男は響子に名乗ることもなく、そのまま歩いて行ってしまった。響子が走って追いかければもつと色々聞くことが出来たはずだが、それが出来ない。彼が何者なのか全くわからないし、学ランを見れば同じ風詠高校の生徒であることはわかるが自分に全く興味を示すことなく、しかも色情霊の取り憑かれていることを見抜き、なおかつその厄介な色情霊をあつさり被ったと言うその男の突然な登場に、響子は思考能力が完全に停止してしまつて行動に移すことが出来なかったのだ。

「あいつ、一体何者なの!？」

何事もなかったかのように学校に向かって歩いて行く男の後ろ姿

を目で追いながら、響子は一瞬幻か幻覚でも見たかのような錯覚に陥った。そして目をこすって何度も確認する。

その男の側に寄り添って歩くように、とても大きな犬が男と一緒に歩いている姿が見えたような気がした。

## 響子と無愛想男（後書き）

今回ちょっと文章的にわかりにくいかもしれませんが、調子が悪かったってのもあるかもしれませんが・・・唐突な展開ですが、うまく伝わってくれたらいいのですが。

## 無愛想な転校生

「君彦くん、おはよう！」

「おはよう、黒依ちゃん！」

教室で君彦と黒依が挨拶を交わす、どうやら昨日は家出をしていた猫又が無事だったことに安心したからなのか、君彦にいつもの明るさと笑顔が戻っていたので黒依は内心ほっとしていた。いつものように他愛のない会話をして笑っているとすぐに始業ベルが鳴って全員が席に着く。そんな時、周囲の生徒達からある噂が持ち上がっていて、君彦もその噂について席が近い黒依と小声で喋る。

「そういえばみんな噂してるね、この中途半端な時期に転校生が来るって。しかもうちのクラスらしいし」

「どんな人なのかなあ、楽しみだね！」

黒依の微笑みに君彦がデレデレになっているといつもなら担任が教室のドアを開けて入って来るのだが、ドアの前で何やら話声が聞こえて来てなかなか入って来ないから全員が訝しげに外の様子を気にしていた。すると担任がどうやら怒声を上げて怒っている様子だった、最初は教室内がざわざわとしていたが担任が誰に対して何を怒っているのか気になった生徒の殆どが耳をダンボにして盗み聞きをし始める。

「全く君と言う奴は！ 本当なら今週の月曜から学校に来るはずだったろう！ 転校初日から何堂々と無断欠席してるのかね！？」

しばしの沈黙、その微妙な間から察するに相手は明らかに言い訳を探している様子である。そして彼が導き出した答えがこれだった。

「いや、新調した学ランが小さくなっていたのでサイズを合わせてました」

「どんな成長期っ！？ 転校決まってから一週間経ってないよね？ 元々成長期だから制服作る時点で割と大きめに作るはずだよね！？ つくならもう少しマシな嘘っこう？ この際法事でも仮病でも何でもいいから正当そうな理由考えて？ いちいちツッコむの先生しんどいからさあ！」

担任が怒鳴っている相手はどうやら噂の転校生らしく、すりガラス越しから見えるシルエイトから察するに190近くはありそうな長身で細長い『何か』を持っている。声は高校生にしては渋い感じの低さで何となく肝の据わったような口調だった。

担任の先生相手に全く怯むことなく、どことなく一本調子に聞こえる台詞から怖いもの知らずというイメージをクラス全員が抱いてしまっている。それからやっと話がまとまったのか担任が教室のドアを開けて入って来た。しかし顔は完全に不機嫌になっており、ひくひくと顔面が怒りから痙攣していた。そのすぐ後に転校生が入って来る。彼が入って来た途端 教室内が一瞬にして静まり返った。

転校生を見た瞬間、クラス全員が一致団結したかのように同じ反応を示している・・・それは。

怖っ！

高校生にしては身長が高く体も結構がっしりしていて見た目には

スポーツマンに見える、日に焼けた浅黒い肌に後頭部は少し刈り上げられている黒髪で基本的に短い髪型、目つきの悪い三白眼で本人は普通にしているかもしれないが、目が合った相手を睨み殺すかのような鋭い眼光である。口は無愛想を体現したかのようにきゅっとくんだままの状態だった。

片手に持っているのは１メートル半はありそうな真っ直ぐとした物を白い布で覆ってある。布の包み方から見ても剣道部がよく手にしている物と似ていたので、それが竹刀か木刀だと察することが出来た。

クラスの誰もが転校生が入って来た途端に、特に男子は視線を落とした。目が合ったらいやもんをつけられるかもしれないと思っただけだ。逆に女子に関しては彼の硬派で強そうなイメージから、急にそわそわと騒ぎ出している。

クラスの殆どの女子が同じような態度をしていたので君彦は急に心配になって来た、自分の前の席に座っている黒依もあの転校生のことがカッコイイなどと思っていないか・・・それだけが気がかりであった。すると黒依は椅子を後ろの方にずらして君彦に小声で話しかけて来る。

「君彦くん、あの入って何だかちよつと怖そうな人だよな」

黒依の反応はクラスの女子とは真逆のものだったので安堵の息を漏らす、そして君彦は嬉しさを隠せない表情で返事をした。

「そうだね、でもきつと大丈夫だよ！ オレ達はクラスであまり目立たないタイプだから、こっちから話しかけて来ない限り関わり合いになる要素が見当たらないからね」

もはや君彦の思考回路から転校生の存在が消失してしまったよう



で、黒依が再び元の位置に戻ってもにこと満面の笑みを浮かべたまま上機嫌な様子である。そんな君彦のことを転校生はじっと鋭い眼差しで見つめ続けていた。

（                      あれが、猫又君彦か・・・ ）

そう心の中で呟きながら、転校生は白い布でくるまれた竹刀が木刀を握る手に力を込めた。

### 無愛想な転校生（後書き）

はい、黄金パターンとか王道とか好きなんです。

w i k i で「転校生」と調べてもやはりこのパターンはよくあるネタのようで（笑）

一応連載当初からメインキャラとして出す予定をしていた人物です、彼がどのように君彦や猫又と関わって行くのか楽しみにしてください。

彼の登場は君彦達にとっても大きなものとなります、キャラ的にも気に入っていただけると嬉しいのですが・・・（^^）

問題児、1 / 2 / 3 !

「犬塚慶尚です、よろしく願います」

君彦のクラスに転校してきた無愛想男が自己紹介をした、名乗った後には大体自分の趣味とか得意なこととかを話すものののだが、犬塚は名前を名乗っただけでそれ以上何かを話す素振りを見せない。いきなり沈黙に包まれてしまったので担任がそれとなく言葉を付け足した。

「あゝ、犬塚君？ 何か趣味とか・・・得意なこととかないのかね？」

そう聞かれた犬塚は視線を斜め上にしながら考え込む、10秒程考えた後に何かを思いついたのか犬塚は担任に向かって答えた。

「  
特にないです」

「ないんかいっ！ ないなら何でそんなに考え込むの！？ 本当はあるのに言わなかっただけじゃないのか！？ 面倒臭いからはしょっただけとか、そういうのじゃないのかね！？」

「じゃあネットサーフィン」

「じゃあって何だよ、じゃあって！ 何でそんなに加減？ どうして何気に不快そうな顔になってんの、先生が悪いのか！？」

「せんせ〜、話が前に進まないのので早くしてください〜い！」

単調な犬塚の受け答えに対し担任一人が派手にツツコミを空振りしまくるので、一人の生徒が業を煮やして文句を言った。そんな様子を見ている君彦も犬塚のキャラクターが掴めず、呆気にとられている。

担任は犬塚の態度に腹を立てながら空いてる席に座るよう促す、その時何となく犬塚の手に持っていた物が目に入ったので試しに訊ねてみた。

「犬塚君、手に持ってるそれってアレかね。竹刀とか木刀かね？もしかして君、剣道部に入るつもりかね？」

担任にそう尋ねられると犬塚は手に持っている物に視線を落とし、それから相変わらずの一本調子な口調で答える。

「いえ、剣道部に入るつもりはありません。てゆうかオレ、こつ見えてインドア派なんで・・・」

「インドア　　っ！？　そんな体格にちよつと筋肉質な体型でインドアって、そりやないだろう！？　どう見ても屋内より屋外の方が大好きな外見でしょうよ！？」

「それにコレ、竹刀とかじゃなくて『真剣』です」

「ちよつと何、思い切りインドアのくだりはスルーするのか！？　もう興味ゼロなのか！？　面倒臭くなつたのか！？」

「せんせ〜、そこはいいから真剣の所をもつとツツコんだ方がいい

いかと思いまゝす！」

再び痺れを切らした生徒の一人が担任を注意する、殆ど肩で息をする位に血圧の上がつている担任をよそに犬塚は全く素知らぬ顔で指定された席に向かおうとしていた。そしてそれを当然止めて、担任が真剣に関して鋭く追及する。

「犬塚君、剣道部に入らないならそもそも学校に竹刀とか木刀とかを持ってきたらダメになってるんだよ、それが校則つてもんなんだよ  
わかるかね？ それから竹刀とか以前に『真剣』は日本人としてもつとNGなのわかってるかね？ ナイフでも包丁でも普通に持ち歩いたらダメなの、それが日本の法律つてやつなの。君、ちゃんと歴史の勉強してる？  
魔刀令つて知ってるかね？」

「せんせゝゝ、そこまで遡らなくても銃刀法違反でいいと思いまゝす！」

そんなやり取りが繰り返されて、クラス中がいい加減馬鹿らしく感じて来た様子だ。それまで犬塚の外見だけでものすごく怖い印象を持っていたが、口を開けばものすごくいい加減な言動や態度が目立ったということもあり  
もしかしたら外見とは裏腹に案外面白い男なのかもしれないと殆どの生徒はそう感じ取った様子だった。しかし担任に至ってはそう思っていない。

（このクソガキ・・・っ！ こいつは要注意人物と認定したぞ、どうして私の受け持つクラスには問題児ばかりが揃っているんだ！）

そつ心の中で叫びながら君彦と黒依の方を睨みつける。

（クラスの問題児その1、猫又君彦！ 授業中だろうがいかなる時でも突然奇声を発してわけのわからないことを口走る！ 見た目は全く持って目立たない普通の生徒かと思いきや、一番の曲者だ！）

それから次に君彦の前の席に座っている黒依の方を睨みつけた。

（クラスの問題児その2、狐崎黒依！ 四六時中微笑みつつ放しだが歯に衣着せぬ言動で最もドス黒い要注意人物！ さり気なく自分に被害がこうむらないようにする立ち回りと腹黒さから、猫又君彦以上に質が悪い！）

自分が受け持ったクラスの生徒に難癖を付けながら、担任は犬塚を席に追いやって

ようやく授業に入ることが出来ると安心した矢先のことだった。犬塚は指定された席の方とは全く逆の方へ歩いて行き、なぜか君彦の前までやって来たのだ。自分の目の前に立ち塞がる犬塚に君彦は目が点になる。

「お前に話がある、ここじゃ何だから昼休みに体育館裏で待つてから必ず来い、いいな」

明らかに宣戦布告だった、犬塚の異様な雰囲気クラス全体が沈黙に包まれる。そして今の一言でつい先程まで好印象を与えたばかりだったのに、あつという間に最悪な印象が植え付けられてしまった。犬塚は見た目通りの怖い人物、そう決めつけられ・・・更にそのターゲットに選ばれた君彦のことを助けようとする人物は誰もいない。黒依がほんの少しだけ不安そうな表情を浮かべながら担任の方を振り向くと、担任は黒板の方に向いて何も見ていないフリをしていた。明らかに見えない、聞こえないを貫いている。担任が当てにならないとすかさず察した黒依は次に君彦の盾となれる人物

春山竜次の方へと視線を走らせる。

しかし春山自身もよっぽど犬塚が怖かったのか、担任と全く同じように教科書を立てて視界を遮っていた。

「ちょっと、春山くん！ 君彦くんのピンチなんだから今こそ春山くんの出番でしょう！？」

黒依に名指しで注意されるが、それでも春山は涙を大量に流しながら逆に助けを求めている。春山も当てにならないと踏んだ黒依はもう一度君彦と犬塚の方へと向き直った。二人の様子を窺った。犬塚は喧嘩をふっかけているようにしか見えない堂々とした態度で、両手をズボンのポケットに突っ込んだまま・・・真剣だと言っていた布にくるまれた物は細長い紐が付いているので、それを肩に掛けながら君彦を見据えている。

両者の間で火花が散っているかと思いきや、君彦は自分の身に何が起こっているのか理解していないのか  
ぽかんとした表情で犬塚を見上げているだけであった。

## 犬塚の話（前書き）

今回は久々に長いです、そして珍しくシリアスモードに突入いたします。

どうか応援してあげてください。



## 犬塚の話

休憩時間

、犬塚の回りには黄色い声を上げながら色々と質問攻めしている女子の集団。そしてそれを妬ましそうな眼差して見つめ続ける男子生徒達。まだ犬塚のことをよく知らない君彦達であつたが、屈強そうな外見から勝手に不良のイメージを抱いてしまっている黒依は君彦に向かって心配そうに声をかける。

「ねえ君彦くん、やっぱり昼休みは行かない方がいいと思うんだけど・・・」

昼休みに体育館裏へ来るように直接言われた君彦は特に気に留めていないのか、そんなことよりもむしろ黒依が他の女子と同じように犬塚の方へ行かずに自分の側にいてくれるという事実には有頂天になっていた。

「もしかしたら何か大事な話があるのかもしれないし、無視するわけにはいかないと思うんだ。だから一応行ってみるよ」

「でも・・・もしいきなり暴力振るって来たりしたらどうするの！？」  
犬塚くんって何だかすごく怖そうだし・・・」

困った表情を作りながら黒依が少し離れた場所の席に座っている犬塚の方に視線を送りながら、人差し指で口元を押さえる仕草をした。仕切りに自分の心配をして来る黒依に対して君彦は嬉しくて仕方のない様子だ。

（黒依ちゃんがオレの心配を・・・！ 本当に何て優しい娘なんだ・・・まさに地上に舞い降りた女神のようだっ！）

結局黒依が何を言っても君彦は樂觀的な態度で深く勘ぐったりしようとはしなかった、そんな君彦の性格を少なからず把握している黒依はちらりと春山竜次の方へと視線を移す。彼は最初に訪れた君彦のピンチの時に全く役に立たなかったのでかなり落ち込んでいる様子だったので、彼にボディーガードを頼むのは速攻で諦めた。

（仕方ないわね・・・、不本意だけど君彦クンに何かあつたらあたしが困るし・・・。ここはケンカに強いって噂の志岐城さんを使うしかなさそうだわ）

一方的にそう決めた黒依は昼休みに弁当と一緒に食べるフリをして響子に君彦のボディーガードをさせようと目論んだ、勿論黒依がそんな計画をしていることなど全く知らない能天気な君彦は鼻歌を歌いながら、今夜の夕食に何を作ろうか献立を考えていた。

昼休み、終業ベルがなった途端に犬塚は君彦の方へ目線で合図を送る。当然君彦だけではなくクラス全員が二人の様子を窺いながら息を飲んでいた。そして黙ったまま二人一緒に教室を出て行く、最初は黒依も一緒について行こうとしたが犬塚に制止されてしまった。君彦と二人だけで話があると、  
鋭い

眼光で睨まれてしまい黒依はそれ以上文句を言うことが出来なかったのだ。

君彦と犬塚が廊下を歩いて進んで行ったのを見送ると、黒依は大きく急ぎで隣のクラスにいる響子の元へと走って行く。ガラリと勢いよくドアを開け、すぐさま響子と目が合った。

突然の来訪者に響子は目を丸くしながら驚いている様子だ。黒依は他の生徒が変な目で見ていようと気にすることなく、いつもとは全く違ったスピードで響子の元へ歩いて行って声をかける。

「志岐城さん、ちょっと頼みたいことがあるから一緒に来てちょうだい！　お願いっ！」

「はあ！？　ちよつと・・・一体何だつて言うのよ」

いつもなら黒依の側には君彦がいるはずなのに彼の姿がないことに違和感を感じる、響子は黒依に何となく嫌われているように感じていたので黒依自身が響子にお願い事をしに来るとは思っていないかつたせいもあつた。黒依と知り合つてほんの数日しか経っていないが、それでもある程度彼女の特徴を把握しているつもりである。

黒依は実に回りの空気を讀まない位のマイペースさで、余程のことがない限り慌てたり取り乱したりしないような・・・そんな女の子だと思つていた。

しかし今響子の目の前に居る黒依は何か焦つているような、ひどく取り乱している様子だったので響子は不審に思う。

「一体何があつたの、ちゃんと説明してくれない？」

響子のその言葉に黒依はようやく落ち着きを取り戻した様子だった、黒依自身も響子に対して良い印象を与えているとは思っていないのか　　響子の方から自分に向かつてこんな言葉をか

けて来るとは思っていなかったようである。呼吸を整え、強く訴えかける眼差しで黒依は犬塚について話し出した。

一方、君彦と犬塚は校舎の屋上に来ていた。君彦は眉根を寄せながら犬塚に訊ねる。

「えと・・・体育館裏じゃ、なかったっけ？」

君彦の問いに犬塚が丁寧に答える、見た目はかなりいかついが聞かれたことに対しては面倒臭くない程度にきちんと返事をするようなので、外見とは裏腹に意外と律儀な人間かもしれないと君彦は思った。

「他の奴等に邪魔されたくないからな、みんなの前でああ言っとけば野次馬なり仲裁なり  
全員体育館裏の方へ行く  
だろ？」

そうまでして邪魔されたくない話というのは一体何なんだろうと君彦は余計にわけがわからなくなった。とりあえずこちらから敵意を見せないようにして  
極力無抵抗の意を見せる為に  
平然を装ってみる。黒依に向かって仕切りに「大丈夫だ」と言っていたが、いくら楽観的な君彦でも全く不安がなかったわけではない。内心では何を言われるのか、突然暴力を振るわれたらどうしようなど、色々と試行錯誤していたのだ。そして遂に犬塚の方から話を切り出してきた、しかしその話の内容は君彦が想像していたこととは全く異なるものである。

「単刀直入に聞く  
お前・・・猫又という化け猫に  
取り憑かれているだろう？」

「え！？」

時が止まったように感じられた、犬塚の言葉に即座に反応して心臓が一瞬跳ね上がる。次第に鼓動が速くなって頭の芯が熱くなってくる、明らかに君彦は動揺していた。

（な  
なんでこいつ、猫又のことを！？ てゆうかそれ

以前にこいつ・・・猫又とか幽霊とか、そういう物の怪の存在を信じてる人間なのか！？」

君彦の顔色が変わり明らかに動揺している様子を見て確信をついた犬塚は、君彦の返答を待つこともせず話を続ける。口調は至って淡々としており、挑発するわけでも諭そうとしているわけでもない。ただありのままを話し始めた。

「オレはお前と同じように霊を見ることが出来る、そして浄霊する能力も持っている。この町にはびこっている物の怪をある程度退治してたら、あることに気付いた。この町の物の怪達は他の町の奴等とは明らかに違う所があったんだ。まるで大きな一つの勢力にまとめ上げられているかのように、定められたルールに従いそれぞれが人間との共存を図ろうとしている。それはオレの知る所じゃない。そんなことが出来る奴が一体何者なのか知りたくて、オレはこの町までやって来たんだ。そしてようやくその親玉を見つけた」

そこまで話して一旦言葉を切る、まるで君彦に理解させるようわざと言葉を切ったようにも取れた。犬塚の言葉のひとつひとつを聞いて、君彦はゆっくりと理解していく。パズルのピースをゆっくりとはめこんでいくように。そして最後のピースがはまった時、君彦は息を飲んだ。それを介した犬塚は再び話を続ける。

「そう、それがお前の知っている猫又のことなんだよ」

「そ・・・っ、それが一体どうしたって言うんだ！？ まさか・・・猫又が何か悪さをしたとか・・・そんなこと言うんじゃないだろうな！？」

君彦は途端に怖くなった、彼の言葉・・・霊を見ることが出来て

なおかつ浄霊することが出来る人間。つまり猫又を退治する力を持っているということになる、なぜ彼がここまで来て君彦に対してこんな話をするのか・・・君彦の脳裏に最悪なイメージが浮かんで来る。

（もしかして  
つは！？）

猫又のことを退治しに来たのか、こい

そう思った瞬間君彦は犬塚に対して身構えた、喧嘩が強いわけでもない君彦はなぜか犬塚に対して抵抗の意を示していたのだ。彼が何を企んでいたとしても、彼の思い通りにさせるわけにはいかない！

「いや、オレは別に物の怪を退治するのが仕事ってわけじゃない、ここへ来る途中に退治して来た奴等もちよつとばかり悪さが過ぎた妖怪だったから、念のために退治しただけなんぞ。お前の知っている猫又って奴が無害ならば別に無理矢理退治してやろうなんてしないから安心しろ」

「え！？ そうなのか！？」

君彦はますますわけがわからなくなってきた、ようするに犬塚が一体何を言いたいのか。その意図が全く掴めないのだ。とりあえず猫又を退治するわけじゃないという言葉聞いて安堵する。あの猫又が人間に危害を加えるような邪悪な化け猫だとは思えない、君彦は心の中で強くそう思った。

ワガママで口が悪くて食べ物好き嫌いが激しくて、猫のクセに寝言を言ったりいびきをかいたりするし、尻尾が2本あって人間の言葉を話せるということ以外、本当にそこの猫と何も変わらない猫又。

そんな奴が邪悪であるはずがない、君彦は中学生の時から猫又のことを知っている。それからずっと一緒に暮らしている。猫又に関しては犬塚なんかよりも自分の方がもつとずっと、何でも知っているのだから

！

君彦には自信があつた、犬塚が何の目的でこうして君彦に確認を取っているのか知らないが・・・彼の思い通りになることは有り得ない。そう思つて君彦の顔に平常心が戻った時、犬塚もまた再び口を開いた。

「お前、猫又という化け猫がどうやって物の怪になるか知ってるか？」

またしても唐突な言葉だつた、先程から犬塚の切り出してくる言葉はどれも予測不可能なものばかりで君彦はその度に呆氣に取られてしまう。本当の所

彼が一体何を言いたいのかわからないままだが、とりあえず犬塚の氣が済むように君彦はそのまま素直に答えていった。

「いや、別にオレは幽霊とかが見えるだけでそういう知識とかは殆どないから・・・。それに考えたこともなかったし・・・」

君彦の言葉に少しだけ間を置く犬塚、彼の無表情な顔から何を考えているのか読み取るのは非常に困難であつたが・・・どこか君彦に対して真実を述べることを躊躇っているような

そんな感情を抱いているようにも見える。それから犬塚は考え込んだ仕草の後に、顔を上げて君彦を真っ直ぐ見据えると少し声色を抑えたような口調で話した。

「猫又という妖怪はな・・・、自分の飼い主を噛み殺すことによつて妖力を得て

化け猫へと転生する」

「

っっ!!」

再び君彦の心臓に痛みが走る、瞳を大きく見開いて荒らげそうになった言葉を飲み込んだ。

「つまり、だ。お前が今一緒に住んでいるという猫又って妖怪は自分を飼っていた飼い主を噛み殺して『猫又』になっただということなんだよ」

「そ                      そんな、だって・・・そんなことって!」

それ以上言葉が続かない、猫又に関しては目の前にいる犬塚よりも自分の方がもつとずっと理解しているはずだった。何でも知っていると思っていた。

それが、今は違う。

猫又の飼い主のことなんて、知らない。そんな話・・・猫又はただの一度だつてしたことがなかったから。猫又がどこから来て、どうして君彦の元へ来たのか・・・聞いてもいつも言葉を濁したり、はぐらかしたりして                      結局本当のことを口にしたことなんてない。

君彦は猫又のことを知っているようで、                      何も知らなかった。

君彦の自信が揺らぐ、                      猫又への思いが揺れる。

そして新たな思いが生まれる、                      猫又のことを信じてもいいのだろうか？



君彦の心の中に初めて『疑惑』という感情が生まれた。

それは君彦と猫又との間に、亀裂が生じた瞬間でもあった。

## 猫又の飼い主

「お前の身近に  
ないか？」

親戚に、不審な死を遂げた人物はい

校舎の屋上で言われた犬塚の言葉が忘れられなかった、午後の授業に出席したものの                    ずっとその言葉に関して君彦

は記憶を手繰らせ、何かを思い出そうとする。しかし頭の中にもやのようなものがかつて、詳しく思い出すことが出来なかった。

君彦の両親は君彦が3歳の時に事故で亡くなり、その後は父方の祖父母によって育てられ・・・9歳の頃には祖母が、そして翌年には祖父まで亡くしている。親戚で不審な死を遂げた人物がいないか問われても、君彦の身近には次々と大切な家族が亡くなっている。しかしどれをとっても家族の詳しい死因を思い出すことは出来なかったのだ。

（                    もしかしたら、トキワ荘の大家さんなら何か知ってるかもしれない）

気になり始めるともう止められなかった、猫又への疑いを晴らす為なのか                    それとも猫又に関して調べる為なのか、どちらが本当の気持かわからないまま君彦は担任に早退を申し出て、そのままアパートへと帰って行く。

全力で走ってアパートに辿り着くといつもアパートの入り口付近を掃除している大家さんの姿が見えず、大家さんの部屋のドアをノックしても返事がなかったので買い物に行ったのかもしれないと思った君彦は、とりあえず自分の部屋へと戻った。

ドアを開けて中に入ると不気味な位に中は静かで、時計の針が時を刻む音しか聞こえない。

「そういえば、オレが学校から帰る頃にはいつも猫又が勝手にテレビを見ながら大笑いしてたっけ……」

『お、遅かったじゃねえか君彦！ おかえりー！』

君彦が帰るといつも親父のように寝転びながら、猫又がこんな風に声をかけて来た。しかし今部屋の中には誰もいない。静まり返った室内に入って行って、それから居間にある仏壇に手を合わせて祖父母に挨拶をした。

「……ただいま帰りました、征四郎おじいちゃん  
ハルおばあちゃん」

それからゆっくりと顔を上げて目の前に飾ってある祖父母の遺影を見つめた、優しく微笑む祖母……。そして優しさの奥に厳しさも兼ね備えた祖父の顔。君彦は黙ったまま二人の写真を見つめ続けて、それから何かをハッと思い出した。

焦燥の色が隠せない様子で君彦は遺影の二人に謝罪しながら仏壇の手前にある引き出しに手をかけて、中にある遺品を探り出す。そこには祖父母が大切にしていた物がしまわれており、手紙や写真

数珠と何かの札……。それから君彦の手に当たってチリンという音が鳴る。

「　　っ!？」

君彦は鈴の音のした物を引き出しから取り出して、それをじつと見つめる。心臓の鼓動が速くなり、息を荒らげながらそれを調べた。それから祖母が大切にしていたであろう写真の方へ自然と目が行き、そこで君彦は確信した。

静かな室内にいたせいかもしれないが、突然全く別の世界に迷い込んだかのような奇妙な感覚が君彦を襲う。動揺から耳鳴りまでして来て、君彦の額から一筋の汗が流れ落ちた。

祖父母の遺品から見つけた品物、

それは。

古びた猫用の首輪と、・・・祖母が女学生だった頃の写真にはアメリカンショートヘアのような毛色をした太った猫が、当時まだ17歳位の祖母と一緒に映っているモノクロ写真。

モノクロなので毛色がハッキリわかるわけではなかったが、その猫の外見はまさに　　どこからどう見ても君彦が知っている猫又そのものであったのだ。

「ハルおばあちゃんが  
そんな・・・っ」

、猫又の飼い主・・・!？」

君彦は首輪を手握ったまま力なく座り込み、呆然とした顔で遺影を見つめる。犬塚の言葉が頭から離れないままショックを隠しきれない君彦に、祖父母はただ柔らかな笑みを浮かべているだけだった。

## 猫又

その日の夜、猫又は犬神使いの青年に襲われた野良猫達から事情を聞き、君彦の住むアパートへと急いで帰った。しかし猫又は、自分が犬神使いの退治屋に狙われているということだけは君彦に伏せておくつもりであつた。ただでさえ自分の素姓や目的などを一切君彦に告げることなく、今までのらりくらしとかわし續けてきた猫又にとって『それ』はどうでもいいことだと考えているのだ。

しかし心の奥では君彦に余計な心配をかけたくない、それが本音であるが猫又はそんな自分の思いを鼻で笑いながら猫又専用の出入り口である小窓から部屋の中へと入って行く。

中は真つ暗で電気どころかテレビすらついていなかった、君彦はすでに就寝しているものだと思つていた猫又は部屋の片隅に黙つて座り込んでいる君彦の存在に、不覚にも全く気付かず飛び上がる程ビックリして声を荒らげる。

『                    なっ、なんだよ君彦！ 暗い顔して座り込んで・  
・                    ほんのちよつとだけびびつちまつたじゃねえかつ！ 』

暗闇の中でも猫又はハッキリと君彦の姿が見える、言葉使いは悪いが一応声をかけた猫又に対して君彦は焦燥しきつた顔でぴくりとも動かない。心の中で猫又は『どうせ学校で黒依と何かあつたんだろっ』程度に思いながら君彦がまだ寝ていないならと、テーブルの上に置いてあつたりモコンのスイッチを器用によきつと出した鉤かぎ爪でテレビの電源を入れる。

それからチャンネルを変え続けて猫又が大好きなバラエティ番組に当たると、そのままテレビの前に座つて観賞し出した。暗い部屋

の中でテレビの明かりしかついていない異様な光景に、それでも君彦は疲れ切った眼差しで猫又の背中を見つめ続けている。ちらりとすぐ横にある仏壇の方に視線だけ動かして、君彦に向かって微笑んでいる祖母の遺影を見つめ・・・ようやく意を決して猫又に話しかけた。

「猫又・・・話があるんだけど」

しかし猫又はテレビに夢中なのか、それとも君彦の声が小さすぎてテレビの音にかき消されたのか、猫又は返事どころか振り向きもしない。君彦は何度か猫又に声をかけて学校から帰ってからずっと思っていたことを聞こうとしていた。

『ちよつと待てよ、今イイとこなんだ。後にしてくれい』

面倒臭そうに返ってきた猫又の言葉に、君彦は奥歯を噛みしめ・・・そして勢いよく立ち上がると猫又の方を睨みつけた。胸の奥に込み上げて来る怒りにも近い感情を懸命に堪えながら、君彦は全身の力を抜くように深く深呼吸をして気を落ち着かせる。しかし君彦の顔に笑みが作られることはなく、今度は押し殺すような口調で

猫又の名前を呼んだ。

「お前に話があるんだよ、喜助」

『っつっ！！』

君彦の声のボリュームは今までと変わらない、それどころか声を押し殺した分さつきより少し小さく声を出していた。にも関わらず猫又は小さな物音すら聞きわけけるような反応で全身がぴくりとし、二又の尻尾はぴんつと真つ直ぐに立って毛が逆立って倍に膨れ上が

っているように見える。

暗い室内にテレビから漏れる音しか聞こえないまま、猫又は君彦の方を振り向くことなく大きな瞳を更に大きくしながら、まるで石のように固まってしまっていた。猫又の反応は尻尾を見て確認できていた君彦は、眉根を寄せながら言葉を続ける。

「お祖母ちゃんの遺品から見つけたんだ、これの首輪だろ？」

お前

そう言つと君彦はずっと手に握りしめていた首輪を猫又の方につき付けると、首輪についていた鈴がちりんつと小さく鳴った。鈴が鳴った瞬間に猫又の耳がぴくつと動いたので、猫又が確かに鈴の音を聞いたことを君彦は黙つたまま察した。

「もう隠さなくていいよ、全部お祖母ちゃんの遺品で確認出来たからさ。猫用の首輪と・・・この写真。どこからどう見てもこれ、お前だもんな。つまりお祖母ちゃんがお前の飼い主だったってことだろ？」

猫又の口から真実が聞きたくて、君彦は言葉を途切れ途切れにしながらひとつひとつ確認して行く。しかし猫又が何も言葉を発しないので本当の所はどうなのかハッキリさせることは出来ないが、沈黙が答え何だと・・・君彦は暗黙に了解した。

「今日学校に転校生が入ったんだ、そいつ・・・いきなりオレに向かって猫又お前に関することを聞いて来た。そいつが言うには、ただの猫がどうやって猫又つていう妖怪になるのか・・・それをオレに教えてきた」

だんだん君彦の声が震えて行く、これ以上先の言葉を続けるのが

よほど辛いのか  
猫又のことを睨みつけていた君彦の眼  
差しはいつの間にか泣きそうな瞳になっていた。

「お前  
お祖母ちゃんを殺したのか？」

「  
・・・つつ」

またもや猫又の全身がぴくりと動き、後ろ姿しか確認出来ない君彦の目からは  
猫又が少しだけ下を向いてうつむいた  
というだけしかわからなかった。しかし君彦はそれ以上猫又の細かい動きを観察する余裕はない、一番口にしたくなかった言葉を出したことでもはや君彦は衝動を抑えられなくなってしまう。まるで急き込むようにだんだんと声が大きくなって、殆ど泣きながら訴えるように必死になって思いの丈を黙っている猫又にぶつけて行った。

「隠すなよ、黙るなよ！ お前はそんなことしないだろ？ だってお前のことはオレが一番わかってるんだからさ！ 転校生が言ってる言葉の方が嘘に決まってるんだ、だってもしお前が飼い主であるお祖母ちゃんを殺して猫又って妖怪になったんならさ・・・計算が全然合わないじゃないか！ だってこの写真のお前には尻尾が1本しかない、写真のお祖母ちゃんは どう見ても今のオレと同じ位だ！ もしお前が猫又になったってんならもつとずっと後になるだろ？ それじゃ猫の寿命から考えてもおかしいよ、オレのお祖母ちゃんが亡くなったのはオレがまだ9歳の頃だ！ だったらお前は一体何歳になるって言うんだよ、な？ おかしいだろ？ どう考えてもお前が猫又になる時期が一致しないじゃないか、つまり転校生の言っていることがおかしいって  
そうだろ？ 何とか言えよ  
猫又っ！！」

最後には殆ど怒鳴り散らす形で君彦は今までに出したことがない



位大きな声を張り上げた、肩で息を切らしながら猫又が振り向くの  
を待つ

猫又が「そうだ」という言葉を待った。すると猫又の尻尾がうなだれるように下にだらんと垂れると、すっと顔  
だけ振り向いて君彦を見つめる。やっと猫又がこっちを見たと

そんな安堵する気持ちには到底なれなかった、猫又のそ  
の瞳はまるで獲物を狙う獣のように大きく光っており

暗い部屋の中で光るそのガラス玉のような瞳が逆に不気味に思え  
て、一瞬君彦の背筋が凍った。今まで見たことがない位に鋭い瞳で  
射抜くように見つめて来る猫又に、君彦はごくんと生唾を飲み込  
む。

『それがどうした？』

「・・・え!？」

君彦は耳を疑った、というより全く予想だになかった返答に君  
彦は即座に反応することすら出来なかった。猫又は今度は体ごと君  
彦の方に向き直ると、二又の尻尾をぱたと動かしながら言葉を  
続ける。

『確かにオレの飼い主はハルだ、だからそれがどうした？ 高齢の  
猫がどうやって猫又になるのか・・・それはその転校生の言う通り  
だぜ？ 10年越えた猫には妖力が宿る、それを更に高めて高位妖  
怪になるには試練が与えられるんだ。つまり自分の飼い主を噛み殺  
してその血を我が物にすれば、猫又になれるんだよ。

オレは血を浴びて、こうして猫又になってる。何か問題あるか？』

君彦の頭にカツと血が昇って目の前が真っ暗になった、怒りで我  
を忘れた君彦は平然と祖母を殺したことを認める猫又を非難した。

「 お前、自分が何を言ってるのかわかってんのか！  
？ 冗談なら質が悪すぎるぞ、いい加減にしるよっ！」

『嘘は言ってねえ、ほら・・・こうしてオレが猫又でいることが何よりの証拠じゃねえか』

「本当のことを言えよっ！ そんな言葉を聞きたいんじゃないっ、オレはそんなの聞きたくないっ！！」

何もかもが信じられなかった、今までずっと一緒に暮らしてきた猫又自身が 君彦の愛する祖母を殺したという事実を受け入れたくなかったのだ。君彦は半狂乱になりながらも両手で耳を抑え、猫又の口から放たれる残酷な言葉を必死になって拒絶する。そしてひとしきり泣き叫んだ後、両耳を抑えていた手を君彦が放したのを確認するように猫又はタイミング良く再び話しかけてきた。

『 オレからお前に言えることなんて何もない、どうせオレはお前に取り憑いてるだけのただの化け猫だからな』

何もない？

ただ取り憑いてるだけ？

本当に オレとお前との繋がりなんて、たったそれだけの関係でしかないのか・・・？

膝をついた君彦は息苦しそうに呼吸しながら、ゆっくりと右手で小窓を指差した。猫又は君彦の合図の意味がわからず指をさした小窓と君彦とを交互に眺める。すると君彦は必死に呼吸を整えてから、

腹の底から懸命に声を出した。力一杯、憎しみを込めて……。

「出て行けっ！ 二度とオレの前に現れるなっ！」

絞り出せた言葉はそれだけだった、後は何も覚えていない。ただ様々な思いが君彦を襲い、色んな感情が渦になって君彦の頭の中をかき乱す。自分が何で泣いているのかわからない、何に泣いているのかわからない。

祖母を殺された憎しみから？ それとも猫又にずっと騙されていたこと？

あるいは。

ずっと家族と思っていた猫又に、何ひとつ与えることが出来なかった自分の無力さに？

その日から、猫又が君彦の目の前に現れることはなかった。

## 響子の心配

「おはよう、志岐城さん！」

朝、学校に登校している途中で君彦とばったり会った響子は満面の笑顔で挨拶をして来る君彦に対して冷たい、白い目で見据えていた。何の根拠もなくにこにこと上機嫌に微笑む君彦に、どこか気持ち悪さを感じた響子は眉根を寄せながら小さく「おはよう」と返す。その間にも響子の背中にはべったりと色情霊がまとわり憑いており、そろそろと男子生徒や会社員といった男共が色情霊の色香に惑わされてついて来てたのだが、君彦と会った途端に色情霊は拒絶反応を起こすように響子から距離を離れた途端

響子の後ろをついて来てた男共は正気に戻っていた。

「猫又の妖力がまだお前に残っているのか？」

君彦と響子の後ろから低い男の声が聞こえて振り向くと、そこには布にくるまれた長い物を手に犬塚慶尚が無愛想な表情で立っていた。彼の姿を見た途端に君彦から笑顔が消え、まるで何も見ていないとでもいうように歩を進める。

「え……あつ

ちよ……っ！」

犬塚に挨拶をするでもなく君彦は足早に学校へと向かったのだ、響子は右手を伸ばして声をかけるも何て言ったらいいのかわからずに後を追いかけるタイミングすら外してしまっていた。

「何だ、随分無愛想な奴だな」

「それ、アンタが言うわけ？」

睨みつけるように犬塚を見据えながら響子はじりじりと犬塚との距離を離す、それをちらりと見つめるも犬塚の方は全く気に留める様子もなく、てくてくと歩き出した。響子は口をへの字に曲げながら犬塚の隣にまで追いつくと文句を言ってやった。

「大体アンタが余計なことするからややこしいことになったんでしようが！」

横目でちらつと響子の方を一瞥するだけで、犬塚は表情一つ変えることなく淡々と答える。

「オレが何したって？」

「とぼけんな！ アンタがアイツにちょっかい出して猫又を追いつように仕向けたんでしようが！ 一体どうしてくれんのよ！」

「  
何でお前がキレルんだ？ お前も猫又と何か関係があるのか」

ほんの少しだけ興味がわいたのか、犬塚は歩調を緩めると小走りに隣を歩いていた響子はやっと普通に歩く速度で会話することが出来た。何を言っても、何を聞いても我関せずといった態度に響子の方も若干苛立ちを感じながら、それでも限界ギリギリまで怒りを抑えながら言葉を続ける。

「アンタも知ってるでしょ！？ あたしに憑いてる色情霊のことはっ！ あたしはアイツに憑いてる猫又を利用して色情霊を追っ払っ

てたのよ、それなのにアンタが何を言ったのか知らないけど猫又が行方不明になるし、アイツはアイツで異常な位ご機嫌を装ってるし、こっちはアイツのあんな無理矢理なハイテンションを見せつけられて迷惑してんだからねっ!？」

犬塚はムキになって睨みつける響子を見据えながら何かを考え込む、そして15秒程思考した後にようやく言葉を発した。

「・・・あいつのことが心配なのか？」

「ちつつつがあ　　うわよっ!!　一体どこをどんな風に聞いたらそんな展開になるのよ、わけわかんないっ!」

響子は顔を真っ赤にしながら犬塚から視線を逸らした、彼女のこの態度だけで今の犬塚の言葉が凶星であったことは明白である。犬塚は心の中で「心配なんだな」と呟くが、面倒臭いのか

決して口には出さなかった。

君彦のことを心配していると凶星を突かれた響子は話題を逸らすと必死になって思考を巡らせるが、異性とこんな風に会話をするという行為自体かなりご無沙汰だったということもあって、拒絶反応と緊張で思うように考えがまとまらずにいると上空の辺りから女の子の悲鳴のようなものが聞こえて来て響子はぎょっとした。

声のする方に視線を走らせると響子は自分の目を疑う、赤いワンピースを来た黒髪の女の子が泣きながら空を飛んでいるのだ。しかしよく見るとその女の子は響子に取り憑いている色情霊と同じように少しだけ半透明に映って見えたので、あの少女もきっと幽霊かなんだらうと思ひ凍りつく。

猫又に霊を見る力を与えられたと言っても響子は君彦のように全ての幽霊や物の怪をハッキリと見えるようになったわけではなかつ

た、最初の内は鏡越し  
次第にうつすらと見えるようになったのだが明らかに「幽霊」と認識出来るものを目にしたのは色情霊以外にはあの少女の幽霊で二人目である。

泣きながら悲鳴を上げて響子たちの上空を飛んで行くと、その後ろから気味の悪い物体が下品な笑い声を上げて追いかけているのが見えた。緑色の皮膚にカエルやトカゲのようにぬめつとした光沢を放ち、見た目には甲羅を取り上げた亀のような姿をした化け物が太くて短い手足をバタつかせながら少女を追いかけている。

吐き気がする位に不気味な姿をした化け物を目にした響子は完全に血の気が失せて、今にも腰を抜かしそうになっていた。人型の幽霊なら色情霊でようやく慣れてきたところであったが、思い切り化け物にしか見えない物体が自分のすぐ目の前に浮かんでいる光景を目にすると、それすら悪夢のように感じられて悲鳴すら出て来なかった。

「助けて

っ、猫又ちゃ

ん！ 君彦く

んっ！」

少女の霊が口にした名前を聞いて響子はすぐに我に返った、犬塚もそれを聞き逃さなかったようで今までやる気のない表情だった顔色がほんの少しだけ真面目になり、両足を肩幅にまで開いて構える。

「犬神、行けっ！」

犬塚の言葉に反応したかのように、突然何もなかった場所から巨大な犬が現れて少女を追いかけている化け物めがけてジャンプした。響子は次々と起こる展開について行けずにただ呆然と事の成り行きを見守るだけであった。





## あんたのせい

犬塚の掛け声と共に現れた大きな犬が上空まで駆けて行き、助けを求めている少女の幽霊を追いかけていた緑色の化け物を前足で引き裂き、噛みつくと醜い断末魔を上げて消滅した。何が起こったのか理解出来ない響子は隣で無表情のまま上を見上げている犬塚の方を振り向くが、彼は淡々とした態度のまま事の成り行きを見守っているように見えた。そして化け物を退治した犬神はそのまま犬塚の足元まで駆け下りて、大人しくお座りをする。

化け物が消滅しても少女の幽霊はまだ恐怖が拭いされていない表情のまま、響子達の方へと下りて来た。すると少女は響子を見るなり『あつ！』と声を上げて指をさしている。

『お姉ちゃん、いつも君彦お兄ちゃんと一緒にいる人だ！』

響子は眉根を寄せながら聞き返した。

「・・・？　　そういえばあんた、逃げてる最中に猫又がどうか叫んでたわね。もしかしてアイツの知り合いか何か？」

半透明の少女に話しかけている自分に多少の違和感を感じながらも、響子は話しかけられた反動で普通に返していた。すると少女は仕切りに犬塚の方を気にしながら少しだけ響子の方に寄り添う形で説明する。

『あたしはカナ・・・、3丁目に住んでる浮幽霊なの。最近この町に悪い幽霊とか物の怪が増えてみんな困ってるから、涼子お姉ちゃんに頼まれて猫又ちゃんを探してたの。町に悪い幽霊が増えたのは猫又ちゃんがいなくなっただけだって、町の縄張りに関係なく飛び

回ることが出来るのはあたしと野良猫さん達だけだから

それにこのままだと君彦お兄ちゃんも危ないかもしれないって」

カナの口から次々と説明されて響子は混乱している、しかし犬塚は内容を把握しているのか少しだけムツとしたような表情になるとカナの方に一步近付いて詳しく聞こうとするが、犬塚に怯えているのかカナは響子の背中に隠れてしまった。

「あんたのことが怖いんだってさ」

「心外だな、こんなに善人なのに」

しかし犬塚のことを怖がっているのはどうやら外見だけではないようで、カナは響子の背中に隠れたまま声を荒らげる。その声には怒りと悲しみが入り混じっていた。

『みんなあんたのせいなんだから！ あんたが猫又ちゃんと君彦お兄ちゃんを苛めたから・・・っ、だから猫又ちゃんがいなくなったのよ！ おかげで猫又ちゃんに守られていたこの町も悪い幽霊を呼び寄せるようになったし、どうしてくれるのっ！ 猫又ちゃんを返してよっ！』

カナの勢いに犬塚の足元で大人しくしていた犬神が牙をむき出しにして威嚇したので、カナは再び泣きそうな顔になって響子の後ろに完全に隠れてしまった。

怯えるカナを気遣ってか、犬塚は厳しい口調で犬神に命令する。

「やめろ、こいつは悪霊じゃないから除霊対象じゃない」

その言葉に忠実に従うように犬神はすぐさま威嚇するのをやめて、それでもカナをじっと見据えたまま再び犬塚の足元でおすわりの態

勢を取る。犬神がこつちを睨みつけているのでカナは恐る恐る顔を出して、犬塚と犬神の方を交互に見つめた。

「猫又がこの町を守っていたのか？」

支配していた

わけじゃなくて？」

犬塚は相手が子供であろうと優しく話しかけると言うそぶりを見せず、いつもの通り淡々とした低い声で訊ねた。カナは眉根を寄せたままつんとした口調で答える。

「そうだよ、すつごく怖い妖怪さんを封印した後からずっと猫又ちゃんがこの町を守ってくれてたの。おかげでこの町には人間とか良い物の怪に悪さをする悪霊は出て来なくなつたわ。たまに悪い妖怪が町に入り込んでも猫又ちゃんが退治するか追い出してくれたの、でも今は猫又ちゃんがないのいいことに今までこの町で悪さをする為に入ることが出来なかつた妖怪達が入りこんで、ここぞとばかりにやりたい放題……。このままだと君彦お兄ちゃんも狙われちゃうから、だから涼子さんはそうならないようにあたしに……。」

カナの説明で響子は慌てるように聞き返す。

「ち、ちよつと待って！？ 町を守る猫又がいなくなつたから悪い幽霊とかが入りこんでるつてのはわかつたけど、なんでそいつらに猫又が狙われなくちゃいけないわけ！？」

「お兄ちゃんは

、えつと……。その……。つ」

響子の質問にカナはしどろもどろになってきよるきよると視線を動かしながら拳動不審になっている、その理由を誰にも話してはいけないようにカナは何とか誤魔化す言葉がないか一生懸命考えてい

る様子だった。カナの状態を見て犬塚はこれ以上詳しいことは聞けそうにないと判断したのか、カナに礼を言うと足元で大人しくしていた犬神に合図を送り

犬神は軽くジャンプするとその途端に姿が消えてしまった。

「もう変なのに見つかるなよ」

それだけ言うのと犬塚はてくてくと学校へと歩いて行ってしまった、響子は呆気に取りられたまま自分の後ろにまだ隠れているカナの方へと視線を移す。

『お姉ちゃんもお願い、あたしは猫又ちゃんを探さなくちゃいけないから君彦お兄ちゃんの側にいてあげられない。きつと寂しがってるから・・・お兄ちゃんと猫又ちゃんと一緒にいなくちゃいけないの。だからお願い、君彦お兄ちゃんにも猫又ちゃんを探すように言っ  
てほしいの』

礼儀正しくお辞儀をして頼み事をするカナに響子はあからさまにイヤな顔をした、カナの頼みを聞くのがイヤなわけではなく君彦に必要以上に関わらなくてはいけなくなるということに拒絶反応が出てしまっているのだ。しかし必死に頼んで来る小さな女の子を無下にすることも出来ない響子は、がつくりと肩を落としながら了解した。するとカナは嬉しそうに無垢な笑みを浮かべると、猫又が見つかったらすぐに知らせに行くと言っただけ言い残して再び空高く舞い上がってどこかへ飛んで行ってしまった。

今までにない奇妙な体験をしたものだと感慨深げになっていた響子はすぐ我に返ると、まだ数メートル先をゆっくりとした歩調で歩いて行く犬塚を追いかける。

「詳しく聞かせてもらおうじゃない、あんたがダブル猫又を引き離

したって理由を！」

勇んで訊ねて来た響子に向かって犬塚は淡白な表情で後ろの方を指さす、怪訝に思いながら響子が後ろを振り向くとさっきまでどこかへ行っていたはずの色情霊が戻って来て、不気味な笑みを浮かべていたので全身に鳥肌が立った。

「ひっ！ さっきまでどっか行つてたくせに！」

毎日家で色情霊を目にしているせいか、最初のように絶叫したり気絶しかけたりということにはならなかったがそれでも不気味であることに変わりはなかった。すると響子は何を思ったのか犬塚の方を振り向いて、必死に訴えかける。

「ちよつと！ あんた幽霊退治の専門家とか何かなんでしょ！？」

さっきのでかい犬を出してこいつ退治してよ！」

「あ、それは無理」

「何でっ！？」

考える間もなくさかさず断つて来たので響子は余計腹立たしく思つて、更に声を荒らげた。すると犬塚は響子の体にヘビが取り巻くようにまとわりついていて姿を見ながら、普通の口調で説明する。

「前にも言つたら、オレがこの色情霊を祓えるのは一時的にしか出来ないって。こいつは強制的に除霊しようとしても無駄なタイプなんだよ、それだけこの色情霊の念は強い。 言ってみれば呪詛じゆその類になる、だからオレが強制的に犬神を使って祓おうと思つても呪詛返しに遭つてオレの方に負担がかかってしまう、だから出来ない」

専門用語が飛び交ってしまいち理解し切れない響子は表情を歪めながら絶句している、そんな時　　犬塚は何かを思い出したかのようにハッとした顔になると、おもむろに学ランのポケットから何かを取り出してそれを響子に差し出した。

響子が一体何だろうとそれを受け取ると、それはブレスレットのように小振りな数珠であった。

「これは？」

「その数珠にはオレの念が込められている、それを左手に身に付けていればその間だけ色情霊を遠ざけることが可能になるんだ。言ってみればお前が猫又の側にいる時みたいな状態でいられるってわけだな、

便利だろ」

響子が数珠を受け取った時、後ろを振り向くといさつき自分にまわり憑いていた色情霊がイヤな物を見るみたいに苦しそうな顔になりながら遠ざかって行く。手に取っただけでこの効果なのだから犬塚の言ってることに嘘はないと響子は思った。

（こいつ

無愛想で口が悪くて何考えてるかわかんない奴だけど、もしかして実は・・・結構いい奴？）

こんな貴重な物をくれるというのだからきつとそうに違いないと思った響子が、犬塚に向かって礼を言おうとした瞬間。

犬塚は右手を響子に差し出して、当然のように言い放った。

「5万円」

「お金取るならいらないわよっ！！」

響子は憎しみと怒りを目一杯込めて数珠を犬塚に投げつけると、

犬塚はそれを見事にキャッチする。

「いいのか？　これがあればお前は猫又にまわりつかなくてもいいんだぞ」

「おあいにく、靈感商法に引かかる位なら猫又にまわりついてる方がミトコンドリア程度にはマシよ！」

響子はこれ以上付き合っていられないと言わんばかりに、犬塚を置いてさっさと学校へと向かった。すると目の前に校舎が見えて来た途端、始業ベルが鳴り始めたので響子は血相変えて走って行った

後方を呑気に歩く犬塚に向かって吠えながら。

「ほら！　あんたのせいで遅刻しちゃうじゃない、このウドの大木がつっ！」

脚力には自信がある響子はすぐさま校舎に入って行ったが、犬塚はマイペースのままのんびりと校舎へ入って行った。

## 黒依の涙

通学時に色々あったが響子は全速力で教室まで走って行ったから何とかホームルームには間に合ったが、犬塚は面倒臭かったのかあえて急いだりせずにマイペースで教室に向かったので案の定遅刻扱いされてしまっていた。すでにホームルームは始まっており担任が朝の挨拶をしている最中にガラツと教室のドアを開けて入って行く・  
・・堂々と。

「いゝぬゝづゝかゝ、貴様は何をそんな胸を張って遅刻して来てるんだね！？ もうちょっと急ぐとか、息を切らしながら教室のドアを慌てて開けるとか何とかあるだろうが！？」

担任はツバを飛ばしながら犬塚に説教した、しかし犬塚は相変わらずの無表情で淡々と意見した。

「・・・廊下は走ったらいけないですよね」

「そうだけど！ 廊下は走ったらいけないんですけどねっ！？ もうちょっとこんなにかあんでしようよ！ 何、学級崩壊のつもりか？ 先生潰すつもりか？ お前の両親モンスターペアレントか！？」

顔を真っ赤にして怒鳴り散らす担任を余所に犬塚は視線をあからさまに逸らしながら、耳の穴を小指でほじくる仕草をしながら自分の席へと歩いて行く。その態度に余計腹が立ったのか担任は勇ましく犬塚の学ランの裾を掴んで引き止めようとした。すると担任は犬塚の残りがと言うわけではないが、微かに煙草の臭いがついていることに不審を抱きぐいっと引張って自分の方に向かせる。



「おい、ちょっと待ちなさい。君これ・・・煙草の臭いだろ、そう  
だろ！？ 貴様、未成年のくせに喫煙してんじゃないだろうね！？」

なおも担任は犬塚の学ランに染みついた匂いを嗅ぎ、それが煙草  
の臭いであることを突き止めた。さすがにこれにはクラス中がざわ  
つき、全員が担任と犬塚に注目している。しかし君彦だけはまるで  
犬塚の存在を無理矢理無視するかのように、頬杖をつきながら窓の  
外を眺めていた。

犬塚は担任を見下ろしながら、黙り込んでいるが  
しばらく間をあけた後にようやく答える。

「いえ、これは清めの煙です。オレン家、神社なんで」

「え、そうなのか？」

そんな問答をしている間にベルがなり、一時限目が始まろうとし  
ていた。結局犬塚の喫煙疑惑はうやむやにされたまま授業が始まる。  
君彦が肩を竦めながら淡々と机の中から教科書やらノートを取り出  
していると、黒依はしきりに君彦の方を気にしながら授業を受けた。

一時限目が終了し、いつものように犬塚の回りに  
は女子達が集まり出していた。話題はホームルームにも出ていた煙  
草について、吸ってるのか吸ってないのか本当の所はどうなのかと  
いう話題から犬塚の家が神社である話題まで、黄色い声に囲まれな  
がら犬塚は少し鬱陶しそうな顔で対応している。

そんな中、ちらちらと君彦の方に視線を送る犬塚に  
君彦は気付かないフリをして全部無視していた。たまりかねた黒  
依が君彦に話しかける。

「ねえ君彦クン、猫又ちゃんがいなくなってもう一週間以上経つん

だよね？」

黒依に話しかけられるのは心から嬉しかったことだが、その話題が猫又のこととなると君彦の笑顔に少しだけ陰りが見えた。しかし大好きな黒依にせつかく話しかけられたのだから笑顔で対応しないと失礼だと思つた君彦は、いつも以上に笑顔を作つて明るい声を出す。そんな君彦の無理した笑顔に気付いている黒依の顔にも、寂しさが滲んでいた。

「うん、もうそんなに経つかなあ。先週からやつとバイトが忙しくなつて来たからすっかり忘れてたよ、家に帰る頃には疲れてくたくただったからね」

につこりと微笑む君彦の態度がやけに痛々しく感じられた黒依は、それでも君彦を傷付けないように根気よく話しかけた。

「ねえ・・・、もう無理しなくてもいいんだよ？ 君彦くん、猫又ちゃんがいなくなつてから無理して笑つてるの・・・あたしわかつてるんだから」

「そんなことないよ、黒依ちゃん！ な、何言つてんの？ オレはいつも通りこんなに元気だよ！？」

両手を上にあげたりして「元気で明るい」ということを必死でアピールする君彦、しかし黒依の顔にはもはや笑顔はなく必死で訴えかけるような表情に変わっていた。

「本当は猫又ちゃんがいなくなつて寂しいんだよね？ でもクラスみんなに心配かけないようにつて、無理矢理明るくしてるんですよ？ だつていつもの君彦くんだったらもつと変で、奇特で、優しいのに・・・」

（それって、褒めてもらってんのかな？）

何となく違和感を感じながらも君彦は黒依が必死になって心配してくることが不思議で仕方がなかった、どうして猫又がいなくなった位でこんな風に言われなくちゃいけないんだろう？ 大体猫又の姿は一部の人間にしか見えないのに、黒依ちゃんには見えないはずなのに。存在がどうか言えるヤツなんかじゃないのに……。

たまりかねた君彦は、猫又が消えたことを割り切ろうとしていた自分の考えを黒依に聞かせた。そうすることで黒依にも納得してもらおうと思ったからである。これ以上 自分の前で猫

又の話題を出してもらわないようにする為に……。

「大体さあ、今までがおかしかったんだよ。猫又なんて妖怪に取り憑かれてるなんて……普通じゃないんだよ黒依ちゃん？ そう考えたら今の方が普通だ、自然な形に戻ったってことなんだよ！ これが本来の日常生活なんだ。だって猫又がいなくなったおかげで朝のトイレを順番待ちすることがなくなっだし、ご飯にケチをつけられることもないし、見たいテレビ番組も見放題だし、家中猫の毛だらけにならずに済んでるから掃除もラクになっだし、いいことだらけだ！」

君彦は思い出せるだけ猫又がいる不便さを次々とまくし立てた、それを聞いた黒依は「随分猫又に尻に敷かれてたんだな」と思いながら呆気にとられている。君彦は 言った後に、それらが今後二度と経験出来ないものなんだと再認識させられたような感覚に陥ったのか、少しだけ気落ちした様子だった。

まくし立てた後、一瞬だけ君彦の顔に孤独に満ちた寂しげな表情が現れた。それを見逃さなかった黒依は、席に座ったままの君彦の目線にまで態勢を低くするともう一度だけ君彦のことを説得しよう

と試みる。

「君彦クン、それが                      家族ってものじゃないの？ い  
つも一緒にいて、悪いこともいいことも・・・全部二人で分かち合  
ってたんじゃないの？    あたしには今の状態の方が不自然だよ、足  
りないの」

それから黒依は本当の気持ちを君彦に告げた、この言葉を言える  
のはきつと今だけ                      今を逃したら二度と話すことが出  
来なくなるかもしれないと、黒依は宿めるような気持ちで君彦に話  
して聞かせた。

「あたし、君彦クンの話を聞いてすごく・・・すっごく楽しかった  
んだよ？    君彦クンが猫又ちゃんに取り憑かれて共同生活を始める  
ようになってから、その話が出るのはあたしだけなんだって

すごく嬉しかった。君彦クンの制服の上に猫又ちゃんが寝転  
んで猫の毛だらけにしちゃって毛玉を取るのが大変だったって愚痴  
ったり、猫又ちゃんが魚の骨を喉に刺しちゃって他の人には姿が見  
えないのに動物病院へ連れて行くべきかどうか本気で悩んだって聞  
いた時も                      あたし大笑いしちゃったし。君彦クンにとっ

ては何でもない出来事でも、あたしにとっては毎日が楽しくて羨ま  
しくて・・・とても大切な時間だったんだ。あたし一人っ子だから  
君彦クンの話を聞いて、まるで兄弟みたいだなって

そんな風に思ってた。だから・・・っ！    だから今の君彦クンは、  
まるであたしの知らない君彦クンみたい・・・。猫又ちゃんが何を  
したのか、犬塚クンに何をされたのか・・・あたしは知らない、わ  
からない。でも・・・でもね？    君彦クンには猫又ちゃんが必要な  
んだと思う！    一緒にいるべきなんだって、あたしでもわかるもの  
！    だからお願い、無理して笑おうなんて思わないで？    寂しかつ  
たらあたしを頼って欲しい、辛かったら助けを求めて欲しいの。猫

又ちゃんがなくなつて良かったなんて、そんな悲しいこと言わないで？」

黒依は全てを告白した、中学生の時

君彦と初めて

出会つて、猫又に取り憑かれていたという話を聞いて黒依にとつて君彦が話してくれる内容全てがとても大切だった、それを君彦に面と向かつて初めて打ち明けたのだ。黒依が必死になつて自分に訴えかけていることを理解出来ない程、君彦は愚かではない。

そんな気持ちを聞いて心が動かないわけではなかった、しかしそれを言われたところでどうしろと言つのだろつという思いだけは拭い去れない。猫又は祖母を殺した、愛する家族の命を奪つた敵なのだから

！

胸の痛みに耐えながら君彦も言わずにはいられなかった、どうしても自分の気持ちを理解して欲しかった。猫又のことばかりじゃない、自分のことも見て欲しかったのだ。

「だったら黒依ちゃんは・・・、自分の家族を殺した殺人鬼と仲良く暮らせて  
そう言いたいのか？」

「

っ！」

君彦は黒依に八つ当たりするつもりなんて毛頭なかった、しかし衝動を抑えられない。溢れ出る感情を止められなかった。辛くて、苦しくて、今にも悲鳴を上げて暴れ出したい気持ちをようやく抑えるもの  
猫又の心配ばかりする黒依に、我慢出来なくなつてしまったのだ。

苦痛に少しだけ表情を歪めながら、君彦は震える手を押さえて

言葉を続ける。

「黒依ちゃんは許せるのか？ 自分の身内を殺したかもしれない犯人

のことを笑って許せて？ オレはそこまでお人好しなんかじゃないよ、そこまで馬鹿じゃない。せめて 猫又が本当のことをオレに話すまでは絶対に許さないって、誓ったんだ。だから・・・っ！」

最後まで言うまでもなく、君彦は黒依を見て胸が痛んだ。心臓をナイフで突き刺されたような激痛が走り、一瞬だけ呼吸を忘れてしまう程の衝撃を受ける。君彦が言い放った言葉に対し、黒依は大きな瞳から大粒の涙を零して 泣いていたのだ。

大好きな女性の涙を見て、後悔に襲われた。君彦は慌てるように椅子から立ち上がると、おろおろしながら謝罪する。

「あ えっと、その・・・ごめん黒依ちゃん！ 黒依ちゃんのこと泣かすつもりなんて全然・・・っ！」

「うつん・・・、違・・・何でもないから・・・っ。ごめんね 君彦・・・クン」

黒依は零れ落ちる涙を拭いながらどうしても止められないことを悟ると、自分の席に戻ってハンカチで涙を拭いていた。君彦は追いかけてもう一度謝ろうとするがちょうどその時に二時限目が始まるベルが鳴ったので、君彦は拳動不審になりながらも黒依の方を気にしつつ自分の席に戻った。

黒依は授業が始まってからも下をずっとうつむいたまま、声を殺して泣いていた。隣に座っている女子生徒に小さく声をかけられ、大丈夫と返事しながらも それでも授業が終わるまでずっと君彦に言われた言葉が黒依の頭の中を反芻<sup>はんすう</sup>している。

黒依ちゃんは許せるの？

自分の身内を殺したかもしれない犯人のことを、  
笑って許せて？

（そんなことはわかってる・・・、わかってるもの・・・っ！許  
せるはずがないって・・・、でもあたしは・・・っ！）

オレはそこまでお人好しなんかじゃないよ。

（・・・許されない、これは許されないことなんだ。  
いくら優しい君彦クンだって人間だもの、憎しみのひとつやふたつ  
抱いてたって不思議じゃない。そう、どんなに言い繕っても罪は罪。  
悪いことは悪いことなんだ・・・っ！）

ごめん、

ごめんね君彦クン。

・・・本当にごめんなさい。

意味ありげな祠の前で・・・

君彦の胸は痛んでいた、八つ当たりするつもりがなかったとはいえ憧れの女性である黒依に対して酷いことを言ってしまった、果てには彼女を泣かせてしまったことに。君彦は授業中ずっと声を押し殺して涙する黒依の方が気になって仕方なかった、何度も黒依の方に視線を送るが当然彼女がこちらの方に振り向くことはなく、それどころか黒依の周囲に居る女子から睨まれてしまっていた。

やがて授業が終わり、君彦がすぐさま黒依の方に向かって謝罪しようとした矢先。

「あ、君彦くん！ 今日のお昼休みは屋上で食べない？ もしかしたら志岐城さんっていつも屋上でお昼ご飯食べてるかもしれないし、何だか可哀想でしょ？」

満面の笑顔、何もなかったかのように接して来る彼女に君彦は謝罪の言葉をかけるタイミングを完全に見失っていた。君彦は呆氣に取られた顔で情けない返事を返すと、黒依はにこにこ上機嫌になっただけのようだった。他愛ない話に花を咲かせた。黒依が落ち込んでいなくて助かったという気持ちもあるが、だからといって君彦が言った言葉を全然気にしていないわけではないのだと君彦は察する。

何気ない会話の中に黒依は、猫又に関する話題にだけは触れることが全くなかったからだ。

その日の夕方、黒依はいつものように君彦と下校しようと話しかけるが君彦は申し訳なさそうに一緒に帰るのを断った。



「本当にごめんね、黒依ちゃん！ 実はバイトの方が本格的に始まっててさ、毎晩出なくちゃいけなくなっちゃったんだ」

「そっか・・・バイトなら仕方ないね、うん わかつ

た。それじゃバイト頑張つてね、また明日！」

「うん、また明日ね！」

君彦が何を言おうと、黒依はいつも笑顔で許してくれる。例えば黒依が怒ったところや不機嫌そうな顔をこれまでにたったの一度だつて見せたことがないことに、君彦は急に気になりだした。黒依が泣いた時も、思い返してみれば今日が初めてである。それまではどんなことがあるうと、何が起きようと、中学校の卒業式の時だつて黒依が泣いた所や悲しんだ所、笑顔以外を君彦は見たことがない。

しかし君彦はそんな黒依の笑顔が好きだった、いつでも笑顔でいるということは普通 とても難しい。感情のある人間

だからこそ怒つたり泣いたり笑つたり拗ねたりするものだが、黒依はいつだつて笑顔を振りまくことで回りを明るくさせていた。そんな黒依の気持ちに君彦にとつてとても温かくて居心地が良くて、とても素敵に思えたのだ。

（そう考えてみれば オレはいつだつて黒依ちゃんの

笑顔に助けられてたんだよな。黒依ちゃんは知らないだろうけど、オレはいつも黒依ちゃんの屈託ない微笑みに気持ちが穏やかになつて、また頑張ろうつて気持ちになれた。・・・本当に心から感謝してるんだよ、なのに今日は酷いこと言つて悲しませてしまつて、オレつてダメな奴だよな。もつとしつかりしないと！）

君彦は気合を入れ直して、そのままバイト先である料亭へと急いだ。そんな君彦の姿を遠くから見つめるガラス玉の瞳。君彦が住ん

でいる4丁目を一望できる程の高台にある丘には木々が生い茂り、町内で唯一の自然溢れる場所でもあった。そこには古びた朱色の鳥居があり、小さな祠が建っている。

もう誰も手入れしていないせいか

雨風に晒された

ままの祠の回りなどは荒れ放題になっており、そこらじゅうに生えた雑草に埋め尽くされそうになっていた。祠の中には石で彫られたお稲荷様が祭られており、首にかけた真つ赤な前掛けもすっかり汚れている。祠のすぐ目の前は殆ど切り立った崖のようになっており、一般人が入ったらとても危険だと示す有刺鉄線も張られていた。しかしそれさえなければここからの景色はとても絶景であり、心地よい風が吹いて草木を撫でている。

そんな祠の前に座り込んでいる大きな猫、尻尾は二又に分かれグレイと黒のトラ模様の太った猫はどこか寂しげな眼差しで薄汚れた祠をじっと見つめていた。

『なあ

本当にこれで良かったと思うか？』

祠に向かつて猫又が話しかけた、その声はどこか悲しげでありとても苦しそうだ。

『オレがあいつの為に本当に

何かしてやれたと思う

か？ オレが出来ることといったら、せいぜいあいつの回りに集ま<sup>ちみもうりよう</sup>つて来る魍魎<sup>ちみもうりよう</sup>どもを払い除ける程度だ……。やっぱ血にまみれた化け物なんか人間と慣れ合うなんて、出来っこないんだよ』

うつむきながら猫又の瞳に雫が溢れ

それが流れ落

ちないように必死で堪えながら上を向くと、今度は丘の上から一望出来る街全体を見渡した。

『なあ

征四郎、オレなんかがあいつの……君彦の

為にしてやれることっていったら一体何なんだよ、教えてくれよ。  
オレにはわからねえ、あいつが欲しいものなんて。君彦が望むもの  
なんて  
何も思い付かねえんだ」

それからまた猫又が祠の方へと向き直った時、突然背後から人の  
気配を感じて瞬時に構えた。するとそこには君彦と同じ学ランを着  
た長身の男が立っていた。すぐ側には巨大な犬  
犬神  
を従えて。

『てめえは  
っ、どうしてここにっ!？』

「威嚇するな、別にお前を被いに来たわけじゃない  
宣戦布告に来ただけだ」

『それ聞いたら威嚇するなって言う方が無理あんじゃねえかつ！  
てめえの目的は一体何なんだ、答えろっ!』

猫又は一向に威嚇の体勢をやめようとせず、背中を丸めながら二  
又の尻尾の毛は2倍近くまで膨れ上がり背中の中も毛も総立ちだった。  
シャーッと牙をむく猫又を白い視線で見つめながら、犬塚は何気な  
く頭を掻きながら言葉を続ける。

「そう言えばまだお前には名乗ってなかったな、オレの名前は犬塚  
慶尚だ」

『何  
犬塚、だと!？』

犬塚と聞いた途端、猫又は威嚇の体勢を解くがそれでも距離は保  
ったままだった。

「そうだ、今日ここに来たのは決着をつける日にちを伝える為だ。

明後日から始まるGWの最終日

犬塚神社でお前を待

つ。そこで積年の決着をつけよう・・・そんだけだ、じゃあな」

『ちょ

待つ、お前の目的は・・・って行つちまいや

がった。なんて無愛想な野郎だ・・・』

猫又にはまだ聞きたいことが山の用にあつたが、犬塚は聞こえないフリでもしているのか背を向けるとさつさとこの場から去ってしまった。一匹取り残された猫又は多少拍子抜けしながらも再び祠の方に向き直り、小さく独り言を呟いた。

『つたく・・・、お前等の家系は一体どうなつてんだ・・・。なあ、征四郎さんよお』

それだけ呆れたように呟くと、猫又は丘を駆け下り再び行方をくりました。

## 孤独

毎日のように学校が終わったらずさまバイトへ行つて夜の１１時に帰って来るといふ日常を繰り返していた君彦、しかしゴールデンウィークに入ってからというもの、君彦は悶々と何かを考え込むことから逃げるように毎日のようにバイトに明け暮れていた。

学校が日曜で休みの時と同じように、６時間労働でバイトを入れて友達と遊ぶ約束もせず、せっかくどこかへ遊びに行こうと誘ってくれた黒依の誘いも断り、君彦は文字通り追われるように働きまわっていた。

基本的に君彦は調理補助を担当しているのだが、料理に関してはとても手際が良かったせいかな・・・補助ではなく殆ど料理自体を作らされている。

君彦は内心「調理師免許持っていない人間が作った料理をお客さんに出してもいいのか？」という疑問を抱いていたが、料理長の顔がヤクザの親分並に恐ろしかったので口答えすることが出来なかった。

夜の１０時、やっとバイトが終わってくたくたになりながら帰って来た君彦はドアの鍵を開けて暗い部屋へと入って行く。もう一週間以上続け様にバイトを入れて疲労がピークに達していた君彦は、虚ろな目になりながら無意識に声をかけていた。

「ただいま猫又・・・」

そして気付く、猫又が君彦の前から姿を消して数日経ってからというものの、君彦は意識的に「猫又はもういない」と自分自身で触れないように努めて来た。しかしそんな意識が吹き飛ばす程疲れ切っていた君彦はいつものように、日常的に自分の帰りを待っている

た猫又に向かって声をかけてしまったのだ。

自嘲気味に微笑みながら君彦は靴を脱いで部屋に上がると、電気やテレビを付けて静寂を消そうとする。それから学校の通学用力バンの教材やノート、筆箱などを取り出して残っていた宿題を終わらせる為にテーブルに向かった。

テレビの音を少し小さくしてから宿題に取り組む、と・・・10分も経たない内に集中力が途切れてテレビのリモコンを勢い良く掴むと、怒声の入り混じった口調で大声を張り上げた。

「てゆうか！ あいつはもういないんだからコント見る必要なんてないじゃないか！ オレはコントとかそういうの別に好きじゃないし！ むしろトーク番組とかが見たかったんだよずっと！」

イライラとした口調のまま君彦はムキになってチャンネルを次から次へと変えまくった。

「もう邪魔でうるさい奴はいないからな、オレの好きな番組を好きなだけ見てやるんだ！ 絶対コントだけは見ない！ これからはうたばんだって、ドラマだって見てやる！ ざまーみる、猫又なんかいない方がずっと自由でやりたい放題なんだ！ いい気味だ！」

そう言ってリモコンを掲げたまま次々チャンネルを変えるも、特に見たい番組があるわけではなかった。やがてチャンネルを変えることに飽きた君彦は別に見たくもない適当なチャンネルにしたままリモコンをテーブルの上に置いて、再び無言になる。

何かが物足りない。

朝起きて、朝食と弁当を一緒に作って学校行って、学校が終わったらバイトに行って、疲れて帰ったらお風呂に入って宿題をしてそ

のまま寝る。きつと普通の人ならこんな毎日を普通に送っているはずだ、

家族と共に。

しかし君彦は家族との生活を早くに失ってしまった、物心ついた頃には既に祖父母と暮らしていて、それもすぐに失った。施設で暮らしていても、結局はみんな他人だった。甘えていいのかどうかもわからない、どこまで気を許したらいいのかもわからない。

きつと祖父母を失った後は、今みたいに

こんな風

に「寂しさ」を感じていたはずだ。だったら一体いつからだろう？ 君彦がこんな風に「寂しく」なくなったのは。

テレビから漏れて来る音が空しく感じる、今日は特に気温が低いわけじゃないのに妙に肌寒く感じる、狭い部屋がこんなにも広く感じられるなんて思わなかった。

これが孤独というものなのか？

今までと一体何が変わらないというんだろう、

た

だ「猫又」という奇妙な猫の存在がなくなっただけなのに。

君彦は不意に仏壇にある小さな引き出しに手をかけて、再び白黒写真を取り出した。そこには若い頃の祖母と猫又が映っている。まだ「猫又」という化け猫になる前の、猫の姿があった。

ぶすつとふてくされたような顔をしているが、どこか憎めず、なぜか心が落ち着く。飼い主である若い頃の祖母の顔を見てもよくわかる、きつと大切に思っていたんだろう。祖母は猫又のことを、猫又は祖母のことを。

この写真を見ると、とてもじゃないが考えられない。猫又が祖母を殺すなんて、全く想像出来ない。きつと何か深い事情があっ

たんだと思いたいが、それならそうとなぜ猫又は言わないんだろう？ そんな疑問が君彦の頭の中をずっと駆け巡っていた。

それを話してくれさえすれば、こんな風に追い出すようなこと

しなかったかもしれないのに。

「確かにあの時は色々あって、信じられないことが立て続けに起こって混乱してたつてもあるけど・・・でもそれなら、どうして猫又は本当のことを話してくれなかったんだよ。あいつがおばあちゃんのことをとても大切にしていたって、オレの想像でしかないけどこの写真を見ればそれ位わかる。だからきつと猫又にとって大切な存在だったはずなんだ。

それとも・・・オレには話せない事情があるってことなのか？」

まるで自問自答するように君彦は写真に写っている猫又に話しかけていた、写真が答えてくれるはずはないとわかっていても話しかけずにはいられない。形として残っている猫又との「繋がり」は、この写真しかないのだから。

「何だつていい、

オレは何だつていいんだ！

オレはただ・・・お前のことが知りたかったただだ、ほんの少しだけでも・・・お前の過去に触れたかったただけなんだ。

それがお前にとってイヤなことではないんだとしても、それでもオレはお前が知りたかった」

だつて、一緒に一つ屋根の下で暮らして来た家族  
なんだから。

そう心の中で思った途端、君彦は顔を上げて両目を大きく見開いた。突然何かが閃いたように、何かを悟ったように。



「あ……、そうだったんだ……っ！」

写真を見つめながら君彦はようやく気付いた、いつの間にか零れた涙を拭うことも忘れ、君彦は今ハッキリとわかった。自分が何をすべきか、それが理解出来た君彦はすぐさま黒電話でバイト先にかけた。今の時間ならまだ店長が残っているはずだと。

案の定店長が残っていたおかげで電話が繋がり、君彦は慌てるように早口で告げた。

「遅くにすみません店長、猫又です！」

オレ                      急用が出来たんで、明日のバイト休みます！

本当にすみません！」

## 心配する女の子二人、いや三人

ゴールデンウィーク最後の日、黒依と響子は前日に連絡を取り合  
って学校の前に来ていた。

響子はクラスが違ったので電話をかけたなり出来なかったが、黒依  
はゴールデンウィークの間ずっと毎日のように君彦に電話をかけ続  
け、結局いつもバイトだったり忙しそうにしていたりと・・・。

連日、猫又に関しての話を切り出すことが出来なかった。

そして最後の日、さすがにこのまま放置しておくわけにはいかな  
いと判断した黒依がわざわざ響子の連絡先を調べて、学校前まで呼  
び出したのである。

「とにかく！ このままじゃ君彦くんも猫又ちゃんも可哀想だから、  
あたし達で何とかしよ！」

やる気満々の黒依とは裏腹に響子はいまいちノリ気になれず、し  
らけた表情で事実を述べる。

「何とかしよ・・・って言ってもさ、これって普通にあいつらの問  
題でしょ？」

部外者のあたし達が口出しするようなことじゃないんじゃない？」

さらりと言い放った言葉に思いのほか黒依がムキになって反論す  
る。

「そんなんじゃないダメなのよっ！」

志岐城さんだって学校に居る間中ずっと気になってたでしょ！？  
猫又ちゃんがいなくなつて放心状態になつて君彦クンのこと！  
あれじゃただの抜け殻！ 死人と一緒によ！」

「・・・何気に凄まじいこと言ってるわね、あんた」

全く会話が成立しないまま数分経過し、それからようやくこれからどうするのかを本格的に話し合うことになった。しかし黒依が先程から携帯で君彦の家に電話をかけているが一向に出る気配がないので、家にはいないと推測する。

家にいないとなればあとはバイト先しか心当たりがないと思った二人は、黒依が以前バイトに関する話を君彦としていた時に場所も聞いていたので、二人が早速君彦のバイト先に向かおうとした矢先だった。

遠くの方から女の子の叫ぶ声が聞こえたので響子は思わず振り向き、上を見上げた。すると青空の向こうから赤いスカートをはいた女の子、カナが慌てて飛んでる姿が目に入る。

「えっと、確かあんた猫又の知り合い・・・だっけ？  
そんなに慌ててどうしたのよ」

「お姉ちゃん大変なの！」

あたしずっと猫又ちゃんの行方を探してたんだけど、やっと見つけたと思って追いかけようとしたら犬のお兄ちゃんが出て来て、猫又ちゃんと一緒に犬の神社へ行っちゃったの！

犬のお兄ちゃんも猫又ちゃんもものすごく怖い顔してて、あたし怖くなって・・・っ！

でも君彦お兄ちゃんの家に行ったら誰もいなかったから、もしかして学校にいるのかと思って・・・。

そしたらお姉ちゃんがいたから・・・っ、ねえあたしどうしよう  
！！」

咳き込むように喋り出すカナの言葉を整理しながら、もしかしたら事態は結構深刻なのかもしれないと察した響子は黒依の方に向き直る。すると黒依は笑顔でにこにこしたままだったので、黒依には幽霊の類を見たり聞いたり出来なかったことを思い出した。

「一体どうしたの？ 志岐城さん」

（めんどくさ・・・）

と思いつつ響子はカナの言葉を整理した状態で説明する。その間にもカナは相変わらず響子の後ろに隠れたままだった。

事態を把握した二人は物事を順序良く進める為に打ち合わせをする、主に黒依の提案であつたが。

「それじゃあたしが君彦くんがいそうな心当たりのある場所を探すから、志岐城さんは犬塚くんの方よろしくね！」

「はあっ！？ なんであたしがっ！？」

無愛想な犬塚の顔を思い出すだけで胸の奥がイライラしてくる響子はすぐさま反論した、それ以前に相手は男。響子が最も憎むべき存在の元へ行かなければいけないと言われ、苛立ちは更に上昇する。しかし黒依は正論を述べた。

「あたしには『何も見えない』し『何も聞こえない』けど、今も志岐城さんの後ろに幽霊の女の子がいるんでしょ？」

それに猫又ちゃんの姿もあたしじゃ『見る』ことが出来ないから、志岐城さんが一番うつてつけどと思うんだけど。

幽霊の女の子と一緒に少なくとも、猫又ちゃんと犬塚くんが向かった場所がわかるんだから・・・ね？」

「う・・・、まあ・・・確かにつ！」

ズバリなことを指摘された響子は反論する言葉が何もなく、言おうと思っていた文句を飲み込んだ。

これで役割分担が決定し、二人は早速目的地へと向かう。

響子はカナと一緒に犬の神社、すなわち犬塚の実家だという噂の犬塚神社へ。

そして黒依は君彦が立ち寄りそうな場所をくまなく探すことになった。

黒依と別れた直後に響子はふと思った。

（てゆうか・・・猫又のやつがどこに行ったのか探す方が、よっぽど大変じゃない？

面倒臭いこととかはちゃっかり避けるタイプだと思ってたのに・・・、それとも猫又の行動範囲が極端に狭いとか？）

そんなことを考えながら響子は、自分の背丈程の高さを飛んで行くカナを追いかけるように走って行った。

## 雨の中の決闘（前書き）

長い間更新出来てなくて申し訳ありませんでした。  
久々の再開でございます、どうぞご覧くださいませ。

## 雨の中の決闘

外は雨が降っていた。

まるで空が悲しんで泣いているように、ここ最近ではずっと雨が  
続いている。

広い神社の敷地内にある境内、そこに傘を差さずに立ち尽くして  
いる一人の男。

学ランを来てずぶ濡れになっている犬塚慶尚、そしてその傍らで  
主を守るような形で威嚇体勢を取っている大きな体をした犬神。

対するは二又の尾に毛色はグレイ、そして虎模様の入った小太り  
の猫が背中の中を逆立たせて同じように威嚇している。

『お前の用件は何だ、犬塚家の孫。

事と次第によっちゃ容赦しないから覚悟しろよ、オレは今すこぶ  
る機嫌が悪いんだからな！』

猫又がドスを利かせた声で慶尚に言い放つ。

しかし慶尚は恐れるでも挑発に乗るでもなく、ただ静かな表情の  
まま手に持っていた獲物の紐を解き、包んでいた布を取り去った。  
そこに現れたのは日本刀で、慶尚はスツと鞘から刀を引き抜く。

降りしきる雨の中、薄暗い場所で抜かれた刃からは鈍い光が放た  
れる。

「オレはただ見極めただけだ、お前がこの町にとって災厄となる  
か・・・それとも救いとなるのか」

猫又との間合いを取る為に慶尚は慎重な足取りで刀を構えたまま  
ゆっくりと横に移動する。

その動きに合わせるように犬神も猫又への注意を怠ることなく、いつでも飛びかけられる体勢で唸り声を上げた。

慶尚の言葉に猫又は鼻を鳴らすように笑うと、軽口を叩くような口調で道化を演じる。

『へっ、何が救いだ。』

オレはただ住み心地のいいこの町で、のらりくらりとやっていきたいだけさ。

英雄気取るつもりなんてねえ、風の吹くまま気の向くままに自由に生きて行くのが猫の性分ってやつだ』

「それで馬鹿が付く程お人好しなあいつに取り憑いて、自分勝手な自由を満喫してるといのか」

慶尚が君彦の話題に触れた途端、猫又に隙が出来た。

その瞬間を見逃さなかった犬神が先制攻撃を仕掛ける、素早い動きで飛びかかり鋭い爪が猫又を捉えた。

しかし身のこなしでいえば猫の方が上であつたのか猫又は体型にそぐわぬ動きで横に飛びのき、犬神の爪が境内の石畳を挟る。

挟られた石畳は瓦礫と化し、そのまま瓦礫を石つぶてとして利用する為にもう一度前足を振り上げると、猫又めがけて瓦礫の石つぶてが数カ所命中する。

『つつ！ やつたなこのヤ・・・』

「遅い！」

犬神に気を取られていた猫又は慶尚の接近に気付かず間合いを詰められていた、振り向いた時には慶尚の刀は完全に猫又を捉えていて鋭い刃が振り下ろされる。



（　　しまった！）

元々無理な体勢で犬神の攻撃を避けた上に、猫又は太り過ぎていたせいもあって自分が思っていたよりずっと動きが鈍っていた。

「猫又ーーーーーっっ！！」

その叫び声に慶尚の手が止まり刃は猫又に届くことがなかった、反射的に猫又は素早いステップで後方に飛び退ると声がした方へと視線を走らせる。

町から神社へと続く階段の先に目をやると、鳥居の下には茶髪の美少女　　響子が息を切らして睨みつけていた。

大慌てで階段を駆け上がったのか響子は息も絶え絶えに苦痛に喘いだ表情を浮かべながら、キツと犬塚だけではなく猫又の方にも鋭い視線を向けている。

「こんつつつな雨の中あんたら一体何やってんのよっ！」

猫又は愕然とした表情でアゴが外れる程の大口を開けて言葉を失っていた、犬塚に関してはやはり表情は変わらず片手に刀を握り締めたまま黙って響子の方を見ている。

慶尚と猫又との間にある並々ならぬ雰囲気は響子はどう言葉をかけたらいいいのかわからなかった、ただ幽霊の女の子カナの案内でここまで来たわけだがまさか二人が戦っているとは夢にも思わなかったからである。

見ると慶尚の手には日本刀が握られていたので、殺すつもりで戦っていたんだと思うと響子は背筋が凍った。

「あんたら・・・、一体こんな所でそんなモン振り回して・・・物騒なことしてんじゃないわよっ！」

どんな理由があるか知らないけどハッキリ言って迷惑なのよ！」

言葉がうまく見つからないまま響子は怒声を浴びせた、今は戸惑いの他にあるのは怒りだけだったからだ。

響子の怒りに犬塚は首を傾げるような仕草をして問いかける。それは恐らく猫又自身も同じことを思っていたことだろう。

「どうしてお前が怒っている？」

お前には全く関係ないことだろう、大体どうしてここに来たんだ」

犬塚の側で威嚇したまま牙をむき出しにしている犬神に怯えている力ナは、相変わらず響子の後ろに隠れたままだった。

響子は無意識に力ナを庇うように、守るように片手で制しながら自分自身が抱いている恐怖感を振り払うように声を張り上げる。

今は虚勢を張ることではがこの状況の中に立つことが出来なかった。

「あんたらがモメると『あいつ』が拳動不審になって、そのままこっちが被害を被るわけ！」

猫又！ あんたが居なくなっただけからあいつ・・・まるで魂の抜けた抜け殻みたいになってんのよ！

迷惑だからさっさと家に戻んなさい、どんな事情があろうとそんなモン却下よ却下！」

『んなつ！ お前そんな勝手に・・・つか、あつさりと・・・っ！』

今生の別れのつもりで行った猫又の気持ちを無視する形で言い放つ響子に、猫又は完全に毒気を抜かれていた。

そして今度は犬塚の方へと人差し指を突き付けて声高々に文句を

言ってやる響子。

「特にあんた！ 何が目的か知ったこつちやないけどこれ以上こいつらを引つ掻き回さないでよね！

日本刀なんか振り回して、あんたは頭のイカれた侍オタクか！  
ともかくこんな馬鹿げたことはもうやめて

言いかけた途端、響子は突然金縛りに遭った。

言葉を発するどころか体のどこも動かすことが出来ず、響子は短く呻きながらどこか一部でも動かそうともがく。

（な・・・何これ！？ 体が全然動かないっ！？）

視線だけは動かせるようで響子は慶尚か猫又、どちらが仕掛けたのか窺った。

『お前がここに来た・・・ってことは、あいつも来るのか。』

だったらこんな所でモタモタしてらんねえな、

も

うオレはあいつに会うわけにはいかねえんだよ』

（猫又・・・、あんたっ！）

『お姉ちゃん、お姉ちゃんどうしたの！？』

このままじゃ猫又ちゃんが危ないよお、あたしじゃあの人を止められない・・・っ！

あたしどうしたらいいのっ！？ 怖いよおお姉ちゃん！』

響子にしがみつくように涙を流しながら必死に訴えかけてくる力ナに向かつて、響子はどうにか思っていることを伝えられないかどうか瞳を動かしてみる。

まばたきしたり目線を動かして、どうにかこの犬塚神社へ向かっているであろう君彦と黒依に現状をカナが伝えに行くように。

今この場でそれが出来るのはカナだけである、響子は必死になって鳥居の向こうへ行くように目線を右から左へ素早く動かしたりして思いを伝えようとした。

『お姉ちゃん・・・？　もしかしてカナに君彦お兄ちゃんを呼びに行けって、言ってる？』

その言葉に響子は両目を強くつむって「そうだ」という合図を送った。

響子の意図を察したカナは瞳に力を宿し、すぐさま鳥居の向こうへと飛んで行く。

当然カナの動きを猫又だけではなく犬塚も察知していたようで、視線だけカナの姿を追うとすぐさま互いの敵へと戻る。

「お前の真意は犬塚家に代々伝わるこの刀で聞いてやる、覚悟しろ」

『てめえがな！』

響子の必死の呼びかけも空しく、二人の戦いが再開されてしまう。化け猫と人間との戦いという異様な光景を目の当たりにして、響子は心の中で強く叫んだ。

（これを止められるのはもうあんなだけよ、  
猫又  
っ！

だから早く来なさいよ、この馬鹿ーーーーっ！！）

猫又を求めて……

雨の勢いがだんだん激しさを増す中、ポロシャツにジーンズというラフな格好で走り抜ける青年がいた。

彼……君彦は、今朝方からずっと猫又を探して走り回っていたのだ。

4丁目を一通り回って何も見つけれないまま、次は3丁目にある居酒屋へと向かう。

木造の古びた店には「猫目石」と書かれた赤いのれんがかかっており、硝子戸には「準備中」という木札が下げられていた。

一瞬躊躇するも君彦はそのまま硝子戸を開けて中へと押し入る。

「涼子さん！ 猫又ここにきてませんかっ！？」

全身びしょ濡れだったので中に押し入ると言っても入口からそれ以上入ることなく、君彦は入り口付近で立ち止まったまま店内を見渡す。カウンターには艶やかな着物を着た美女、涼子が驚いた顔で君彦の方へと駆け寄った。

『君彦さん、びしょ濡れじゃないの！』

待って、今タオルを持ってくるから………』

涼子は急いで君彦の体を拭ってやろうと大きいタオルを探しに行こうとするが、君彦はそれを制して声を荒らげる。

「いえ、それよりも猫又を見ませんでしたか！？」

オレ朝からずっと探し回ってるんですけど、どこにもいなくて………！

考えてみれば猫又が立ち寄りそうな場所って涼子さんのお店しか

知らなくて……っ！

猫又のこと、オレ……何も知らなくて……っ！」

黒い艶やかな髪からぼたぼたと水滴を落としながら君彦は今にも泣きそうな表情で訴える。

それを見た涼子は悲しげに、そして優しげに君彦に声をかけた。

『残念だけど猫又さんはここには来てないわ、ここ最近ずっと……。町から姿を消したってんで、町内の物の怪達がみんなで猫又さんのことを探し回ってる最中なのよ。』

カナも一緒になって探してるんだけど、めばしい手掛かりは未だに何も……。

……ごめんなさいね、君彦さんの力になれなくて』

涼子の言葉を聞いて、君彦は最後の希望を絶たれたように意気消沈した。

脱力したようにうつむき、その場に立ち尽くす君彦の落ち込む姿を見た涼子の胸がちくりと痛んだ。

君彦は恐らく、猫又がここに来ているんだろうという希望を胸に涼子の居酒屋を目指して走って来たのだろう。

店に入った時の君彦の瞳は希望に溢れていた、期待に満ち満ちていた。

その期待は裏切られ、後には何の手掛かりもなく、八方塞がりの状態。

猫又を追いかける君彦の姿を自分と重ね合わせた涼子は、どうにか力になってやりたいと思ったが自分はこの店を離れるわけにはいかない。無力だと、そう感じた時だった。

『っ、この感じは……』

突然涼子は眉根を寄せて数歩後ずさりした、涼子の様子に異変を感じた君彦は顔を上げて涼子の顔色を窺う。

もしかして猫又の気配を感じ取った？

涼子が物の怪特有の何かを感じ取ったのだろつかと思った君彦は、涼子に向かって声をかけようと口を開きかけた時。

『君彦さん、今すぐ商店街の方へ行つてちょうだい。

もしかしたら……、導きがあるかもしれない』

「え？ 涼子さん、それってどういう……」

『いいから早くっ！ 急がないとすれ違ってしまうかもしれないわっ！』

いつも穏やかな物言いをする涼子が声を荒らげる姿を見たことがない君彦は驚き、わけもわからず涼子に従った。

お礼を言ってから再び雨が降っている店の外へと出て行く。

再び店の中で一人になった涼子はその場に立ち尽くしたまま、胸に両手を押し当てて祈った。

『猫又さん、本当に今はもう大丈夫なのよね？

あなたと征四郎さんとで救ってくれたのだから、……信じていいのよね？』

居酒屋「猫目石」を出てすぐ表通りに出れば商店街へと入る、そこには屋根があつたのでこれ以上濡れることもなかったが、今まで傘も持たずに雨の中を走り回り、すでにずぶ濡れになっている君彦の姿は回りからそれなりに目立っていた。

君彦は商店街の中を、通り過ぎる人々をくまなく目で追う。

涼子の言葉がどういう意味なのか、何を指して言っていたのかわからず仕舞いだったがそれでも何かないか探し回った。

生きてる人間の知り合い？ それとも幽霊の類か？ とにかく猫又に関連しそうなものを見逃さないように、君彦は手掛かりになるものを必死の思いで見つけようとする。

「ああ、君彦くん！ やつと見つけたっ！」

黄色い呑気な声が後ろから聞こえ、君彦は驚きながら振り向いた。そこには淡い水色のワンピースを着た黒依が閉じた傘を片手に立っている、黒髪をツインテールにして学校で会う時と少し印象が違っただけの彼女の姿に君彦は唖然としていた。

「え……、え？ 黒依……ちゃん？ どうしてここに？」

ここは君彦達が住んでる四丁目からだいぶ離れた場所、黒依が好きそうなお洒落なお店などがあるわけでもないこの商店街で彼女とばったり会ったのは全く想定していなかった君彦は、その偶然に驚きを隠せなかったのである。

当然黒依が自分のことを探し回っていたとは露とも思っておらず、目を丸くしている君彦の方へ上品な足取りで近付き、黒依は頬を膨らませてわざとらしく怒って見せた。

「君彦くんを探してたに決まってるでしょう！？」

雨が降って来たからついつい屋根がある商店街の方に入ってきたけど、まさかここで君彦くんを見つけたなんて思ってたわ。

でもちようど良かった！ あ、……はいコレ！」

怒っていたかと思うとすぐに笑顔になって、黒依はトートバッグの中からハンドタオルを取り出してそれを君彦に手渡す。



それを手に君彦は未だ黒依の言葉の全てに納得していない様子であつた。

「オレを探しに……って、どうして？」

「だ……か……ら、君彦クンに猫又ちゃんの居場所を教える為に決まってるでしょう！？」

黒依の口から「猫又」の名を聞いた途端、君彦は相手が憧れの黒依だということも忘れてものすごい形相で詰め寄つた。

「猫又っ！？ 猫又がどこにいるのか知ってるの黒依ちゃんっ！」

いつも穏やかな君彦がこんなにも声を荒らげ女性に詰め寄る姿を見たことがなかった黒依は、一瞬ほんの少しだけ驚きはしたもののすぐさまにつこりといつもの柔らかい笑顔を作って、君彦を落ち着かせるような口調で言葉を返した。

「うん、今ね……志岐城さんが猫又ちゃんのいる場所へ向かつてる所だから、あたし達も早く行こ？」

黒依の笑顔を見てようやく落ち着きを取り戻したのか、それとも猫又の確実な居場所を聞いて安心したのか、君彦は今の自分の姿を確認してすぐさま後退して行つた。

「あ……黒依ちゃん、その……ごめん」

そう言つて黒依に失礼のない距離まで下がると、受け取つたハンタオルで顔を拭く。

ようやくいつもの君彦に戻つたと思つた黒依は気が緩み、猫又が

いる場所まで一緒に行こうと促した。

「君彦くんも早く猫又ちゃんに会いたいですう？」

猫又ちゃんは犬塚神社にいるって聞いたから、今から歩いていけば十五分位で着くんじゃないかな」

黒依の言った場所に君彦の手が止まる。

「犬塚、神社？」

「うん、そうだよ？」

犬塚という言葉に、君彦は急に無愛想な男の顔が脳裏に蘇った。

（あいつは猫又が邪悪だと判断した場合、退治するって……そう言っ  
てなかったか！？）

どうして犬塚の神社に猫又が……！？ まさかあいつ、犬塚と！  
？）

君彦の頭の中に最も最悪なイメージが浮かんだ、その瞬間背筋が  
凍り全身の血の気が失せるような感覚に襲われた。

こうしてはいられない。

君彦はなりふり構わず、自分を探して猫又の居場所を教えてくれ  
た黒依の存在すら一瞬で忘れ去ってしまい、気付けば犬塚神社へ向  
けて走り出していた。

後方で君彦の名を叫ぶ黒依であったが、今の君彦には誰の声も届  
かない。

猫又！ 猫又っ！

早まるな、絶対にあいつと喧嘩なんかするんじゃないぞ！  
せめてオレが行くまで無事でいてくれっ！  
オレにはお前が、猫又が必要なんだっ！

それを今伝えに行くからっ！ だから……！  
絶対に死なないでくれ、猫又  
っ！！

## 睨み合い

降り続く雨は次第に激しさを増していく、同時に猫又と犬塚慶尚との戦いも熾烈を極めていた。

剣道をしたことがあるのか、慶尚は慣れた手つきで日本刀を振りかざし猫又を追い詰める。

太った体で攻撃を回避するのは相当辛く、息を荒らげながらも刀による攻撃を避けながら猫又は更に隙をついて襲ってくる犬神の攻撃にも気を張らなければいけなかった。

『チツ、くそう！ お前等卑怯じゃねえか、二対一なんてよっ！』

宙返りしながら猫又が愚痴をこぼす、そうすることで余裕を見せようとしているが慶尚には通じていない様子だ。

刀を両手で構え直すと慶尚は焦燥すら微塵も見せない表情、口調で反論する。

「化け猫退治に卑怯も何もない」

『退治…って、お前さっきオレの真意を見極めるとか何とか言ってたじゃねえかつ！』

『ぐるるるっ、挙げ足を取っている余裕があるのか……化け猫っ！』

主に口答えする猫又を威嚇するように犬神が猫又を罵った、しかし猫又は犬神の言うことを殆ど相手にしていないのかちらりと視線を動かしたただけですぐにまた視線を慶尚の方へと戻す。

息も切れ、体中に少しばかり受けた傷から血を流し、猫又は自分の力が落ちていることに気付いている。

本来ならば犬神使いに引けを取らない強さを持っている猫又であったが、この数日間の内に物の怪としての能力が急激に低下していると感じていたのだ。

このままでは慶尚に負ける、殺される。

そう察した猫又は疲労困憊の表情になりながらも懸命に威嚇する、しかしその姿にはすでに迫力がなくなっていた。

圧倒的に猫又の方が不利な状況を目の当たりにしながらも、体を動かすどころか言葉一つ発することも出来ない響子は、もどかしい思いに打ちひしがれていた。

すぐ目の前で猫又が殺されかかっている、しかし自分は何一つ出来ない。

見ていることしか出来ない。

もしここで猫又が慶尚の手で殺されでもしたら

。

（そんなの……、どうやってアイツに説明しろっつーのよっ！）

途端に君彦の悲しそうな顔が頭の中に浮かんで来る、その顔を思い浮かべた途端…響子も悲しくなってきた。

胸の奥がズキズキと痛んで苦しくなってくる。

響子は全身に力を込めてどうにか金縛りを解こうとするが、結局どうすることも出来ずに猫又達の戦いから視線を背けた。

両目をきつく閉じ、戦いの音だけが響子に耳に入る。

（猫又っ！ お願い……、早く来てよっ！

このままじゃあのデブ猫が殺されちゃうじゃない、あんたの大切な猫なんでしょう！？

だったら早い所ここに来てさっさとあの無愛想男をぶっ飛ばしちやってよね、あんたも一応男なんでしょ！

頼むから早く……、お願いだから……っ！

こんなのあたし、もうこれ以上見てらんないわよー！ーっ  
！)

慶尚の一太刀が完全に猫又を捉えそのまま迷いなく振り下ろす、全身の毛を逆立たせて殺気を感じ取るも猫又は飛び退ろうとした瞬間に水たまりに足を取られ、逃げ遅れてしまった。

その瞬間、全ての時が止まったかのようにゆっくりと慶尚の鈍く光る刀が猫又を襲う、避けようにもバランスを崩した体は瞬時に体勢を立て直すことが出来ず、大きなガラス玉の瞳に日本刀の切っ先だけが映る。

刹那、白刃の一閃は突然現れた「何か」によって遮られた。

猫又は力が抜けたように、目の前に現れた「何か」をじっと見つめていた。

両手を広げて猫又を庇う背中

、見覚えのある黒髪。

『君……彦……！？』

無意識に口から出て来た言葉、猫又は消え入る程に小さな声で囁くように呟いていた。

願わくばこの場に現れて欲しくなかった人物、これから決して会うことはないと思っていた者。

君彦の首筋に冷たい刃が突き付けられる、寸での所で刀は止まっていた。

猫又だけではなく慶尚もまた、この場に君彦が現れるとは

猫又の盾になるとは思っていなかった様子である。

しかし動揺することなく慶尚は低い声で警告した。

「どけ」

「嫌だ！」

即答に慶尚の顔がぴくりと、わずかに奇立ちを見せた。

君彦の声を確かに聞いた響子は目を開け、戦いの音が止んだ理由を知る。

猫又をかばうように両手を広げて盾になる君彦の姿、そんな彼の目の前で刀を振り下ろしたまま止めている慶尚。

そんな異様な光景を目にした響子が声を上げようとした時、いつの間にか隣に立っていた黒依がしっと口元に指を当てて静かにするように促した。

黒依もまた君彦と慶尚の戦いが緊迫していることを察し、邪魔しないように……見守るようにしているのだ。

「お前が出る幕じゃない、それはただの化け猫だ。人間に害をなす化け物なんだぞ」

慶尚の冷たい言葉に、君彦は断固としてどかなかった。

「違う！ 猫又は化け物なんかじゃない。

過去に何をして来たかオレは知らないけど、少なくともオレの知ってる猫又は人間に危害を加えるようなヤツじゃない！」

両手を広げたまま、全身ずぶ濡れの姿で慶尚を睨みつける君彦。慶尚もまた刀を引くことなく、君彦の喉元に突き付けたまま殺気を抑えることはなかった。

「邪魔立てするつもりなら、お前でも容赦しない。化け物に加担する者としてこの手で処断するまでだ、それでもい

いのか！？」

常に抑揚のなかった慶尚の口調に初めて、はつきりとした怒りが現れていた。

鋭い瞳で君彦を睨みつけるがそれに臆することなく、君彦は決して怯まない。

意地でも動かないという君彦の力強い眼差し、

それ

が慶尚の神経を逆撫でし今まで怒りを露わにしなかった彼が遂に激昂した。慶尚は刀を握る手に力と殺気を込めて振り上げると、狙いをそのまま君彦に定めて一気に刀を振り下ろした。



## 本当のキモチ

『君彦ーーーーーっっ!!』

慶尚の刀が君彦を斬り付ける寸前、猫又は咄嗟にジャンプすると君彦の顔に飛びかかって自ら攻撃を受けようとする。

ダメだ、ダメだダメだダメだ!

お前をオレなんかの為に傷付けさせるわけにはいかねんだ……  
っ!

だって……、お前は……っ!

全てが幻のようだった、時がゆっくりと進むように全ての動きが不思議と手に取るように分かる。

そして運動神経の鈍い君彦の目でさえはつきりと映し出される、自分の顔にしがみついて離れようとしない猫又を慶尚の鋭い刀が捉えている場面を。君彦は声にもならない程の「一瞬」で猫又を両手で掴むように抱いた。

刹那。

雨で濡れた石畳の上に、鮮血が滴り落ちる。

傷口は思いの外浅かったが、それでも刀で腕を斬られた君彦が重傷であることに変わりはない。

君彦はそのまま猫又をゆっくり放すと、激痛で斬り付けられた腕を庇うように前屈みになって呻いた。

『君……彦……?』

猫又は寄り添うように君彦の側へゆっくりと近寄り、すると君彦

は顔を上げて猫又を見つめた。

優しい瞳で、痛みを堪えながらもにつこり微笑む君彦が……ようやく猫又に言いたかった言葉を口にする。

「猫又……、よかった……お前に怪我がなく……て。

オレ……お前に何かあったらって、思うと……全然……落ち着かなくて。

黒依ちゃんがお前の居場所……教えてくれて、  
こうしてやっと会えたんだ。

オレどうしても……お前に伝えたいことがあって

腕を押さえながら話す君彦に、猫又は動揺しつつ声を荒らげる。  
君彦の跪いた足に前足を乗せて顔を覗きこむようにして、必死になって声をかけた。

「何言っただ！ そんなことより早く傷の手当てをしねえと……  
っ！」

「猫又、聞いてくれ……っ！ 今言わないとオレ……きっと一生後悔、する……っ！」

「お前がオレに何を言おうと……、オレは何も変わりはいしねえんだよ！」

オレはただの猫又……、化け猫なんだ！ 人間を襲う化け物と何も変わりはいねえんだよっ！

だからそんなオレの為なんかにお前が……、お前がそんな目に遭う必要なんてどこにも……っ！」

目に涙をたつぷりと溜めながら、猫又は声を震わせ怒鳴った。  
しかしそんな猫又の言葉を遮るように、今度は君彦の方が声を荒

らげる。

君彦もまた……、目にたくさんの涙を浮かべながら声を高らかに  
して言い放った。

「家族なんだっ！」

『……………っ！』

君彦の言葉に、猫又の涙が大量に零れ落ちた。

完全に不意を突かれ、全身を小刻みに震わせながら猫又は君彦の  
顔をじっと見つめる。

腕からどくと血を流しながら、それでも君彦は苦痛の表情を  
見せず……猫又に温かく笑いかける。

「お前がいなくなって……、ずっと考えてた。

最初は口うるさいお前がいらないことを喜んでせいせいしたと言  
ってたけど、何かが違うんだ。

それが何かずっとわからなかった……、オレはお前がいなくなっ  
たことにずっと目を背けてた。

本当のことを知るのが怖くて……。

知ったら自分がどうなるのが全く想像出来なくて、それでオレ  
……ずっと現実から目を逸らしてたんだ。

お前がいらない毎日を過ごして……ずっと何かが物足りなくて、そ  
れが何なのか……やっとわかったんだ。

猫又……、お前がオレのおばあちゃんと何があったのか……、オ  
レは知らない。

話したくないって言うなら、お前の口から無理矢理聞こうとはし  
ないよ。

でも……、これだけは言いたい。

オレにとってお前はおばあちゃんの仇とかそんなんじゃないで、

もつと……それ以上のものだっただ。

一人になって、おじいちゃんが亡くなった後に感じてた孤独をも  
う一度感じて、それに気付いた。

猫又……、オレにとってお前は  
かけがえのない家族  
だっただよ。

とても大切な……、オレにとってはとてもとても大切な……、大  
事な家族なんだ。

一緒に笑ったり、喧嘩したり、ふざけ合ったり、毎日本当に騒が  
しくて  
毎日本当に楽しかった。

お前がオレを寂しい気持ちから救ってくれたんだ、孤独からオレ  
を助けてくれたんだよ。

だから……っ！ もうオレの前から姿を消すような真似なんか、  
するなっ！

オレにはお前が必要なんだよ……っ！

だってオレ達はもう……、家族……だろ？ なあ、猫又……っ！

『君彦……、お前……っ！』

君彦の真っ直ぐな思い、心からの言葉、それを受け止めた猫又は  
涙が止まらなかった。

かろうじて泣き声を上げないように静かに涙を流す猫又が、刀傷  
を負った君彦の腕へと視線を走らせどうにか傷の手当てをしようと  
思い、顔を近付ける。

「  
待て！」

すかさず止める慶尚、彼の言葉に猫又と君彦は緊張交じりに慶尚  
を見上げた。

「化け猫が人間の血を口にするな」

慶尚の冷たい言葉に君彦はどうしても逆らわずにはいらなかった。

「猫又のことを化け猫だなんて呼ぶな！ それに猫又はオレの怪我を治そうと思ってるだけだ！」

「理由なんてどうでもいい。」

オレはただ……物の怪が人間の生き血をすすった時、そいつの妖怪化が進んでそのまま理性を失う可能性が高くなると言ってるだけだ」

君彦が負傷し、猫又は君彦が現れたことによつて一時的に戦意を失っている状態にあつた にも関わらず、慶尚と犬神は未だ君彦達への殺気を消そうとはせずに、いつでも攻撃出来る態勢を保っている。

このままだと劣勢にある君彦達が危ないと響子は蒼白になりながら、どうにか駆けつけたいと思つてゐるが全身の金縛りがまだ解けていない状態なのでもどかしい気持ちになりながら、助けに行けない自分自身に苛立つてさへいた。

自由に動ける状態にある黒依に頼んだ所で彼女は普通のか弱い少女、響子は黒依に向かつて君彦達を助けに行けとはとても言えない……例え言葉を発することが出来たとしても、黒依に向かつてそんな無謀なことは口に出来なかつたのだ。

一方黒依は傘の柄を握る手に力を込めながら……じつと様子を窺っている、口元を引き締めて……いつもの笑顔はなかつた。

ただ 君彦と慶尚の行く末を黙つて見守つてゐるといふよりむしろ、これ以上君彦達に危害を加えるようならば次は自分が容赦しない……とでも言いたげな表情だ。

雨に打たれながら、二人の睨み合いはなおも続く。

しかし君彦の腕から血が流れ落ち……だんだんと顔色が悪くなつて行く様子を窺い、悠長に事を構えているわけにもいかなかった猫又が、君彦の前に立ちはだかつて慶尚に告げる。

『……オレの負けだ、好きにしろ』

「  
猫又っ！？」

君彦が弱々しい声で呼ぶが、猫又は振り向きもしなかった。

決意した猫又はその場に座るとじつと慶尚を見据え、静かな口調で命乞いをする。

『お前の刀で殺されようが、そっちの犬っころに噛み殺されようが構わない。』

だがな……君彦だけは！

君彦だけはこれ以上傷付

けないでやってくれ、頼む』

猫又の二又の尾が頂垂れるように下を向く、でっぷりとした体型をした猫又の背中がどこか力なく肩を落とすように見えて、君彦は痛みを堪えながら猫又に手を伸ばそうとする。

しかし慶尚と、こちらを威嚇したまま睨みつける犬神の殺気にそれ以上体が動かなかった。

猫又はガラス玉のような瞳を慶尚に向けたまま慶尚が下す審判を、

ただひたすら待ち続けた。

## 二度と失いたくない

君彦の状態が思わしくないということもあり、猫又は数分ほど慶尚の決断を待つてはみたが横目でちらりと君彦の様子を窺い、どうしてもこれ以上時間を取られるわけにはいかないと察した。

座った姿勢から再び立ち上がると、まるでそれを合図にしたかのように慶尚が刀を握る手にわずかに力を込めると、目線だけで犬神に合図を送る。すると犬神は牙をむき出しにして君彦に向かって威嚇の姿勢を取り始めた。

『おい、ちよつと待て!』

しかし猫又の言葉に耳を傾けようとしない慶尚が、すごんだ口調で遮った。

「オレ達犬塚家は邪悪な妖怪共を一掃する為に生きて来た、今更化け猫の言葉に耳を傾ける謂われはない。

化け猫に加担し、挙げ句の果てに家族とまで言い放ったそいつもそうだ。

人間にとって災いとなるものは例えそれが同じ人間であったとしても、容赦する必要はない。

猫又……、お前だけではなくそいつも同罪となるからには

見過ごすわけにはいかない!」

慶尚が刀を今までとは全く異なる構え方で、ありったけの殺気を込める。

まるで慶尚の周囲だけピンと張りつめた空気が漂ってるように、「そこ」だけ異質な雰囲気放っていた。

猫又は背中を逆立てて臨戦態勢を取るが、正面には慶尚……

そして右方向には犬神が君彦を狙っている。いくら何でも君彦を庇いながら慶尚と犬神を相手にするのは無謀に近かった。それでも猫又は君彦を守る為に神経を集中させて慶尚と犬神の両方の動きを注意深く警戒する。

ふと、慶尚が動きを見せて刀の握りが音を立てた瞬間

猫又の全神経が慶尚の方へと注がれた隙を狙って、犬神は君彦に向かって襲いかかった。

腕の激痛でその場から素早く動くことが出来なかった君彦は、自分に襲いかかる凶暴な姿をした犬神に目を瞠り、声を上げる余裕すらない。猫又は慶尚が音を立てたのはただのフェイクだと察して心臓が跳ね上がった。

ドクン。

目の瞳孔が開き、後方を振り返るとそこには君彦に飛びかかっている犬神の姿が映し出されていた。

このまま行けば犬神の尖った爪は君彦の体を食い込む程押さえ込み、その鋭い牙は迷うことなく君彦の喉笛を噛み千切る。

想像するだけで猫又は深い苦しみに囚われる、そして守れなかった自分を悔やんでもきつと悔やみきれないだろう。

……あの時と同じように。

猫又にとって初めての家族を、最も愛した飼い主を……。

この世で一番大切だったハルを守れなかった時と同じ苦しみを、  
……再び味わうことに。

ドクン。

『うわああああああああああああああっ！！』

猫又の絶叫と共に周囲が一瞬にして眩い光で覆われた、何が起こ



ったのか分からずに慶尚は目が眩みそうな程の光を避ける為に片手で視界を覆った。同じように響子や黒依も、まるで突然目の前に太陽が現れたかのような……理解し難い展開にただただ目を閉じるしか出来ない。しかし君彦はじつと見つめていた……、確かにあまりの眩しさに視界を覆いたくなるような明るさであったがその光はとても優しく温かいものだと感じられて、かえって視線を逸らせずにいたのだ。

「猫……又!？」

光の正体は、宙に浮かんだ猫又。

猫又の体全身から光を放っているというよりも、猫又の背に突如として現れた「光の翼」が美しい光を放っていたのだ。

それは七色に輝いていてとても美しく、その光景を目にしている君彦の心を魅了する程の神々しさを持っている。

猫又の背に現れた六枚の翼ははたきはしていないが、翼から放たれる凄まじい「神通力」が猫又の体を宙に浮かせていた。

翼を生やした猫又はまるで殆ど無意識となっているせいか夢見心地のような表情で、ゆっくりと君彦を襲おうとしていた犬神の方へと向き直って六枚の翼を一振りさせた。

『  
ギャン!』

たった一振りで嵐が巻き起こったかのような突風が発生し、その衝撃をともに受けた犬神はそのまま吹き飛ばされて境内にある大きな木に激突した。

君彦に危害を加える者がいないことを察したのか、放心状態の猫又は宙に浮かんだまま光を放ち続けている。

六枚の翼を生やし、犬神をたった一振りで撃退した猫又を目の当たりにした慶尚は畏怖を込めて……、まるで神か悪魔を目にしたよ

うな顔で驚愕し声を震わせた。

「まさ……か、これは

猫神化したというのか!？」

刀を片手に握ったまま驚きを隠せない慶尚は口を開けたまま、猫又を見つめていた。

すると猫又の背に生えた翼が突然羽ばたき出す。

まるでこのまま空の彼方へと飛んで行きそうな勢いで、何度も翼を羽ばたかせた。

君彦は猫又がどこかへ行ってしまうと直感的に察したのか、腕の痛みも忘れて立ち上がり、猫又に向かって叫ぶ。

「猫又っ!」

しかし光を放ち続ける猫又からの返事はない、まるで君彦のことを忘れてしまったかのように猫又は振り向きもなかった。

それでも君彦は猫又を呼び続けながら、両手を広げて迎えようとする。

「猫又……もういい、もういいんだ。

オレ達を傷付ける奴はもうどこにもいない、だからもう戻ってもいいんだよ」

宥めるように、諭すように優しく声をかける君彦は猫又の向こう側に居る慶尚の方へと視線を走らせ、刀を捨てるように訴えた。

それを察した慶尚は反論することなく、君彦の言う通りにする。大人しく刀を石畳の上に投げ捨てると慶尚の方を振り向いた猫又が、投げ捨てられた刀を一瞥するように見つめ、何かを考え込むようにじっと様子を窺っている。

「猫又、戻ってこい。」

またオレと一緒に……、貧しいけど楽しかったあの頃に  
戻ろう、な？」

君彦の声に今度はちゃんと反応したのか、猫又はゆっくりと君彦の方へと虚ろな瞳を向ける。

両手を広げて、猫又が怯えないように……警戒しないように近付いて、宙に浮かんでいる猫又を受け止めようとする君彦。

するとそんな君彦の心が通じたのか、猫又の背に生えた六枚の翼から徐々に光が失われていく。

『君、彦……』

小さく呟くように名前を口にすると、猫又の背から七色に輝く六枚の翼が完全に消失してしまう。

翼が消えたと同時に猫又を宙に浮かせていた「力」が効力を失い、両手を広げていた君彦の腕の中へと落ちて行く。

しっかりと抱きとめた君彦は、愛おしそうに……眠っている猫又の頭を優しく撫でた。

雨なのか涙なのかわからない雫が君彦の頬をひたすら濡らす。

「猫又、おかえり」

長かった戦いはようやく幕を閉じ、君彦はたった一人の家族を  
再び取り戻した。

## 猫又の奇跡

深い眠りに落ちたように寝息を立てて眠る猫又を抱き締めながら、君彦は安堵に満ちた笑みを浮かべる。

猫又の変貌に驚きを隠せない慶尚はまだ君彦の腕の中で眠っている猫又を凝視するように眺めていた、犬塚神社の鳥居の前では響子と黒依、そして浮幽霊のカナが遠くから君彦達を見つめている。

余りに突然の出来事だった為、全員がその場から動けずにいたのだ。

そんな時、猫又が眠りに落ちたことで金縛りが解けた響子であったが、目の前で起きた不思議な光景に啞然としていたせいで既に体が自由になっていることに気付いていない様子である。

呆けたように立ち尽くしていると、ようやく我に返った黒依が傘を手に君彦の元へ駆けて行く。

「君彦くん！ 腕の怪我は大丈夫！？」

君彦に声をかけながら黒依はバッグの中からハンカチを取り出そうとする、君彦は猫又が無事だったことに安心していたせいで腕の痛みを忘れていたものだと思っていた。

「あれ、腕の傷が……！？」

見ると君彦の腕に血は付いているが、雨で血が洗い流されると刀傷は跡形もなく消え去っている。

「どういうことだ、あんなに痛かったはずなのに……今はもう全然痛くないし、傷跡すらないなんて！？」

君彦の腕をまじまじと黒依が見つめながらお互い首を傾げていると、刀を鞘に収めながら慶尚が平然とした口調で答える。

「恐らく猫又の力がお前の傷を癒したんだろう」

「え!？」

君彦はきよとしながら慶尚と猫又を交互に見つめる。

飲み込みが悪いなという目つきになりながら、慶尚が君彦に向かって詳しく説明してやった。

「さっきの現象のことだ。

あれは猫神化、

つまり猫の妖怪が神格化した

時に得る姿なんだよ。

羽九尾猫又はくびといつて、本来なら野生の猫又が二千年の時を要してその域に到達すると言われてるけどな。

恐らく羽九尾猫又に変化した時に現れた六枚の翼、その翼から発した光によってお前の傷を癒したんだろう」

信じられないような顔で君彦は抱き抱えている猫又を見つめた、それから小さく笑みをこぼすと猫又を抱いたまま立ち上がる。

「オレにはどういふことがよくわからないけど、……でも猫又がオレを助けてくれたってのはわかるよ。

猫又はこんな風になってまでオレの傷を治してくれたんだ、感謝しないとな」

そう言って猫又の頭を優しく撫でる君彦に、黒依は傘を差し出した。

「もう全身ずぶ濡れになっちゃってるから、今更遅いかもしれないけど……。」

早く帰って体を乾かせないと風邪引いちゃうよ、君彦くん」

「ありがとう黒依ちゃん、でもオレは平気だから。」

オレに傘を貸して黒依ちゃんが風邪引いちゃったらそれこそ大変だからね」

心配そうになりながらも黒依は笑顔を作る、その笑顔を見て君彦も微笑んだ。

少し離れた雑木林の中から猫又の力によって吹き飛ばされた犬神が全身を震わせ水しぶきを飛ばすと、むすっとした顔で慶尚の元へと戻って行く。それから慶尚の足元に寄り添うように立つと、君彦の腕に抱かれている猫又をじっと睥睨した。

犬神の目線に君彦の顔から笑みが消え、猫又に手出しさせないようにぎゅっと抱く腕に力を込める。

ようやく全身の金縛りが解けたことに気付いた響子がハッとして君彦と慶尚の間に割って入ろうかとも考えたが男が二人もいる中に飛び込んで行くことが急に躊躇われて、二の足を踏んでいた時

突然神社の方から怒鳴り声が響いた。

「何をしておる慶尚！ 気を失つとる今がチャンスじゃろうが！

さっさとその化け猫を殺してしまうがいい！」

境内全体に響き渡る程の怒声に驚いた君彦と黒依は、目を丸くしながら神社の方へと視線を走らせる。

すると建物の裏から袈裟を着た老人が怒りに満ちた表情で現れた、その老人は真っ直ぐに慶尚の元へ歩いて行くと君彦の方へと指を指し、鋭い眼光で睨みつけながら再び怒鳴り散らす。

「さあ、今日こそ犬塚家が抱き続けた積年の恨みを晴らす時じゃ！  
慶尚よ、遠慮するでない！ さあ殺れ！ そら殺れ！ 今すぐ殺  
っちゃうのじゃあああっつ！」

突然現れて猫又打倒コールを叫び続ける老人に、何がどうなっているのかわからずとも猫又に危害を加えようという憎しみだけは十分に感じ取れたので、君彦は猫又を隠すように抱え直した。

老人の勢いを横目で見ながら慶尚は刀を鞘から抜く素振りを見せず、むしろこれ以上の戦いは無益だとも言いたげな表情になる。  
そして慶尚は刀を肩に当てながら、小さく溜め息をこぼしている一本調子な口調に戻った。

「いや、もう止めだ。」

「今ので大体わかったから」

あっさりとした慶尚の意外な言葉に老人は口を大きく開けて、まるで顎が外れたかのような表情でショックを受けている。

君彦と黒依、そして鳥居の前で立ちすくんでいる響子は、慶尚の言葉を聞いて呆気にと取られていた。

猫又と慶尚との戦いがまだ完全に終わったとは言えなかったが、それでも猫又を取り戻して安心していただ君彦達の前に突如として姿を現した老人。

彼のせいで先程まで緊迫していた状況から今度はややこしい状況へと早変わりしたことに不満を覚えた響子が、誰もが思っているであろうごく当たり前の言葉を口にした。

「てゆうか、このじじい一体誰よ」

響子が少し離れた位置から呟いたにも関わらず、地獄耳らしい老人は怒り心頭に再び声を荒らげた。

「こんの小娘が……っ、無礼じゃぞ！」  
ワシはこの犬塚神社の神主、犬塚呂尚……ここにいる慶尚の祖父  
じゃー！」

そう大々的に自己紹介した老人の威風堂々とした態度とは裏腹に、  
横でさつきよりも大きな溜め息をつく慶尚の姿がちらりと君彦の視  
界に入っていた。



## 猫又の奇跡（後書き）

この小説を読んでくださってありがとうございます。

今回少しだけ触れた羽九尾猫又……。

実はこの読み仮名は私が勝手に付けました、本来は何て読むか私にもわかりません（ごめんなさいっ！）

この小説では今後「羽九尾猫又」のことを「はくびねこまた」と読んであげてください。少しだけ慶尚が説明しましたが、また話が進むにつれて詳しく語りたいと思います。

今は君彦達と同じように「よく意味がわからないまま」、物語を読み進めていただきますようよろしくお願いいたします。

一件落着！？

突然姿を現した犬塚慶尚の祖父を名乗る、犬塚呂尚……。

彼は相当猫又に恨みでもあるのか、戦意を完全に喪失している慶尚を焚きつけるように声を荒らげていた。

「何をしておるのじゃ慶尚！」

憎き猫又が目の前に居るというのに、なぜトドメを指さん！

今日こそ我が犬塚家が猫又によって蔑まされ続けた憎しみを晴らす時じやろうが、さつさと刀を抜けい！」

ツバをたくさん飛ばしながら強要しようとする呂尚に対し、遂に慶尚の堪忍袋の緒が切れた様子である。

「いい加減これ以上身内の恥を晒すのはやめてくれ、……勝負はついたと言ってる」

慶尚は祖父であろうと手加減なしに一睨みする、しかしそんな孫の下剋上に屈服することなく呂尚は負けじと睨みをきかせて怒鳴り散らした。滅多に声を荒らげようとしない慶尚に勝てるのは、声の大きさだけだとうやら本人にもわかつているようだ。

「何が身内の恥じゃ、お前は悔しくないのかっ！？」

古来より我等が祀りし犬神様は、世間から凶暴な妖怪と恐れられてきた。

それもこれも陰陽師に媚びへつらってきた猫又一族の汚い策略によつてじゃ、わかるか！？」

仕える者に対する忠誠心は全ての物の怪すら凌駕する、最も情の深い妖怪なのに猫又一族と来たらっ！

自分勝手自由気ままに振る舞っているクセにその並々ならぬ神通力を武器に、陰陽師に付きおった！

妖怪退治を生業とする陰陽師の手足になることで自らの格を上げたつもりであるうが、ワシは騙されん！

大体ワシはそこにいる猫又だけはどうしても許すわけにはいかないのじゃ！」

そう怒声を上げながら呂尚が指を指し示したのは、なぜか猫又だけではなく君彦にも向けられていた。

君彦は突然怒りをぶつけられ、わけがわからないまま戸惑っている。

「猫又……、ワシは猫又だけは許せんのだ！」

このワシから大切な者を二人も奪いおってからに……っ、よく見なくてもわかる。

どこからどう見てもヤツに瓜二つ、まるで若かりし頃の猫又征四郎を見ているようじゃわい！

あ~~~~っ！ 思い出ただけでまたはらわたが煮え繰り返るっっ！」

「えっ！？ お祖父ちゃんのこと、知ってるんですか！？」

呂尚の口から君彦の祖父である征四郎の名が出た途端、君彦は驚きの余りつい声に出してしまっていた。

すると呂尚はふふんと鼻を鳴らし、両腕を組みながら少し上機嫌の表情で話し出す。

「知ってるも何も、このワシの永遠のライバルだった男じゃ！

その昔一人の女性を取り合い、決闘までした。

数年前にヤツが……………」

そう呂尚が口にしかけた途端、慶尚は祖父に向かって平手チョップを坊主頭に食らわせて無理矢理黙らせた。

孫に攻撃され文句を言おうと思った呂尚であったが、慶尚は祖父に向かって軽蔑にも近い眼差しを向けると呂尚はさすがに大人しくなってしまう、わざとらしい咳払いをしてから落ち着きを取り戻した。

「まあ、その内わかるじやろう。

そんなことより慶尚、勝負がついたとは一体どういうことじゃ!?

猫又の奴はまだ健在じゃぞ、だったら勝負がついたとは言えんのか」

すると慶尚は君彦の腕に抱かれている猫又に視線を向けながら、先程の現象について呂尚に話した。

「あいつは……猫又は人間に危害を加える邪悪な妖怪じゃなかった、むしろそれ以上の存在だったんだよ。

猫又君彦の危機を救う為に奴は体内に蓄積していた神通力を解放し、まだ未完成だったが羽九尾猫又に変化した。

尾は二又のままだったが、背中から七色に輝く六枚の羽根を出現させたんだ……まず間違いない」

慶尚の言葉に呂尚の顔色はだんだん険悪になって行く、先程の猫又に対する憎しみから……猫又が邪悪な妖怪ではないという事実以外にも、猫又がとても高位な妖怪へと転身した事実が悔しくて堪らないといった感じだ。

口ごもりながら慶尚から告げられる言葉を聞く呂尚。

「オレとじいさんの約束事……」。

それは……猫又が邪悪な妖怪かどうか見極めること、そしてもし猫又が人に仇なす凶悪な妖怪であった場合には、これを退治せよ……だったな。だがむしろ猫又はこの町を治める為に尽力していた、つまり退治対象ではなかったということになる。

そう判断したからオレはとづくに勝負はついたと言ったんだ、奴の正体を一部でも見極めることが出来たから」

そう結論付けると慶尚はぐうの音も出ない呂尚へと向き直り、本題に入った。

「  
というわけだから、じいさん……約束は守ってもらうぞ。

猫又の正体を見極めた暁には……、オレの一人暮らしを許可して全面的に協力すると」

慶尚が悪びれた様子もなく言い放った言葉に、一同耳を疑った。君彦も黒依も響子も、全員固まったように目を丸くしながら慶尚を睨っている。

真っ先に食いついたのは当然、慶尚によって散々な目に遭って来た君彦であった。

「ちょっと待て、お前それ……一体どういうことなんだよっ!？」

当然と言えば当然の反応に、それでも慶尚は平然とした態度で答える。

「だから……猫又が良い妖怪なのか悪い妖怪なのか。それを判断したら今住んでる実家を出てオレが一人暮らししてもいいって、じいさんと口約束してたんだよ。

おかげで無事に一人暮らしが出来そうだ、一件落着だな」

他人事のように片手を振って適当に礼を言う姿に、普段穩便な君彦が珍しく本気で怒りを露わにした。

どこからかブチンという何かが切れた音が聞こえたように、すやすやと深い眠りに陥っている猫又を両腕に抱き抱えたまま君彦は、ウドの大木の如く立ち尽くしている慶尚に向かって悪口雑言を浴びせ続ける……。

そんな世にも珍しい「キレた君彦」を目にした響子が呆氣に取られながら、黒依の方へと歩み寄った。

「あいつがあんなにキレて、誰かに向かって怒鳴り散らす姿なんて初めて見た。

ねえ、あんた猫又と付き合い長いんでしょ？ 猫又が怒ったトコって、他にもあった？」

何となく、何の気兼ねもなく黒依に話しかけていた響子は突然ハッとして先程の言葉を訂正する。

「べ……っ、別に付き合いって言っても男女の付き合いって意味じゃなくって！

あいつと知り合ってから長いんでしょって意味だからねっ！？  
だからといって別にあたしがそんな細かいこと気にしてるってわけでもないんだから、勘違いしないでよっ！？」

顔を赤らめながら慌てて言い繕う響子であったが、黒依は全く気にしていない様子であった。

どこか元気がないような、まるで響子の声が全く聞こえていないような……そんな虚ろな表情でぼうつとしている黒依を見て、響子は眉根を寄せながら首を傾げる。

君彦の溜まりに溜まったうつぶんやストレスや愚痴などを散々慶尚に放った後、慶尚から軽い謝罪があった程度で「猫又失踪事件」はめでたく幕を閉じたのであった。

翌日、黒依を除く三人（と一匹）が軽い風邪を引いてしまったことは……、勿論言うまでもない。

## 戻って来た日常

ゴールデンウィークが終わって学校へ行く準備をする君彦、ぼうつとする頭で台所に立って弁当と朝ご飯を作っていると、居間と寝室が一緒になっている部屋から気だるい声が聞こえて来た。

『うー……、全身が重だるい』

小さな鼻の穴から鼻水を垂らしながら猫又がのしのしと重たそうに歩いて来る、君彦もまた鼻をすすりながら猫用の底が少しだけ深い皿にキャットフードを目分量で軽く入れた。

猫又は虚ろな眼差しで皿を覗きこみ、それから物言いたげな眼差しで君彦を見つめる。

「体調悪いのに缶詰食べるわけにいかないだろ、今日は栄養たっぷりのキャットフードで我慢しろ。」

大体風邪引いたら普通食欲わかないはずなのに……、お前の腹は一体どうなってるんだよ」

ぶつぶつと小さく文句を言いながら君彦は水受けのお皿に水道水を入れると、こぼさないようにキャットフードが入ったお皿の隣に置いた。猫又はしばらくキャットフードを黙って見つめていたが、とうとう諦めてガツガツと食べ始める。

君彦はズルズルと垂れて来る鼻水に耐えかねて、ティッシュで鼻を噛みながらキャットフードにがつついていて猫又をじっと見つめていた。いつもの光景、いつもの朝……。

ついこの間まではこの日常がどれだけ大切なものだったか、気付いてなかった。

しかし今は違う、こんな何でもない毎日が……いつもと変わらな



い会話が君彦を満たしていたのだ。

メタボ気味な猫又は腹を全部床につけながら座り、キャットフードを食べては水を飲み、またガツガツと食べていた。あれだけ文句言いたげな態度を取っていたにも関わらず、結局最後まで綺麗に食べ尽くす猫又。それを君彦は穏やかな表情で見つめていた。

するとにこしながら見つめている君彦に向かって、猫又は少し不快そうな顔で言葉をかける。

『おい、君彦……』

猫又の明らかに不機嫌そうな表情に、君彦が微笑ましい顔で見つめていたのを嫌がったのかと思って、すぐに君彦は反抗的な顔に変わって文句を言った。

「な……、なんだよ猫又。オレが笑いながら見てるのが、そんなにおかしいかよっ!？」

すると猫又は左前足でコンロを指すと、呆れたように注意した。

『卵焼き、

焦げてるぞ』

「っ!」

猫又の言葉に急いで君彦は振り向いた、見るとフライパンで焼いていた卵焼きは見るも無残な姿になって黒い煙を上げている。

「わああああああっっ、しまったああああああっっ!」

どたばたと慌てふためく君彦の後ろ姿を目にしながら猫又は、ふんつと鼻を鳴らして満足そうに微笑んだ。

久々の登校、風邪気味、そして猫又が帰って来たことで少し浮かれていた君彦は朝から料理を失敗して落ち込んでいた。

テレビを見ながら朝食を食べる、チャンネル権はなぜか猫又に奪われているが君彦は特に気にしていない。

いつものように「今日のじゃんこ」を見ながら、猫又は自分の方が賢いだの、この猫はまだまだなっていないだのとテレビに向かって文句を言っている。

そんな時でも君彦は学校に行く為の準備で頭が一杯になっていた、忘れ物はないか、宿題も提出するレポートも全部カバンに入れたか、たまにチェックする為にもう一度カバンを開けて確かめたりしている。

すると猫又は「今日のじゃんこ」と「今日の星座占い」を見終わった途端に、裏の硝子戸を開けてふらりと出掛けようとしたので君彦は慌てて声をかけた。

「……………おい猫又っ！」

お前どこに行くんだよ、一緒に学校行かないのかっ!？」

猫又が振り向くとそこには不安そうな君彦の顔が目映った、まるで親に見捨てられて泣き出しそうな子供みたいに、不安一杯の君彦の顔を見て猫又の胸が少しだけちくりと痛んだ。

いつもなら適当にあしらってそのまま出て行く所であったが、ゴールデンウィークの間ずっと君彦に行き先も告げずに姿を消していたことを思い出した。

猫又は足を止めると、大きなガラス玉の瞳を大きく見開いて君彦を真っ直ぐに見つめると明るく振る舞いながら、とりあえず行く予定にしている場所をきちんと告げた。

『なに心配そうなツラしてんだよ、大丈夫だって。もう行方をくらましたりしねえって!』

ちよつくら涼子ん所に挨拶しに行くだけだ、犬塚の件で随分心配かけちまったからな。

あいつも普段穏やかなだけにヒス起したら手がつけられなくなるからよ、お前も世話になったんだろ？

一緒に礼言つとくから、用事が終わったらすぐ戻るって」

それだけ言つと猫又はもう一度君彦を見据えながら、最後に言葉を付け足した。

『だからそんな泣きそうな顔で見ると、心配すんなよ。そんじゃ、……行つて来るぜ』

猫又の二又の尾がピンつと上に立つて振り振りしている、その光景はまるで尻尾で手を振る仕草をしているようだった。

君彦はぐつと堪えながら、猫又に向かって憎まれ口を叩く。

「だ……誰が泣くかよっ！

とにかく夕飯までには絶対に帰つて来いよな、約束だぞっ！

行つてらっしゃい」

何だか照れ臭かった。

考えてみれば猫又はいつも好き勝手に暮らしていたようなものだったので、さっきのように出掛ける時猫又が君彦に向かって「行つて来ます」と挨拶したことが、一度もなかったからである。

だから君彦も家族に向かって「行つてらっしゃい」と口にするのは、本当に数年振りのように感じられた。

そんなくすぐったい経験を味わいながら、君彦は一人で学校へと向かった。

猫又はまだ乾き切っていない塀の上を歩きながら、猫娘の涼子が経営している居酒屋「猫目石」へ向かわずに別の方向へと向かった。途中お馴染みの野良猫に捉まって適当に話をしながらも、後で猫目石に行くからと言いついて目的地へと急ぐ。

辿り着いた先はさびれた場所、誰にも手入れされていない高台になっている場所にぽつんと立てられた小さな祠。

猫又は祠の中に祀られている石造りの、赤い前掛けをしているお稲荷様の首にかかっている鈴を前足で猫パンチすると、小さくちりと音が鳴った。

それから少しだけ後方に下がり、猫又は社全体を目を眇めるようにして様子を窺う。

すると先程鳴らした鈴から白い靄のようなものが現れて、それが煙のように上へ立ち昇って行くとだんだん人の形を成していった。

人の形をした靄は祠の側にある大きな石に座ると、今度は白かった靄にうつすらと色や輪郭が少しだけはっきりしてくる。

半透明で猫又の前に姿を現した人物は外見だけ見た限りではおよそ二十歳前後、黒髪の短髪に物腰穏やかそうな表情、甚平に下駄を履いた姿へと定着させた。

猫又はその人物を睨みつけながらも、どこか安心しているような表情になっている。

半透明の姿で現れた人物も目の前に座っている猫又を見つめ、軽く笑みを浮かべていた。

先に声をかけたのは猫又だった。

『よお、こうして会うのは何年振りになるだろうな。』

なあ……？

征四郎

征四郎と呼ばれた男は何も言わず、猫又に向かって満足そうに微笑んだ。



## 猫又征四郎

地面に転がっている石に腰を下ろした状態で、目の前に座っている猫又を見据える征四郎と呼ばれた男。

猫又は不満を露わにした表情で、征四郎に向かって更に文句を続ける。

『何をそんなのほんとしてんだよ、こちとら大変だったんだからなっ！』

二又の尻尾の毛を逆立すると尻尾は通常より倍の大きさにまでなり、猫又は征四郎に対する怒りがだんだん上昇して行くせいもあって最終的には威嚇する姿勢になっていた。

『お前と因縁深い犬塚家のヤツまで出て来て、面倒臭えったらなかつたっつんだよっ！』

それもこれもお前が憎たらしい性格してっから悪いんじゃないか、おい聞いてんのか！？』

征四郎はまくしたてる猫又の姿を見て、静かに微笑むと穏やかな口調で話し出した。

『わかつてる、ちゃんと見てたさ。』

だからこそこうしてお前は私に文句を言いに来ることが出来てるし、君彦も無事だったんだ。

お前が、私との約束を果たすとわかっていたからな』

両腕を組みながら満足げに語る征四郎に苛立ちを感じた猫又は、

憎しみをたつぷり込めた言葉使いで言い返す。

『見てたんなら何でお前が行ってやらねえんだよ、お前あいつのジイなんだろうがっ！』

何で……っ！ どうしてあの時……っ！

オレがここに来た時……、何で今みたいに出て来なかったんだよ……っ！？

お前が君彦ん所に行ってやりやいいじゃねえか、……オレなんかじゃなくてよおっ！』

猫又は君彦の家を出た後、この祠に向かって問いかけていた時のことを思い出していた。

過去のこと、そして自分のことを君彦に突き付けられて逃げ出したあの日。

吐くつもりがなかった弱音を吐いて、結局救いの手が差し伸べられることのなかったあの時……。

それを思い出すと猫又は悔しさで一杯になる、今こうして自分の目の前に。

笑顔で……、しかも平然とした態度で姿を現している君彦の実の祖父  
征四郎に対して、猫又は激しい怒りと憎しみをぶつけようとしていた。

どうしても悔しくて堪らない猫又は眼光を鋭くさせ、征四郎の口から出る弁明の言葉を待つ。

征四郎もまた、そんな猫又の心中を察してか……すぐに答えようとはせず両目を閉じてしばらく黙っていた。

一瞬だがその時だけとても静かで、清々しい気が流れたように感じる。

それからゆつくりとまぶたを開けて、猫又を見据えながら征四郎は語った。

『私はすでに死んだ身だ……』

君彦の思い出の中でしか生きられない存在……、故に私自らが君彦に救いの手を差し伸べるわけにはいかないんだよ。

お前も本当はわかっていているだろう。

霊力の強い者が、生と死の狭間に存在する者と深く干渉すると

亀裂が生じてしまう。

その亀裂は君彦に害をなす恐れがある、そうならない為に私が君彦に干渉するには慎重にならなければいけない。

何より私は今回の件に関しては最初から干渉するつもりは全くなかったよ、必要ないとさえ思っていた。

それがなぜか、わかるか？』

そう言つて微笑む顔が君彦そっくりなせいで、猫又は少し調子が狂つたような表情をするとすぐにまたひねくれた顔を作つて反抗的な態度を保とうとする。

征四郎は片手で猫又を指さし、はっきりと言い放った。

『それは猫又、

お前がいたからだ。

お前なら私との約束を必ず守ってくれると信じていたから、私はお前に君彦の全てを託した。

あの日……、お前は私にこう訊ねたな。

自分は君彦の為に何をしてやれるのかわからない、君彦の欲しいものが……望むものが何なのかわからないと』

その言葉に猫又はムキになって答えていた。

回りくどく、まるで自分のことを小馬鹿にしているように聞こえたせいか、征四郎に言われる言葉の何もかもが癪に障つて猫又はつい腹が立ってしまうのだ。

『ああ、わかんねえよっ！ 今だってそうだ！



オレはあいつに特別なこととか、特に大したことなんて何もやってねえ！

あの時も言ったけどな、オレがあいつにしてやれたことなんて……せいぜい低級な悪霊があいつにまわり憑かないように、周囲にマージングする程度だった！

でもそれだけだ、他に何が出来るってんだよ！？

こんな血にまみれた化け猫が……、大切な飼い主の孫に

ハルの大切な者に何をしてやれる』

胸が苦しくなつて猫又の放つた言葉は、最後には震えて涙声に変わっていた。

それでも憎い征四郎の前では氣丈に振る舞おうとあからさまにそっぽを向くことで、泣きそうになっているのを何とか誤魔化そうとする猫又。

当然そんなことはすでに見通している征四郎であつたが、あえてそれには触れず珍しく自分に自信を持つことが出来ない猫又に対して、征四郎はまたしてもはつきりと教えてやった。

「まだわからないのか、お前は君彦にかけがえのないものを与えてくれたよ。」

君彦も言っていただろう……、お前のことを家族として

とても大切な存在なのだ」と

つ  
つ  
!

その言葉を聞いて、猫又は昨日の記憶が蘇る。

犬塚から自分を守ろうと盾になる君彦、最後までつっぱねようとする猫又に向かつて君彦が真つ直ぐに言い放った言葉。

「家族なんだっ！」

必死な顔で、今言わなければもう二度と伝えられないと思い詰めた君彦の、本心から出た言葉。

それを思い出した猫又はうつむき、どこか後ろめたいような雰囲気です。小さくこぼす。

『オレなんかが……、あいつの家族になってもいいのかよ。』

だってオレは君彦の家族を、

死に追いやった

ようなヤツなんだぞ!?

そんな化け猫が君彦の家族なんかなれるはずが、いや……なつていいはずが……』

落ち込んだ様子で小さく呟く猫又に対し、征四郎はこれまで穏やかだった態度から一変すると表情から笑みが消えた。

『お前がどう思っているように、君彦自身がお前のことを家族だと言っているんだ。』

そのどこが悪い、いい加減つまらない罪悪感に囚われるな。

あれは

事故だったんだ、お前のせいじゃない』

厳しい口調で猫又を諫めながらも、征四郎の表情には苦渋が滲んでいた。

（本当はそんな風に、簡単に割り切れるはずないだろうが。

……あれはお前の家族でもあるんじゃないかねえかよ、無理しやがって……っ！）

征四郎の辛そうな表情を読み取った猫又は心の中で反論したが、これ以上征四郎と揉めるつもりはなかったのであえてそれは口に出さなかった。気が重くなる話題が出て来たことで互いの間の空気が

張り詰めたが、しばらく沈黙が続いた後それを解くような形で猫又はおもむろに話題を切り出した。

『ところでよ、さっきの亀裂の話があるから別にみなまで言つつもりはねえんだけど。』

お前……いつまでここに居座るつもりなんだ!?

あれからもう何年も経つが……、オレが見た感じじゃ別にこれといった兆候は現れてねえぞ。

まだ何かやばいのか?』

猫又は征四郎が座っているすぐ隣にある祠へと視線を走らせ、中に納められているお稻荷様に注目した。

それからまるで悲惨な記憶を思い出すような渋い表情になると、猫又は征四郎の方へと向き直り返答を待つ。

征四郎は遠くを見つめて何かを考え込むように押し黙る、まるで慎重に言葉を選ぶようにしながら答える。

『せめて……、あの子に笑顔が戻るまでは待つつもりだ』

その言葉に猫又は首を傾げると、こともなげに言い放った。

『……いつもバカみたいにへらへらとよく笑ってるぞ?』

猫又の言葉に征四郎は思わず吹き出し、肩を震わせながら笑いを必死で堪えようとする。

その態度にプライドを傷付けられたような気がした猫又は、かちんと来て思わず声を荒らげてしまう。

『な……っ、何だよ! オレ、何か変なこと言ったか!?』

『いや、別に何でもない。悪かったな……猫又よ。

ただ、私が言ったのはそういう意味じゃなくてだな。

私はただ、あの子が本当の笑顔で笑える日が来ることを……待ち望んでいるだけだ』

そう言いながら征四郎は空を仰ぐ、梅雨にはまだ早いにも関わらず雨が續いてるせいかな今も空は雨雲に覆われていた。

猫又もまた征四郎と共に上を見上げて雨雲を見つめた、今にもぽつぽつと雨が降って来そうな天気である。

そんな曇り空を目にしながら猫又は、再び君彦に告げられた言葉を思い出していた。

罪深い自分のことを家族と呼んでくれたあの瞬間を、今にも降り出しそうな空を見上げながら思いを馳せる。

（そういえばあの日も、雨が降ってたっけな……）

そう心の中で呟きながら、大雨の中で全身ずぶ濡れになりながら猫又に向かつて家族だと呼んでくれた君彦のことを思い出し、両目を閉じるとその光景が別の記憶を蘇らせた。

降りしきる雨の中、全身ずぶ濡れになって、寒くて、お腹もぺこぺこで。

誰を待っているかもわからずにひたすら鳴き続けていたあの日、彼女は目の前に現れた。

持っていた傘を自分の真上に差し出して、雨を凌いでくれた。それからとても優しい眼差しで、自分に手を差し伸べてくれた。あの手の温かさを、猫又は今でも忘れない。

「まあ、こんな所にいると風邪を引いてしまうわ。

良かったら私の所へ来る？　ねえ、可愛い子猫ちゃん」

そう言つて薄汚れた自分を抱いて、連れ帰つてくれた。  
とても寒くてひもじかつた自分にとって、それは天の助けにも等しかった。

震えながら弱々しく小さな声で鳴く自分に、  
食べ物を、住む場所を、名前を与えてくれた。  
そして……。

ハルは自分のことを……新しい「家族」だと、そう呼んでくれた。  
『思えばオレのことを家族だと呼んでくれたのは、いつもあんな風に雨が降つてゐた時だったな……』

猫又にとつてこの世で最もかけがえない愛しい女性、初めて自分に家族というものを教えてくれた大切な飼い主。

君彦の瞳は、ハルを思わせる程とてもよく似ていた。

大切な人と同じ瞳をした、大切な人の家族……。

猫又は例え自分の命に代えてでも、愛する女性  
性を守ろうとしていた者を。

君彦をハルの代わりに守つてやりたいと……そう思っていた。

ハルと同じように自分のことを家族だと呼んでくれた君彦のことを、心の底から守つてやりたいと。

猫又は改めて、そう強く思った。

## 今日のご機嫌

長いゴールデンウィーク明け、部活をしていなかった君彦は数日ぶりに登校していた。

思えば連休直前の君彦は慶尚のせいで猫又と喧嘩をしてしまい、挙げ句猫又が家出してしまつて精神的に重苦しい状態にあったが、今の君彦はそんな重苦しさを微塵も見せていなかった。

むしろ機嫌良く、いつもの能天気な笑みを浮かべながら鼻歌なんかを歌つて学校へと向かっている。

そんな時四つ辻に差し掛かった場所で奇妙なくしゃみが聞こえて来た。

「ぶえーつくしょーいっ！」

まるでバラエティのコントばりの派手なくしゃみ。

わざとしか思えないようなくしゃみに驚いた君彦は一体誰がしたのかと思い、くしゃみが聞こえて来た右側の道に目をやる。

するとそこには鼻を真つ赤にさせて片手にはティッシュを持った響子の姿があつた。

君彦は鼻をすすりながら響子に挨拶をする。

「おはよう、志岐城さん。」

えっと……その、もしかして志岐城さんも風邪引いちゃったの？」

先程までの能天気な笑顔から一変、君彦はぎこちない笑顔になりながら恐る恐る声をかける。

別に響子のことが苦手だからという理由ではなく、響子が明らかに風邪を引いている様子を見て、それが自分のせいであると認識していたからその罪悪感により、無責任な笑みを放つわけにはいかな

いと自重した為だった。

響子は苦虫を噛み潰したような表情で君彦に目をやると、もうひとつ派手なくしゃみを放つ。

今君彦の目の前に居る響子は、君彦が初めて会った時の響子とは全く違っていた。

初めて会った時の響子は出来るだけ周囲の注目を浴びないように、ひたすら地味な格好を演出していたのだ。

元々色素の薄い髪色をわざわざ黒髪に染めておさげにし、制服のスカート丈も膝より下、明らかに「イモい」格好をすることで自分の周囲に存在する男性から注目されないように努めていた。

しかし今ではそんな努力をしても結局無駄であることに気付いた響子は地味な格好を封印する、髪色は元の茶髪に戻してウェーブがかったロングヘアもおさげにせずそのまま下ろし、制服の着こなし方も普通の女子高生の如くスカート丈を膝上に戻していた。

君彦は特に女性のことを外見で判断してきたわけではないが、それでも今の響子は以前に比べるととても自然で君彦の目から見てもどちらかといえば美人の系統に入っていると思っていた。

そんな風に思っている女性が加藤茶ばりの大きなくしゃみをぶちかました所を見て、少しばかりショックを受けている。

響子は警戒する様子もなく、ごく自然に君彦と共に歩いて学校に向かう。

恐らく本人達はさほど意識しているわけではないようだが、ほんの少し前のことを考えてみればそれは響子にとってとてもない進歩であったが、残念ながら風邪の諸症状に苦しむ今の二人にはその変化に気付くことはない。

響子は鼻を噛んだ後、横目で君彦を見据えると少し不機嫌な表情で返事をした。

「ええ、まあね。」

見ての通りさつきからくしゃみが止まなくてさ、イヤになるわ」

「あはは……、そっか。」

何かごめんね、きつと昨日の出来事が原因……だよな」

君彦は申し訳なさそうに頭をぼりぼりと掻きながら、響子が癪に障らない程度に謝罪する。

すると響子は鼻をすすりながら平然と言い放つ、そこに厭味も照れ隠しもなかった。

「別にあんたが謝んなくていいわよ、あたしが勝手にやったことだし。」

大体さ、猫又のヤツがいなくなつて困るのはあたしだって同じなんだから……お互い様でしょ」

今日は機嫌が良いのか？

君彦は目を丸くして響子を見つめた。

てつきり「いちいち謝るんじゃないわよ、鬱陶しい」とか「元はと言えばあんた達が面倒臭いことするから悪いんでしょ」とか言われると、君彦は本気で思っていたからだ。

響子が本来持っていたのであるう優しい一面に触れることが出来た君彦は、嬉しさの余り満面の笑みを浮かべて今度は感謝の言葉を述べようと前に進み出た。

思えば猫又が無事君彦の元へ戻って来ることが出来たのは、黒依や響子……そして浮幽霊のカナのお陰でもあった。

だが昨日は色々なことがあり過ぎて、黒依や響子にきちんとお礼を言うことが出来ていなかったことを思い出した君彦は、今こそお礼の言葉を述べるチャンスだと察してここぞとばかりに響子の方へと詰め寄る。



「志岐城さん、それでもオレはすごく嬉しいんだ！」

もしかしたらオレや猫又って、志岐城さんにものすごく嫌われてるものとばかり思ってたからさ。

でも昨日オレ達の為に雨の中ずぶ濡れになってまで助けてくれて、本当に感謝してるんだよ！

志岐城さんがいなかったら、猫又はもう一生戻って来なかったのかもしれないんだ。

本当なら昨日の内にちゃんと言えれば良かったんだけど……、本当にありがとう！」

まるで君彦の背後から後光が差してるような、そんな純真無垢な笑顔を見せつけられて響子は硬直していた。

顔がひくひくと痙攣し、口はあんぐりと開いたまま。

響子に対して全く悪意のない男が目の前に……、そう考えただけで響子の胸が高鳴る。

あまりに慣れない状況に耐えきれず響子は拳を震わせ、自分自身でも心から望んでいるわけじゃない行動に出てしまう。

「だーかーらーっ！」

男は近寄るなって言ってるでしょうがああああっっ！！」

気付いた時には君彦の頬を思い切り殴り飛ばしていた。

響子は今までの経験から「反射的に男を殴ってしまう」という癖に、心底嫌気が差していたが後悔先に立たず。

結局いつもと変わらず、響子は自分の許容範囲内に迫って来た君彦に対してまたしても暴力を振るってしまっていた。



## 心のほころび

始業ベルが鳴る少し前、教室のドアが開けられた時クラス全員が一気に注目していた。

それまではそれぞれグループ別に固まって雑談したりしていたが、教室に入ってきた張本人を見るなり突如として沈黙が教室全体を襲う。そんな中、沈黙を破ったのは君彦と小学生の頃から知り合いだった春山竜次だった。

「あああああつ！！ 猫又、一体どうしたんだー！！」

それまでたった一人で席に着き孤独を装っていた竜次であったが、完全にのびている君彦を担いで教室に入って来た慶尚を見て思わず椅子を倒して立ち上がったのだ。

慌てて君彦の元へ駆けて行くと慶尚の後ろにはバツが悪そうな顔で響子が立っていることに気が付き、一気に竜次の胸がときめく。顔を真っ赤にして君彦のことを心配していたことすら既に忘れてしまっている様子だ。

声を荒らげ近付いて来た竜次に、慶尚は無関心全開の眼差しで目をやると突然背中に担いでいた君彦を下ろして竜次に託す。

いきなり君彦を預けられて竜次はわけがわからず抱えると、慶尚と響子の方を交互に見て説明を求めた。

しかし慶尚に至っては説明すること自体面倒臭いのか、無表情のまま竜次に向かって手を振る。

「それじゃ、後は任せた」

「　　って、オレが！？ 何で！？」

てゆうか猫又に一体何があったんだよ、何でこいつ気絶してんの

っ!？」

竜次の叫びも空しく慶尚は全く聞く耳を持たないまま自分の席へと歩いて行ってしまった。

すると今度は教室の奥から、能天気な黄色い声が響く。

「あゝ、君彦クンじゃない!

一体どうしたの? 何だかほったがものすごい腫れてるけど?」

黒依から放たれる言葉の一つ一つが響子の心臓を抉り、ますます居心地が悪くなってしまう。

しかしそんな響子の心中を察することなく黒依は満面の笑みを浮かべて、顔面蒼白になっている響子に話しかけた。

「もしかして君彦クンをノックアウトしたのって、志岐城さんだったりするのかなあ?」

白々しい言い回しに響子はほんの少しだけ殺意を抱いてしまうが、黒依が言っていることは間違っていないのでその怒りを必死に堪えようとする。

「ベ……別に悪気があって殴ったわけじゃないわよ、ちょっと色々あって。」

あたしが殴ったらこいつ気絶しちゃってどうしようかって思ってた、たまたま犬塚の奴が来て……」

「それで犬塚クンが君彦クンをここまで運んでくれたってこと?」

響子の説明の後半部分を黒依が引き継ぐ。

異性に必要以上に近寄られると拒絶反応が現れて反射的に相手を殴ってしまう癖がある響子は、君彦を殴り飛ばしそのままノックアウトしてしまったのだ。当然男に触れることすら嫌悪感を抱いてしまう体質な為、気絶した君彦を介抱するどころか学校まで運ぶことすら出来ず、道の真ん中で立ち往生しているとたまたまその場に犬塚慶尚が現れたというわけである。

慶尚はその場の状態を目にしたただだったが、特に響子に説明を求めるわけでもなく黙ったまま君彦を担ぎ上げてここまで運んで来た……というわけだ。

慶尚に対して良い印象を持っていなかった黒依や響子は、既に自分の席についてぼーっとしている慶尚を見つめ、少しだけ見直していた。黒依は口元に指を当ててぼそりと呟く。

「へえ……、犬塚くんって案外イイ人なのかもしれないね」

黒依のその言葉に、響子はかつて自分も同じように考えたことがあったのを思い出した。

響子に取り憑いている色情霊を一時的に近付けないように出来る数珠を、5万円で買わされそうになったというニガイ思い出。

それを思い出した途端、黒依が感じていることが気の迷いであることを教えるようとも思ったが、その時ちようど始業ベルが鳴ってしまった為、響子は自分の教室へ帰らなければならなくなった。

「あ、それじゃあたしは教室に戻るから。

その……、猫又のこと……頼んだわよ」

響子は少し照れくさそうに目の前に居る黒依と竜次にそう告げると、黒依はいつものようににつこり微笑んで手を振っていた。

竜次は憧れの響子に君彦のことを頼まれ、必要以上に張り切っている様子だ。

それから響子は自分の教室に戻り、竜次は君彦を肩に担いで保健室へと向かう。

「……ていうかコレ、最初から保健室に連れて行けば良かったんじゃないのか!？」

犬塚の野郎くゝわざとか!？ 保健室より教室の方が近いからとりあえずここに連れて来たってわけか!？」

竜次が君彦を保健室に連れて行ってる時、黒依は担任に事情を説明する為だと言って教室にちゃっかり残っていた。

その後、保健室のベッドで寝かされていた君彦が目を覚ましたのは、一時限目が丁度終わった頃だった。

保険医の先生にお礼を言ってから教室へ戻る君彦、今は休み時間の為廊下には数人の生徒がたむろっている。

君彦は二時限目が始まる前に一度響子の教室へと立ち寄った、休み時間のせいだ教室のドアは開けっ放しになっていて君彦は覗き込むように顔を出す。すると廊下側の席に一人で座っている響子を見つけて、君彦は声をかけた。

「志岐城さん!」

その声に驚いた響子は笑顔を引きつらせて言葉を失っている様子だった、それも仕方がないこと。

またしても自分のせいで君彦に怪我を負わせてしまったのだから、さすがの響子でも罪悪感に苛まれて当然だった。

しかしそれがわかっていてもどうしても異性に対して素直に謝罪出来ない響子が言葉を詰まらせていると、膨れ上がった頬がなぜこなくなったのか忘れてしまったかのように……、まるで何事もなかったかのように君彦は笑顔で響子に話しかけた。

「あのさ志岐城さん、今朝言いそびれたことがあるんだけどね。実は志岐城さんと黒依ちゃんに昨日のお礼をしようと思って、みんなの分のお弁当を作って来たんだよ。

前もって伝えられなかったから、志岐城さんも黒依ちゃんも自分のお弁当を持って来てると思うけど、そんなにたくさん量を作って来たわけじゃないから、お昼休みまた一緒に屋上でお弁当食べようよ」

何の企みも悪意もない、そんな君彦の屈託のない笑みに響子はいつも戸惑ってしまう。

今までなら自分に声をかけて来る異性は全員、響子に必要な以上の好意を持って接して来る。中には悪意を持って襲って来る者さえいたのだ、そんな出来事を過去に腐る程経験して来た響子は男の誘いなど全く受ける気になれなかった。

そんな男性不信が響子の心をかたくなにさせていたのに、なぜか君彦だけは違っていたのだ。

君彦には響子に取り憑いている色情霊の色香が効かないという理由もあるにはあったが、どうしてもそれだけではないような気がしていたのだ。しかしそれが一体何なのかはつきりとした理由は分からない。

それでも響子は心のどこかで、なぜか君彦のことだけは信じられたのだ。

だから何の警戒心もなしに響子は、自分でも気付かない内に頷いていた。とても素直に。

「……わかった、それじゃ　　昼休みに屋上ね」

「よかった〜！　約束だからね、志岐城さん！」

約束を交わした君彦は始業ベルが鳴った途端、響子に手を振って

自分の教室へと戻って行った。

突然目の前に現れて約束をこじつけて去って行った君彦に、響子はただただ啞然とするしかなかった。

わけのわからない安心感に浸りながら……。



## 天敵

昼休み、君彦は約束通り黒依と響子と共に屋上で弁当を食べようとしていた。

しかし天気がかなり怪しい曇り空だった為、屋上に出る手前の踊り場で弁当を広げることとなる。

「天気が悪くて残念だったね。」

晴れ晴れとした青空を見ながらお弁当を食べたら、すごく美味しく感じられただろうに」

君彦はいそいそと弁当の包みを広げながら女子二人がっかりしないように明るい声を出す。

「そんなことないよ、天気に関係なく君彦くんが作ったお料理ってすごく美味しいよ」

黒依は満面の笑みを浮かべて君彦を励ました、そんな黒依の言葉に君彦は天にも昇るような気持ちで舞い上がる。

（黒依ちゃん……っ！

なんて君は心の優しいいい子なんだ。

そんな風に言ってもらえると、朝早くに頑張っておかずを作ってきた甲斐があったってもんだ！）

傍から見てもわかりやすいリアクションでデレデレになっている君彦を白い目で見つめながら、響子は自分の弁当を黙々と食べ始めた。君彦は嬉しさの余り笑いが止まらない様子のまま、黒依達の前におかずが入った弁当箱のふたを開けて薦める。

「嫌いな食べ物があったらいいんだけど、とりあえず遠慮なく食べてよ。」

これはオレからの心ばかりのお礼だからさ」

照れ臭そうに二人が食べてくれるのを待つ君彦、その時君彦が作ったほうれん草の胡麻和えを見知らぬお箸が捉えた。

一瞬にして硬直する三人。

見ると階段下からお箸を持った手が伸びて、そのお箸で捉えた胡麻和えを口に運んでもぐもぐと食べる男が一人……。

「……美味しい」

「……つて、何でお前が先に食べてんだあああああつっ

！」

絶叫に近い大声で君彦は声を張り上げた、階段下には身長を活かして君彦のおかずを奪った慶尚が何食わぬ顔で平らげている。

突然の侵入者に黒依も響子も啞然として固まっていた、君彦は女性二人の為に作った料理を先に憎き慶尚に食べられて怒り心頭の様子である。拳を震わせながら目くじら立てる君彦に対し、慶尚は特に悪びれた様子もなく事実を述べた。

「お前からの心ばかりの礼なんだろ、この料理」

「ああそつだよ！

お前のせいで猫又が行方不明になったから、黒依ちゃんと志岐城さんが心配して手助けしてくれたお礼だよ！」

君彦は憎しみをたっぷり込めながら慶尚に向かって指を指す、い

つも温厚で穏やかな物腰だった君彦が慶尚を前にした途端にまるで別人のように性格が豹変したので、黒依も響子も少しばかり驚いている様子だった。

むしろ慶尚が突然乱入して来たことよりもずっと驚愕している。君彦に取って犬塚慶尚という男はどうしても許せない人物であった、猫又との何気ない生活をぶち壊した張本人。

果てには猫又の命を狙い、自分に刀傷を負わせた危険人物

理由はそれだけでも十分であったが、なぜか君彦は慶尚のことが苦手で仕方なかった。

顔を見るだけで胸の奥がむかむかしてくるのだ、クラスメイトに對してそんな態度を取ってはいけなないとわかっていても、君彦は猫又の一件以来どうしても慶尚をすぐに許すことが出来ず、少し意地になっていたかもしれなかった。

そんな君彦の心中など全く介せず、慶尚は淡々と言葉を返す。

「だからオレも今朝、氣絶したお前を教室まで担いで行っただろうが。

まあさっきの胡麻和え一口程度じゃ、礼の足しにもならねえけどな」

「そんなもんオレは頼んだ覚えはないっ！　しかも何て恩着せがましい奴なんだっ！　

ってだから、食うな！　あつ、今回のメインデ  
イッシュまで！」

君彦が罵る間もなく慶尚はどんどん箸を伸ばして弁当の中身をた  
いらげていった。

啞然とする黒依と響子に、君彦は遂に我慢ならず力ずくでもこの

場から邪魔者を追い出そうと立ち上がる。

すると慶尚はある程度おかずを口にして少しは満足したのか、伸ばしていた腕を引っ込めて階段下から少し場所を移した。

「そうカリカリ怒るな、オレは別に喧嘩を仕掛けにここまで来たわけじゃないからな。」

あ、もしかしてハーレム状態を邪魔されたくなくて怒ってんなら話は別だけど」

「え、ハー……レムって？」

慶尚の何気ない一言に君彦の怒りは一気に消沈してしまう、それからきよんとした顔のまま自分の目の前で啞然としている黒依と響子の方へと視線を移した。

「両手に花の状態もハーレム状態って言うのかなあ？」

黒依はあっけらかんとした口調で言い放つ、すると響子は心外とでも言うように顔を真っ赤にさせながら激怒した。

「何バカなこと言ってるのよ！　べ、別にそういうつもりでここに集まってるわけじゃないんだからねっ！　

ただ単に弁当食べに来ただけじゃない！」

「そ、そうだよ！　オレ達が誰とどこで弁当食べようと自由じゃないかっ！　

失礼なこと言っただから二人に謝れよ、犬塚っ！」

ただでさえ響子は男に対して不信感を募らせている為、君彦は変な誤解を与えないように何とか言い繕おうとする。

すると慶尚は細かい事情を知ってか知らずか、君彦達が弁当を広げている場所まで階段を上って来るとコンビ二袋に入ったパンとコーヒーを取り出して、自分もその場で食事をし出した。

「だから！ 何でそうなるんだよ！  
てゆうか普通に入ってくんなくて、どんだけフリーダムなんだお前はっ！」

けたたましく声を張り上げる君彦に対し、少しだけ機嫌を損ねたように眉根を寄せながら慶尚が適当な言葉を放つ。

「ハーレム状態だっと思われるのがイヤなんだろう？  
だったらオレがこの中に入ればハーレム状態じゃなくなる、問題解決だな。」

あ、その火星人ウィンナーくれ」

「タコさんウィンナーでしょ？ はい、犬塚クン」

黒依も黒依で慶尚のことを自然に受け入れてしまったのか、彼が要求したタコ型ウィンナーの入った弁当箱を差し出してしまう。

慶尚は普通に「サンキュ」と礼を言っただけで、当たり前のように君彦が作った手料理弁当を平らげていった。

その光景を目にした君彦はまるでこの世の終わりの瞬間を目撃したかのような表情で、まさにムンクの叫びの如き顔でショックを受けている様子だ。

（黒依ちゃんああん！ なんてそんな奴の言うこと聞いちゃうの！  
？

しかもそれ黒依ちゃんと志岐城さんに食べてもらおうと、オレが朝早くに起きて一生懸命作った料理なのにいっ！）

ショックを受けた直後、君彦は確信した。

まるで敵に対して威嚇する猫の如く、目を光らせて今にも「シャアアッ」と言わんばかりの顔で慶尚を睨みつける君彦。

（ 敵だっ！ こいつは紛れもなくオレの天敵だっ！ ）

誰が割り込んで来ようと我関せずを貫くように終始笑みを絶やさない黒依、そしてちゃっかりとグループの中に入り込んだ慶尚、そんな慶尚に対して敵意をむき出しにする君彦。

そんな奇妙な三つ巴風景を目にしながら響子は、内心アホらしいと思いながら君彦が作って来た手料理を口一杯に頬張った。

## 天敵（後書き）

久し振りにキャラクター紹介をいたします。

読まなくても今後の物語には一切影響しませんのでご安心ください。

いぬづかけいしょう  
犬塚慶尚、15歳、5月27日生まれ、AB型、身長186センチ。

趣味は、AV機器や家電製品などの機械類。

好きな食べ物は、てっちり。

嫌いな食べ物は、特になし。

特技は、除霊・浄霊などの霊媒。

性格は、どこまでもマイペースで滅多なことでは感情を露わにしない。

黒髪で男前カット（笑）、肌の色は少し日に焼けていてアウトドアなイメージのある外見だが、実は意外にもインドアだったりする。室内での過ごし方は主にPCでインターネットしたり、TVゲーム（主にアクション）をしたり、音楽（主に洋楽）を聴いたり、まったり過ごすのが好き。

出掛ける際の目的地は決まって家電製品の品揃えが豊富なOOOOへ。

慶尚の実家は代々犬神を祀る神社で、祖父はその神主をしている。家庭の事情により現在もまだ祖父が神主をしているが、本来は慶尚が後を継ぐことになっている。しかし理由あって慶尚はそれをかたくなに拒絶。

実家を出て一人暮らしを希望したのも、神主という役職を継ぐことに反発する為だという理由があるらしい。

慶尚に関する細かい事情は、今後物語の中にも出て来ます。

殆ど無理矢理ですが遂に君彦達のグループに、敵であるはずの慶尚が仲間に加わることとなりました。

敵意むき出しの君彦、二人の間にはまだまだトラブルが続きそうな予感がしますがどうぞ生温かい目で見守ってあげてください。

いつもたくさんさんのアクセス、お気に入り登録ありがとうございます。今後も面白い話が書けるように執筆頑張りますので、更新を楽しみにしててください。よろしくお願いいたします。



## 意外な展開！？

君彦とが納得しないまま、結局慶尚は最後まで一緒に昼休みの弁当を食べていた。

もともと慶尚が持参したものは数種類のパンとコーヒーだけで、物足りない部分は君彦が作って来た弁当で腹を満たしていた。

食事してる間も君彦はまだ猫又の一件を根に持っているのか終始ピリピリとして落ち着かない様子であったが、慶尚に至ってはもう過去の出来事として片付けられているのか全く相手にしていない。

そんな温度差が何となく面倒臭いと思ったのか……、黒依と響子は二人の関係を取り持とうとはせずに君彦が作って来た弁当をありがたく食べ続けていた。

そしてふと黒依が腕時計を見て、もうすぐ午後の授業が始まることに気付く。

黒依が腕時計を見たのが合図となったのか、その場にいた全員が君彦に向かって口を揃えて礼を言った。

「ごちそうさまでした、君彦くん！ すっごく美味しかったよ！」

「……ごちそうさま。お……美味しかったわよ、確かに」

「お粗末様でした」

「ちよつと待てええいっ！ 最後のヤツ、何だ！？」

人がせつかく精魂込めて作って来た料理を、この中で一番食ったクセにお粗末様だと！？」

約一名の礼の言葉だけ腑に落ちなかった君彦は怒声を上げて指摘した。

しかし慶尚は怒り狂う君彦を見て見ぬフリするようにわざと視線を逸らしている様子である。

その光景を見て響子は「もしかしたらわざと君彦を怒らせるよう

なことを言ってるんじゃない？」という推測をしていた。

壁にもたれて両腕を組み、君彦が居る方向とは真逆に顔を背けて思い切り無視している慶尚。

そんな態度にも苛立ちを覚えた君彦はぶつぶつと文句を言いながら後片付けをする。

一応食事させてもらった礼として片付けるのを手伝おうと思った響子であったが、君彦があまりに手際よくてきばきと片付けて行くので途中で自分の手と君彦の手が当たってしまったらどうしようなどと余計な考えが頭をよぎって、結局話しかけることも出来ないまま後片付けが終わってしまった。

君彦は持参して来た弁当箱を片手に階段を下りて行くと、途中に立っている慶尚の方には目もくれずにムスツとした表情でそのまま通り過ぎて行く。

他人に対して怒りを露わにするというそんな珍しい君彦の様子を見て、響子は少し呆れながらも驚いていた。

そんな君彦を目にして多少動揺していた面もあったのか、響子は思わずにこにこしている黒依に向かって小声で訊ねてみる。

「あ……あのさ、猫又があんな風に他人に対していつまでもねちっこく怒ってる……なんてこと、よくあるの!？」

眉根を寄せながら君彦の状態を気にする響子に、黒依は終始笑みを絶やさぬ顔で明るく答えた。

「そうね、滅多にないと思うよ？」

君彦クンってすぐく人が良いから、相当犬塚クンのことが嫌いみたいだね」

「ち……、ちょっとあんだ。

本人目の前にしてよくそういうこと言えるわね、逆にあんたの神

経疑うわよ」

じつと黒依と響子の方を見ている慶尚に注意を払いながら、響子は少し後ずさりしながら苦笑いをする。

だがそれでも慶尚はじつと見つめたままその場を動こうとしない、そんな時階段下の方から誰かが君彦を呼ぶ声がして何やら会話するような話し声が聞こえてきた。

一体誰が来たのかと思って階段上から下を覗きこむと、そこには君彦のクラスメイトの男子が立っている。

「猫又、今朝お前が気絶してて春山に保健室に連れて行かれたる？　なんかその時のことで先生がお前に話があるみたいだから、職員室に来てさ」

「え、一体何だろ……？」

とりあえずすぐ職員室に行ってみるよ、わざわざありがとな」

教師からの伝言を伝えるとクラスメイトはすぐにその場を去り、君彦は上を見上げてさっきの話を繰り返した。

「黒依ちゃん、志岐城さん、ごめん！

何かオレ今から職員室に行かないといけないみたいだから、そのまま教室に戻ってくれるかな？」

（……犬塚のヤツが黒依ちゃんや志岐城さんに変なことしなきゃいいけどな）

か弱い（？）女子二人を置いてその場を去るのが心苦しく思えたが、何やら急ぎの用事だと感じられたので君彦は後ろ髪引かれる思いで職員室へと向かった。

ひとまず自然と解散という形になったが、黒依と犬塚は同じクラスで響子はそのすぐ隣。

解散といっても結局のところ目的地は同じ方向ということになるが、そそくさとまるで逃げるように響子は階段を駆け下りた。

（いくら猫又と同じように色情霊の色香が通じないからって、男と一緒に教室戻るなんてごめんだわ）

仮にも慶尚は響子の苦手な男であることに変わりはない、今までにも何度か出くわしたことはあったがその時はずっと一緒に付き添っていたわけではなかった。

まるで慣れ合うように一緒に教室に戻るなんて響子にとっては我慢ならないことだったのである。

「悪いけどあたしも先に行くわ、それじゃあね！」

そう言って響子はそのまま自分の教室へと戻って行ってしまった。君彦と響子が去って行くのを見送る形になってしまった黒依と慶尚であったが、気を取り直して黒依は慶尚に微笑みかけると敵意も何もない口調で話しかける。

「志岐城さんももう少し心を開いてくれたらいいのにね、でもあれじゃ仕方ないか。」

ま、そんなことより……あたし達も早く教室に戻ろっか！」

黒依は君彦のように猫又の一件について慶尚を嫌う態度を取ることもなく、他のクラスメイトと接するように分け隔てなく言葉をかけた。しかし慶尚は変わらず無愛想な表情のままで黒依を見据えながら、低い声で呼び止める。

「待て、お前に少し話がある」

その声はまるで威嚇にも近い口調で、一瞬だけ周囲の空気がピンと張りつめた。

黒依は階段を下りる途中だったので慶尚に背を向けたまま足を止める、それからいつもの笑顔で振り向いて明るく言葉を返す。

「えゝ？ でも早く行かないと午後の授業に遅れちゃうよゝ？」

「お前の返答次第によつては早く終わる」

慶尚はさっきまでの緩い雰囲気から一変、威圧感を放つように仁王立ちすると黒依を鋭い眼光で睨みつけた。

あまりに態度が違つて見えたので黒依の笑顔がほんの少しだけ凍りつくと、観念したように体ごと慶尚の方に向き直る。

「もうゝ、そんな風に睨んだら怖いよ犬塚くん。」

話つて一体なあに？」

少しだけ間が開く。

空気は相変わらず張りつめたままでほんの数秒が数十分に感じられた頃、ようやく慶尚が口を開いた。

「単刀直入に聞く、

お前は一体何者だ」

慶尚の言葉と共に、背後から犬神が姿を現す。

そして主である慶尚を守るように、犬神は威嚇する姿勢を取りながら慶尚の背後で唸り声を上げていた。

両腕を組みながら仁王立ちで立ったまま、黒依からの返答を待つ慶尚。

慶尚から何者かと問われた黒依は自分を見下ろす慶尚の方に向き合ったまま、それでも微笑みを絶やさなかった。

## 秘密の黒依ちゃん

お前は一体何者だ。

その問いに黒依は動じることなく、ただ笑顔のまま階段上から見下ろす慶尚を見つめていた。

慶尚の背後では犬神が威嚇するように牙をむき出し、黒依に何か動きがあればすぐにでも迎撃できる態勢である。

しかし黒依は敵意を見せることなくあっけらかんと聞き返した。

「いきなりどうしたの、犬塚くん？」

何だかそんな言い方されると、まるであたしが人間じゃないみたいに聞こえるよ？」

至って明るい声で、先程の慶尚の言葉を冗談だと捉えるように笑って言葉を返す黒依。

しかし慶尚に至っては笑み一つない顔で、まだ黒依に対して警戒を解いていなかった。

黒依がすぐに白状すると思っていなかったのか、慶尚はゆっくりと説明し出す。

なぜ自分が黒依に対して「何者なのか」と訊ねた理由を。

「オレが初めてこの学校に来た時、途中で会った色情霊とは比べ物にならない程の邪悪な力を感じていた。

人の姿をしているが犬神だけは誤魔化せない。

犬神は古来より人に化けた物の怪を嗅ぎ分ける能力がある、それはかつて陰陽師に仕えていたと言われる猫又以上の能力だ。

その犬神がお前を邪悪な存在だと察知しているのだから間違いな

い。

現に気合いを入れて視れば、お前からは人間に化ける以前の名残を目にすることが出来る」

淡々とした口調でそう告げる慶尚、すると黒依は顔だけは笑みを浮かべたままであったが突然黒依の周囲を取り巻く空気が変わり、慶尚と犬神は息を飲んだ。

まるで冷たい冷気が発生したかのように、周囲の気温が一気に下がって肌寒くなる。

気付けば慶尚が息を吐く度に白い息が出ていた。

黒依は微笑んでいた顔のまま、両目をしっかり開いて慶尚を見つめる。

射竦むような瞳の冷たさと力強さに慶尚は一瞬怯んで、ぞくりと背筋が凍った。

犬塚神社で猫又と対峙した時でさえ、慶尚がこれ程動揺した姿はない。

それだけ今慶尚の目の前に居る黒依の威圧感は凄まじかったのだ。異質な空気を肌で感じながらも、慶尚は最後にトドメと言える言葉突き付ける。

「お前本当は、

霊が見えているんだろ。

あいつに取り憑いている猫又の姿も見えているはずだ、違うか！  
？」

今この場に除霊用の刀は持って来ていない、だがそれでも慶尚はここぞとばかりに黒依の正体を暴いてやろうと思っていた。

緊張感を抱きながら黒依の返答を待っていると、その答えは以外にもすぐ聞くことが出来た。

黒依は肩にかかる黒髪を手で払いのけながら明るい笑顔で返答する。



「バレてた？」

たった一言、そのあっさりとした返答に慶尚は凄まじい殺気のよ  
うなものを感じて一瞬金縛りに遭ったかのように硬直してしまふ。  
しかし腹に力を入れるようにして何とか体が強張っているのを解く。  
黒依はその場から一步も動くことなく続けた。

「確かに犬塚クンの言う通り、猫又ちゃんの姿も声もずっと前から  
わかってたよ。」

他の幽霊達も見えてるし、声も聞こえてる。

でもね？ これでもあたしは人間として生まれてるんだよ？

確かに普通の人とは少し違うかもしれないけど、でもあたしは……  
人間だよ」

人間だと言い張るには黒依を取り巻く力は尋常じゃないと察して  
いる慶尚は、黒依の言葉を鵜呑みにせず未だ警戒を解く気配はな  
かった。そして更に慶尚が言葉で詰め寄る。

「お前の狙いは何だ、猫又君彦か？」

あいつに取り憑いてる猫又と同じように、あいつに取り憑いて命  
を奪う魂胆か」

「違うよ、あたしは君彦クンとお友達になりたかっただけ。」

それにさ……仮に、犬塚クンが言うようにあたしが君彦クンを殺  
すつもりで近付いたなら、君彦クンを守る猫又ちゃんが黙ってない  
でしょう？

猫又ちゃんもあたしのことには気付いているし、最初からわかっ  
ていたよ。

でもあたしが君彦クンには絶対危害を加えないって約束したから、

猫又ちゃんはあたしのこと信じて黙っててくれるの。

あたしは誰にも危害を加えない、

本当だよ」

今までは笑顔で言い繕っているように感じられた黒依の態度であったが、後半ではまるで慶尚に乞うように……自分の言葉を信じて欲しいという願いが込められていた。

それから黒依の周囲を取り巻いていた異様な雰囲気が消え去り、ずっと威圧感を感じていた慶尚の体も正常を取り戻す。

再び黒依は慶尚と、背後に居る犬神に向かって言葉を投げかける。

「

お願い、もう少しだけ……このままで居させて

欲しいの。

もしあたしが君彦クンに、他人に対して危害を加えようとして暴れたら……その時は遠慮なんかしないで。

猫又ちゃんにもそう言っただけあるし、あたしは

ほん

の少しでも君彦クンと一緒に居られるだけでいいから。

どうしても返さなきゃいけない恩があるの！

それを果たすまでは、あたし……っ」

瞳がわずかに潤む、零れそうになる涙を片手で拭って気丈に振る舞おうとする黒依。

すぐに笑顔を取り繕って再び口の端を持ち上げて微笑みを保とうとした、慶尚はじつと黒依を観察するように眇めっていると遂に時間切れ、始業ベルが鳴ってしまった。

それが合図となり、一旦ここで話を切る形になる。

「わかった、とにかく猫又も知っているってんなら話は別だ。

一応猫又は危険な存在でないことを確認済みだからな、猫又に免じてここは放置しとく。

だがさっきお前が自分で言ったように、この先誰かに危害を加え

ようとしたその時は……いいな？」

「うん、それでいいよ。」

あたしだって今のままで、平穩無事に過ごせるような存在だなんて……思っ てないから」

その言葉には深い裏があるように聞こえた、しかし今は教室に戻る方が先決だと慶尚は考えた為あえて追及はしなかった。

背後に控えていた犬神に目で合図するとそれに応えて犬神は姿を消す、それを同じように目で確認した黒依は階段を下り始めながら慶尚の方へと顔だけ向き直る。

「やっぱり犬塚くんは、いい人だね。」

今だけでもあたしのこと信じてくれて、……ありがとう」

どこか寂しげな口調でそう言うと、黒依はそのまま振り返ることなく教室へと走って行ってしまった。

黒依の背中を見送りながら慶尚は少しの間、考えに耽る。

「猫又君彦……、随分と厄介なものにばかり取り憑かれたものだな」

わずかに笑みをこぼす慶尚、どこか面白がるように、そして少しだけ君彦に対して興味がわいたかのように慶尚は滅多に見せない微笑みを浮かべていた。

## 不器用ロマンス

君彦達が住む四丁目を見渡すことが出来る程の高台、雑木林が生い茂り住民の殆どは足を踏み入れることのない小高い山。

特に見晴らしの良い場所に造られた祠の前で猫又は君彦の祖父である猫又征四郎と話をしていた、祖父といっても今現在猫又の目の前に居るのは霊魂という存在であり、外見は老人の姿ではなく能力が最も充実していた頃の二十代半ばの姿で現れている。

犬塚との一件について一通り話し終えた猫又が、今度は世話になった猫娘の涼子の所へ行こうとした時……珍しく征四郎の方から猫又を呼び止めて話しかけて来た。

『そういえば猫又よ、時にお前……最近能力の方に異変はないか？』

突然わけのわからないことを聞かれた猫又はふと足を止めて、二又の尻尾を左右に振りながら振り向いた。

『あん？ 能力って……神通力のことか？』

まあ全盛期の頃に比べれば多少の衰えは感じてるけど、別に何か問題があるってわけじゃ……』

そう言いかけた時、猫又は急に慶尚との戦いの時に感じた違和感を思い出す。

（待てよ、そういえば犬塚の野郎と交えてた時にいつも以上の衰えを感じたな。

まるで神通力そのものがオレの中から失われたみてえに、でなきやこのオレがあんな犬っころに差をつけられるはずがねえ。

いつからだ！？ いつから能力の衰えを感じた

！？）

猫又が征四郎の言葉により自分の異変に気付いて必死に記憶を辿っている、征四郎は静かな口調で注意を促した。

『お前、しばらくの間は君彦から離れるんじゃない。』

出来る限り側にいて本調子に戻るまでは…… そうだな、それまでは犬塚君と一緒にいなさい』

『はあっ！？』

君彦に付きまとうのは別に我慢出来るからいいとして、なんでこのオレが犬つころと一緒にいなくちゃいけねえんだよ！？』

猫又はプライドを傷付けられたように驚愕した表情になると、冗談じゃないと言わんばかりに征四郎に向かって威嚇した。

しかし猫又がどんなに威嚇しようと全く構うことなく征四郎はマイペースに言葉が続ける、そこに猫又の意思は関係なかった。

『お前が感じている神通力の衰え、恐らくそれは君彦と距離を離してしまったことが原因だろう。』

元の状態に戻すには常に君彦の側に控え、二又の尾に神通力を蓄積させなさい。

そうすればまた全盛期のような能力に戻るはずだ、猫又という物の怪は年数を重ねる毎に力が増す妖怪だからな。

お前が本当に邪悪な物の怪達から君彦を守りたいと思うなら、まずは自分の状態を整えることだ。

でなければ犬塚君と戦った時のように力及ばず、君彦を巻き込み、果てには自我を失った猫神と化してしまうだろうからな』

諭すような口調で説明する征四郎に、猫又はきよとした顔で

先程の言葉を繰り返した。

『え……、猫神？』

猫又の鈍い反応に征四郎は小さく溜め息をつくと、困ったような表情で事の顛末を猫又に教えてやる。

『やはり覚えていないか。

神通力の不足によって不利な状況に陥った時、お前は君彦に救われただろう。

そこで傷を負ってしまった君彦を守りたい一心でお前は我を失い、一時的にだが猫神化したんだよ』

征四郎の言葉を最後まで聞かず、猫又はガラス玉のような大きな瞳をキラキラさせて興奮し出した。

『……ってことは、ようするにだ！

一時的だろうと何だろうと早い話が、このオレが猫神化したってことだろ！？

本当に猫神になれたんだなっ！？

だったら何を心配する必要があるだよ、オレはずっと長い間猫神化する為にここまで来たようなもんだ！

やっとその苦勞が報われたんじゃないか！

よし、やったぞ！ これでオレは……っ！』

『まあ待て、落ち着くんだった猫又』

猫又の喜びを余所に征四郎の顔から優しげな雰囲気が消えて、まるで子供を叱りつけるような厳しい表情へと変わる。

そんな征四郎の態度に猫又は自分の喜びを台無しにするつもりな

のかとでも言うように、非難に満ちた顔で反論した。

『何だよ、お前だって言っただろうが！』

オレが猫神化することが出来れば天に認められた証として、この身に受けた穢れを祓うことが出来るって！

それとも何か、今になってこのオレが猫神化することに反対するってんじゃないだろうな！

オレはこの日をずっとずっと夢見て来たんだ、オレの最終目標を邪魔すんじゃないよ！』

『そうは言っていないだろう。』

ただ私が問題にしているのは、お前が猫神化した時の状態が完全に自我を失った状態だったということだ。

あの時は君彦の呼びかけに応えて何とか元のお前に戻れたからいいものの、もし君彦の声が届かなかった時は……。

もしかしたらあの場に居た者全員……、お前の手で消失させられたかもしれないということだ』

征四郎の重い言葉に猫又は硬直した、さっきまでの喜びが嘘のように静まり返り言葉を失っている。

『え、それって……、一体どういうことだよ！？』

なんでオレが君彦達を』

『本来、猫又という物の怪が猫神化する場合……何千年という長い年月を要する。

しかしお前は自らの力で道を切り開き、短期間で猫神化することを望んでいる。

お前は今までの野生の猫又達とは勝手が違う。

だからこそ何の準備もなく早急に猫神化することはとても危険な

んだ。

今は焦ることなくしつかり神通力を蓄えて、時期を待て。

お前と君彦との繋がりがお前を正当な猫神化へと、きつと導いてくれるはずだ』

『……征四郎』

それだけ猫又に告げると征四郎は腰を下ろしていた大きな石からゆっくり立ち上がると、重苦しい空気を払拭させるかのように話題を切り替えた。

『そういえば猫又よ、この町の物の怪達とは仲良くやっているのか？ お前は不器用で社交的な性格じゃないからな、何か問題を起こしてないかと心配してるんだが』

につこりと意地悪そうな笑みを浮かべる征四郎に、猫又はケツと地面に唾を吐き捨てると征四郎を小馬鹿にしたように反論した。

『オレはお前みてえなお人好しじゃねえんだよ！

この町のヤツ達はな、このオレの圧倒的な力によって恐怖を植え付けてやってるから誰も逆らったりしねえんだよ！

オレ様が右を向けて言ったら全員右を向くし、上等な酒を持っ  
て来いって言ったら全員死に物狂いで献上してくんだ！』

『それはそうと何て言ったかな、お前のことを慕ってる猫娘の涼子ちゃん  
は元気か？

彼女の元へは挨拶しに行かないのか、随分世話になっているんだ  
ろっ』

『オレの話聞いてた！？ 何思い切り自然にスルーしてんだよ、ち



よつとは訝しんだりしろよ！

言ってるこつちが恥ずかしいじゃねえかこの野郎がつ！』

あることないこと言い放った自分が恥ずかしく思えた猫又は、まるで顔を真っ赤にして照れているように見えた。無論猫又は猫なので全身毛むくじやらの顔が真っ赤に見えることはないのだが……。

それでも征四郎は聞き流す部分はしっかりと聞き流して、猫又と涼子の関係を興味深げに聞いて来た。

猫又は少しむくれた顔で適当に答える。

『この後涼子の店に行く予定だよ、一応君彦も世話になったみてえだからな。』

本当は行きたくねえんだけど……、あいついちいちうるせえし。

こないだまで何も言わずに姿くらましちまったから、どうせ会いに行った所で小言言われるに決まってる。

あゝあ、どうして女ってえのはああもグチグチネチネチとしつこいのかねえ！

特にあいつのヒステリーには頭が痛くなつてくらあ、ちったあ女らしくなればそれなりに……』

『それなりに……、何なのかしら？ 猫又さん』

一瞬にして猫又の背中毛は逆立ち、尻尾は二倍に膨れ上がる。

両目をこれでもかという程大きく見開いて全身から大量の汗が噴き出て来るようだった。

恐る恐る声のした方へ振り向くと、そこには一升瓶と風呂敷包みを持った猫娘の涼子が満面の笑みを浮かべて立っている。

『り……、涼子……？ なんでお前ここに……！？』

しかし猫又には目もくれず、つんとした態度で無視すると祠の前で苦笑いを浮かべる征四郎の元へと歩いて行った。

『どうも征四郎さん、お久し振りです。

今はこんな姿にまで成長したけれど、あの時お世話になった猫娘の涼子です。

あ、これ……差し入れですわ』

そう言つて手に持っていた一升瓶を征四郎に渡すと、征四郎は苦笑いを浮かべたまま素直に受け取る。

『おや、ありがとう涼子さん。

それよりいつもありがとう、ここの祠に来てたまに掃除をしてくれるのは涼子さんだろう。

いつも悪いね』

征四郎の言葉に涼子は嬉しそうに微笑むと風呂敷包みからお猪口を取り出し、それを征四郎に渡すと涼子は一升瓶を受け取って封を開けるとお酒を注いだ。

『この町の恩人さんだもの、それ位は当然よ。

むしろウチ達にはこれ位しか恩を返せないから、もどかしくつてどこかの誰かさんはのりくらりとしてるだけで頼りないっらないわ、ホントやんなっちゃう』

『……ぐっ』

明らかかなイヤミに猫又は何も言い返せずに、仲良くお酒を酌み合う征四郎と涼子を恨めしそうに睨みつけた。

それから猫又は手持無沙汰のまま、二人の会話に入ることもその

場から去ることも出来ずに、延々と涼子からのイヤミを聞かされる羽目となる。ようやくイヤミの嵐から解放されたのは涼子が差し入れに持って来たお酒が半分まで減った頃。

残りは祠の中に祀られているお稲荷様へと捧げた。

『それじゃ私はこれで失礼するよ、猫又への説教も済んだからね。涼子さん、こんなヤツだが君彦共々よろしく頼むよ』

征四郎は優しい表情で涼子に猫又と君彦のことを託した、涼子はしおらしく微笑むと快く引き受ける。

『当たり前よ征四郎さん、猫又さんのことはともかく……君彦さんのことは任せてちょうだいな。』

君彦さんはとてもいい子に育つてから苦労することはないけれど、ウチ達で見守らせてもらいます。

安心してくださいな』

(……けっ、なんだよ涼子のヤツ！

オレの前ではそんな風に大人しく言うこと聞きやしねえくせに、征四郎の前ではやけに素直じゃねえか！)

腑に落ちないという顔で猫又がブツブツと文句を垂れていると、征四郎はそんな猫又と涼子を交互に見つめながらおかしそくに笑みを浮かべ、それから最後に猫又に向かってもう一度念を押した。

『いいな、猫又。』

調子が戻るまではずっと君彦の側にいるんだぞ。

それから何かあった時の為に、必ず犬塚君と行動を共にして助けてもらいなさい』

『あーあー、わーかつてるって言っただろう！

他に言うことないならさっさと行っちゃまえよ、小うるさいったらねえぜ！』

『ちよつと猫又さん！ 征四郎さんに向かって何て口のきき方！』

『うるせえ！ こいつにはこれ位がちょうどいいんだよ！』

征四郎と涼子が仲良くしていたこと、そして慶尚と一緒にいると念を押されたことで完全に機嫌を損ねた猫又は荒っぽい口調で怒鳴った。涼子は両腕を組んで呆れたように溜め息をついている。

そんな二人を見つめ、征四郎はその場からすうっと消えて行った。征四郎の姿が完全に見えなくなって、少しの間沈黙になる。それから数秒して、その沈黙を涼子が先に破った。

『ねえ猫又さん、……どこか体の調子でも悪いの？』

先程の征四郎の言葉を聞いて少し気になっていた涼子が心配そうに、猫又に訊ねた。

しかし猫又はまだ腹の虫が治まっていないのか、ぶっきらぼうに言葉を返す。

『別に何でもねえよ、お前には関係ないだろうが！』

そんな冷たい言葉が涼子の心を傷付けたのか、いつものように勝気に反論してくると思いきや涼子は急に大人しくなっちゃってしょんぼりと肩を落としていた。悲しそうな瞳で猫又を見つめる涼子、その目は心底猫又の身を案じている女性の眼差しであった。

涼子につらく当たってしまったかと思った猫又は少しバツの悪い顔になると、涼子から視線を逸らして今度は少し柔らかい口調で言

葉をかけた。

『だから、お前に心配されるようなことじゃねえって言ってんだよ。その……アレだ、ただ単に風邪気味なだけだって』

少し寂しげに肩を落とした猫又が涼子に心配をかけまいと、不器用に理由を言い繕う。

そんな猫又の気持ちに触れたのか、涼子は心配そうな表情のままであったが、それでもくすりと小さく笑って猫又を抱っこした。

『それならウチの熱燗でも飲んで体を温めるといいわ、このまま猫目石に直行ね』

『ちょ、降ろせって！　こんな格好、他の奴等に見られてもしたら！』

『あら、別にいいじゃないさ。

猫又さんは病気なんだから、ウチがお店まで運んであげる』

照れ臭そうに暴れまくる猫又を両手でぎゅっと抱き抱える涼子に、なおも暴れながら抵抗する猫又であった。

『はーなーせーっ！　こんな姿を君彦にでも見られたら死んじまうっつっつっ！』

## さいこの晚餐

夕方、四丁目の高台にある祠で君彦の祖父である征四郎と一通り話を終えた後、その場に現れた涼子と共に物の怪御用達の居酒屋「猫目石」に直行していた。

数日もの間、行方をくらましていた猫又のことを心配して、多くの物の怪や幽霊、野良猫達が集まってちよつとしたお祭り騒ぎになりかける。このまま朝までどんちゃん騒ぎをしようと息巻いていた連中であつたが、主役である猫又の言葉によってそのテンションは一気に静まり返ってしまった。

『そんなじゃ涼子、悪いけどオレは先に帰るぜ。  
酒ありがとな』

そつけなく言うつと猫又は特等席であるカウンターの席からジャンプして床に飛び降りると、そのまま出口へと向かう。

カウンターから大忙しでつまみを作っていた涼子が慌てて声をかける。

『え、猫又さん！？ もう行っちゃうの！？』

涼子の声に猫又が帰ろうとしていることに気付いた物の怪達は、こぞつて猫又の方に注目すると口々に引き止めた。

『そりゃないよ猫又さん！』

せつかく町の英雄さんが帰って来たつてのに、もう行っちゃうんですかい！？』

坊主頭に子供用の着物を着た一つ目の少年が、涼子の作った団子

を口一杯に含みながら声をかける。

『みんな猫又さんが無事に戻って来てくれて喜んでるんだ。もう少しゆっくりしてったらどうだい！？』

同じように全身茶色い毛むくじやらかな姿をした物の怪も、お酒の入ったお猪口に向かつて舌を伸ばしてぴちゃぴちゃと飲みながら一応猫又を引き止める。

その場にいたおよそ半数は、猫又の帰還祝いを喜んで参加しているわけではなく、それに出て来る酒や食べ物につられてやって来た者が殆どだと最初からわかつている猫又は、特にそんな態度を気にしていないせいか……彼等の相手をする事なく振り向き、とりあえず世話になった涼子にだけ挨拶がてら理由を話した。

『君彦の奴が夕飯までに帰って来いってうるさいからよ。ここで酒や食い物をたらふくもらうわけにはいかないのさ、そういうこった。』

とりあえずこの後はお前達で好き勝手に楽しんでな』

何の未練もなくそう言い放った猫又はそのまま玄関の方に向き直って、二又の尻尾だけ振り振り左右に振って合図を送る。  
涼子は少し寂しそうな眼差しで見送る。

『そんじゃ猫又さん、また明日な〜！』

猫又のお陰で今夜の酒にあり付けた物の怪達は、感謝を込めて猫又に手を振った。

硝子戸が閉まって猫又が出て行った途端、涼子はキッと鋭い眼差しに早変わりして店内の客全員を睨みつける。

『本当にあんた達は！ 猫又さんがいないんじゃないさつ！！』  
タダ飯食らいじゃないさつ！！』

猫又がいなくなった途端、店内の客に向かって涼子の怒りが爆発するもこの店の常連客が何とか彼女を宥めたことによつて、何とか涼子の鋭い爪による引つかき傷を負う客が出ることはなかった。

夜、何とか夕食の時間までに戻つて来た猫又は玄関の前で一旦立ち止まると、両の前足を口元に持つて行つてはあゝと口臭を確認する。息を吐き出した後くんくんと匂いを嗅いで、お酒臭くないことがわかと猫又は「よし」とすました顔になつて、家の中に入つて行つた。

裏口にある小さな硝子戸は猫又の為に常に開放してあり、そこから家の中に入ると目の前にハンドタオルが置いてある。

猫又はそのハンドタオルで前足と後ろ足を掻くようにして適当に砂や汚れを拭き取つた。

これは猫又が好き勝手に外出する際に足の裏に付いた汚れを拭き取つてから家の中に入るよう、君彦から耳にタコが出来る位教えられた猫又家の作法だつた。

こまめに部屋の掃除をする君彦のこと、この作法を守らなかつた時の説教は征四郎の上を行く位、君彦はとても口うるさい。

最初の内は適当に誤魔化したりしてやり過ごそうとしていたが、段々飽きることなく長い説教を続けて来るのでさすがに猫又の方が折れて、今は君彦の言う通りに足の裏を綺麗にする作法だけは毎日きちんと守つていたのだ。

猫又は前足の肉球を見つめて、とりあえず砂などが付いていないことを確認するとくんくんと鼻を動かす。

台所では君彦がエプロンを付けて夕食を作つていた。



飼い猫のように首に鈴を付けていないので、猫又が帰って来たことに君彦はまだ気付いていない様子だ。

猫又は忍び足で畳の上を歩いて行くが体重のせいで、普通の猫のように音もなく歩くことが出来ず、みしみしとわずかに足音を鳴らして歩いて行ったのですぐに帰って来たことが君彦にバレてしまった。

君彦はちょうど味噌汁を作っていて、おたまに味噌汁を少しだけ入れて味見をしながら振り向く。

「あ、お帰り猫又。

ちよつと待ってるよ、これが終わったら夕食だから」

猫又のことを自然に笑顔で出迎える君彦。

それから味噌汁を味見して顔に笑みがこぼれるとそのまま火を消してお茶碗にはご飯を、そしてお皿にはおかずをよそってトレイに乗せると一間の部屋へと運んで行った。

猫又は君彦が一間に来るまでにテレビを付けて、好きなお笑い番組がやってないかチャンネルを順番に押していく。

「ほら、お前の分も入れるから」

夕食はいつも一緒に食べるので、君彦は自分の分をテーブルに並べたら今度は猫又の夕食を出す為に冷蔵庫を開ける。

猫又も毎日の繰り返しのように自分の夕食が出て来るのを待った。すると君彦は冷蔵庫から缶詰めを取り出す時に妙な笑みを浮かべてこつちを見ているので、猫又は気持ち悪いものを見るような目で君彦を見る。

「ふっふっふっ、猫又。

今日はこのオレに感謝するといい!」

勝ち誇ったような君彦の言葉と笑みに、猫又は呆れた顔で聞き返した。

『はあ？ だから一体何なんだよ、気色悪いな』

暴言を吐く猫又であったが、今日の君彦はどこか機嫌がいいのか。そんな暴言には耳を傾けることもなく、にっこり微笑んだまま持っていた缶詰めを猫又に見せつけた。

『……………ん？』

猫又は見せつけられた缶詰めを目にして、一瞬動きが止まる。

それからゆっくりと口を大きく開いて、今にもアゴが外れそうな位にあんぐりとさせて大きな瞳を更に大きく輝かせた。

『き……………き……………、君彦おおおおおおっ！

こっ、これはああああっ！！！』

驚きの余りそれ以上言葉に出来ないのか、あうあうと震えながら目の前に差し出された缶詰めに向かって、まるで崇めるような大袈裟な態度で缶詰めと君彦を交互に見つめた。

異常な程に驚いている猫又の反応を見て満足したのか、君彦もまた両目を輝かせて口にする。

「そっだよ、お前がずっと前から食べたがってた高級缶詰め……………モンプティだ！

色んな味があっただけどお前、ミヤオの中ではまぐろ味が一番好きだったろ？

だからとりあえずまぐろ味にしてみたんだ、もうすごい高かつ

たんだからな！？

でもお前が帰って来たご褒美だと思えば安いもんだよ。

ちょうどバイト代も入ったばかりだったし！

毎日は無理だけどさ、バイト代が入った時のお祝いとして毎月一回だけなら買えるから。

有り難く思えよ、猫又！」

猫又と同じようにとても嬉しそうに話す君彦。

そんな君彦の優しさに触れた猫又は瞳をうるうるさせながら感動で全身を小刻みに震わせていた。

そしてあまりの嬉しさに本来の斜に構えていた性格を自分で忘れてしまったせいか、感激の余り思わず君彦に向かって甘えた声を出してしまう。

『に……っ、にゃ~~~~んっつっ！！』

いつもふてくされたようにムスツとした顔ばかりしていた、あの猫又が……。

初めて君彦に向かって見せた、猫又の両目を輝かせた可愛い顔と甘い鳴き声……。

甘えた姿を見せたことがなかった猫又の今の姿を見て、君彦はほんの一瞬だけ戸惑ったがせっかく心を開いてくれた猫又に悪いと思い、顔には出さず心の中にしまい込んだ。

今日は特別に缶詰の中身全部をお皿に移して、スプーンでよくほぐしてやる。

今か今かと待っている猫又のお座りしている姿を見つめながら、君彦はその姿が本当にただの猫みたいに見えて初めて憎たらしかった猫又のことが可愛く見えた。

（何だ……、こいつでもこうやって素直な態度を見せることってあ

るんだな。

猫又に対してこんな風に思うのって初めてだけど、こうして見たらこいつもなかなか可愛いじゃないか)

君彦は心の中でそんな風に思いながら、モンプティをほぐし終えると猫又に向かって微笑んだ。

「ほら、お前が先に食べてみる。

猫用缶詰めの中で一番高いやつなんだからな、しっかり味わって食べろよ」

言い終わる前に猫又は待ち切れないと言わんばかりに既にガツガツとがつついていた。

さっきまで可愛らしかった猫の姿から一変……今は三日間何も食べてないハイエナのように、ものすごい勢いで食べる猫又の姿に君彦は嬉しいやら醜いやら複雑な気持ちになった。

しかしそれもつかの間、食べ始めて五秒と経たない内に、突然猫又はピタリと動きを止める。

がつついたのはモンプティを五口程食べただけ。

それから徐々に何かを考え込むような感じでゆっくりとお皿から距離を離して、もごもごと口だけを動かしている。

そしてごくんと口の中で噛みまくっていた物を飲み込むと、うつむいたまま何も言わない。

不思議に思った君彦は、モンプティの余りの美味しさによく味わって有り難がって食べているものと思い、感想を聞いた。

「どうだ？ やっぱ高級食材は味が違うか？」

期待に満ちた微笑みで猫又からの感謝の言葉を待つ君彦。  
しかし返って来た言葉はあまりに残酷で酷いものであった。

『　　まずい』

一瞬にして訪れる沈黙。

君彦は猫又が発した言葉を聞き間違えたのだと思い込み、もう一度顔をひくひくさせながら訊ねる。

「……え？

よ、よく聞こえなかったな。今何て？

これものすごく高かったんだぞ？　いつも買ってるミャオの4倍の値段だぞ？

今気のせいかなズイ……って、まさかな！

オレの聞き間違いだろ、そうだろう！？

何とか言えよ猫又……っ！」

今にも怒りで飛びかかりそうになりつつも必死で理性で抑え込みながら、君彦は口元を一字に引き締めながら問いただすような眼差しでもう一度猫又の反応を窺う。

すると猫又はすっかり目の前に残ったモンプティに興味がなくなったのか、呑気に前足をぺろぺろと舐めて目線を泳がせながら、あっけらかんと正直な感想を述べた。

『ま、所詮は人間が作った食材だったってことだな。

猫の気持ちに全然理解してねえ、ただ脂身乗せりゃいいってもんじゃないやねえんだよね。』

それでもオレ様、コレステロールとか気にしてるからよ。

こういったギトギトしたのは好みじゃねえの、これ以上食べたら胸やけしそうだ。

高いつつつてもこんなもんなら、今まで食ってたミャオの方がまださっぱりしてて美味かったな。

あ、君彦！ もうモンプティ買わなくていいから。  
オレが一番好きなまぐろ味でコレなら、他もたかが知れてるから  
な」

それがトドメであつた。

猫又が次々と素直な感想を述べる毎に、君彦の怒りのボルテージ  
はどんどん上昇して行き、猫又が最後まで言い切った頃には完全に  
君彦の堪忍袋の尾は切れてしまっていた。

頭に血が上った君彦は怒り心頭の顔で、猫又に向かって怒鳴り声  
を上げる。

「もぉ~~~~お前には何も買つてやらないからなああああつ！」

『な……っ、何だよ！』

オレはありのままを述べただけじゃねえか、何でそんなにブチギ  
してんだよっ！??』

「もう知らん知らん知らーーーーんっ！」

お前みたいにワガママな猫はもう知らーーーーんっっっ！』

## 不機嫌な朝

君彦の朝は早い。

それは学校のある平日だけではなく、学校が休みの日も君彦は毎朝六時には必ず起きていた。

本日学校は休みであり、君彦はいつもと変わりなく起きて朝食を食べ終え、朝の洗濯をしていた時。

何やら隣が騒がしいことに気付き、君彦はふと首を傾げた。

「おかしいな、確か右隣の部屋は空室だったはずだけど。  
大家さんが掃除でもしてるのかな？」

君彦は特に気にすることもなく洗濯機を動かしている間、部屋の掃除を始める。

その時、やはり隣から何か大きな物音が聞こえて来たのでどうしても気になってしまう君彦は、掃除する手を止めて隣の部屋の様子を見に行くことにした。

「随分大きな物音だし、もしかしたら大掃除とかしてるかもな。  
大家さん一人じゃ大変かもしれないし、何か手伝えることがあるかもしれないからちょっと行ってみよう」

君彦は部屋を出て行く前に猫又の様子を窺う、君彦と違い猫又の朝は遅い。

基本的に猫は夜行性であるが猫又の場合は更に妖怪ということもあり、君彦が学校を休む日の朝だけはとても弱かったのだ。

一応起きてはいるがまだ寝惚け眼でテレビをぼんやりと眺めている、猫又は目を覚ましてから一時間程は非常に機嫌が悪いので君彦は猫又の機嫌を損ねないように、声をかけないまま部屋を出て行っ

た。

玄関のドアを開けると目の前にはたくさんの荷物が置かれていて、ダンボール箱やら家財道具などがひしめき合っている。

「うわ、何だこれっ!？」

君彦が住んでいる所は二階建ての木造アパートで、一階に四部屋、建物の両サイドには鉄筋で組まれた階段があつて二階にも同じように部屋が並んでいる。

玄関前には幅狭のコンクリートの段差があり、段差を下りると地面のままで舗装されていない敷地となっていた。

塀に囲まれたアパートの敷地内、つまり地面むき出しの庭にたくさん荷物が置かれている状態で君彦はすぐに誰かが引越して来たんだと察する。

きよろきよろしながら戸惑っていると、右隣の空室だった部屋のドアが開いた。

恐らく右隣の部屋に新しく引越してきた住人なのだろう、君彦はとつさに挨拶しようと体を傾けるようにして出てくる人物を覗きこんだ。

「  
つて、ああああああああっ!！」

隣から出て来た人物に向かって君彦は大声を張り上げる。

驚きの余り思わずまっすぐに指をさしながら、君彦は誰が見ても明らかに嫌悪感を露わにした表情になっていた。

君彦の奇声で振り向いた人物、グレイのボーダーに黒のジャージをはいたラフな格好で首にはタオルをかけている。

そう……、隣に引越してきた人物は君彦がよく知っている

犬塚慶尚であつた。

君彦はあうあうと言葉が出て来ない様子でいると、慶尚は無愛想



な表情のまま君彦を一瞥すると足元に置いてあったダンボール箱を両手で抱えて君彦に渡す。

「……え？」

突然ナチュラルに箱を手渡された君彦は、つい素直に受け取ってしまい哑然としていた。

すると慶尚は開けっ放しの部屋の中を指さして、当たり前のように君彦に向かって指示する。

「その箱は、中に入って右側に置いてあるラックの上な」

「……って、何いきなり荷物整理を手伝わせてんだお前はあああああっつ！！」

そうじゃなくて！ 何でお前がこんな所にいるのかって方が先だろうがっ！

しかもこんな朝っぱらからドツタンボタンとうるさいったらないよ、近所迷惑だろ！」

箱を持ったまま君彦が声を張り上げていると、二階に住んでいる住人が階段を下りて来て君彦と慶尚の方をじっと見つめていた。

その視線に気付いた君彦は「ほら見る」と言わんばかりに胸を張り、二階に住んでいる独身のサラリーマンが慶尚に文句を言うのを待つ。しかしサラリーマンは慶尚を見るなり急に視線を逸らしてそのまま逃げるようにアパートの敷地を出て行ってしまった。

その後も次々とアパートの住民が部屋を出て来るが、誰もが慶尚を見るなり苦笑いを浮かべて声すら掛けて来ない。

君彦はちらりと慶尚を見て、なぜ誰もクレームを付けて来ないのかすぐに理解した。

「お前のその無愛想な顔のせいで、誰も文句を言えないんだな」

「……ものすごく善良な市民なのに」

こればかりは君彦の方がなぜか勝った気になって「ふふん」と鼻を鳴らしていると、両手に抱えて持っていた箱の上に更にもう一つ追加されて、急激に重みが増したせいで君彦は短い悲鳴を上げながら慌てて両手に力を入れた。

「だーかーらーっ！

何でオレがお前の荷物整理を手伝わないといけないんだっつーんだよ！」

変わらず声を張り上げる君彦に慶尚は両手で耳を押さえながらやり過ぎしていると、それらの喧騒に遂に我慢出来なくなった猫又が怒り心頭で怒鳴り込んで来た。

『だああああああっっ！

さつきからやかましいぞ、君彦っ！

お前がぎゃあぎゃあ騒ぐから「今日のワンコ」のナレーション、聞きそびれちゃったじゃねえかつ！』

部屋の前で声を荒らげていた君彦に向かって怒鳴り散らした猫又であつたが、すぐに君彦以外の存在に気付く猫又。

見るなり大きなガラス玉の瞳に嫌悪感が現れ、表情を歪めていると慶尚の背後から犬神までもが姿を現した。

『むっ、出たな猫又！

ここで会ったが百年目、この間のケリを今つけてやる！』

現れるなり犬神は猫又に向かって唸り声を上げて威嚇する、いつもなら犬神のことを適当にかわしているはずの猫又が朝の不機嫌モードのせいで怒りのスイッチが入ってしまう。

『オメーもいちいち暑苦しいっつーんだよ！』

こちらら寝起きで機嫌最悪なんだ、何なら骨を投げて遊んでやろうか犬ところ！

ちゃんと取って帰って来たら、オレ様の南斗水鳥拳をお見舞いしてやるぜっ！』

『全然メリットがないではないか、このメタボリックシンドロームヘアがっ！』

君彦は両手に荷物を抱えながら慶尚を睨みつけ、猫又と犬神は喧嘩の売買が成立してしまい互いに威嚇し合っている。

そんな光景を他人事のように見つめながら、慶尚は小さく溜め息をついていた。

まさかの……

君彦と猫又が威嚇し続ける中、慶尚はどうにかしてこの険悪な雰囲気は何とかしなければと思っていた時。

一番奥の部屋から大家さんが出て来て声をかけて来た。

「あらあらまあまあ、今日引越してきた犬塚君ね!？」

朝早くから荷物の整理だなんて大変でしょう、業者さんをお願いしなかったのかい？」

大家さんが何の警戒心もなく慶尚に話しかけ、君彦は敵意むき出しにしていた表情を伏せて平静を取り繕う。

慶尚はこのアパートに来てから君彦以外の住人に話しかけられ、ぺこりと頭を下げた。

「どうも、今日からお世話になります。

家の者にこれ以上迷惑はかけられないので、業者には荷物移動だけお願いしたんです。

朝早くから騒々しくしてすみません」

丁寧に挨拶する慶尚に君彦は少しだけむっとした顔になりながらも、一応礼儀はわきまえるんだなと感心していた。

すると慶尚の隣でダンボール箱を抱えている君彦に気付いた大家さんが、今度は君彦に話しかける。

「君彦君、あんたも朝早くからダンボール箱持って何してるんだい？そっちの犬塚君と知り合いなの？」

そう問われ、君彦はわずかに嫌悪感の入り混じった表情をしながら

ら嫌そうに頷く。

「え……、まあ。

一応こっちの無愛想なヤツとは、学校のクラスメイトでして……」

素直に慶尚との関係を大家さんに話したのは失敗だった。

アパートに新しく引越してきた慶尚と、その隣に住んでいる君彦が学校のクラスメイトだと知った大家さんは満面の笑顔になって、両手を叩いて何やら喜んでいる。

「あゝなるほど、それで君彦君はお友達の引越を手伝ってくれてるってわけだね!？」

本当に君彦君は優しいんだねえ、犬塚君も君彦君がお友達になつてくれて良かったわねえ！」

思いがけない誤解に君彦は両手に持っていたダンボール箱を落としてしまう。上に乗っていた小ぶりの箱はそのまま地面に転がり落ちて、大きなダンボール箱は君彦の両足の上に落ちる。

「どあああつ！　いったあああつ！

てゆうか何でこの箱こんなに重たいんだ、何が入ってたんだよ一体！」

「お前……、何て事を……」

慶尚は君彦の足の心配より先に落とした箱を拾い上げ、中身が大丈夫かどうか確認し始めた。

小ぶりの箱にはCDのアルバムケースがぎっしりと詰め込まれており、それらを何枚か取り出して割れてないかどうか確認している。それよりも君彦は両足の上に落とした箱の中身の方が気になってい

た。

それなりに重いからには何か高価な物が入っていたらどうしようかと思っていたのだ、しかしそんな物を持たせる方が悪いと心の中で思いつつ、しゃがみ込んで荷物の心配をしている慶尚に向かって、きちんと謝るべきかどうか迷ってしまう君彦。

「いや、それ以前に本当なら荷物より人間の心配の方が先じゃないのか!？」

誰が荷物整理手伝ってやってると思ってるんだ!」

「まあまあ、やっぱり犬塚君の引っ越しの手伝いをしてくれてたんだね、君彦君は!」

次々と巻き起こる展開に君彦は慶尚を怒るのが先か、大家さんの誤解を解くのが先かおろおろし始めた。

しかし時すでに遅し、大家さんはすっかり君彦と慶尚が仲の良い友達だと認識してしまうと、そのまま「近所迷惑にならないように」と注意だけして、いつものようにアパートの近くで開かれる井戸端会議に参加する為、大家さんは納得した様子でアパートの敷地内から出て行ってしまった。

「ああああっ、大家さんっ!

違うんですってばああああああっ!」

君彦は慶尚と仲良しだと誤解されることに相当の苦痛を感じながらも、その声が大家さんに届くことはなかった。

大きめのダンボール箱の中身を確認だけした慶尚は、いつも以上に不機嫌な顔で君彦に話しかける。

「そんなことより、早く外にある荷物を全部中に片していくぞ」

「何普通に指示してんだあつ!？」

てゆうかやつぱり最初からオレを使って荷物を片付けるつもりでいたんだなお前はああつ!!」

「うるさい、さっき大家さんが近所迷惑にならないようにって言ってただろ。」

お前はいつも騒がしいんだよ、鼓膜が破れる」

静かな口調のまま慶尚は足元にある箱を中へ運び出した。

その後も慶尚に関わってしまった者は結局全員引越整理を手伝わされる羽目となる、役割分担としては君彦が重たい荷物を中に運び入れ、手が使えない猫又と犬神は口で銜えられる物だけを運んで行った。

慶尚は運び込まれた物をどこに置くか指示しつつ、箱から出せる物は出して、後で片付ける内容物だけは箱から出さず部屋の隅へと追いやって行く。

電化製品、タンス、テーブル、ベッドなどは最初に置き場所を決めて先に部屋の中に配置させていた。

室内が箱だらけになりかけたので残りのダンボール箱は慶尚の部屋の前に固めて置き、アパートの住人の通行の邪魔にならないように配慮する。

それからは箱の中身を慶尚が確認しては、細かい置き場所などを君彦に指示して並べて行った。

まだ完全に整理しきれていないが、ある程度箱から取り出せる物は取り出し、後は時間をかけてゆっくりと片付けて行くことにするようには君彦が促す。

整理整頓にかけては君彦の指示の方が的確であった。

引越の際に一番手間となるのがすぐに使用しない小物や衣服類、それらをいくら一人分だといっても一日で全て片付けるには時

間がかかり過ぎる。

ましてや慶尚の趣向もあるだろう、君彦は今必要な物だけを箱から出して整理していくことを優先させた。

大家さんに釘を刺されたこともあり、君彦は湧き上がる怒りを我慢しながら怒声を発することなく慶尚の手伝いを黙々とこなしていき、我慢の甲斐あつて何とか昼の一時頃には全ての荷物を室内に押し込めることが出来た。

汗だくになりながら君彦が一安心していると、おもむろに慶尚は台所に置いてあつた箱の中から何かを取り出しそれを君彦に手渡す。一体何だろうと手渡された物を眺める君彦……。

「おい」

顔をひくひくさせながら、徐々に我慢していた怒りが解放されていく。

「いいから早く作れ、腹減った」

「お前はああつ！」

引越しの荷物運びやら整理整頓やら無理矢理手伝わせておきながら、最終的には引越蕎麦作れってかつ！

何様だお前はあああつ！！」

むきいつと顔を真っ赤にさせて怒り狂う君彦を余所に、引越しの手伝いをして疲れ切っている猫又までもが寝転びながら慶尚と同じように要求して来る。

『いいから早く作れよ、オレも腹減って死にそうだ……』

『馳走になる、青年よ……』



まさかの三対一、君彦は爆発寸前だった怒りが萎んで行って肩が  
がっくりと落とす。

小さく文句を言いながら慶尚の部屋から出て行くと、君彦は自  
分の部屋で引越蕎麦を作り始めた。

## 一 挨拶

慶尚が自分の部屋の電化製品……主にテレビなどのＡＶ機器の接続を行なっている際、君彦は自分の部屋で引越蕎麦を作っていた。ただの蕎麦だと味気ないので少しだけ工夫してみた。

慶尚から提供された市販の蕎麦を普通に茹でたら素早く冷水で洗いきるに上げておく、それから君彦の部屋の冷蔵庫にあった長芋をすりおろしてとろろ風にすると小皿に移し置いた。

今度は君彦の弁当には欠かせない梅干しを冷蔵庫から出すと、全て種を取って包丁で叩いて練り梅状にする。

ざるに上げておいた蕎麦を器に入れて、めんつゆをかけ、そこに先程のとろろと練り梅、更に白ゴマやのりを散らして出来上がり。

二人分の蕎麦を君彦の部屋の居間にあるテーブルに置き、コップには冷たい麦茶を入れて割り箸も添えておいた。

あとは猫又と犬神用の小皿に、先程の蕎麦を入れる。

「てゆうか普通の猫や犬とは違うっていつでも、猫又達って蕎麦とかその他諸々を食べさせて平気なのかな？」

一応冷やし蕎麦だからお腹とか壊さないだろうな……」

そんな疑問を抱きつつ、君彦は隣の慶尚の部屋に行って配線の接続作業をしている慶尚と、ベッドの上で横になっている犬神、そして裏口の硝子戸を開け放し網戸から吹きこんでくる風で涼んでいる猫又へと声をかける。

「蕎麦の準備出来たからオレの部屋に来いよ。」

「ここじゃ換気で窓を開け放してるっていつでも、ちょっと環境が劣悪だろ？」

「……劣悪とは無礼だな、お前」

「劣悪って言ったら劣悪なんだよ！

だったらお前だけ、まだテレビも映らない埃っぽい部屋で一人寂しく蕎麦をすすり食うがいい！」

君彦の言葉に慶尚は負けを認めたのか、ベッドの上で横になっている犬神に目線で合図を送ると立ち上がって君彦の部屋へと向かった。猫又も待つてましたと言わんばかりに尻尾をぴんつと立てて、我先にと駆け足で君彦の部屋へ走って行く。

君彦の部屋に入るや否や、猫又はテーブルの上に用意されている二人分の蕎麦に目をやり、それから畳の上に置かれている二つの小皿へと視線を走らせた。

自分がいつも使っているお皿と、普段あまり使っていない小皿に入っている蕎麦の量を見比べている様子だ。

明らかに不服そうな顔でひくひくしている猫又に、君彦は半ば呆れた口調で声をかける。

「量が違うのは当然だろ。

どう見てもお前より犬神の方が体が大きいんだから……」

「……それでもなんか納得いかねえ」

「ふん、猫というものは随分と意地汚い生き物らしいな」

後からやって来た犬神にそう罵られ、猫又は鋭く睨みつけた。

「何をおおっ！？」

言っとくが犬ところより猫の方が上品なんだぜ！？」

犬なんざ目の前に出された食い物を、自分の限界考えずに食い続

けるって言うじゃねえか！』

「それはお前も似たようなものだろ……」

せつかく犬神に向かって犬と猫の違いを豪語している側から、君彦にダメ出しされて猫又は言葉を詰まらせた。

それぞれが席に着く中、慶尚は一間に入った時に右側の部屋の隅に置かれている仏壇に目をやる。

大きな体で立ち尽くすものだからどうしても目立ってしまい、君彦は怪訝な顔で慶尚を見上げた。

すると慶尚は蕎麦が用意されているテーブルの方には座らずに真っ直ぐ仏壇の方に向かうと、正座して君彦の方へ声をかける。

「……手、合わせていいか？」

そう聞かれ、虚を突かれた君彦は思わず普通に返事をしていた。

「あ、ああ……。別にいいけど……」

すると慶尚は神社の息子さながらの仕草で焼香した。

テレビも何も付けていない室内で慶尚が手を合わせているのを待つ間、その時間はとても長く感じられる。

君彦は祖父母の遺影が飾られている仏壇に向かって黙々と手を合わせている慶尚の背中を見つめながら、どこか心がふわふわするような感覚がした。

こんな風に君彦と同世代の者が自分の祖父母に向かって手を合わせてくれた人間は、今までいなかったからである。

祖父母への挨拶を終えた慶尚は軽く会釈すると、ようやく食事の席に着いた。

何も言わない慶尚に向かって、君彦は少し躊躇いながら遠慮気味

に声をかける。

「えと……、犬塚……」

「……なんだ？」

無愛想な慶尚に向かって言葉をかけるのはどこか腹の奥がざわざわするような感じだったが、君彦はその奇妙な感覚を我慢しながらやっと口に出す。

「ありがとな、その……おじいちゃんとおばあちゃんに手を合わせてくれて」

まともに慶尚の方を見ることは出来なかったが、今の君彦に出来る精一杯のことはしたつもりだった。

そんな君彦の礼を述べる姿に慶尚はぼんやりとした眼差しで見つめたまま、殆ど無視に近い仕草で割り箸を割って器の中に浸っている蕎麦を箸で掴むと、ぶっきらぼうとした口調で返す。

「別に、……仏壇を見たら手を合わせたくなる性分だな」

「嘘つけええっ！」

そんな奇怪な趣味の奴がいるかああああっ！」

慶尚の言葉に嘘臭さを感じた君彦がすかさずつつこむ。

そんな二人のやり取りを白い目で見つめながら、ちゅるちゅると蕎麦をすすりながら呆れ口調で呟く猫又と犬神。

『……この二人も素直じゃねえな』

『……全くだ』

それからというものの終始君彦は何かにつけて慶尚や、ついでに猫又に向かつていちゃもんをつけながらも、全員残すことなく綺麗に引っ越し蕎麦をたいらげた。

## 引っ越しの理由

引っ越し蕎麦を食べ終わると、君彦はすぐさま食べ終わった皿を台所に持って行くと後片付けをし始めた。

猫又がテレビのチャンネルのボタンを爪の先で器用に押すと、テレビを付けて何かバラエティ番組が放送されていないかチャンネルを適当に押していく。

慶尚は何も言わずにチャンネル権を猫又に託したまま、黙ったままテレビを眺めていると台所から君彦の怒鳴り声が聞こえる。

「　　って！」

だから何でお前はオレん家でくつろいでんだよ！

引っ越し蕎麦食べ終わったんならもう用事はないだろうが！

さっさと自分の部屋を片付ける続きでもして来いよっ！」

しかし顔を合わせる度に怒鳴り散らす君彦の相手をすることに疲れたのか、慶尚は面倒臭そうに両手で耳を押さえると、あからさまに聞こえないフリをした。

そんな慶尚の態度に苦虫を噛み潰したような表情になった君彦は、朝からずっと荷物整理していて疲れてるんだから仕方ないと無理矢理納得することにして、ひとまず放置することに決めた。

慶尚が祖父母に対して手を合わせるといふ礼儀を見てから、君彦はどうしても祖父母が見てる前で彼を無下にすることが、ほんの少しだけ躊躇われたせいもある。

あからさまに大きな溜め息をつくとき今の慶尚にあれこれ言うのを諦めた君彦は、がっかりした表情で肩を落としながら渋々後片付けを再開させた。

君彦が背中を向けて食器を洗い始めたので、慶尚はちらりと横で真剣にテレビに見入っている猫又へと視線を向ける。

するとすぐに視線を猫又と同じテレビの方へ向けると、台所に居る君彦に聞こえない程度の小声で話しかけた。

「猫又、オレがここに来た理由……お前ならわかってると思うが」

低い声色で話しかけて来た慶尚に、猫又もまたちらりと君彦の方へ視線を走らせ様子を窺いながら答える。

「チツ……、やっぱり征四郎の仕業か。」

あの野郎……、余計な真似ばかりじゃがって」

慶尚が何を言いたいのか瞬時に察した猫又は舌打ちすると、不服そうな顔で言葉を吐き捨てた。

「……二日前にオレの夢の中に出てきた、恐らく夢枕に立ったんだと思うが。」

夢の中に出てきた人物……、あれが猫又の祖父なんだろう？

あの遺影に映っている人物の面影がある、何よりあのアホにそっくりだ。

まあ征四郎という人の方がずっと聡明な雰囲気だったが」

君彦にそっくりだと言う慶尚の言葉に猫又は、彼の夢の中に現れた時の征四郎の姿が祠で出会った時の若かりし姿で、夢枕に立ったんだと察した。

「征四郎から言われてここに引越して来たってわけか？ お前も物好きだな。」

あの野郎から何言われたのかは大体わかってるぜ。

どうせ征四郎の孫である君彦の身を守ってくれとか、そういうのだろうか。



だけどな……猫又家と犬塚家は因縁の間柄、征四郎の言葉に従う義理なんてお前にはねえだろ！？」

猫又の言葉に慶尚は少し間を置き、それから何食わぬ顔で問いに答えた。

「それはじいさんの代までの話だ、オレはそういうしがらみに囚われるのが嫌いだな。

だからといって別に征四郎という人に頼まれたから、ここに引越して来たってわけじゃない。

まだ色々とお前達のことを知る必要があると思ったから、ついでに頼みを聞いてるだけのこと。

たまたま利害が一致したからだ、そこん所勘違いするんじゃない」

普段と変わらないむすつとした表情で、にべもない言葉を口に出す慶尚に猫又は少し不満そうな顔になりながら、それ以上口答えすることはなかった。呆れたように目を細めながら苦笑すると、猫又は背後に居る君彦の食器洗いが終わったことに気付き、テレビを見つめたまま小声で慶尚に話しかける。

『まあ別にお前が君彦に危害を加えるわけじゃねえんなら、どうでもいいや。

とりあえずこないだみたいに争うのだけは勘弁だぜ？

オレはもう君彦を戦いに巻き込みたくねえからな』

猫又の本音を聞いた慶尚は少し怪訝な表情を浮かべると、最後に一番肝心なことを訊ねた。

「その割に危険な奴を側に置いているんだな？

あのまま放置してもいい存在とはとても思えないが、何を考えて

いる」

ぎろりと猫又を睨みつけながら慶尚が問う。  
それが誰のことなのか瞬時に察した猫又は、あからさまに視線を泳がせると適当に答えた。

『黒依のことか、やつぱ気付いてたか。』

……あれはいいんだよ。

いざとなったらオレが何とかする、黒依とは最初からそういう約束だからな』

それだけ言うとも猫又は鋭い視線で刺すように慶尚を睨みつけるとそれ以上口を挟むなと目で訴えた。

一瞬にして猫又の雰囲気が変わったので慶尚はそれ以上は何も言わずに、ぼんやりとテレビを見るフリをする。

そんな時、後方から呑気な声が響いて来る。

「お前等、今黒依ちゃんがどうか言ってなかったか!？」

黒依ちゃんが一体どうしたって言うんだよ、さては犬塚

っ！

お前まさか……っ!!

いくら黒依ちゃんが可愛いからって、惚れたりなんかしたらこのオレが許さんからなっ！」

エプロン姿の君彦が一人でぎゃあぎゃあ騒ぐ中、猫又を始め慶尚と犬神は呆れた顔で肩を竦めた。

「……アホか、お前は」

「だ……っ、誰がアホだっ！

お前にだけは言われたくないんだよ、このアホ！ バカ！ オタ  
ンコナス！」

君彦のレベルの低い仕返しに猫又は急に恥ずかしくなって来て、  
嫌悪感たつぷりの顔で君彦を見据えた。

『これから毎日コレが続くのか、……めちゃくちゃ憂鬱だなオイ』

つまらない物ですが……

ひとしきり君彦を放置した後、慶尚は「お粗末様でした」と告げ、そのまま犬神を連れて君彦の部屋から出て行こうとした。するとちやうど大家が君彦の部屋のインターホンを鳴らそうとしていた所で慶尚と目が合う。

「あらまあ、びっくりした！

さつき犬塚君の部屋に行っただけでいなかったからねえ。

もしかして君彦君の部屋かと思って来てみたけど、どうやら正解だったね！」

どうやら大家は慶尚の方に用事があったようで、その慶尚が君彦の部屋にいたことを大家の頭の中にインプットされてしまったかもしれないと思って、顔を蒼白にさせる君彦。

大家が慶尚にアパートのルールが書いてある手書きの紙切れを渡すと、突然慶尚は何かを思い出したのか……大家に待っていてくれと言ってすぐさま自分の部屋へと入って行った。

君彦も大家と同じように首を傾げていると慶尚はすぐに戻って来て、手には包装紙で包んである品物を持っている。

「遅れてすみません、これ引越しの挨拶代わりです」

「あらあら！ そんなに気を使わなくてもいいのに〜！  
悪いわね〜、有り難くいただくわ」

慶尚から包みをもらうと大家は上機嫌で自分の部屋へと帰ってしまっただ。

君彦が何ともなしに大家が部屋に戻る背中を見送っていると、慶

尚が君彦に向かってにべもなく言い放つ。

「……欲しいのか」

まるで自分が物欲しげにしていたように見えたのかと思った君彦は、慌ててそれを否定する。

しかしその慌てぶりがかえって怪しく見えてしまったのか、慶尚が白い目で疑わしそうに見つめて来た。

「べ……、別に欲しくないわっ！」

そう反論する君彦に対し、慶尚がおもむろに何かを手渡した。

「実はお前の分もあつたとか」

無愛想のまま大家に渡した品物と同じ大きさの箱を君彦が受け取ると、少しだけ嬉しそうな表情になりながら「氣を使うなよ」と言いかけたが、すぐさまその言葉を飲み込んだ。

手渡された物は包装紙に包んですらいな裸の状態、しかも思い切り洗濯洗剤のフタが開いていた。

「……って、使いさしかあああつっ！！」

あ、でも今ちょうど洗濯洗剤切らしてたんだ。

いやいや！ オレはそこまで卑しくないぞ！

使用済みの洗剤もらってまで近所付き合いしたくないわ、持って帰れ！！」

どうやら完全に敵に回したかもしれないと何となく思いながら、慶尚は特に落ち込んだり怒ったりする様子もなくただ無言で君彦をじっと見据えた。それが逆にガンをたれているように見えた君彦は

無表情のままでも案外怒ったのかもしれないと思って、慶尚のことを警戒しつつ後ずさりする。

「な、なんだよ!？」

「いや別に、じゃあな。」

引越しの手伝い、助かった」

やけに素直な慶尚の態度に若干拍子抜けした君彦は、目を丸くしながら「ああ」と小さく返事をした。

新しく一人暮らしをすることになった部屋に入り、まだ片付け途中の小物類を片付けながら慶尚はふと……天井を見つめながら、君彦の部屋で見た遺影を思い出す。

遺影に映っていた二人の老夫婦、その中でも慶尚は君彦の祖父である征四郎の顔を思い返していた。

(……あれがあいつの祖父、  
猫又征四郎か。  
確かに面影はあったな)

二日前に慶尚の夢の中に現れた人物。

姿こそ二十代の若い青年の姿で現れていたが、遺影に映っていた老人の顔と照らし合わせればわかること。

慶尚はあれが間違いなく、猫又征四郎本人であつたことを確信した。

そして慶尚は夢の中で告げられた征四郎の言葉を思い出そうとした。

何もない真っ白な空間で、甚平に草履という格好をした若い男……征四郎が屈託のない表情で慶尚に向けた言葉……。

『 慶尚君、今度こそ君彦の友達になってくれるかな？ 』

その言葉を聞いた瞬間、慶尚の脳裏に昔の記憶が蘇る。

まだ自分が幼かった頃……、初めて猫又家の人間に出会った日のことを。

つまらない物ですが……（後書き）

長い間更新が遅れて申し訳ありませんでした。

少々プライベートの方で嬉しいトラブルが発生しておりまして、執筆する時間が全くなかったのです、深くお詫び申し上げます（>|<）

今後もちよつと不定期更新になってしまいますが、一週間に一話位は更新出来るように頑張りたいと思いますので見捨てないであげてください！

これからも「猫又と色情狂」をよろしくお願いいたします。



## 夢の中で見た夢

慶尚は走り続けていた。

いつも自分の前を走って行く姉の背中を追いかけるように、一度でも見失ったらもう二度と会えなくなるような気がして、必死に姉の後をずっと追いかけていたあの日……。

慶尚の祖父から口がすっぱくなるまで教えられたこと。

『猫又家の人間には関わるな』

そう言いつつも喧嘩の火種を振り撒いていたのが実は自分の祖父だったということは、幼い慶尚にでもわかっていた。

慶尚は未だ猫又家の人間に会ったことも見たこともない。

ただ……大好きだった姉が自分を放置してまで、祖父に逆らってまで会いに行った人物にほんの少しだけ興味があつた。

慶尚は今、姉を追いかけて今まで通つたことのない道を通つていった。

すでに姉の姿はどこにもなかったが、毎日少しずつ後をつけている内に姉が通つていた道を把握して来たのだ。

住宅街を駆け抜けて行くと、遠くの方に木々が姿を現す。

やがて辿り着いたのは慶尚の祖父が神主をしている犬塚神社に負けずとも劣らない、広い敷地を持った大きな古家が建つていた。

敷地内にある古家の背後にはまるで神木のように雄々しくそびえる樟くすのきがあり、周囲を取り囲むように木々がたくさん生い茂っている。鳥居などがあればその場所が何かの寺だと思われる。でも申し分ない広さと荘厳さが見て取れる。

姉は一体どこに行つたのだろうか？

もうあの古家の中に入ってしまったのだろうか？

そんな風に思いながら幼い慶尚は遠くから家を見つめるだけで、それ以上歩を進めることが出来なかった。

五分近くずっと立ち尽くしたままでいると、家の硝子戸が開いて誰かが出て来る。

慌てた慶尚は思わず周囲の木々の間に身を隠していた、姉の後を追いかけて……もしかしたら怒られるかもしれないと短絡的に考えた結果の行動であつたのだ。

しかし出て来たのは姉でもなく、姉が会いに行つた「猫又征四郎」という老人でもない。

慶尚と同じ位の歳、同じ位の背格好をした少年が暗い表情で家の中から出て来た。

黙つて見ているとその少年は慶尚の存在に当然気付くはずもなく、落ち込んだ様子のまま家の裏手へと歩いて行つてしまった。

この家の子供だろうか、それしか考えられない。

そんな風に古家の背後にそびえたつ樟がある方向へ歩いて行つた少年の背中を見つめていると、突然背後から声をかけられて口から心臓が飛び出しそうになつて驚いた。

振り向くとそこには姉と、もう一人……甚平を着た老人が立っている。

慶尚はすぐさまその老人が姉を魅了した憎き「猫又征四郎」であると察した。

そんな私的感情のせいもあつてか、慶尚は自分でも無意識の内に征四郎を睨みつけていた。

敵意むき出しの眼差しをした慶尚に向かって声を上げる一人の少女、烏の濡れ羽色という表現が良く似合う美しく艶やかな黒髪、髪の色とは対照的に真っ白な肌、少女にしては少し大人びた挑発的な力強いキレ長の目。

腰まで伸ばした綺麗な黒髪を左右に振り乱しながら、気の強い口

調で慶尚を諫める。

「慶尚、お前はここに来ちゃダメだって言ったでしょう？  
お前までお祖父様に怒られてしまうじゃないの」

慶尚は姉の言葉を聞いてむっとした表情になる、反抗すら見せる顔つきであつたが決してそれを口に出さなかつた。

すると弟を叱りつける姉を見ていた征四郎　髪は全て白髪で、皺だらけの顔であつたが威厳ある風格や温厚で柔らかい雰囲気は何も変わらない　　が、口の端を緩ませながら優しい口調で慶尚に話しかける。

「もしかして君が、犬塚慶尚君かな？

君のことは妃紗那きさなから聞いて知ってるよ、私は……」

「知ってます、犬塚家の敵でしょう」

慶尚の言葉に征四郎はほんの少しだけ面食らつた。

見た目は自分の孫である君彦と大して差のない年齢の少年だといふのに、少年とは思えない口調、征四郎に対して拒絶感を露わにする態度。そんな慶尚の子供らしくない姿に、征四郎はただ困つたように微笑むだけだつた。

その時、慶尚の態度に対して怒りを見せた姉・妃紗那は口元をへの字に曲げて、慶尚に詰め寄る。

「慶尚！　征四郎さんに向かって失礼よ！  
謝りなさい！」

しかしそんな妃紗那の肩を優しく掴んで制止する征四郎に、妃紗那は「どうして？」という表情を浮かべながら慶尚の頬を叩こうと

した手を引っ込める。

それでもなお慶尚は征四郎に対して心を開く気が全くない表情で、ただ睨みつけるだけだった。

「君は今、何歳だい？」

突然の質問に慶尚はふてくされた表情のまま、威嚇したまま答える。

何より姉の視線が怖かったからかもしれない。

「六歳」

「そうか、ちょうど君彦と同じ年齢だね」

慶尚の年齢を聞いた途端、征四郎の表情が慈愛に満ちたように見えたので慶尚は眉根を寄せた。

まるで目で訴えるように樟の方に視線を動かして、慶尚は後ろを振り向く。

何もなかったのもう一度征四郎の方に向き直ると、征四郎は全く慶尚の予測が付かない言葉を口にした。

「慶尚君、私には一人……君と同じ歳の孫がいるんだがね。」

良かったら君彦の友達になってくれないかい？」

突然の申し出に慶尚は難しい顔を浮かべると、先程目にした少年を思い出した。

まるでこの世の終わりのような顔で家を出て行き、樟のある家の裏手へと向かって行った少年のことを。

「……オレは根暗な友達は欲しくない」

何より相手は憎い人間の孫、冗談じゃないとでも言うようにはつきりと拒否する慶尚であったが、それでも征四郎は慶尚の威嚇に怯むことなく言葉を続けた。

「君彦はね、幼い頃に両親を亡くしてしまつて……すっかり心を閉ざしてしまつた状態なんだよ。」

保育園でも結局、特別仲の良い友達が出来ないままでね。

君みたいな子が友達になつてくれたら、私としては安心出来るんだが……」

征四郎からそう言われようと全く心が動く気配のない慶尚は、かたくなに首を左右に振つて断つた。

さすがにこれ以上無理強いしたくないと察したのか、征四郎は寂しげな笑みを浮かべると仕方なく慶尚の気持ちを含んでやる。

「そうか、それは残念だ。」

だが……今はイヤでも、いつか……二人がもう少し大きくなつたら。」

その時は君彦の友達になつてやつて欲しいんだ」

どうしても引き下がる気配を見せない征四郎の姿に、慶尚は思わず自分から声をかけていた。

「なんでそうまでしてオレとあいつを友達にさせたいんですか。」

オレは別に友達が欲しいわけじゃないのに、誰とも仲良くなりたいて思つてないのに。」

どうしてさっきのヤツとオレを!？」

慶尚の疑問に、征四郎は柔らかに微笑むと慶尚の頭を優しく撫で

ながら答えた。

「それはね……、私は君に

」

## バイト先

慶尚が君彦の隣の部屋に引っ越して来た夜。

君彦は夕方からのバイトへと出掛けた。平日は店が定休日になっている水曜日以外、夜の八時から十時までバイトに出ていた。

土日は一番の稼ぎ時なのでシフト制ではあるが、一日五時間は出勤している。

慶尚の引っ越しの手伝いをしたせいか、少しだけ体が痛かったが気にすることなく君彦はいつものように猫又に注意を促した。

「いいか猫又、一応玄関の鍵はかけておくけど。

お前が入り出している小窓の鍵が開いてるのが、外からバレないようにしなきゃダメだからな!？」

いくら塀に囲まれたアパートだからって空き巣が入って来ないとも限らないんだから」

(こんなすつからかんの質素な部屋を見た時点で、金目の物がないと判断すると思うけどなあ……)

念入りに空き巣に注意するよう促す君彦に対し、猫又は呆れた眼差しで室内を見渡しながらも本当のことは口にしなかった。

君彦は猫又のことを家の中に閉じ込めるようなことはしない。

朝でも昼でも夜でも、好きな時間に入出入り出来るようにいつも猫又専用の小窓の鍵は開放されたままなのだ。

しかしそれに関して猫又が感謝するのかと言えば全くそういうわけではない。

むしろ放浪している時間が長かったせいか、好きな時間帯に好きな場所へ行くことがごく自然で当たり前のことだと認識していたの

で、そういった君彦の心配りに猫又が有り難く感じることはなかった。

部屋を出てドアの鍵を閉めた君彦は、ふと隣に引越して来た慶尚の部屋へと視線を移す。

玄関の真横が台所になっているという室内の作りは君彦の部屋と全く同じなので、玄関の横にある台所の小窓を見ると室内が真っ暗だったので、慶尚がどこかに出掛けているんだと暗黙に理解した。外はまだ少し明るかったが、それでも室内から漏れる明かり程度なら確認出来る。

君彦は特に気に止める様子もなく、そのままバイト先である小さな料亭へと足を運んだ。

君彦が高校生になってからすぐに見つけたバイト先、料亭と云ったら聞こえは良いがようするに和食中心のお食事処といった感じである。内装も京都の料亭を思わせるような和風の造りになっており、一見値段が高そうな店に見られがちだが料理の値段は意外に手頃で一般家庭の家族連れがよく夕食に食へに来ることが多い。

元々料理を作るのが好きな君彦は、どうせなら料理に携わる仕事でもあればいいと思い、ちょうど調理補助や雑務のバイト募集を発見して面接してみたのである。

この料亭で店長以上の権力と存在感を誇っている強面の料理長に、君彦の料理の腕を認められあっさりと雇われたのだ。

それからというものの君彦は雑務を中心に仕事をするものだと思っていたが、次から次へと調理を任せられ大変な目に遭っていた。

調理をする度に頭のどこかで「調理師免許を持っていない素人が作った料理を出してもいいのだろうか？」という疑問が離れなかったが料理長から、ヤクザも真っ青な鋭い眼光で睨みつけられたら文



句も言えない。

そういつた経緯から君彦は、今や雑務パートではなく殆ど調理の主戦力となってしまうていた。

出勤して来た君彦はお店の裏口から中に入り、そこでタイムカードを押すと割烹着に着替える為ロッカー室へと向かう。

お店の中は整理整頓が完璧にされていて清潔そのものであった。

客に料理を出す場所なので調理場だけではなく店全体を清潔にするのは当たり前だと言う料理長の意向もあったが、君彦が来てから更にロッカー室や通路、調理場は一層清潔感を保つことが出来ている。

とにかく目に付いた所から率先して掃除をしたり整理したりするので、自然と周囲の者達にも意識付けされていたのだ。

今日は遅番だったので君彦は割烹着に着替えるなり、すぐさま調理場に行くといつもと少し様子が違うことに気付く。

何やら調理場では先輩の料理人達がそわそわと何かを話している様子だった。

普段は君彦が調理場に現れた頃には全員必死になって、注文された料理名を叫んで伝えたり、怒声が飛び交ったり、次々と客から注文された料理を作ってはそういった慌ただしい光景が繰り広げられていたというのに。

今はひっそりとしており、どこか浮足立ったような感じで全員が落ち着かない様子でちらちらと調理場から客が料理を食べる店内の方へと視線を配ったりしている。

もしかして奇妙な客でも来ているのだろうか？

君彦は意味がわからないのでとりあえず先輩に声をかけてみた。

「あの……、何かあったんですか？」

君彦が声をかけると全員がわずかに笑みをこぼしたままの表情で

振り向き、一人が嬉しそうに返事をした。

「おお猫又か、お前も見てみるよ！

実はな……すっごい美少女が店に来てんだ、ほら……あそこあそこ！」

そう言われ君彦は興味の素振りも見せないまま、カウンターから店内を覗き込む。

先輩が指さす方向に目をやると、そこには茶髪のロングヘアがまず目に入った。

それから君彦は顔をひくひくさせながら、更にもう二人の存在を確認する。

艶やかな黒髪の美少女、そしてその隣には無愛想な憎たらしい顔をした男の姿が……。

「んなっ！！

黒依ちゃんに志岐城さんに……っ。

そしてなんで犬塚までもがこんな所にいいいいっ！？」

一体誰が来ているのかはつきりと認識した君彦は、あまりのショックに無意識で大声を張り上げていた。

## 来た理由

君彦がバイトとして働いている料亭に顔見知りか三人も来ていることに、何が起きているのか…… 見間違いだはないだろうか、君彦は何度も確認しつつ驚愕していた。

黒依には元々バイト先を教えていたので特に問題はない、響子に關しても別に二人がバイト先に来た所で君彦はむしろ歓迎ムード一色で出迎えていた所だ。

しかしその場に慶尚がいるとなれば話は大きく変わってしまう。それも単体で来るならまだしも、なぜ黒依や響子と三人一緒にここに訪れているのかその理由が全く理解出来なかった。

君彦が顔を引きつらせたまま固まっていると、興奮気味の先輩達がこぞって君彦に声をかけて来る。

見た所、慶尚が側に居ても響子にまわりつく色情霊は健在のようで、先輩達は全員その色情霊の色香に惑わされている様子だ。

「おい猫又、お前もあの美少女が気になるのか!？」

そりゃそうだよなあ、あの綺麗な容姿、目にするだけで胸がドキドキしてくるし、目が合ったらもうそのまま手を出してしまいそうな衝動に駆られてしまう興奮!

オレがおかしいのかと思ってたけど、やっぱりこの奴全員が同じ思いだったんだな。

天然なお前も同じってことは、やっぱりあれは男を虜にするオーラか何かがあるんだなあ!」

(いや、それは志岐城さんのオーラとかじゃなくて色情霊の成せるものなんですけど)

しかしそんなことを厨房に居る男性陣全員に話した所で、君彦の

方が頭がおかしいと思われるのは目に見えているので、そこはあえて口を閉ざしたままにしておいた。

先程の先輩の言葉にもあった「天然なお前も同じ」という表現は、完全に間違いであることも黙っていた。

響子にまとりつく色情霊が健在ならば、今ここにいる全員に何を言っても無駄だと察した君彦にとつて、彼等が響子を見て騒ぎ立てることに關してさほど気に留めることはない。

むしろ君彦に取って最も重要と言える問題、女性陣の中にたった一人だけ氣に食わない男が混じっていることが肝要だった。

ともかく厨房でいつまでも三人が席に座っている状態を見ているだけじゃ何も始まらないと思った君彦は、客に注文を聞きに行くフリをして厨房から出て行き、響子達に話しかけようとする。

率先して出向いた君彦のことを「抜け駆け」と勘違いした男性陣は一斉に手を伸ばし、君彦を食い止めようとしたが素早い動きで駆け抜けて行ったので誰一人として君彦を捉まえることが出来なかった。

君彦は慶尚の姿が目に入るや否や顔が引きつり、意味もなく胸の奥から込み上げてくる不快な気持ちに負けないように歩を進める。すると最初に君彦の接近に気付いたのは……、慶尚であった。

「……遅い」

「……くっ!」

何が遅いのか、一瞬悔しそくに表情を歪めながら君彦は怒鳴りそうになる気持ちを必死で止める。

三人が店に来ていることに気付くのが遅かったのか、それとも店員として注文を聞きに来ることが遅かったのか。

主語も何もない慶尚の言葉に苛立ちを募らせながらも君彦はあくまで店の店員として振る舞おうと接する……が、どうしても黒依や

響子も目の前に居るのに慶尚というたつた一人の存在のせいで笑顔を  
を取り繕うことは敵わない様子であった。

「……お客様、ご注文はお決まりでしょうか」

ぎこちないような、怒りを抑えたような口調で話しかける君彦に、  
ずっとメニューを見ていた黒依がようやく君彦の存在に気付き黄色  
い声を上げた。響子に関しては目の前に座っている慶尚の存在と厨  
房で騒ぎ立てる店員達の態度を不快に感じており、ずっとピリピリ  
していた為君彦がすぐ側まで来ていたことに気付かなかったようだ。

「君彦くん、待ってたんだよー！」

黒依のノンキで明るい声が店内にこだましていたが、他の客は誰  
一人として入店していなかった。特に気に留めることもなく、君  
彦はあえて慶尚を無視し黒依と響子だけに話しかけるようにする為  
視界に規制をかけた。

「急にどうしたのかと思ったよ、まさか『二人』がこの店に来るな  
んて！」

あからさまに慶尚の存在を無視した発言を試みるも、慶尚は全  
く気にしていないこともあってかその言葉に誰一人として引つ掛か  
ることなくスルーされた。

不機嫌そうな響子は自分にまわりつく色情霊を鬱陶しそうに手  
で払おうとするが全く無駄で、結局払いのけようとすることを諦め  
て溜め息をつく、じろりと君彦の方へ視線を移し理由を話した。

「急も何も……、あたしは興味ないからイヤだって言ったんだけど、  
この二人がね。」

帰って来た猫又のお祝いか何か知らないけど、それにプラスこいつの引越祝いも兼ねてさ、ここでパーティーしようってなったのよ」

全く気のない口調でそう説明する響子に、慶尚が更なる言葉を添えた。

「志岐城の色情霊がいればメシ代が半額になると思ってな、あえて被わずに放置してある。

……半額にするよな？」

「オレにそんな権限あるわけないだろうがっ！  
てゆうかそんなくだらない理由で色情霊被わないって、お前それでも退治屋かよっ！」

そう突っ込んでみたものの、数秒してから慶尚の言葉よりもっと重要な内容があったことに時間差で気付く君彦はぴたりと動きを止めて思考をフル回転させた。

「……って、え？」

猫又が帰って来たお祝い？

それに何でこいつの引越祝いまで……、なんで!？」

話の展開に全く付いていけない君彦がおろおろしていると、厨房から男性陣達がかぞって君彦に何か訴えかけているのが聞こえてきた。後ろを振り向き厨房の方に視線を走らせると、そこには片手に紙切れを持った先輩達が必死の形相でうごめいている。

彼等なりの配慮か、それとも恥ずかしいのか。

響子に聞こえないようにものすごい小声で、殆ど口パクにしか見えない台詞を君彦に向かって訴えかけていた。

「猫又っ！」

是非ともオレの携帯番号を彼女に渡してくれ！」

「いや、オレのを先に渡してくれ！」

「なんの！ オレなんか部屋の鍵を渡してやる！」

「オレは！」

「僕は！」

下心しか見えない先輩達の姿に、君彦は呆れた眼差しでただただ黙って哀れな狼たちを眺めるだけであった。

#### 四角関係：！？

君彦がバイトとして働いている店の従業員全員が完全に響子の色情霊による色香に惑わされているようで、彼等の燃えたぎる熱い視線に更なる苛立ちを募らせる響子。

さすがにここまで来ると怒りに任せて帰り出すかもしれないと察した君彦が、慶尚を睨みつけるなり色情霊を一時的にも祓うように口添えしてみた。

「おい犬塚、志岐城さんを利用して飲食代をまけさせようとしても駄目だからな！」

志岐城さんはただでさえ色情霊のせいで辛い思いをしてるんだから！

オレ達と一緒に居る時位は色情霊を祓ってやれよ！」

そうでもないと言料の注文は受け付けなと言わんばかりの形相で君彦が言くと、慶尚は小さく溜め息をつくなり飲食代半額を諦めたのか……席を立てて響子の方に手を伸ばすと、肩をはたくようにして軽く叩いた。

すると響子の背後にまとわりついていた花魁風の色情霊は怪訝な表情を浮かべながら、響子から離れて行き店の外へと消えて行く。途端に響子は重苦しい感覚から解放されて、安堵した表情になる。

慶尚が一時的に響子に取り憑いていた色情霊を祓っている際にも黒依はメニューを開きながら君彦に料理をオーダーしようと張り切っていた。

「あ、ねえねえ君彦くん！」

この薄揚げの煮物と、長芋と大葉の油揚げロール巻きってすごく美味しそうだね！」



「あんたね……、最初にお祝いがどうか言ってなかった？  
思い切り食事しに来てんじゃないのよ」

マイペースに自分が食べたいものを注文しようとしている黒依に、  
すかさず響子が突っ込んでいた。

同じように君彦も黒依達の本来の目的がはっきりとわからないま  
ま黒依の注文を走り書きしつつ、苦笑している。

ふと君彦は黒依達の周囲に視線を走らせ、もう一匹の存在を探し  
出した。

「……えと、猫又が帰って来たお祝いがどうか言ってたと思うけ  
ど。」

それじゃここに猫又が来て……、ないみたいだね？」

帰って来たという表現から、主役は猫又の方だと察した君彦はて  
つきり猫又もここに来ているものとはかり思っていたのだが、全く  
姿が見当たらないので黒依達に訊ねてみた。

すると今度はちゃんと発案者である黒依から説明を受ける。

「うん、実はね。」

犬塚クンが君彦クンの隣の部屋に引っ越したって聞いたから、猫  
又ちゃんを呼ぶのは犬塚クンにお願いしてあったの。

一応このパーティーは君彦クンにはサプライズとして驚かせよう  
と思ってたから、君彦クンがバイトに行った直後に猫又ちゃんを連  
れて来てもらおうと思ってたんだけど、部屋にはもう居なかったん  
だって。

逆に君彦クンは猫又ちゃんがどこに行ったか知らないかな？」

説明の中にいくつか引つ掛かる内容があったことに気付いた君彦

は、たじろぎながらゆつくりと更なる説明を求めた。

「えと……、黒依ちゃんってどうして犬塚がオレの隣の部屋に引っ越して来たこと知ってるのかな？」

オレは今朝初めて知った所なんだけど……」

君彦が憧れている黒依が、自分の知らない所で慶尚と親密な関係になっているのでは？

という無駄な不安を抱きつつ訊ねる。

しかし内心では真実を知りたいような知りたくないような……そんな複雑な思いも隠し切れていなかった。

その証拠に君彦は黒依に訊ねながら、全身に嫌な冷や汗を大量にかいている。

しかしそんな心配は皆無だったのか、黒依はあっけらかんとその謎を解いてやった。

「あのね、あたしのお父さんって不動産を経営してるから。

たまたま犬塚くんが一人暮らしする物件を探している所に、あたしが居合わせてただけなんだけど。

それがどうかした？」

「あああ……っ、なるほど！　そういうことだったのか、あははは……っ！」

そうだよな、それだけだよなえ！

こんな無愛想男と黒依ちゃんがオレの知らない所で仲良くなってるなんて、そんなこと有り得ないよねえっ！」

大袈裟に安心しまくる君彦を横目で見つめる響子は、片側の顔を痙攣させながらひくついていた。

(……その台詞だけで十分だっつーの。

どんだけこの腹黒女のことが好きなの！？

全く理解出来ないわ、こいつ……外見だけ可愛い娘にあっさり騙されるタイプだね)

色情霊が祓われたことで多少の正気を取り戻していた従業員達の熱い視線から解放されたにも関わらず、響子の苛立ちは一向に治まる気配がなかった。

それどころか君彦が黒依にデレデレとした表情で話しかける度に、胸の奥のもやもやがだんだん酷くなって行って今にも何かを蹴り上げてその場を立ち去りたい衝動に駆られそうになっている。

勿論そこまで理性を失うわけにはいかないということもあって、響子は寸での所で堪えてはいるが不機嫌な表情だけはどうしても隠し切れておらず、イラついている響子の様子はバツチリと慶尚に見られていた。

響子の機嫌がだんだん悪くなっていることに当然気付いている慶尚であったが、元々そうだった細かい人間関係に首を突っ込む気がないのか、慶尚はそれに関して一言も触れることなく気付かないフリを決め込んでいる様子だ。

ただ君彦、黒依、響子の様子を無言で見つめながら三人の態度や口調をまるで観察でもするように、ただ黙って様子を窺うことに専念していた。

## 八つ当たり

君彦が黒依達の接客（？）をしていると、ちょうど夕食時のせいか次々と家族連れの客が入店して来たので、君彦は黒依達だけに構っている暇がなくなってしまった。

「あ、ごめん！

一応オレ、バイト中だから仕事に戻らないと！」

謝罪する君彦に対し誰一人として反論することもなく、全員適当に安い料理を注文すると君彦はそれを注文書に書き留めて仕事に戻ってしまった。明らかに今の状況ではお祝いパーティーどころではないと察した響子が、当然さながらの口調で文句を言いだす。

「どうすんのよ、あいつ仕事中だからこのままお祝いがどうとか言っ  
つてらんないわよ？」

あたし達だって呑気に食事する為、ここに集まったわけでもない  
でしょうに」

君彦が接客の為に黒依達のテーブルに来た時に出したお茶をすりながら響子が不機嫌そうに言い放つが、黒依は響子の不機嫌さなんてお構いなしにマイペースなままで答える。

「そうね、さすがに今の感じじゃパーティーなんて出来ないもん  
ね。」

君彦くんはバイトで忙しそうだし、主役の猫又ちゃんもどこに行  
ったかわかんないし……。  
どうしよっか？」

全く危機感のない微笑みを慶尚に向ける黒依、まるでその微笑みには全ての責任を慶尚に押しつけようとでもしているような雰囲気、を醸し出していた。しかし黒依に負けず劣らずマイペースな慶尚も、自分に全く非はない……とでも言うように口を開く。

「メシ代が半額にならないなら、ここで食事会する意味もないな」

「あのね……、あんたは食事代半額が目的でここに来たわけ！？」

慶尚の関心のない態度にさすがの響子が苛立ちを見せて食いついた、ぎろりと睨みつけて批判するも慶尚は視線を逸らすだけで全く聞く耳ない様子だ。そんな態度にも腹が立つ響子は全くやる気のない慶尚と、そんな慶尚の態度や今の状況に危機感をまるで持っていない黒依……そんな二人ののりくらりとした態度に対して、遂に響子の堪忍袋の緒が切れてしまう。

ぱんつとテーブルを両手で叩くと、響子は勢いに任せて怒鳴り声を上げた。

「もういいわよ、あんた達！

勝手にすればいいじゃない、ここまで来たあたしが馬鹿だったわ  
！」

突然怒り出した響子に黒依達だけではなく店内に居る他の客、そして厨房から響子の怒鳴り声が聞こえた君彦が驚いて注目していた。奇異な目で見られることに不意ながらも慣れている響子は、他人の視線に構うことなく怒りを露わにするとそれ以上黒依達へ言葉を交わすことなく店から出て行こうとした。

「  
志岐城さんっ！？」

慌てて止めに入ったのは君彦だった。

何があったのか状況が全く理解出来ていなかったが、響子が何の意味もなく怒り出すはずがない。

そう判断した君彦は響子がこのまま出て行くことを止めようと、仕事の手を止めて駆け出していった。

出入り口の硝子戸に手をかける寸前で響子の肩を掴む、すると当然反射的に響子が攻撃の体勢に入る。

振り向き様に右手で殴り付けようとする響子。

しかしそのパンチを今まで何度も受け続けて来た君彦は、肩を掴んだ瞬間に攻撃が来ると察していたので回避する準備はすでに出ていた。素早い響子の右ストレートを紙一重でギリギリかわす君彦は、二発目が来ないように……そして響子が振り切って逃げてしまわないように肩を掴んだ手はそのまま、反対側の手で攻撃して来た響子の腕を少し強く握った。

君彦の意外な対処に響子は虚を突かれて動きが止まる。

今まで君彦がこれ程俊敏に動いて響子の攻撃を防いだことがないせいだ。

響子がなぜ怒っているのか、その理由がわからないながらも君彦は響子を宥めようと懸命に接する。

「一体どうしたの、志岐城さん!？」

犬塚がまた何かしたのならオレが文句言っただけから、とりあえず落ち着こうよ……ね?」

まるで小さな子供に言い聞かせるような優しい対応に、響子は急に恥ずかしさが増してきた。

自分が一人で勝手に怒り出し、周囲を困らせているように思えて仕方がなかったからである。

途端に押し寄せる罪悪感。

君彦に気を使わせてばかりいる自分に対する自己嫌悪。

そんな思いが響子の心を支配して、余計にこの場に居ることが苦痛に感じられた。

更にその苦痛を増幅させるように、君彦の優しさが追い打ちをかけるように響子の心を苦しめる。

君彦に掴まれた腕を振り払うと響子は君彦を睨みつけ、言いたくもない言葉を言い放ってしまった。

「あんたに何がわかるって言うのよ、人の気も知らないでヘラヘラしてっ！」

誰にでも優しくすりゃいいってもんじゃないでしょ、馬鹿にしないでよっ！」

響子が君彦に対して放った言葉は、八つ当たり以外の何物でもなかった。

しかし口から出た言葉を戻すことは出来ず、響子は激しい後悔に苛まれる。

一瞬垣間見えた君彦の驚愕した表情が目には焼き付いて離れず、面と向かっているのが苦しくて堪らなかった。

唇を噛み締める響子を見て、肩を掴む君彦の手が少し緩んだ瞬間に響子はそのまま店から飛び出してしまふ。

響子に言われた言葉に動揺していた君彦は、いつものように後を追いかけることが出来ずにいる。

ただ呆然と立ち尽くしたまま、響子に突き付けられた言葉で君彦は言葉を失ったままであった。

## 突然のお誘い

（あああああつ、あたしのバカバカバカバカ！

一体何を言ってるんのよ、なんであたしキレてるのよっ！

自分でもわけがわかんないわ！

とにかくもうはらわたが煮え繰り返る位、何もかもがうっとうしい！

腹立たしくってしょうがないわっ！

アイツの笑った顔を見ると余計に胸の奥がむかむかして、文句を言わずにはいられないっ！）

支離滅裂となった響子は心の中で自己嫌悪にも近い自問自答を繰り返しながら、どこへともなく走っていた。

特にどこかへ向かっているわけでもなく、かといって自宅のマンションの方向へ走ってるわけでもない。

ただがむしやらに、めちゃくちやに走り続けていたのだ。

すると前をしっかりと見ずに走っていた響子は、短い悲鳴と共に突然目の前に現れた女性に勢いよくぶつかってしまった。

相手の女性も響子と同じように虚を突かれたのか声を上げる間もなく、手に持っていた荷物を地面に落としてしまう。

響子は相手が女性であることがわかるなり、急いで地面に落ちた相手の荷物を拾い始めた。

「う……ごめんなさい、ちゃんと前を見てなかったから気付かなくて……」

『いいのよ、気にしないで』



響子は慌てながら女性の荷物を拾い上げて行く。

女性の荷物は大きな風呂敷包みに包んであった重箱で、風呂敷でしっかり結んでいたが響子とぶつかった拍子に少し結び目がほどけてしまったようで、三段式の重箱のフタが少し開いて中に入っていた料理が地面に転がっていた。

さすがに地面に落ちた料理を再び重箱に戻すわけにはいかないと響子が躊躇っていると、相手の女性がはにかんで笑い声を上げながら響子のことを優しくそんな眼差しで見つめる。

見ると響子がぶつかった女性はとても美しく、ガラス玉のような……まるで猫のような瞳はカラーコンタクトでも入れているのか、緑がかった色をしていて街灯の光で反射する度に緑色の瞳は時折金色を帯びたりしていた。

綺麗な和服を着ていたので、どこか夜の店の女性かと響子と思う。

響子の親戚である蝶野蘭子（志岐城則雄）もゲイ中心の水商売を経営しているので、つい直感的に同業者だと認識してしまった。

そんな女性の美しい容姿、綺麗な衣装、そして……まるで京都の女性のようなどこかはんなりとした物腰に響子が見とれていると、女性はくすくす上品に笑いながら響子に話しかけてきた。

『ああ、別に気にする必要はないのよ？

どうせこれを食べるのは、てんで駄のなっていないお客さん達ばかりだから。

地面に落ちたお料理を中に戻しても、どうせ気付かないでしょ』

相手の女性の台詞から、この重箱の料理は客に出すものだとは理解出来た。

しかし響子は女性の穏やかでありながら、どこか軽薄な言葉にと

う返事をしたらいいものが困っていた。

その時、はんなりとした女性の後方から聞き慣れた少女の声が聞こえてくる。

『涼子さ〜ん、猫又ちゃんをお店に連れて行つたよ〜！』

お店に着くなり猫又ちゃんが早くお酒とお料理持つて来いって……あれ？

お姉ちゃん！ 一体どうしたの、そんな所でっ！？」

声をかけて来たのは君彦と親しい幽霊の女の子、カナであった。おかつぱにした黒髪に赤いスカート、どこか怪談話に出ていた「トイレの花子さん」のような外見をした少女は、響子を見るなり嬉しそうな表情をして響子の周囲をくるくると浮かびながら回っている。

さすがに幽霊を見ることにも慣れてきた響子は、カナが害の無い幽霊だとわかっていたので何とか普通に接することが出来た。

「えっと、いつも変なタイミングで会うわね」

それでも「幽霊と会話をする」という行動はさすがに慣れないせいか、響子は苦笑いを浮かべながらカナに話しかける。

するとカナは響子から離れて行くと先程響子とぶつかったはんなり女性、涼子の側にそつと寄り添った。

『うん、今から君彦お兄ちゃんを猫目石に呼びに行こうと思って。』

猫又ちゃんが無事に戻って来てくれたから、物の怪のみんなが宴会をしようっ言い出したの。

あ、良かったらお姉ちゃんも猫目石に来てよ！

今は悪い色情霊さんもないみたいだし、猫又ちゃんや君彦お兄ちゃんもきつと喜ぶから！』

カナの言葉で大体の流れを察した。

ようするに黒依達が開こうとしていたパーティーは、タッチの差でカナ達に持つて行かれたということになる。

パーティーに猫又を連れて行く為、慶尚が君彦のアパートへ行っても誰もいなかったという説明がこれでついた。

しかしカナの誘いに響子はあからさまに抵抗の意を示す。

自分でもわかる位あからさまに……。

「君彦お兄ちゃん」という言葉がカナの口から出て来た途端、響子は先程やらかしてしまった出来事を思い出し、笑顔が引きつっていたのだ。

カナの言葉に出てきた単語の半分も理解出来ないまま、響子はカナの誘いを断ろうと口を開き掛けた瞬間。

響子の断りの言葉を遮って間に割って入ったのは涼子だった。

『あらあら、あなたが猫又さんやカナがよく話してた女の子ね？

確か猫又さんにまたがれたせいで、中途半端に霊媒能力を開花させられたとか……。

災難だったでしょう？ いきなり幽霊やら物の怪が見えるようになるなんて。

でも自分の身を守る為だと思えば、猫又さんがしたことはきっと正しいのかもね』

矢継ぎ早に言葉をかける涼子に、口をあんぐりとさせたまま相槌を打つことしか出来ない響子。

呆気にとられながら立ち尽くしながら涼子の言葉が切れた隙に、誘いを断つてすぐにこの場から立ち去ろうと頭の中で考えていると、そんな響子の考えを既に読んでいたのか……。

涼子は持っていた重箱をカナに持たせるなり、両手でがっしりと響子の手を掴んで放すまいと力を込める。

「逃さない」という雰囲気すら感じ取れる涼子の勢いに響子がどきまぎしていると、優しくにっこりと微笑んだ涼子は響子に向かって回避不可能な言葉を浴びせた。

『猫目石っていうのはウチが経営してる居酒屋でね？

主に幽霊や物の怪達の溜まり場になってるのよ。

あ、安心してちょうだいな。

口が悪いのも少なからずいるけれど、みんな根は良い物の怪達ばかりだから。

ウチの店ではお酒やおつまみが出て来る以外に、悩み相談も引き受けてるわ。

……って言っても、別に本格的な悩み相談じゃなくて。

そうねえ、……近所のお姉さんに相談する、みたいな感覚かしらね。

だから今お嬢ちゃんが抱えてる悩みもウチが聞いてあげてもいいのよ？

……どうやらあなた、自分の気持ちとちゃんと向き合うことが出来てないみたいだからね。

試しに少し話してごらんさいな、内に溜めてるものを吐き出すだけでも結構すっきりするわよ？

もしかしたらあなたが抱えている色情霊について、何かわかるかもしれないし……。

どうかしら？ ウチの店に一緒に来ない？』

ついて来るかどうかの許可を得ようとしている言葉とは裏腹に、涼子の手は響子の手を握ったまま放す様子がなかった。

涼子の瞳の奥に優しさと、鋭く光る力強さのようなものを感じ取った響子は彼女のキラキラとしたガラス玉のような瞳を見つめながら、吸いこまれそうな感覚で見入っている響子。

催眠か暗示にでもかけられたように涼子の手を振り払い、抗うこ

とも出来ない様子でじつと涼子の瞳を見つめ続ける。

響子の心の中には二つの心が渦巻いていた。

もしかしたら自分でもよくわからない、このもやもやとした気持ちの正体がわかるかもしれない。

今までずっと悩まされ続けてきた色情霊について、何か解決法がみつかるかもしれない。

そして何より、響子の頭の中に真っ先に思い浮かんだこと。

この女性は君彦のことを知っている、恐らく自分が知っている君彦よりもずっと以前の君彦のことを……。

響子は黒依以外に君彦のことについて話が出来る相手が欲しかったのかもしれない。

気がつけば響子は自分でも無意識に涼子の手を取ったまま、猫目石がある商店街の方へと一緒に向かっていた。

## もう帰る

「志岐城さんに一体何があったのか説明しろよ、犬塚」

京都の料亭風の店内で店員が客に向かって詰め寄っていた。

白い割烹着を着た店員、君彦は物凄い剣幕で客として来ている慶尚に事情説明を求めている。

他にも一般客が来てる中で客と揉めたりすれば問題になると思い、厨房にいた先輩が君彦を止めに入ろうとした。

しかし君彦は先輩相手に一歩も引かず、今自分が相手にしている人物が学校のクラスメイトだと簡単に説明すると、店内で口論したら他の客に迷惑がかかると促され、君彦達は一旦店の奥にある更衣室へ移動することになった。

店の奥に移動する際にも通路を歩いて行く時に、客席に座っている家族連れの客やカップルなどが険悪な雰囲気の君彦達を横目で見ではひそひそと何やら話をしている。

店内で騒いでしまったので他の一般客に不快な思いをさせてしまったと、少しだけ我に返った君彦は申し訳ない思いを抱きながら黒依と慶尚を連れて店の奥に案内した。

厨房を抜けた先にある鉄製のドアを開けて出て行くと、そこはいくつかのロッカーや業者から取り寄せた瓶ビールがプラスチックの箱に山積みされて置いてある。

先程開けたドアのすぐ横にはタイムカードの機械が置かれていて、機械の真上には従業員のタイムカードが入った壁掛けが設置されていた。君彦がバイトしている飲食店の奥の個室に初めて入った慶尚達は一通り周囲を見回して、時計やカレンダーなどを見つけたりしたがそれ以外には特に珍しいものを発見することがなかったので、こちらに向き直って不満たっぷりの表情をしている君彦へと視線を

戻した。

両手を胸の前に組んで慶尚達の目の前に立っている君彦は、鼻息を荒くしながら再び同じ質問を慶尚に浴びせる。

「さっきの話の続きだ。

一体何があつたんだよ、志岐城さんがあんな風に怒るなんて……。どうせ何か志岐城さんの気に障るようなことでもしたんだろ」

睨みつけるように慶尚に食ってかかる君彦。

響子を不快にさせたのが自分だと決めつける君彦の態度が気に食わなかったのか、普段から無愛想でむすつとした表情の慶尚であったが、今回ばかりは本当に不快に感じたのか眉間にしわを寄せて珍しく反論した。

「どうしてオレだと思つ、何か根拠でもあるのか」

響子がなぜあそこまで怒り出したのか、正直慶尚自身にもはつきりと分かつてはなかつたのだ。

自分と黒依が適当に受け流していると響子が突然怒り出した。

慶尚の目にはその程度にしか映っていない。

二人の会話のどこに、何に響子は怒りを感じたのか……。

それは慶尚自身も興味があれば知りたいところだと思つていたのだが、残念ながら他人に対して必要以上に興味を示そうとも思わない慶尚は、せめてこの誤解を解く程度の事情さえ説明することが出来ればそれだけで十分だとさえ思っていた。

多くを語らず、確信を突いた言葉を発するでもない。

そんな慶尚の態度に君彦をは痺れを切らして、慶尚に向かった思い切り指を差した。

勝ち誇つた君彦の顔、まるで名探偵が真犯人に向かって「犯人はあなたです」と言わんばかりの状態である。

「根拠ならある！」

それは犬塚……、お前が『男』だからだっ！」

そう言い放った君彦の言葉は空しく個室に響くだけだった。

そのどこが根拠になるのか……と言わんばかりに、慶尚はむつとした表情から呆れた表情へと変わる。

黒依も二人のそんなやり取りを、ピンポン球を追うように右へ左へと視線を移すだけで、特に会話に割って入るうとはしていなかった。ただどこか笑いを堪えるような……、今にも嘖き出しそうになっているのを必死で堪えているように口の端をむずむずとしている様子だけは、慶尚の目にも窺えた。

君彦の決めつけた態度から時折、その場に一緒にいた黒依が何か証言してくれるのかと多少なりとも期待していたということもあり、時々黒依の方に視線を投げかけていたのだ。

しかし黒依はその場の揉め事を楽しんでいるかのように、あえて慶尚の無実を証明しようとはせずに口論している二人を傍観者の如く眺めているだけだった。

数度黒依の方に視線を走らせ、遂には全く当てにはならないことを察した慶尚は小さく溜め息をつく、黒依を無視して自分でこの面倒臭い展開を回避しなければいけないと思い、ようやく思い口を開いた。

「だから……？」

そんなものに一体何の関係が

「

そう言いかけて思い出す、響子が何に悩まされていたのかを。

一瞬だけ視線を君彦から外し、響子に取り憑いていた色情霊の存在を思い出すと合点がいったように左手にばんっと右手の拳を打ちつけて、納得した慶尚。



「ああ……、色情霊の影響で男を避けてるんだっとな、あいつは。でもだから何だって言うんだ。それでオレがあいつを怒らせた理由にはならないだろう」

悪びれた様子もなく事実を述べる慶尚。

君彦はなかなか自分の言いたいことが伝わらない慶尚に対し、更なる苛立ちを募らせる。

一体どんな言い方ならばこのマイペースな男に理解させることが出来るんだろう、そんな風に胸の奥のムカムカした気持ちをどうにか抑えながら、君彦が次の言葉を考えていた時……。

突然むすつとした顔で突っ立っていた慶尚の視線が君彦をすり抜け、遠くの方に目をやっていることに気付いて思わず慶尚の視線の先を君彦は追っていた。

振り向くとそこには黒髪のおかっぱをした少女が……、半透明の姿をしたカナが宙に浮かんでいた。君彦は思わず呆気に取られてしまう。カナが君彦の学校やアパートに遊びに来ることは今までに何度もあったが、君彦がどこでバイトをしているのかカナに教えていなかった。これまでの間カナが君彦のバイト先に遊びに来ることはなかったからだ。

一体どうやって君彦のバイト先を知り得たのか、もしくはたまたま入って来た店に君彦がいただけなのか。

理由は全くわからないが、響子に関して慶尚と話をしていた君彦であったがカナが登場してきたことにより、一旦慶尚への詰問は中断されてしまった。

「カナちゃん！

一体どうしてここに！？」

相手は浮幽霊といえども小さな女の子。

慶尚に向けていた棘のある口調から一変、君彦は子供をあやすような猫撫で声でカナに話しかける。

すると君彦に好意を抱いているカナは嬉しそうに笑顔になりながら、君彦の腕を取って話しかけて来た。

『あのね、君彦お兄ちゃん！

今から涼子さんのお店で猫又ちゃんの為に宴会を開くことになったの。

君彦お兄ちゃんも主役だから連れて来いって、猫又ちゃんに言われてここまで来たんだよ』

カナの言葉に君彦はついさっき同じ台詞を聞いた気がして、にこにこ他人事のように笑みを浮かべている黒依と、特に表情を変えないことのない慶尚の顔を窺うように視線を送った。

どうしてこうみんなして、猫又の帰還祝いを開きたがるのだろうか。

確かに猫又が無事に戻ってきたことは実に嬉しいことだ、それは君彦が一番よくわかっている。

しかしそれは君彦にとって猫又が「家族」であるから。

だからこそその喜びもとてつもなく大きなものになっていたと理解出来る、だが他の者達は？

それだけ猫又に人徳があったということなのであるうか。

(……猫の場合も「人徳」って言うのか？)

カナは今すぐにでも君彦を、猫娘である涼子が経営している居酒屋・猫目石へ連れて行く気満々の表情で、決して離すまいと君彦の腕を掴んでいるカナに対し、君彦は目の前にいる小さな女の子にどうやって断ろうか頭を悩ませていた時だった。

今まで特に割って入ろうとして来なかった黒依が突然何かを思い

出したかのように声を上げたので、何があったのかと思った君彦と慶尚はカナから黒依の方へと向き直る。

「君彦くん、ごめんだけどあたし帰るね！」

「は？」

黒依ちゃん、いきなりどうしたの!？」

（てゆうか今日はオレのバイトが終わった後にパーティーを開くとかどうとか言ってたなかった!？」

今更用事!？」

突然の黒依の発言に君彦だけではなく慶尚までもが、怪訝な顔になって黒依に注目していた。

黒依はそれでも笑顔を崩すことなく、つい数十分前まで言っていた言葉を覆すような言葉を並べて来る。

「猫又ちゃんがどこに行っちゃったのかわかんない以上、今日はもうパーティーなんて出来ないでしょ？」

それならパーティーはまた今度、君彦クンの家でしょうかなって思っ

君彦クンと犬塚クンは家が隣同士だから、二人のアパートに行っ  
た方が早いと思うのね。

それと志岐城さんのことなら心配ないと思うよ、多分!」

まるでこのまま締めくくるように放つ黒依の言葉に、君彦は自分の後ろに隠れるカナの頭を無意識に片手で撫でつけながら黒依に話しかける。

「いや、でも……っ!」

志岐城さんのあの様子、今までと少し違うみたいだったから……

心配だし」

「もう、君彦くんは他人のことを心配し過ぎだよ！以前から何度か志岐城さんがいきなり怒り出して、でもその後には仲直りしてつていうの何度もあったじゃない。

どうせ学校に行けば絶対会えるんだから、君彦くんが気に病む必要なんて全然ないんだよ？

だから、あたし達はもう帰るから。

また月曜日に学校で会おうね、君彦くん！」

片手を振り、黒依は笑顔のまま個室を出て行こうとした。

その時慶尚は一度君彦の顔を窺い、それから君彦の後ろに隠れる力ナへと視線を移すと、そのまま黒依の後を追いかけるように個室を出ようとする。

君彦はどこか自分一人だけが置いてけぼりされたような気持ちに陥り、二人に声をかけた。

個室のドアを開けて出て行く寸前、黒依は振り向き……君彦に向かっていつもの柔らかい笑顔を向ける。

「大丈夫だってば、君彦くん。

パーティーはいつでも開けるんだし、それに……その幽霊の女の子について行けば君彦くんの心配も解消されるから。

それじゃ、またね」

それだけ言うと黒依は二度と振り向くことなく店内へと戻って行った。

黒依の背中を追うように見つめていた慶尚は、開いたドアのノブを握り締めたまま後ろを振り向き、君彦に話しかける。

「ま、そんなわけだ。

あの女の事なら心配するな、オレがちゃんと家まで送るから。  
お前はその浮幽霊の女の子と一緒に猫又の所へ行けよ。  
……今の猫又はお前の存在が必要なはずだから」

慶尚の意味深な言葉に君彦は首を傾げながらもう一度言葉の意味を聞き返そうと声をかけたが、当然慶尚がそれ以上詳しい説明を君彦にするわけもなく、そのままドアを閉めて出て行ってしまった。個室に残された君彦は響子、黒依、慶尚の思惑が何もわからないまま……一人だけ取り残されたような気分になる。

こんなにも近いようで、心の距離がとてつもなく遠いと、そんな気持ちになって来る。

自分がどんなに距離を縮めようと話しかけても、触れようとしても、誰もが自分をすり抜けて遠くへ行ってしまうような感覚に陥ってしまふ。

そんな思いを抱きながらその場に立ち尽くしていると、君彦にしがみついていたカナが遠慮気味に声をかけて来た。

『君彦お兄ちゃん、もし今は忙しいなら用事が終わった時にまた来るよ？』

でも……用事が終わったらすぐにも猫目石に来てね？

色情霊のお姉ちゃんも猫目石で待ってるから……』

カナがなんとなしにかけた言葉に、君彦は大きく反応した。

両目を見開き、反射的にカナの方に振り向くと少し声のボリュームを上げて問いただす。

「色情霊のお姉ちゃん……って、もしかしてそれ……志岐城さんのこと!？」

君彦の必死な姿に多少驚きながら、カナはこくんと小さく頷いた。

お店を出て一人歩いて行く黒依を追い掛けるように、後ろからついて来る慶尚。

三十秒も経たずに黒依は足を止め、自分の後について来る慶尚の方に振り返ると声をかけた。

「あたしのことなら心配いらないうてわかってるでしょ、犬塚くん？」

その言葉に対し慶尚は動じることなく言葉を返した。

「それはどっちの意味で言ってる？」

女子高生の夜の一人歩きが危険なことを指してるのか……。

それともお前の正体を知る何者かが、お前に接触して来るかもしれないということを指してるのか……」

「冗談でもなく真剣な面持ちでそう聞いて来た慶尚に、黒依は鼻で笑うようにくすりとした。

すると昼間に見せていたような、今まで君彦達の目の前で見せていた柔らかい笑顔から一変。

どこか冷たさを感じさせるような不敵な笑みを浮かべながら、黒依は静かな口調で答える。

「どっちに取ってくれても構わないけど、でも残念。

両方ともあたしには何でもないから安心して？」

だから一人で家に帰れるから、別に送ってくれなくてもいいのよ」

他者を突き放そうとするように黒依は慶尚の付き添いを断ろうと  
していた。

しかし慶尚はズボンのポケットに両手をつ突っ込んだまま、それ  
でも動じることなくその断りを断る。

「お前を家まで送るってアイツに約束してきたからな。  
いらないうって言うてもついて行く、悪く思うなよ」

慶尚のその言葉に黒依の顔から笑みが消える。

どこか値踏みするような眼差しから、諦めたように肩を竦めると  
黒依は慶尚の付き添いを許可した。

「二人とも……、自分で言ったことは絶対曲げないんだね。」

男の子ってみんなこうなのかな、あたしにはわかんないわ。

でも……、君彦クンと約束したなら仕方ないよね。

「ありがと、犬塚クン」

ほんの少しだけ気を許したような安堵した表情を見せると、慶尚  
はそのタイミングを見逃すことなくすかさずもう一つ訊ねた。

「あの浮幽霊の女の子の話、お前も聞いてたんだろ。」

どうして一緒に行こうとしなかった？」

その台詞が仇となった。

気を緩めかけていた黒依の表情に再び警戒の色が現れると、冷徹  
な眼差しの奥に少しだけ寂しさを思わせる色が見え隠れする。

視線を逸らすようにぶいっと顔を背けると、黒依はそっけなくそ  
の疑問に答えた。

「あたしが行ったら、みんな楽しめないでしょ？」

怖がつて誰も歓迎なんてするわけないもの……、だから帰るって行ったの。

君彦クンと猫又ちゃんの為に開かれる宴会みたいだし。

……それを台無しにしたら、悪いでしょ」

黒依のその返事を最後に、慶尚がこれ以上何かを追及することはなかった。

ただ……学校に関することや何気ない日常など、そんな話題をぼつりぼつりと切り出す程度で、それ以上二人が何か言葉を交わすようなことは何もなかった。



## もう帰る（後書き）

いつもたくさんの方のアクセス、ありがとうございます

とりあえずは毎週月曜日の朝9時に予約投稿しているわけですが、今後と同じように定期的に更新出来るように順守していきましょう。

最初の頃に比べると何やら黒依の方に「影」なる部分が見え隠れしております。

それに関しても後ほどメインとして描いて行くことになっているので、今はもやもやしていただきます。

それでは今後も「猫又と色情狂」をよろしく願います。

## 頼れるお姉さん

商店街から裏道へ入って行くと、ぼつんとさびれた場所に一軒の酒場がある。

赤い提灯とのれんには「猫目石」と書かれ、店内から漏れる明かりが裏通りの道を明るく照らしていた。

中からは賑やかな声が聞こえて来ては物が壊れる音や、店内で暴れ回っているような騒音までもが聞こえてくる。

そして綺麗な声音をした女性の怒鳴り声がこだました。

『もう！ いい加減におし！』

このお嬢さんが、あんな達みたいな粗野な連中のことを怖がったらどうすんの！』

女性の喝で、店内は一気に静まり返った。

それまでの賑やかさが嘘のようにぴたりと止まり、突然静寂に包まれた中…… 他人事のように素っ気無い口調で猫又が水を差す。

『つつても、こんな連中に後れをとるような気性じゃねえけどな…』

…こいつは』

猫又の厭味な台詞に、カウンター席で小さくなっていた響子がむっとして猫又のことを睨みつける。

しかしすぐにまた周囲の客達に向かって視線を配ると、再び肩身が狭いような仕草になって縮こまった。

綺麗な着物姿の女主人、涼子が苦笑いを浮かべながら響子に気を使って優しく話しかける。

『本当にごめんね、騒ぎ立てることしか知らないような連中ばかり』

だから……。

怖がらせちゃったかしら？

でもそんなに固くならなくていいんよ。

みんな根は良い物の怪達ばかりだから、お嬢さんのことを取って食おうなんて考えたりはしないから』

そう涼子に言われながら、響子はふと奥のカウンターに座っている毛むくじやらの謎の物体や、入り口前の客席でお酒を酌み交わしている鋭い牙を剥き出しにしたイタチのような生物と、黒い塊にぎよろりとした目玉と子供のような細くて白い手を生やした何の生物なのかわからない物体を目にしながら、とてもじゃないが涼子の台詞に素直に賛同する気持ちになれずにいた。

(……てゆうか、こいつらに悪意がないとかどうとか以前の問題なんだけど。

妖怪自体を目の当たりにして平気で居られる神経なんて持ち合わせていないわよ、あたし……)

ここは主に妖怪物の怪、魍魎魍魎達が集う居酒屋。

あまりにさびれた一角に建てられているので、普通の人間が立ち寄ることはまずないのだが、たまに迷い込んだ酔っ払いなども店を訪れたりもするが、その時は普通に接客するようになってい

る。特に何かしらの結界というものが張られているというわけではない。

ただ単に周囲から見れば「どこか入りづらい」という、ある種の警戒心を抱かせるような雰囲気や店の外観から醸し出されている……

……そんな気にさせる店であった。

響子も長くこの地域に住んでいるが、今までこんな店があったこと自体知らなかった位である。

そして入ってみれば店の作りなどはごくごく一般的な、どこにで

もある居酒屋であつたが訪れる客は異様そのものだつた。

居酒屋「猫目石」に連れて来られた響子がこの店に入った時にはすでに店内の客達は出来上がっている状態で、中を覗いた瞬間目を疑うような光景にすぐさま固まつてしまったのを響子は忘れない。

特撮か何か、そんな風に真つ先に考えたがどう見ても体の大きさや特殊メイクの凝り具合から察して、それらが「本物」であると響子が理解するのにさほど時間はかからなかつた。

響子は安心安全だと促されながらも自然と足は、他の客達と最低限接触しない距離感を保つ為に、あえて一番奥のカウンター席に向かつていた。

響子が一人ぽつんと席に座ると、店の入り口手前で酒を飲んでいた猫又が響子の存在に気付き、響子の隣の席へと移動してちよこんと座る。その時は特に深く考えることのなかつた響子であつたが、何人かが人間である響子の存在を訝しげに感じて声をかけようと近寄つて来た所を猫又が適当にあしらつて響子に近付けさせないようにしていた場面を目撃していた。

そこで初めて、猫又が他の物の怪達が人間である響子に害を与えないように、自分がその境界線として響子の隣に陣取つたのだと察した。だがそれを知つた所でどうしても素直に接することが出来ない響子は、猫又の氣遣いに気付きつつも決して感謝の言葉を述べるようなことはなかつた。

店に入つて涼子が酒を勧めようとしたが、響子はまだ未成年であることを涼子に告げる。

すると涼子は酒以外の飲み物を冷蔵庫から取り出し、コップに冷えた麦茶を注いだ。

響子は麦茶の注がれたコップを口に持つて行き、とりあえず気を落ち着かせる為に冷えた麦茶を口の中を含む。

これだけ妖怪だらけの店を経営する人物の事……、見た目は京都風の綺麗なお姉さんではあるが恐らく普通の人間であるはずがないと、響子は心の中でそう推測していた。

そもそも猫又によって幽霊や物の怪を見ることが出来る能力を与えられるまでは、響子もそれまでそういった存在を目にするどころか実在することさえ知らなかった位である。

それが妖怪達を専門とするような居酒屋を営む位なのだから、君彦と同等の霊媒能力を持っているか。

もしくは涼子と呼ばれる女性自身が、実は物の怪だという可能性も否定出来なかった。

そう考えると余計に落ち着かなくなってしまうので、響子は冷静さを取り戻す為にどんどん麦茶を口に含んではきよきよと落ちて着きなく店内に視線を走らせていた。

そんな落ち着きのない響子を見て、猫又は二又の尻尾を左右に振りながら前足をカウンターのの上に乗せて響子に話しかける。

『ところで、なんでこんな所まで来たんだよお前。

確か黒依達と一緒にパーティーか何かするはずじゃなかったのか？』

そう訊ねる猫又に、響子は眉根を寄せながら聞き返した。

「えっ、あんた……何でそれ知ってんのよ!？」

驚く響子をちらりと横目で見て柔らかに微笑みながら、涼子はヒラメのえんがわを猫又に差し出す。

猫又はふふんと鼻を鳴らしながら、出されたえんがわの匂いを嗅ぎ、それからむしゃむしゃと美味しそうに食べ出した。

響子の質問に答えることなく貪り食う猫又の姿に、少しだけ怒りを覚えた時……涼子がくすくすと上品に笑いながら猫又の代わりに説明してくれた。

『猫又さんはね、あの犬神のお兄さんと犬神のことが苦手みたいで

ねえ。

誘われる前にウチの店に逃げて来たってわけ』

慶尚が猫又を誘う為に君彦のアパートに行ったが、誰も部屋にいなかったと言っていた理由がこれで分かった。

どちらにしろいつかはパーティーをさせられそうな雰囲気であったことから、今逃げた所でまたいつか誘われるに決まっているのだと思った時、再び猫又が訊ねて来る。

『そんで？　なんでお前がこんな所まで来てんだよ。』

君彦を誘いにバイトの店まで行っただろ、黒依達と。

それがなんで妖怪達が入り浸る居酒屋に来る羽目になったのか、ちよつとばかり興味あるなあ。

ま、どうせお前が一人でいきなりキレ出して君彦と不毛な喧嘩でもしちまっただら！？』

無責任な笑い声を上げながら大笑いしていると、そんな猫又の頭をぴしゃりと軽く小突いた涼子が唇を尖らせて非難する。

『猫又さん、そんな言い方失礼でしょ！』

お嬢さんにはお嬢さんなりの理由があるんだからね。  
どうせそんなの、オスにわかりはしないだらうけど』

涼子のお叱りを受けた猫又は、ふてくされた表情になって押し黙った。

そんな奇妙な光景を目にしながら響子は、ここに来た理由を説明しようと思ったが猫又が側にいる以上どうしても話し出すことが出来ずに、恨めしそうな視線で猫又をちらちらと窺う。

そんな響子の仕草を見た涼子が勘を働かせると、奥で騒がしく飲んでる妖怪を呼び出すと猫又にどんどんお酒を勧めるように連れ

出させた。

『にやつ！ あんまり飲むと君彦に怒られるっ！』

『大丈夫よ、今カナが君彦さんもここに来るようになって頼みに行ってる所だから。』

付き合いの為ならって、きっと君彦さんも許してくれるわよ  
これはウチの奢りだからお代は気にしないで飲んでってちよいだい。

……って、猫又さんが飲む酒代だけだからね！？

あんた達はちゃんと払いな、わかった！？』

威勢の良い声と共に猫又は一つ目小僧と毛むくじやらの何かに体をがつしりと掴まれて、奥の客席まで拉致されていった。

「にゃあああ」という低くかすれた声が店内に響きながら、涼子は気を取り直して響子に話しかける。

『これで邪魔者はいなくなったから、話しやすくなったでしょ』

この台詞でようやく涼子が自分に気を使ってくれたんだと察した響子は、呆気に取られながらもどこか安心した表情になって涼子のことを見つめた。

美しく、強く、そして周囲への気配りを怠らない彼女の姿に、響子はどこか惹かれるものを感じる。

それはまるでこれから自分が目指したいような、そんな理想的な女性像を涼子に感じ取ったかもしれない。

彼女なら信用出来るかも。

心の内を打ち明けても、きっと大丈夫かもしれない。

響子は初めて、身内ですら明かすことの出来なかった思いの丈を話せる相手を見つけたと確信し、話し始めた。

自分自身にも理解し難い、複雑な思いを  
君彦に対する、不可解な苦しみの全てを。



## 涼子が誘った理由

奇妙な「人あらざる者」達が集う居酒屋にて、人間である響子は話を聞いてくれるという居酒屋の女主人である涼子に自分のことを話してみようと思っていた。

今まで身内でさえも本当の意味で心を開いたことがない響子が、なぜ涼子には話せそうな気がしたのか……それは本人にもわからない。しかし響子の悩みは今まで自分の周囲にいる者達には到底理解出来ないものなのだというのを、響子自身無意識に察していたのかもしれない。

それ程に響子の周囲には、響子の現状を理解出来る者がいないのだ。

## 色情霊。

その存在について相談出来る者がそこらにいるだろうか。

そしてその存在を教えた人物に対して、更なる悩みが増えたことも誰に相談すればいいのだろうか。

霊の存在を理解し、なおかつその人物のことをよく知る者。

そんな都合の良い人物がいるとは思えず、ずっと心の内に秘めることしか出来なかった響子。

ようやく相談するに足る人物に響子は会えた。

だからこその他の人間とは異なり、容易に心を許せたのかもしれない。

いや、むしろこれが本来の響子の姿なのかもしれない。

余りに不信になり過ぎて、それで他人に対してなかなか素直になれなかったのかもしれない。

何より目の前にいる女性には響子が欲しい物を持っているように

見えた。

憧れの対象といってもいい、そんな思いを響子は感じ取っていたのかもしれない。

気さくに、裏表もなく響子に接してくれる涼子なら、きつと笑ったりせずに自分の話を聞いてくれるかもしれないと踏んだのだ。

何より響子はもう自分の心の中に問題を抱え込むことに限界を感じていた。

今までずっと異性に対したった一人で苦しんで来て、それだけでも十分重荷であつたにも関わらず更なる問題が響子の心をかき乱していたのだから無理もない。

色情霊に苦しめられるようになってから今日まで、響子が異性に対し興味を抱くということは相当な苦痛であつたのだから。

店の奥で猫又達が騒がしく酒を飲んでいる。

殆ど周囲の物の怪達に無理矢理酒を飲まされて、猫又はそれを制止しようと暴れ回っていると表現した方が妥当かもしれない。

そんな中、響子は店の端で何から話し始めたらいいか頭の中で整理しながら、ちらちらと涼子の顔を窺う。

涼子はなかなか話し出そうとしない響子に対し、嫌な顔一つせずになにっこり微笑みながら待っていた。

本当に聞きたいことをすぐに口に出出来ない響子は手始めに、自分に取り憑いている色情霊について訊ねてみる。

「あの……、今はどこかに行っちゃってしまってるけど。

あなたはあたしに憑いてる色情霊に関して、何か知りませんか？  
具体的なことを知りたいってわけじゃないけれど、せめてあたしから引き離す方法がわかればと思って。

あそこにいる猫又は何か知ってそうなんだけどあの性格だし……。それにどうせなら自分でどうにかしたいと思って、聞いてみたんだけど……」

少し不快そうな面持ちで奥にいる猫又の方に視線をやると、響子はすぐまた涼子の方へと視線を戻した。

響子が言いたいことを察しているのか、涼子は猫又を見つめながら呆れたように微笑んでいる。

その笑顔は響子の話を笑っているわけではなく、猫又の性格のことを言われて笑っているようだった。

涼子が猫又の方へ視線を傾けた時、ちょうど猫又は一升瓶を両の前足で抱えながら周囲を威嚇している場面。

猫又が抱き抱えている酒は猫又が好物としている「鬼殺し」、それを他の物の怪達に取られまいと奮戦している様子だった。

すると涼子は視線を響子へ戻し、少し困ったような微笑みを浮かべながら話し出す。

『色情霊か……、確かに以前猫又さんから聞いたことがあったわね。ごくごく一般的な悪霊だったなら、猫又さんの力で無理矢理引き離すことは簡単だったんだけど。』

でもお嬢さんに憑いてる色情霊はただの悪霊じゃない、恨みの念が強過ぎるの。

だからそんな悪霊をお嬢さんから引き離すのはとてもリスクが高いって……。

もしかしたらお嬢さん自身にもその負担が圧しかかって、最悪……お嬢さんの肉体に影響が出るかもしれないのよ。

だから猫又さんはお嬢さんから色情霊を無理矢理引き離すことをしなかった。

ああ見えてね、猫又さんってとても心が優しいの。

口では悪態付いたり、乱暴者みたいな振る舞いをしてはいるけどね。

お嬢さんに憑いてる色情霊を被わなかったことにも、きっとそういった理由があるのよ。

正直、ウチにはこれ位しか言えないわ……あまり力になれなくてごめんなさいね。

でもお嬢さんに憑いてる色情霊に関しては、ウチの情報網で何とか調べてみるわ。

こつ見えてこの町に滞在している物の怪達とのネットワークはそれなりに広いから。

だから色情霊に関する情報は少し時間を貰えないかしら？』

涼子からそう言われ、結局は早急な解決法がわからなかったものの色情霊に関する話題が終わってしまったことに、響子は虚を突かれて急に落ち付きの無い態度へと変わる。

こんなに早く話が終わってしまったら、心の準備をするまでもなく君彦に関する話をすぐにでもしなくてはいけなくなる。

もう少し話を長引かせて、響子の緊張がほぐれてから君彦について話を聞こうと思っていた計画が見事に総崩れとなった。

そうやって挙動不審に陥ってる響子を余所に、涼子は笑顔の裏で本当のことを隠していることがバレないようにしていた。

（猫又さんが言ってた……）

彼女に取り憑いてる色情霊は恨みの念が強だけじゃない、復讐の念も込められているって。

そんなことを今のお嬢さんに話した所で不安にさせるだけ……。実際お嬢さんに取り憑いている色情霊の正体はつきりとわかっていない以上、本当のことを話すわけにはいかないのよね。

色情霊の素性、恨みの理由、復讐の本当の対象が何なのか。

それがちゃんとわからないと彼女に取り憑いた色情霊を抜うことは出来ないわ……。

猫又さんから色情霊に関して調べて欲しいって言われて、あれから二ヶ月経つけれどまだ詳しく掴めてない。

もしかしたらこのお嬢さんに取り憑いている色情霊を抜うことは、

永遠に不可能なのかも……)

笑顔を取り繕いながら涼子は猫又に頼まれていたことを思い出していた。

最初にその依頼をされた時、詳しい事情を知らなかった涼子はあまり乗り気ではなかった。

強い念を持った悪霊に関わることは自分達に返るかもしれない、居酒屋を営むことで情報が飛び交いやすい涼子は情報屋紛いのことをしてはいるが、涼子を取り扱う情報はごくごく些細なものばかりである。

単なる物の怪探しであったり、帰る場所を忘れてしまった浮幽霊の墓場探しであったり。

しかし猫又から依頼されたものはそういった類の依頼とは、全く異なっていた。

邪念に満ちた悪霊を祓う為、何の犠牲もなく力づくで祓うにはその悪霊の素性や目的を知り尽くす必要がある。

その時涼子は少し疑問に思っていた。

いつもならば町全体に関わるような大きな問題でなければ手を下そうとしない猫又が、今まで一人の少女に取り憑いていただけの色情霊を祓う気になったのか、それがどうも納得いかなかったのだ。

いくら猫又の本来の気性が優しいものだったとしても、基本的な性格は面倒臭がりで怠惰だったはず。

にも関わらず猫又が少女に取り憑いた色情霊を祓う気になったことを不思議に思った涼子は、それを猫又自身に訊ねてみたが本当のことは何も明かしてくれなかった。

そこで涼子は察したのだ。

猫又が言葉を濁す時、涼子にすら打ち明けないことがある時は決まって一人の人物が大きく関わっていた。

それは……猫又が守りたい存在、君彦を守る為に他ならないということに気付いたのだ。

他の物の怪達や浮幽霊の力ナから聞いた話をまとめてみて、それがはっきりとわかった。

猫又が守るべき存在である君彦が、色情霊に取り憑かれている響子を気に掛ける以上、君彦に色情霊による災いが降りかかるかもしれない。

そう察した猫又は色情霊を放っておくわけにいかなくなったのだ。だからこうして涼子に依頼してきたのだろうと理解した。

全ては君彦を守る為、色情霊から守る為に猫又は響子に降りかかった怨念の塊をどうにかしようと行動に移したというわけである。それで疑問が解消された涼子は、全面的に猫又に協力することにした。

今日こうして色情霊に取り憑かれた響子に出会ったのも何かの縁。色情霊に関する情報を少しでも多く手に入れる為に、涼子は人間である響子をこの猫目石に誘ったのだ。

そうとは知らず響子は、色情霊に関する話題が尽きてしまい、今度は本当の意味で一番聞きたかった君彦に関する話題に突入しなくてはいけなくなり、急に恥ずかしさが増して来ていた。

顔を真っ赤にしながら次の話題をなかなか口に出せず、もじもじする響子。

その時、居酒屋の硝子戸が開いて客が一人入って来た。

「涼子さん、いつも猫又がお世話になってます」

にこやかに入って来たその人物は、店内を一通り見回して一番奥に座っている響子へ来た途端視線を止めた。

学ラン姿の客に響子は絶句する。

そういえば涼子やカナが何か言っていた気がした。

用事が済めばすぐにでもここに君彦がやって来るのだと……。



## 気付き始めた矛盾

響子は固まっていた。

一番肝心な内容を相談する前に当人が店に現れてしまったからだ。学ラン姿で居酒屋・猫目石にやって来た君彦は、懐くように側から離れない力ナに優しく笑い掛けながら、すぐに視線は入り口手前で一升瓶を抱き抱えている猫又ではなく、店の奥で硬直している響子へと注がれていた。

カウンターから愛想の良い涼子の声が響く。

『君彦さんいらっしやい、待ってたのよ！』

さあさ、こつちに来て座ってちょうだいな。

今お飲物を入れるから、今日はゆつくりしていつてね』

いそいそと女主人の顔に戻った涼子は棚からグラスを手に取り、氷を入れた。

その間、君彦はちらりと猫又の方へと視線を走らせ睨みつける。君彦の眼差しは明らかに猫又の行動を諷めるように、叱り付けるような厳しい目つきをしていた。

猫又はその視線に気付くや否や、抱き抱えていた一升瓶をそつとガラスのテーブルに置くと大人しく真つ赤なソファにちよこんと座りこむ。周囲にいた物の怪達は店を訪れた君彦に敬意を払っているのか、片手を振って挨拶すると急に行儀よくなりテーブルの上から下りたり猫又と同じようにソファに座ったりしていた。

君彦が店に来たことによって暴れ倒していた物の怪達が急に大人しくなった所を見ても、君彦は特に気にする様子もなく苦笑いを浮かべるだけでそれ以上は何も言わない。

氷の入ったグラスに番茶を注ぎながら、涼子は君彦が店にやって来てから店内の空気が一気に変わったことに当然気付いている。



店内にいる物の怪全員、君彦の祖父に対して敬意を表しているのだ。

しかしそのことを知らない君彦は、物の怪達が自分に対して少し距離を置いている態度をしているのを見て、ただ単に人間と物の怪との違いがあるから……その程度にしか認識していなかった。

きつと物の怪と人間との間には何かしら埋めようのない溝のようなものが存在するのだろう。

猫又と同居する以前から幽霊や物の怪の存在を知り、程々に接して来たことのある君彦は付かず離れずの距離感を保った付き合いを今までしてきた。

カナのように君彦を慕って交流を求めて来る者ならまだしも、相手が君彦を警戒している分には必要以上に親しくしようとすることもなかったが、猫又と同居するようになってからは人外の者との交流がいつの間にか増えていった為、こうして微妙な距離を保ちつつ彼等との親睦を深めることが出来たのだ。

猫目石の常連達とは特別親しくしているわけではないが、軽く挨拶をする程度にはなれたと君彦は思っていた。

それでも相手はあくまで妖怪の類、人間のことを完全に信用しているわけではなく必要以上に親睦を深めようとしている存在ではないことを君彦は猫又から教わっていた。

中には物語に描かれるように人間を餌として認識している妖怪だっただけ存在するのだ。

妖怪相手に無防備になっただけはいけない、不用意に信じてはいけない。

それは幼い頃から君彦の祖父である征四郎からも言われていたことである。

君彦は祖父と猫又から教わったことを胸に、決して心を許し過ぎない範囲で、招かれれば猫目石に足を運ぶことにしていた。

真っ直ぐに自分の元へやって来る君彦を横目で窺いながら、響子

は急激に帰りたい気持ちに襲われた。

つい先程、ほんの数時間前の出来事。

響子は自分でも抑えられない激しい衝動に駆られて、君彦に対して溜まっていた怒りをぶつけてしまったことを思い出していた。

今でこそ頭も冷えて、冷静さを取り戻していた響子は自分のしかした過ちに後悔している。

出来ることなら時間を遡ってもう一度やり直したいと思う程である。

しかしそんなことが不可能なことがわかっている響子は、無意味に笑みを作ることも睨みつけることも出来ない複雑な表情で居心地悪そうにしていた。

きつと完全に嫌われた。

響子の脳裏に真つ先に浮かんだ言葉だった。

仕返しされるわけでもなく、響子に対して文句を言う君彦をイメージするでもなく、ただ「嫌われた」と思った。

出会ってから今日までそれ程付き合いが長いわけではない。

それでも響子には分かっていて。

君彦は何でも笑顔で取り繕うような人間だ。

きつと響子のことを心底嫌っていたとしても、笑顔で何事もなかったかのように振る舞うに決まっている。

腹の底では何を考えているか、恐らくヒステリックな響子のことを扱いにくい女だと思っているに違いない。

そう思ったら泣けて来そうだった。

今まで誰に嫌われようと、ましてや男に何と思われようとどうでも良かったはずなのに。

君彦にだけは……同じ男のはずなのに、君彦にだけは嫌われなくなかったのだ。

それもおかしい話である、明らかに矛盾していると響子自身にも

わかつている。

男という存在は響子にとっては敵以外の何者でもないはずなのに、どうして君彦にだけは嫌われたくないんだろう？

特に端正な顔立ちというわけでもなく、男らしさを兼ね備えているようにも見えない。

どちらかといえば軟弱な印象で、実に頼りなさそうに見える。

響子が君彦と距離を取ろうとしていたので、響子と君彦の間に何か好感を持つような共通点があるとは思えなかった。

今で言えば「人外が存在を目視出来る」という共通点はあるが、それなら犬塚にも同じことが言えるはずである。

にも関わらず響子が最も嫌われたくない人物、とても気になる人物は君彦だけだったのだ。

その意味がわからない。

なぜこんなにも君彦のことが気になるのか、なぜこんなにも君彦に嫌われたくないのか。

その答えを涼子に聞くつもりでいたのに計画が大きく狂ったことよって、響子は自分目指して歩いて来る君彦から逃げ出さたくて堪らなかった。今にも席を立ててこのまま店の外へと走り出したくて堪らなかった。

しかしそんなことをすれば、先程……君彦のバイト先でした過ちと何も変わりはない。

ならばどうしたらいいのか。

長年他人との交流を避けてきた響子には、この後どうしたらいいのか全く考えもつかなかった。

いくら君彦がお人好しで気さくな人間だったとしても、わけもわからず怒鳴られたんじゃないや怒っていても当然である。

そんな相手に何て声をかけたらいいのか、どんな顔をしたらいいのかわからず、君彦から視線を逸らした時……。

いつの間にか響子のすぐ隣に立っていた君彦が明るい声で話しかけてきた。

「良かった、志岐城さんがまだここに居てくれて！  
もしすれ違ったらどうしようかと思って、急いでここまで来たんだよ」

屈託もなく、つい数時間の出来事が夢か幻だったように、まるで何もなかったかのように、君彦はいつも通りの明るい雰囲気で響子に話しかけてきた。

あまりに自然な態度に、逆に不自然さを覚えた響子は呆気に取られて目をしばたく。

ぼかんとして言葉を失っている響子の隣で、君彦は手に持っていた包みをテーブルの上に置くと涼子に告げた。

「あ、涼子さん。

これ……店の残り物で作ったおつまみで申し訳ないんですけど、どうぞ良かったら食べてください。

お店でも結構評判良かったんで、少しだけ折り詰めにして持ってきたんです」

そう言つて包みを開けると紙で出来た折りたたみの弁当箱には、ちくわの磯辺焼きに、もやしとセロリをごまで炒めたもの、それからすりおろしたれんこんにネギと桜えびを混ぜ合わせてハンバーグのように焼いたものなど。

見るからにとても美味しそうなつまみが敷き詰められていた。

涼子は嬉しそうに声を上げて弁当箱に手を出そうとした時、奥に居たはずの物の怪達が君彦の手作り料理の存在に気付いて一斉に集まって来た。

『なんだなんだ、君彦兄さんの手作り料理じゃないか！』

『あんたの作った料理、実はおじさん大好きでねえ！』

『おいおい、どうせ酒のつまみにして食っちゃっただけだからお前さんに味なんてわかつちやいないだろう！』

君彦の回りに物の怪達が集まって物欲しそうな目で見つめる光景に、響子は思わず席を立て後ずさりしていた。

急に周囲が賑やかになって君彦は全員につまみを取り分けようと、涼子に小皿を出して欲しいと頼む。

『もうあんた達！ 君彦さんのご厚意に甘えるのはいいけれど、君彦さんは特別なお客様なのよ！？』

何こき使おうとしてんのさ！

ああ君彦さん、いいのよ。これはウチがするから、君彦さんはお嬢さんを……』

物の怪達が集まって来たことにより響子が君彦と距離を取ってしまったことを氣遣って、涼子は目線で促した。

君彦はすぐさま涼子のアイコンタクトに気付き、小皿に取り分けようとしていた箸を置いて後のことを涼子に任せると、君彦も席を立て響子の方へと移動する。

つまみ目当てで集まった物の怪達を順番に二又の尻尾でしばしとしばきながら、猫又は響子に話しかけようとしてる君彦を横目で見てほくそ笑んでいた。

それからつまみを取り分けている涼子の方へと視線を移すと、涼子もまたにつこり微笑んで猫又が言いたいことを察した様子だ。

『へえ……、君彦のヤツもたまにはやるじゃねえか。』

ま、あの二人じゃこれ以上の進展は確実に望めないだろうけどな』

そう呟きながら猫又は君彦が作って来たつまみを一口先に食べて、涼子に頭を小突かれたのは言うまでもない。

## 謝罪の言葉

君彦の後方ではバイト先で作って来たつまみを貪り食う為に、猫又含む物の怪達がこぞって皿の奪い合いをしていた。

その度に涼子の金切り声が聞こえてきたが、それはこの店に来ればいつものことなのか……君彦は背後で繰り広げられている騒動を特に気にすることなく、硬直している響子の方へと歩を進める。

響子は気まずい気持ちになりながら顔を引きつらせ、君彦のことを凝視していた。

すると君彦は苦笑いを浮かべながら響子を宥めるように、出来る限り穏やかな口調で話しかける。

「ごめんね、志岐城さん。」

猫又達って騒がしいだろ？

別に怖がらなくていいから、安心していいよ。

この店に来る物の怪達は別に悪い妖怪とかじゃないみたいだし。

あ、でも……ここだけの話。

猫又が言うには、人間が不用意に近付いていい存在ってわけでもないみたいだから、一応気を付けてね？」

君彦は片手で口元を隠すように小声で響子に忠告した。

恐らく彼等に聞こえはしないだろうが、君彦は念の為……背後に居る物の怪達が不快に思わないように声を出来る限り小さくして、注意を促す。

彼等が一口に安全だと言っても、どこまで安全なのか君彦自身にも保証は出来ない。

それなら君彦が猫又に注意を促されたように、響子にも注意するよう言うべきだと判断したのだ。

しかし響子にとって今は物の怪達がどうであろうが全く気にして

いなかった。

なぜなら響子が顔を引きつらせる程に緊張していた相手は、他の誰でもない。

君彦自身に対してだからだ。

しかし君彦は響子が極度に緊張しているのは、恐らく響子が初めて見るであろう猫又以外の物の怪達を目にしたからだと察した為である。それで君彦は響子がこれ以上怖がらない為に、彼等が一応安全であると告げる為、安心させる為に教えたのだ。

当然君彦の心遣いは全く意味がない。

緊張の元である君彦が響子に小声で話しかける為に距離を縮めたから、響子は男性不信による拒絶反応が現れていたのだ。

明らかなまでの警戒態勢……、胸の前で両手を構える響子。

当然君彦はそんな響子の警戒態勢に気付き、一定範囲内に近付かないよう距離を測っている様子だ。

本当なら、きつとこのタイミングなのだ。

響子は目の前に居る君彦に対し、どうしても言わなければならぬことがあった。

しかし本人を目の前にすると肝心の言葉が出て来ない。身内にならずに出てくるというのに。

どうして一番言いたい人物には、言えないのだろう。

そんな自分が嫌で、腹立たしくて、大嫌いだった。

口を開きかけながら、また言葉を飲み込み……これを二、三度繰り返した時、二人の間の沈黙を破ったのはやはり君彦である。

「さつきは本当にごめんね」

「……え!？」



響子は呆氣に取られた。

そして同時に思った、……先に言われてしまったと。  
しかしなぜ君彦が謝る必要があるのだろう。

そもそも何に対して謝っているのか、響子には全く理解出来なかった。

さすがの君彦もそれだけは察したのか響子が呆氣に取られている表情を見るなり、片手で頭を軽く掻く仕草をしながら説明する。

「いやほら、さっきの話だよ。

犬塚の奴がいい加減でやる気がないから、志岐城さんが怒っちゃって……。

そこに事情も何も知らないオレが余計な事しちゃったから、余計にむかついたんだよね？

あの時はちゃんと理由を聞いてあげられなくてごめんね。

志岐城さんだって忙しい所を、わざわざ猫又の為に来てくれたってのにさ。

だからってわけじゃないけど……、犬塚やオレの事……勘弁してもらえないかな？」

響子は黙って聞いていた。

胸の奥に沸き起こる不快な思いを抱きながら、もやもやする気持ちを抑えながら。

複雑そうな表情で、響子は黙したまま君彦の言葉を聞き続ける。

「志岐城さん、……言ったよね？」

誰にでも優しくするものじゃないって……」

「　　っ！」

その言葉を聞いて、響子は絶句した。

言っではいけない言葉、後悔してやまない言葉。

何も悪くない君彦に対して一方的に怒りをぶちまけ、傷付けてしまった。

傷付いてるのは言われた方なのに、口にした張本人である響子の方が胸が張り裂けそうになっていた。

君彦はその言葉を言われてきつと傷付いている。

いや、傷付かない方がどうかしてる。

それなのに君彦は自分の事より、響子の心配をしている……明らかに。

あんな酷いことを言った自分に対して、なぜこんなにも響子のことを気遣うことが出来るんだらう。

そんな君彦の優しさが、今の響子を更に苦しめていた。

表情を歪ませ、自己嫌悪に陥る響子の様子を心配そうに窺いながらも君彦はゆつくりと言葉を続けた。

響子を刺激しないように、自分の気持ちがちんと相手に伝わるように。

「もしかしたら志岐城さんはオレの事、こんな風に思ってるんじゃないかな？」

君彦は少し自嘲気味に話し出した。

これは君彦が懂れてやまない黒依にすら言ったことがない内容だった。

「オレがいつも笑顔で居て、誰かれ構わず優しくしてるんだって……」

その言葉に響子の胸は跳ね上がった。

君彦の口調はあくまで柔らかく、どこか自分を卑下しているよう

なニュアンスに聞こえる。

しかしその台詞だけを聞いていたらなぜか棘があるようにも聞き取れてしまった。

やはり響子が言った言葉を君彦は気にしているんだと、それについて反論しようとしてるんだと察した。

次はどんな言葉が来るのか、響子はまるで死刑判決のように待つ。響子自身もこの考えがとても大袈裟に感じられたが、それ位怖くて仕方なかったのだ。

いつも笑顔でいた君彦。

常に優しく接して来た君彦が、響子に対して怒っているかもしれない。

酷い言葉を口にした響子を咎めに来たのかもしれない。

口では謝っていても、そんなに容易く許せるものではないと響子は思った。

長らく他人との関わりを絶って来た響子は気付かない。

君彦は決して響子を咎めに来たわけではないということを……。

出来る限り響子を傷付けないように、誤解させないように。

君彦は自分の本心を知って欲しくて、こうして響子の後を追いかけて来たのだ。

響子が怯えながら君彦の言葉を待っている。

表情を見ればすぐにわかった。

全身が小刻みに震えて、何かを恐れていること位……見ればすぐにわかった。

だからこそ君彦は話すべきだと思った。

その相手が、他ならぬ響子だからこそ……。

「オレはね、志岐城さんが思っている程……良い人じゃないんだよ。欠陥だらけの人間、他人の気持ちを知った気で居るような……無

「神経な人間なんだ」

響子は伏せていた顔を上げ、君彦を真っ直ぐ見据えた。  
もしかしたらこんな風に真っ直ぐ異性の顔を見たのは数年ぶりではないだろうかという程、……響子は真っ直ぐに君彦のことを捉えていた。そして同時に眉根を寄せる、聞き間違いではなかったことを自分の頭の中で確認する。

君彦は確かにこう言った。

自分は決して良い人ではないんだと。

それは一体どういう意味なのか？

これ程、馬鹿が付く程のお人好しな人間が他に居るだろうか？

そして君彦は続ける。

自分が他人と関わることに、どれだけ憶病になっているのかを。  
生まれて初めて……。

君彦は他人である響子に、自身の心の内を話し始めた。

## 水と油

物の怪達が集う居酒屋、その奥では人間である君彦と響子が二人で話をしていた。

猫又はお猪口に入った日本酒をぺろぺろ舐めながら、時々様子を窺うように視線を向ける。

距離が離れていることと、周囲の物の怪達の喧騒で君彦達の会話は聞こえないが猫又ははわかっていた。

また君彦が他人の為にお節介を焼いているんだと。

そう察した猫又は可笑しそうにククツと笑いながら、また一口酒を舐めた。

これまで何度か見て来た真剣な面差しの君彦に、響子は胸がドキドキしていた。

しかしその胸の高鳴りはただ単に君彦を意識して鼓動していたわけではない、この高鳴りは君彦が今までにないことを響子に告白しようとしている……そう思うと、緊張して心臓の鼓動が早くなって行くのだ。

緊張気味の響子に気を使い、これ以上近付かないように気を付けながら君彦は言葉を続けた。

「確かにオレは志岐城さんの言う通り、誰にでも笑顔を振りまくし……相手が誰であろうと優しく接して行こうって思ってる。

でもそれはね、志岐城さんや他の人達が思ってるような善行から来るものってわけじゃないんだよ」

自嘲気味に微笑みながら、君彦は口の端を緩めつつもその笑みはどこか寂しさを漂わせていた。

そんな君彦の表情を見た響子は、これから告げることは君彦に関

するとても重要な内容だと暗黙に察する。

単なる打ち明け話というわけじゃない。

それは恐らく誰にも……、もしかしたらあの黒依にすら明かして  
いない内容かもしれないと、響子は感じた。

君彦の表情と言葉にはそれだけの重みが含まれていた。

いつも能天気で天然の入り混じった君彦からは想像もつかない真  
剣な雰囲気、響子は異性である君彦への警戒をほんの僅かだが無  
意識の内に緩めていたせい、そのことに本人は全く気付いていな  
い様子である。

「いつからかなのかオレはあまり覚えていないけれど、多分……身  
内を全て失くしてからだと思う。

前にも確か言ったよね？

オレの実の両親は、オレがまだ小さい頃に事故で亡くなって……

それから父方の祖父母に育てられたって。

それから祖父母も亡くしたオレは、他に面倒を看てくれる親戚が  
いなくて施設に入ったんだ。

勿論その施設には他にもオレと同じ境遇の子供はたくさんいたよ、  
別にオレだけが特別ってわけじゃない。

それでもオレは……自分だけが世界で一番不幸みたいに感じて、  
不公平に思えて……。

どうしたらいいかわからなくて、どんな風に笑っていたのかさえ  
思い出せなくなって。

一時は本当に周りの人達をとて困らせてしまう位、すごく暗い  
子供だったと思うよ。

先生に話しかけられても返事すら出来ないし、ずっとうつむいた  
ままで……誰の声も届かなくて。

今でも思うんだ、一人で勝手に閉じこもっていた頃の時間が、今  
では物凄く勿体なかったなって」

黒髪を指でくねらせながら、君彦は他人事のような笑みを作った。まるで自分の知り合いの話を書かせるみたいに、それが君彦自身の話だと思えない位に。

同時に響子も同じ感覚に陥っていた。

今の話からはまるで想像もつかない、お人好しで明るいだけを取り柄のような君彦の幼い頃がとても暗い子供だったとは、今の君彦の姿からは全くの別人の話のようで違和感さえあった。

しかしそれが事実であると、本当の話だという実感だけはなぜかあった。

それだけ君彦の言葉には真実味というものが存在していたからである。

「でもオレはただ単に自分の不幸が憎かったわけじゃなかったんだ。どうしてこうなったのか、これからどうしたらいいのか……それがわからなかっただけ。

唯一頼りにしていたお祖父ちゃんまでも失くしてしまって、道しるべを失って道に迷ってただけなんだ。

行く道を示してくれる誰かが欲しかった。

そんな風にいつしか思い始めると、今度は回りのことが見えて来たんだよ。

道を示してくれる誰かが欲しいなら……、こんな風にしてちゃ駄目なんだって……ある日突然気付いた。

そしたらだんだんわかってきたんだ。

回りのクラスメイトや、先生や、色んな人達がどれだけオレのことを気にかけてくれたのかって。

今まで真っ暗な小部屋に一人きりでいたみたいに、何も見えないし何も聞こえない。

そんな小さな部屋に一人ぼっちでいたのかと思ってたけど、自分の足で立ち上がって、手探りでドアを探して。

暗闇の中でやっと見つけたドアを開けたら、その先には笑顔で自

分のことを迎えてくれる人達が立っていた。

……勿論これは例え話だよ！？

本当に真つ暗な小部屋に閉じこもってたわけじゃなくて……っ！

とにかく、オレはその部屋を出ることだよやく気付け  
たんだ。

自分は一人じゃないって。

自分から立つて歩いて、行動を起こせばきつと応えてくれる。

オレにとってそれが何なのか、わかったんだ。

それは……、他人に親切にすること。

亡くなる寸前に遺言として遺したお祖父ちゃんの言葉にもあった、  
それがオレの道だったんだって。

最初はただ素直に、自分が信じるままにそれこそ色んな人に親切  
にしようって思ってたよ。

まずは身近な人から……、そこからだんだん範囲を広げて、それ  
こそすれ違う人全員に接する勢いで！」

暗い時代の話から、ようやく心を開くことが出来た時代の話まで。  
その話をしている時の君彦の笑顔はまるで幼い子供そのままであ  
った。

面白いおもちゃを見つけた時の子供のように、満面の笑みで両手  
を広げたりジェスチャーを交えながら話す君彦。

その姿は響子を知る今の君彦そのものであった。

君彦が誰かれ構わず他人に親切するルーツはそこにあったんだと、  
響子は少し理解した。

この世の不幸な出来事とはまるで縁がなさそうな君彦に見えたが、  
実は彼にも闇があり、暗い過去が存在していた。

その内容の全てを事細かに聞いたわけではないので、どれだけ辛  
かったのか……その詳細までは今の話からはわからない。

お節介を焼き、誰にでも笑顔で接し、相手がどんな人物であろう  
と親切にしようという人道的な心。



その理由を話して聞かせた君彦。

響子に優しくしていた理由も、恐らく今の話に繋がるんだろうと思った。

しかし突然君彦の顔から笑みが消えて、話し始めた時の憂いを帯びた表情が戻る。

気落ちしたように肩を竦めながら君彦は視線を床に落としたまま、続きを語った。

「他人に親切にすること、そして他人を幸せにしたいって気持ち……」。

それは今でも変わらない。

でも……、時が経つにつれてそれがだんだん違うものになって来たんだ。

もしかしたらオレが今まで親切心として行なってきた善行は、ただの自己満足だったんじゃないかって。

いや……、自分自身が自己満足に浸りたくて他人を利用してただけなんじゃないかって思い始めたんだ。

他人に笑顔で接すれば、よほどのことがない限り自分に好印象を与えることが出来るんじゃないかって。

人に優しくすれば、自分が良い人だって褒めてくれて、それで一人で勝手に満足してただけなんじゃないかって。

回りの人達を幸せにしてあげたいって気持ちと同時に、本当は……もしかしたら自分自身が幸せになりたくて、それで他人に親切にしていただけなんじゃないか。

そう考えたら、オレが今まで振りまいて来た笑顔も本当は嘘っぱちで……。

親切にしていたのだって、ただ見返りが欲しくてただけなんじゃないかって。

そんな風に思い始めるとさ……、何が嘘で何が本当なのかわからなくなっただ。

自分が今まで笑顔でいたのも本当は仮面だったのかって思うと、どんな風に笑ったらいいいのかわからなくなる。

今自分が親切にしてる行為は、ありがとって言われたいからしてるだけなのかもしれない。

考えれば考える程わからなくなってきた、でも優しくしたいって気持ちは変わらなくて。

はは……何言ってるのか、自分でもわからなくなってきたよ」

誤魔化すように微笑む君彦であつたが、そこにはわずかな苦痛が滲み出ていた。

響子は静かに話を聞きながらそれを見逃さなかった。過去の話をしながらも、心の内を明かしながらも君彦は響子に気を使っている、響子はすぐに理解出来た。

そして気落ちしている君彦に向かって、優しさがただの自己満足かもしれないと言う君彦に対して、口を開きかける。

親切にしようとする気持ち、例え自己満足でも恥じることはない。

現に親切にされて、優しくされて感謝な気持ちを抱いている人間だつて確かにいること。

それが事実なんだと、君彦に言つてやりたかった。

しかし響子はそんな言葉すらうまく口に出すことが出来ない。もどかしい思いながらも、どうしても臆病になってしまう。自分のような人間が知った風な言葉を言つていいのだろうか。こんなに歪んだ自分が、君彦のそんな優しさを素直に受けることが出来ずに、かえつて迷惑がつている態度を取っている自分が口にしていい言葉なのだろうか。

君彦がこんな風に自分の親切心に疑問を抱くようになったのは、

少なくとも響子のような人間が過去にいたからではないだろうか？  
そんな風に思えて仕方なく、励ましの言葉をかけることが出来ずにいたのだ。

抱かなくてもいいプライドを抱き、目の前の親切的な青年に声をかけることすら出来ない。

そんな自分がとても嫌いだった。

響子は唇を噛み、汗で滲んだ両手を握りしめながら、黙って君彦の続きの言葉を……ただ待つ。

最後まで聞けば……、このくだらないプライドすら払拭させるような言葉を聞けるかもしれない。

君彦が伝えようとしていること。

それが今の自分にとって、とても必要なことのように思えてきた。

この時の響子はきつと、とても素直に話を聞いていたに違いない。瞳を逸らすことなく毛嫌いする異性の言葉に耳を傾け、心に留めようとしていた。

そんな響子の懸命な姿を見た君彦は、明るく、そして力強く告げる。

「とにかく！ オレはね……、志岐城さん。

回りのみんなが思ってるような人間じゃないってことだよ。

この笑顔だって、自分でも無意識にただ『振りまいてる』だけかもしれない。

親切にしてるのだって、下心があってしてるだけかもしれない。でもね、結果がどうあれ……どれも今のオレが『したい』って思ってることなんだ。

志岐城さんには笑顔で接したい、そして親切に……優しくしてあげたい。

それは紛れもないオレの本心だし、本当の気持ちからしてること

なんだ！

だからさ、オレにとって志岐城さんは……不特定多数なんかじゃないよ。

今はハッキリ言えるんだ。

オレがこんな風に志岐城さんと仲良くしたいって思ってるのは、きつと志岐城さんは……」

君彦の言葉に響子は目を丸くし、黙って聞き入った。

熱く語った後に来る言葉。

響子の呼吸が荒くなる。

そしてごくんと生唾を飲み込み、言葉の続きを待った。

「物凄くオレと似てるからだと思っんだ！」

一瞬訪れた沈黙……。

君彦は「どうだ！」という顔で、響子を見つめている。

しかし響子は全身の力が一気に抜けたみたいに、啞然として瞳を細めた。

「……は？」

今の言葉のせいで、ついさっき長々と語っていた君彦の熱弁が薄っぺらく感じてしまう。

笑顔を引きつらせながら聞き返す響子に、君彦はまたしても得意満面といった表情で続けた。

「うん、だから！

志岐城さんは少し前のオレと似てるんだよ！

色情霊のせいで他人のことが……じゃなくて、志岐城さんは男性限定だったね。

えっと、男性のことが信じられなくなっでどう接したらいいのかわからない。

だから放っておけなかつたんだよ、志岐城さんのことを！

志岐城さんは今、暗い小部屋の中にいるんだ。

だからオレは志岐城さんに明るい場所へ出してあげたいんだよ。

そうすれば本来志岐城さんが持つてゐる優しい心も素直に出せるようになって、そしたら友達だつてたくさん出来る！

オレはその手助けがしたいんだよ！

……さっきも言つたように、それはオレの自己満足でしかないのかもしれないけどさ。

それで志岐城さんの手助けが出来るなら、それでも構わないって思うんだ。

だつてオレは志岐城さんの笑顔をもつと見たいからね。

たくさん笑つて、他人を信じる事が出来るようになればきつと

「

「うつつうしいわあああつっ！！」

響子は声を振り絞つて、そして力の限り君彦を殴つた。

見事に響子の拳は君彦の左頬を捉え、そのまま背中から倒れてしまふ。

幸いにも店内にある椅子やコップなどが巻き添えを食ふことはなく、被害は君彦だけで止めることが出来ていた。

「あたしの笑顔とか……っ、優しい心とか……っ！

鳥肌立ちそうなこと平気で言つてんじゃないわよ、気持ち悪いわねっ！

そういう青春ごっこは余所でやってよ、正直言つて耐えられないわ！」

（ええ~~~~~っ!!?）

激痛の走る左頬を片手でさすりながら、まだ衝撃が抜けきれない君彦は床に尻もちをついたまま響子を見上げる。

顔を真っ赤にして、わずかに瞳を潤ませながら響子は口元を一文字に引き締めてわなわなと震えていた。

（馬鹿みたい！ 本当に馬鹿みたいっ！

一体何を期待してたのよ、あたしってば！

この天然ボケがあたしのことを特別扱いするはずがないじゃないのよ、バツカみたい！

真面目に聞いて損した！

こいつが珍しく真剣に話し出すから何かと思っていれば、何て事ないわ！

ただの怖気が走るような青春日記じゃない！

今時そんな話をされて感動するような純真無垢な高校生がいるかってえの！）

息を切らしながら心の中で吐き捨てるように文句を垂れると、少しでも期待した自分に後悔する。

先程の言葉の中になぜ響子が怒りを感じたのか全くわからない君彦は、まだ心外そうな眼差しで見上げていた。

## 一筋の光

「あの……志岐城さん!？」

オレ、何か気に障る事でも言っただかな？」

全くわかっていない君彦のことを不快に感じながら、響子はまたしても怒りを露わにした口調で返す。

「気に障るも何もないわよ、あたしはそういう綺麗事を聞かされると鳥肌が立つのっ！」

ええいいわよ、どうせあたしの性格は歪んでるわよ！

だから今更何だつて言うわけ、ずっとこの性格で生きて来たんだから仕方ないじゃない！

結局あんたとあたしじゃ住む世界も環境も何もかも、相性最悪だったってわけよ！

あんたもこれ以上あたしに関わって痛い目を見たくなかったら、もうあたしに話しかけないでよ！

これ以上関わらないで、迷惑だからっ！

もうイヤなのよ……っ！」

これ以上君彦を殴るのは。

その言葉だけは飲み込んでしまった。

最後の最後まで素直に気持ちを現すことが出来ない響子は、自分を見上げる君彦の眼差しから逃れるように不自然に視線を逸らせると、そのまま踵を返して去ろうとした。

このまま絶縁してしまえば、いつもの日々が戻って来るだけ。またいつものように一人だけの毎日が訪れるだけ。

そう思うと、足が竦んだ。

踵を返したまま、それ以上歩を進めることが出来ずに、響子は立ち尽くしていた。

あと一歩が思う通りに踏み出せない。

ぼたり、ぼたり……。

響子の頬を熱い雫が濡らしていく。

このまま、唯一自分のことを親身に気にかけてくれた人物に背を向けたまま、去ろうとする自分を何かが止める。

店内の誰にも見られたくないと察した響子はうつむき、床を見つめた。

すると床に数滴の雫が零れ落ちていった。

肩を震わせ、嗚咽を堪える。

声に出してしまつたら、もう取り返しがつかない。

今までずっと虚勢を張って来た響子の努力が、全て無駄に終わってしまう。

しかし響子の足元を濡らす涙に、当然君彦は気付いていた。

「ごめんね、  
本当にごめん」

（謝らないでよ、あたしが惨めになるだけじゃない！）

「オレ、本当に女の子の扱い方が下手くそで……優しくしたいのに、怒らせてばかりで……」

（あんたが謝ることじゃないでしょ！？ あたしが勝手に怒ってるだけなんだから、放っておいてよっ！）



「でも志岐城さんには分かってほしいんだ。  
オレが本当に志岐城さんのこと、助けたいって気持ちは本当の…  
…本心からなんだって」

(……………)

「確かにオレには猫又みたいな力も、犬塚みたいに悪霊を祓う力も、  
何もない。

口では物の怪や悪霊に困ってる人達を助けたいって言っても、結局の所……出来ることは限られてる。

自分に出来る範囲で助けたいって、自分で緩いルールを作って…  
…甘えてただけかもしれない」

(……猫又)

「でもオレ、わかったことがあるんだ。

志岐城さんを苦しめてるのは確かに色情霊の存在と、その力のせいかもしれない。

だからオレは今まで色情霊をどうにかして助けようと思ってた。  
でも違うつて思った。

確かに志岐城さんは色情霊によって実害を受けてたかもしれないけれど、違うんだ。

オレ……、わかったんだよ」

「何……、を？」

響子は君彦に背を向けたまま、思わず声に出して聞き返していた。  
その声は震え、少し上ずっていたが今の響子にはそんなことを気にする余裕はない。

今は君彦の言葉が気になって仕方がない様子であった。

「志岐城さんは、志岐城さん自身の気持ちと向き合わなくちゃダメなんだよ」

君彦のその言葉で、響子は無意識に振り返り尻もちをついたままの君彦を見つめていた。

眼鏡の奥から覗く透き通った瞳が、真っ直ぐに響子を捉える。

その瞳には先程まで宿していた寂しげな雰囲気が消え、響子に対する優しさと憂いに満ちていた。

君彦が心から響子のことを心配し、考え、そして言葉をかけてくれている。

今の彼の姿を見れば、その瞳を見れば異性に嫌悪感を抱いている響子にだってわかる。

この人物は響子が思っていた以上に、響子のことを思ってくれているのだ。

今の言葉で君彦の気持ちが十分響子に伝わっているのだが、どうしても君彦の言葉の本当の深い意味までを的確に理解することが出来ずにいる。

響子にとって今の歪んだ自分を形成した一番の原因は他の誰でもない、全て色情霊のせいだった。

君彦や猫又に出会い、色情霊の存在を認知するまでは決してそんな風に思いはしなかっただろう。

意味もわからず異性を嫌悪し、自分がどうしたらいいのかその答えを見つけることは永遠に不可能だったろう。

しかし君彦は響子が抱えている問題は、色情霊が全てではないと言っている。

響子自身の気持ちに問題があると、そう指摘しているのだ。

響子が君彦の言葉を聞いて、そして理解に苦しんでいる表情を見

て、その理由を話す。

尻もちをついていた体勢からゆっくりと体を起こし、両手でズボンをはたくと少しだけ埃が舞って苦笑した。

殴られた衝撃で少し眼鏡の位置がずれていたので右手で位置を直す、再び響子と向き合い笑みをこぼす。

しかしその笑みは満面のもではなく、遠慮して……まだ警戒しているのではないかと思っているのか、響子を不快にさせない程度に遠慮気味に、わずかに口の端を持ち上げていた。

「確かに全ては色情霊がきっかけかもしれない、原因はそれにあるかも。

でもね、それだけじゃないと思うんだよ。

志岐城さんは色情霊のことがなくても、本当はとても心の優しい人だから。

だから心を開こうと思えば開けるはずなんだ、例えば色情霊を完全に祓うことが出来なくても」

響子は黙って聞いていた。

いつものように癩癩を起こすことなく、感情に任せて暴力を振るったりはしなかった。

真っ直ぐに自分だけを見てくれる君彦の瞳を見つめ返し、その言葉の真の意味を理解したいと心から願い、聞いていたのだ。

「一番厄介なのは色情霊のせいで歪まされた志岐城さんの心だよ。でもそれは志岐城さん自身が直そうと思えばいくらでも直せるものだと思うんだ。

確かにそれは難しいかもしれないけれど、ゆっくり……少しずつでもいいからさ。

ほんの少しだけでもいいから、他人のことを  
信じてみようよ」

「他人を、信じる？」

響子はオウム返しのように口にした。

素直に反応してくれたことがとても嬉しかったのか、君彦は満面の笑みを浮かべると大きく縦に頷く。

「そう、志岐城さんに足りないのは色情霊を無理矢理抜くことでも、無理して素直になることでもない。

他人を信じる心なんだよ。

そりゃ誰かれ構わず信じるのは危険かもしれないけれど、でも……誰かを信じるのが出来なきゃ一人ぼっちのままだ。

志岐城さんには一人ぼっちになって欲しくない、昔のオレみたいになつて欲しくないんだよ。

だからオレはその手伝いをしたいって思ったんだ。

色情霊を抜う力はないかもしれないけれど、志岐城さんが他人を信じられるように……友達のことを信じて心を開けるようになればきっと、今みたいに志岐城さんが一人で苦しむこともなくなるはずなんだ。

少なくとも、今のオレの答えはこうだ。

そして他人を信じられるようになるには、まず志岐城さん自身が自分のことを信じられるようにならなくちゃダメだと思う。

綺麗事とかそういうのは好きじゃないかもしれないけれど、だからって醜いものばかりに目を向ける必要もない。

もしほんの少しでもオレの言うことに賛同してくれるなら……、オレのことをちょっとでも信じてくれるなら。

改めて言うのも変な話だけどさ、志岐城さん。

オレの、本当の友達になつて欲しいんだ」

そう言つて君彦は右手を差し出した、男性恐怖症である響子に対

し握手を求めたのだ。

それがどんなに危険な行為か今まで何度も殴られた経験のある君彦は、十分に理解している。

だからこそ君彦は右手を差し出したのだ。

響子のことを、信じているからこそ。

涙でわずかに視界が歪んで見える中、差し出された右手を見つめ、怯える。

他の男達に比べ危険性が低いが男であることに変わりはない。

響子が今まで男達にどれだけ嫌な思いをしてきたか、それらが走馬灯のように蘇る。

瞳を閉じれば今にも吐き気を催してしまいそう、そんな悪夢のような経験が鮮明に思い出された。

表情を歪め、そして再び瞳を開けて手を差し出したままの君彦を見つめる。

信じて、いいのだろうか？

自分に足りないものは、信じる心だと君彦は言った。  
それは間違いなく、真実だった。

響子は男そのものに嫌悪感を抱き、不信感を抱き、そして敵と見なしている。

君彦に出会ってからそれは変わることの無い真実だった。

しかし君彦は言った。

響子が信じていないのは「男、異性」だと断定していない。

君彦は「他人」と言ったのだ。

つまりそれは異性に限らず、他人そのものを避けていると指摘されたことになる。

言われて気付いたが確かにそうだと響子は思った。

今まで自分に言い寄って来た男のことが信じられず避けていたが、

いつしか自分を妬み避けるようになった同性ですら信じられなくなっていたことに気付く。

回りの誰も信じられなくなり、自分は一人なんだと割り切ることで強く生きていると思っていた。

本当はとても寂しかったくせに、とても辛かったくせに、そんなことを口にしてしまえば、弱みを見せてしまえば自分自身を保てなくなると思った響子は、虚勢を張ることで自分を保っていたに過ぎない。

その虚勢が更に他人を遠ざける結果になろうとも、響子はそうするしかないと半ば諦めていたのだ。

誰も自分を理解してくれる者などいない。

そう思い込むことでずっと他人に心を閉ざして来たのだ。

しかし今、響子に一条の光が差し込んだ。

その光はずっと闇の中に身を潜めていた響子にとってはとても眩し過ぎて、目が眩みそうな程であった。

彼は自分にはないものを持っている。

そして、それを自分に惜しみなく与えてくれようとしていた。

彼を信じて、いいのだろうか？

少し前の響子なら拒絶していた所だ。

差し出された手を払いのけ、罵倒を浴びせ、その場を去っていた所だ。

しかし彼は今までずっと諦めることなく真っ直ぐ響子を見て、根気良く話しかけ、心を開こうとしてくれた。

そんな君彦の健気な気持ち、かたくなだった響子の心を揺り動かすことが出来たのだ。



## パーソナルスペース

君彦はもう夜も遅いから危ないということで、響子のマンションまで送ることにした。

当然響子は断ろうとしたが、この日ばかりは君彦に逆らうことが出来ずに大人しく従う。

猫目石を出る際に君彦は猫又に釘をさしていた。

食べ過ぎないこと、飲み過ぎないこと、そして他の物の怪達に迷惑をかけること。

それだけ言っていると君彦は「それじゃ」と涼子に礼を言って出て行った。

君彦と響子を見送った猫又と涼子は、まるで我が子を見守るような温かい眼差しをしていた。

最も猫又にとっての温かい眼差しというのは、皮肉の混じったものでもあるが。

『良かったわね、あの二人。』

最初はどうなることかと思っただけで、何とか上手くやっていけそうじゃないの』

安心したような口調の涼子に、猫又は鼻を鳴らしながらケチをつけた。

『へっ、どうだかな。』

君彦のヤツはまだまだ甘ちゃんな所があるし、色情女に至っては根っからの捻くれモンと見たぜ。

これから先も思い知らされること請け合いだと思っがなあ』

そんな憎まれ口を叩く猫又の小さな頭を、涼子は軽く小突いて叱



り付けた。

猫目石を出て響子のマンションまで歩いていく中、響子は何を喋ったらいいのかわからず黙っていたが君彦は何度となく話題を提供してはずっと響子に話しかけ続けていた。

何が一般的なのか普通なのかわからないが、響子の中の一般的なことと言えば「男より女の方がお喋り」だということ。

にも関わらず女である響子は話題が何も思い浮かばず、まだ多少なり抵抗がある異性に対して距離を取りたくなる衝動を抑えることに必死で、自分から話しかけるといことが出来ていなかった。

それを察してかどうか響子にはわからなかったが、男性不信である響子に氣遣って次々話題を振って来る君彦に対し、変に氣を使わせてしまっているのではないかと、とても心苦しくなってしまう。君彦に氣を使わせ、話題を提供させ、きっと自分のことを「疲れる女」だと思っているかもしれない。

そんな考えが響子の脳裏をかすめた時、まるでそれに気付いたかのように君彦が唐突に否定した。

「そんなに氣にすることないよ、志岐城さん。オレって男のくせに喋るのとかすごく好きだからさ。

別に志岐城さんに氣を使って喋ってるとかじゃなくて、自分が好きで喋ってるだけだし。

だからそんな風に逆に氣を使うことないよ」

そう笑顔で君彦が言った。

響子は自分で気付かなかったが、君彦の目から見た響子は凄く申し訳なさそうな顔で話を聞いていたらしい。

笑顔は少し引きつり、相槌もたどたどしく、どこか遠慮氣味に見

えた響子の態度を見て逆に君彦の方が自分に気を使わせているのかもしれないと思ったのだ。

響子はもう一度、君彦の言葉を思い出す。

自己満足かもしれないけれど、他人に笑顔で接したいのは本当の気持ち……。

それこそ目に映る者全てに対して優しく接したい気持ちはあるが、その中でも響子は別格だと。

他人に対して素直に心を開けないところは、かつての君彦と似て通じるものがあつたからこそ、助けになりたい。

響子と本当の意味での友達になりたいと、君彦ははっきり響子に告白したのだ。

義務感じゃなく、誰でもいいというわけでもない。

それは響子にとって、自分が特別なんだと言われたように感じた。勿論君彦の口から直接、響子が特別なんだと言われたわけではないが、響子はそう捉えることが出来たのである。

それはとても凄いことで、今までの響子から考えると有り得ないと言っても過言ではない進歩だったのだ。

君彦のことを他の男同様に不信のままであつたなら、きっとこんな都合の良い前向きな考え方はしなかつただろう。

必ずそこには裏があり、下心があるものとして、全く相手にしなかつたはずだった。

そんな響子が君彦の言葉に対して前向きに解釈出来たということ、それだけ君彦の言葉が響子の心に伝え届けることが出来たということになる。

色情霊によって世界中の男は全員敵だと認知せざるを得なかつた響子には、それこそ人類が初めて月に降り立った時のような凄まじい進歩だと言えるのだ。

そんな君彦の真っ直ぐな気持ちが、時間はかかったけれどもようや

く響子に通じることが出来た。

だからといってすぐに響子があるのままだに心を開けるわけがない。それだけ色情霊に苦しめられた日々は響子の心に重く深い傷を負わせていたのだ。

しかし今までと明らかに違う。

響子の隣を歩く君彦。

響子にとってのパーソナルスペースは、他の女性とは全く異なっていた。

男に対してのみ、そのスペースの広さは尋常ではない。

それでも君彦は響子の隣を歩くことが出来た。

これがどれだけの成長か、初めて出会ってからこれまでのことを振り返るとよくわかる。

今まで異性の誰一人として、自分のすぐ側を認めた者はいなかった響子。

無意識に響子のボーダーラインを越えて、何度も手痛い目に遭った君彦。

そんな経験をしてきた二人だからこそ、この距離感は少しくすぐったいようでも……とても喜ばしいことだった。

響子はすぐに素直になれずとも君彦に自分の隣を許している。

以前のような極度の緊張はなく、まだ反射的な衝動は多少残っているがそれでもなぜか落ち着けた。

色情霊によつて苦しめられ続けた響子にとってこれは初めての感覚であり、とても嬉しい成長だった。

何気ない会話（と言っても殆ど君彦が一方的に話し続けていたのだが）をしていると、響子のマンションに到着するのは驚く程に早かった。響子はマンションの近くまで来ると、そこが自分の住んでいるアパートであることを告げて、そして送るのはここまででいい

と口にする。

これ以上はマンションに住んでる知り合いに見られるかもしれない。

それはつまり、響子が男と並んで歩いている姿をマンションに住んでいる誰かに見られ、伯父である則雄（通称、蝶野蘭子）に報告されるかもしれないからだ。

もし則雄に知られでもしたら大変なことになるかもしれない。

今はまだ男性不信をほんの少しだけ克服出来たことを、則雄に知られるわけにはいかないのだ。

響子がマンションを背に君彦に向かうと、今日一番のリラックスした笑顔を向ける。

足りないかもしれないけれど、心ばかりのお礼と感謝の気持ち。数時間前ならば、そんな自分に反吐を吐いていた所だったろう。

「その……、今日はありがとう……」。

ほんのちょびつとだけど、あんたのことが知れて……良かった」

言葉は少なくても、君彦は嬉しさに溢れていた。

同じように満面の笑みを浮かべると、君彦もまた礼を言う。

「ううん、こっちこそ！」

志岐城さんと友達になれて嬉しかったよ、ありがとうね」

君彦が放ったその言葉がとてつもなく嬉しかった。

その嬉しさから思わず目頭が熱くなり、再び両目に雫が溢れて来そうになる。

だがこんな所で涙を流してしまつては君彦はきつと誤解するだろう。

何か気に障ったのかと慌てふためき、また自分との間の距離を詰

めて来るかもしれない。

そんなことをされたらもう衝動を抑えられなくなってしまうかもしれない。

感情のままに大量の嬉し涙を流し、異性である君彦に弱さを見せて抱きついてしまいかもしれなかった。

それだけは避けたかった響子は必死で涙を堪えると、片手を振って別れを促す。

ここまでの一連の流れだけでも、まるで別人のようだと響子は自分で皮肉った。

君彦も同じように片手を振って、自分のアパートへ帰ろうと踵を返した時。

思わず響子は君彦を呼び止めていた。

声を上げるように君彦の名字を叫んだので、まだ何か言いそびれたことでもあったのかと振り向く。

君彦の笑顔の表情を見るとどうしても疎んでしまう。

胸がドキドキして、頭の中が真っ白になってしまいうち……それで響子はどうしても伝えなければいけないことがあった。

これだけは伝えないといけない。

生唾をぐくりと音を立てて飲み込み、緊張をほぐそうとする。

響子からの言葉を待ち続ける君彦。

それからゆっくりと、響子は笑みの無い必死の面差しで口を開いた。

「あんたのそれは……、自己満足なんかじゃないから！」

勇気を振り絞ってやっと出た言葉。

それでも響子にとっては崖からダイブする程の勇気と同じものだった。

頭の中で思ってることの半分も言葉にすることが出来ず、必死の

眼差して訴えかけられるように君彦を見据える。

そんな響子の心中は、当然君彦に届いていた。

響子は何を言いたかったのか。

君彦に何を伝えたいのか。

まるで今の二人には過剰な言葉など全く必要としないように、不思議と心の中で思っていることが手に取るように分かる。

そんな感覚だった。

君彦は嬉しそうに微笑む。

その笑顔を見て、響子も嬉しくなった。

君彦はたった一言、「ありがとう」と響子に告げて、それから背を向け歩き出す。

そんな君彦の背中をいつまでも手を振って見送り続ける響子。

綺麗に整備されたタイル状の歩道を歩き、角を曲がって君彦の姿が見えなくなるまで響子はマンション前で見送り続けた。

完全に君彦の姿を捉えられなくなると響子は静かに息を吐き、リラックスした状態でようやく自分の部屋へと帰る。

そんな中、二人の様子を窺う人物が闇の中から姿を現す。

わなわなと肩を震わせながら、真っ白い上質な生地で出来たフリルのハンカチを口に咥えて悔しがる人物。

歯を食いしばってマンションの中へと消えて行く響子を見つめ、鼻息荒く憤慨した。

「響子……っ、何なの！？ 一体誰なの、さっきの男は！？

たった一人の身内であるあたしに何の断りもなく、男と何をそんなにイチャイチャしてるわけっ！？」

有り得ない、信じられないわ！

信じられるはずがないわよっ、あたしの可愛い子猫ちゃんに限って有り得るはずがないじゃないっ！

男性不信の男性恐怖症であるあたしの愛しい姪っ子ちゃんが、男と仲良く歩くななんてそんな馬鹿なことっ！」

珍しく店が早く終わって帰宅途中だった、響子の実の伯父である志岐城則雄。

彼（彼女？）は途中からとはいえ、マンション前で繰り広げられていた二人のやり取りをずっと街灯の明かりが届かない路地裏から、恨めしそうに眺めていたのである。

凄まじいアゴの力で遂にはハンカチを食いちぎり、そのまま歯ざしりするようにハンカチの切れ端も一緒に噛み続ける則雄。

「許せない……っ！

あたしの大切な姪っ子ちゃんに近付く男なんて、このあたしが絶対に許さないんだからねっ！？」

## 猫又の災難

『ぎにゃあああああああつっつ！』

町中にこだまする醜い悲鳴。

その絶叫を聞きつけ木々にとまっていたスズメ達が飛び立ち、声の届く範囲にいる飼いだ達は一齐に吠え出した。

分譲住宅で建ち並んでいる屋根の上から何かが大きな音を立てて走り回っている。

先頭を走って行く足音の持ち主を追い掛けるように、次から次へと大勢のメス猫達が黄色い声を上げて走っていた。

可愛らしい鈴の付いた首輪を付けた真っ白い猫から薄汚れた野良猫まで、殆ど町中に住んでいるであろう猫達が一齐に追いかけているもの……それは。

『だあああああつ、しつこいわお前等あああつ！』

オレをそこのオス猫と一緒にしてんじゃねえええつっ！

言っておくがオレはお前等なんかに興味はねえんだよおおおおつっ！』

息を切らし、脂肪で伸び切った腹を左右に揺らしながら走り抜けるアメリカンショートヘアの毛並みをした肉肉しい猫、猫又は自分を追いかけて来るメス猫達を振り切ろうと必死になっていた。

まるで猟奇殺人鬼に狙われたヒロインのように必死になって逃げ回っている猫又であったが、当然追いかけて来るのは猫又の命を狙っているわけではない。

メス猫達が狙っているのは  
。



『待つてえーん、猫又ちゃん！』

『いやんイカスわ、貴方のその遅しい体つき！』  
『だからお願いよーん』

『貴方の子供を産ませてちょうだーい！！』

そう、今はメス猫達の発情期。

妖怪化した化け猫といえども、猫又はれっきとしたオス猫。

この町に住まうどの猫よりも長く生き、遅しい生き様、そしてその強さと支配力。

どれを取っても他の猫達に引けを取らない猫又の子孫を残そうと、町中のメス猫達はこぞって猫又を追い掛け、交尾に持ちかけようと必死なのである。

当然妖怪化した猫又にも子孫を残す本能は残っているが、それ以上に理性も備わっている為、メス猫の求愛に応じて交尾に至ろうという気持ちなど、今の猫又にはさらさらなかった。

そもそも猫又は以前からのメス猫とも子孫を残そうとはせず、自分だけの自由を満喫して来た自由そのものの猫。

今更子供を残そうという考えや、メス猫をはべらせようという欲求さえも殆ど興味が無いに等しかったのだ。

だが猫又自身がそういった考えであったとしても、発情期を迎えたメス猫には関係ないこと。

こうして毎年毎年猫の発情期が訪れる度に猫又は町中のメス猫達に追いかけられ、交尾を迫られて来たのだ。

いつもなら発情期の間だけでも君彦と一緒に住んでいるアパートに引きこもって、時が過ぎるのをひたすら待ち続けていたものだが今回だけは例外であった。

犬塚慶尚との戦いにより神通力を大量消費した猫又は、本来の強い力を失ってしまいとても脆弱な状態にまで落ち込んでいたのだ。

それでも霊力のない一般人に見えない程度には神通力を維持出来ているし、低級な悪霊を退ける力もまだ残っている。

しかし少しでも賢しい悪霊相手ともなると力がわずかに及ばず、本来の力を出せない所か動きも少々鈍ってしまっていた。

消費した神通力を早く取り戻すには君彦の側に控えることと教えたのは、君彦の実の祖父である猫又征四郎。

彼の助言により猫又は、君彦の側にずっと控えていたのだ。

君彦もまた文句を言いつつも邪見にすることはなく、猫又が学校について来てもまるで空気のように自然に振る舞っていた。

そして今、君彦と一緒に登校している途中。

発情期の季節になっていたことをすっかり忘れていた猫又は、すっかり野良であるメス猫に見つかるや否や他のメス猫達にも追いかけられる羽目になったというわけである。

その際に君彦もメス猫を退けようと奮闘していたが、多勢に無勢……猫の波に対抗する術もなく引つ掻かれ、蹴り飛ばされ、踏みつけられる様となってしまった。

黒い学ランが猫の足跡だらけになって地面に這いつくばった状態となった君彦を救おうにも、メス猫達の狙いはあくまで猫又。振り返り戻りでもすれば捕まって貞操を奪われてしまうのは目に見えていた。

猫又は大きなダミ声で君彦に謝罪すると、そのまま君彦を見捨てて住宅街の塀を駆け上がり、そのまま屋根伝いに駆け抜けることとなったのだ。

だがこのまま走り続けても太った猫又の方が体力が尽きて、いずれメス猫達に取り囲まれてしまう。

そう悟った猫又は進行方向をとある場所へと向けて走り出した。向かう先は商店街、……の外れにひっそりと佇む一軒の居酒屋。裏道を駆け抜ける猫又を追い掛けながら、メス猫達は途中の障害

物で足を取られたり他のメス猫と衝突して大惨事を招いたり、狭い路地裏での障害物競走が功を奏し、何匹か巻くことに成功した。

しかしそれでも猫又を追い掛けて来るメス猫の勢いは後を絶たず、次から次へとどこから湧いて出てくるのか疑いたくなる位に鳴き声を上げて追い掛け回して来た。

その度に猫又は舌打ちし、鬱陶しい顔つきになりながらも急いで目的地へと向かう。

恐らく猫目石に逃げ込めば、猫娘である涼子の力で何とかなるだろうと思ってる猫又であったが、それでもこれだけ大量のメス猫を引き連れて店に逃げ込むわけにはいかないと考える。

せめて半分だけでも数を減らさなければ、涼子から謂れの無い嫌味が飛んで来そうでもそれもまた億劫であつたからだ。

猫又は息も絶え絶えになりながら走っていると、どこからか突然粒子のようなものが降ってきた。

茶色い物質が宙を舞い、咄嗟に猫又は両方の前足で頭を抱えるようにしてそれらの粒子が目に入らないようにガードする。

猫又を追い掛けていたメス猫達はそのまま降ってきた粒子をかぶってしまい、短い悲鳴を上げながら足を止めた。

中には粉が目に入った猫もいたらしく、激痛に転げ回る者が何匹かいた。

何事かと猫又は前足を解いて後ろを振り返って様子を窺った。

するとそれまで興奮状態で猫又を追い掛けて来たメス猫達に異常が見られる。

降って来た粒子を浴びた猫達の殆どは、急に地面に横たわり無防備な状態になり始めていた。

ごろごろと喉を鳴らし、電信柱や引つ繰り返ったゴミ箱に顔をこすりつける行動を始めたりと……、まるで泥酔状態になって発情期による興奮が冷め切った様子を見た猫又は、先ほど降り注がれた粒子が「マタタビ」であつたと理解した。

しかし問題は一体誰がメス猫達めがけてマタタビを放ったかであ

ったが、その謎はすぐに解消される。

『ほら、猫又さん！』

早くウチの店に来て頂戴、全部のメス猫がマタタビで酔ったわけじゃないんだから！』

いつの間にか猫又が向かおうとしていた進行方向に涼子が立っており、片手にはマタタビが大量に入った袋を持っていた。

慌ててきたのか、涼子は少し髪を乱し、いつもきっちりと着こなしている着物が少しはだけている。

『涼子！』

猫又はなぜ涼子がここにいるのか、なぜ猫目石に向かおうとしているのがわかったのか、色々聞きたいことはたくさんあったが、その言葉の全てを飲み込んで、とにかく涼子の言う通り急いで店に避難することにした。

最後尾にいた辺りのメス猫達にはマタタビ効果がなかったらしく、黄色い声を上げながら地面で恍惚状態に陥っているメス猫達を器用に避けながら追い掛けて来るので、猫又は慌てて先導する涼子の後に付いていく。

神通力が最高潮に高まっている時は猫又の威嚇により、追い掛けて来るメス猫達を金縛り状態にすることも可能であったが、今はそれが出来ないだけでもどかしく、情けないと思いながら涼子の背中を追い掛け、そして店内へと逃げ込んだ。

猫又と涼子は硝子戸をぴしゃりと閉めると、そのまま安堵と疲労が一気に押し寄せたのか、腰が抜けたようにその場に座り込んでしまう。居酒屋・猫目石には微量な結界が張られている為、猫又の気配そのものを認識することが出来なくなり、完全に見失った状態のメス猫達は猫又を探すようにその場から去って行った。

やがてメス猫達の発情期特有の鳴き声が遠くの方から聞こえるようになり、そして完全に聞こえなくなるまで猫又は本当の意味で完全に安心することが出来ず、だらしなく座り込みながら未だぜえぜえと息を切らしたままであった。

## マタビと猫娘

ひとまず発情期のせいで追い掛けて来るメス猫達を退けた猫又は、涼子の店でしばらく身を隠すことにした。

カウンターの席に飛び乗り、前足をテーブルに乗せてくつろぐ猫の姿は何とも奇妙な光景である。

涼子は乱れた髪や着物を直しつつ猫又に何かを勧めようとしたが、他所で間食をしたら君彦に怒られると理解している猫又は涼子の厚意を断った。

普段猫又はあまり猫目石に顔を出すことはない。

それこそ気が向いた時にふと店の様子を見に来るだけであつた。

しかしここ最近猫又がよく店に来るようになってから、涼子の機嫌は割と上向きになっている。

朝方から猫目石にあまり足を運ぶことのなかった猫又は何だか妙に落ち着かず、店内をきよろきよろ見回していた。

そわそわしている猫又の様子が気になり、涼子は苦笑しながら声をかける。

『あら、一体どうしたの猫又さん？』

そんなにそわそわしちゃってさ、いつもの図々しい猫又さんらしくないじゃない』

からかうよう言う涼子に、猫又はむすっとした表情になって言葉を返した。

『図々しいは余計だ。』

いや……、何かやつぱまだ営業前だけあつて店ん中がやけに静かだなんて思つてな。

考えてみればいつもオレ様がここに来るのはもっぱら夜だったし、

そりゃ静かで当たり前か。

そっぴゃカナの奴はどうした？

また君彦のストーキングでもしてんのか？』

『あらやだ猫又さんったら、ストーキングだなんて酷い言い方ね！君彦さんの様子を猫又さんの代わりに見てもらうように頼んだのは、どこの誰だと思ってるの！？』

猫又の言い方にカチンと来た涼子はすかさず言い返した。

しかし猫又はそんな涼子の反感には耳を貸さず、皮肉たっぷりの笑みを浮かべながらカウンターの上で頬杖をついた。

『カナがいたらひとつ飛び君彦ん所に行って、オレが今猫目石にいるって伝えてもらおうと思っただけがな。

いねえもんは仕方ねえか』

それだけ言い残すと猫又はカウンターの席からびよんと飛び降りて、玄関先へ向かおうとした。

明らかに店を出て行くこうとする猫又に、涼子は思わず声を上げて呼び止める。

『あ……っ、猫又さん……！

もう行っちゃうの！？』

普段は温厚ではんなりとして、猫又を叱りつける時は鬼の如き威勢ある口調になる涼子が、珍しく悲しそうな声を出したので猫又は思わず足を止めて振り返った。

何か用事があるなら聞いてやる、という頼りがいのある目で涼子を見つめる猫又。

そんな勇ましさを感ぜさせる猫又の大きな瞳に、涼子は頬を赤く

染めてつい俯いてしまう。

着物の袖口を弄りながら、涼子は視線をわずかに反らせて遠慮気味に口を開く。

『あ……えっと、その……ね？』

せつかくお店に来たんだし、そんなすぐに帰らなくてもいいんじゃないかなって……。

さっきも言ったように君彦さんにはカナが付いてるから、心配いらないんじゃないかしら？

何かあつたらすぐウチに知らせに来るようにしてるし……、少しの間なら問題ないと思うの』

どこか落ち着きの無い涼子の態度に猫又は少々訝しげに感じたが、涼子の気持ちを探ると猫又は玄関口へ向かっていた足を止めてそのまま踵を返すとカウンター席へと戻った。

涼子の言葉に素直に従った猫又を見るなり表情を明るくさせ満面の笑みを見せた涼子は、嬉しさの余り気分が高揚したのか、いつもの落ち着きある仕草から打って変わって、急にそそくさと忙しない動きに変わる。

『まだお店の時間じゃないけれど、何か食べる？』

あ、それとも君彦さんから外での食事は禁じられてるのかしら。でもちよつとつまむ位なら君彦さんも許してくれるわよね』

舞い上がったように涼子が冷蔵庫の中身を物色したり、棚の中に何か軽いつまみがないか探し出したので、猫又はそんな涼子の珍しい姿を見て苦笑しながら少し落ち着くように言葉をかけた。

『おいおい、そんなに気い使うことねえって。』

用事が済んだらすぐ君彦の所へ戻るんだからな、だから別に何も



いらねえよ』

何より今の猫又は出来る限り君彦の側にいないといけない。

この先何が待ち受けているかわからない以上、猫又は一刻も早く神通力を最大値へと戻す必要があった。

力の最大値がどれ程なのか猫又自身にも定かではないが、少なくとも力を思う通りに操れるようになり、そして肉体的な疲労感や倦怠感が完全に抜けるまでは本調子ではないことだけはわかっていた。今の不調な状態で君彦の側にいたところで、何かあった時に守ることが出来なくなってしまう。

君彦を守ること、かつて愛した飼い主と唯一無二の好敵手であった征四郎とのそれが約束であったから。

だが猫又は一時的にはあるが猫目石に留まることを良しとした。それはいつもと様子が違う涼子の様子が気にかかったからである。涼子は心に抱える不安や悩み、問題などを一人で抱え込む癖があった。

可能な限り自分一人で解決させようと躍起になり、そして結果的には潰されてしまい、それで何度手を貸したことだろう。

小さな問題に対し、誰の助けも求めず、それが迷惑になると捉えて抱え込んだ挙げ句に小さかった問題は次第に膨れ上がって行き、涼子一人で抱えられなくなる所まで大きくなった所で、結局の所猫又が力を貸して問題を収束させることを何度も経験してきた。

だからこそ普段と様子が異なる涼子の態度を見た瞬間、また何かの問題を一人で抱え込んでいるのかと察した猫又は、それを涼子から聞き出す為に猫目石に残ったのであった。

しかし単刀直入に訊ねた所で涼子は素直に何でも話す性格ではない。

猫又の力を軽視しているわけではなく、猫又が口で文句を言いながらも最終的には全面的に協力してくれることを他の誰よりもわか

つていた涼子だからこそ、軽々しく問題を口にして猫又に迷惑をかけるわけにいかないと、そう配慮する為だった。

そんな性格だと理解している猫又は、どのようにして涼子の胸の内に秘めている思いを吐き出させようか試行錯誤してる時だ。

猫又が自分の言葉に従って居残ってくれたことに相当嬉しかったのか、普段へまをしない涼子は珍しくドジを踏んでしまった。

先程発情したメス猫達を酔わせる為に使用したマタタビがたっぷり入った袋をしまおうと手にした時、足元を滑らせてそのまま袋に入ったマタタビを頭からかぶってしまったのだった。

中身はそれ程残ってなかったので大量にかぶることはなかったのだが、それでも涼子はマタタビを吸い込み、そしていくらか口に含んでしまい、ふらついて床に尻もちをついてしまう。

大きな音を上げて倒れてしまった涼子を見て、猫又は驚きカウンターから勢いよく飛び出して涼子の元へ駆け寄る。

『おい涼子、お前何やってんだよ！？』

呆れたような、しかし心から心配しているような声を出す猫又。

涼子は咳き込みながら何度か両手で顔に付いたマタタビを払おうとする。

払った粉末がマタタビだと察した猫又は自分も吸い込むまいと少し後ずさりして、前足で鼻と口を覆った。

『大丈夫、大丈夫よ猫又さん。』

マタタビはそんなに残ってなかったから、ほんの少し入っただけで……』

そう口にした途端、涼子は目眩でもしたように一瞬ふらつき、それからマタタビを払っていた手を見るなり、一口そつと舐めた。

手に付いたマタタビをぺろぺろと舐め出した涼子を見て猫又は慌

てて声をかける。

『おいおい、何どさくさに紛れて食ってんだよ！？  
いくらマタタビが好物だからって朝っぱらから酔っぱらうつもりか、お前は！？』

しかしそんな猫又の制止する声が耳に入って来ないのか、涼子は無心に手を舐めた後、放心状態になったかのようにぼうつとしてただ一点を見つめていた。

それから涼子を心配して側に寄り添った猫又の方へ視線を移すと、涼子の両目はとろんとしている。

涼子の様子を見るなり猫又は嫌な予感でもしたのか、涼子がマタタビで酔っ払っているとは断定すると涼子から距離を離す為にじりじりと後ろへ下がろうとした。

しかしそんな猫又の行動を涼子の片手が制止する。  
むんずと猫又の脂肪で伸び切った首根っこを引っ掴むと、涼子はわずかに表情を緩めながらゆったりとした口調で話しかける。

『猫又さん……、ウチ……何だか体が熱くなってきた。  
それにどうしてかしら、猫又さんを見てると体が疼いて仕方ないの。』

ねえ……、お願いがあるの。  
猫又さんのこと、抱っこしてもいいかしら？』

うつとりとした眼差し、そして緩やかな口調。  
だがしかし猫又を放すまいと掴んだ涼子の手は、容赦ない力で自分の方へと引き寄せようとしていた。

猫又は恐怖におののいたように全身の毛を逆立てて、何とか引き寄せられる力に反発しようとしたが無駄だった。

爪を全開に立てて抵抗するも、床に引っ掻き傷が残る程の勢いで

引きずられ、猫又は呻き声を上げる。

そして察した。

涼子の今の様子が、彼女達と酷似していたことを。

定期的に訪れる恐怖の季節、本能には決して逆らうことが出来ない。

それは『普通』の猫にしか訪れない衝動だと思っていた。

少なくとも今までの間、涼子が理性を失い本能のままに行動するようないことが一度たりともなかったから。

しかしマタタビの効力によってその理性を強制的に喪失させてしまった今の涼子に、これまで持っていた冷静な判断が成立するはずもなかった。

そう、今の涼子はとても危険だ。

彼女の様子は明らかに、外で猫又を追い掛け回してたメス猫達のそれであった。

発情してる！

殺気にも近い様子を感じ取った猫又は自身の貞操に危険が迫っていることを瞬時に察し、本能的に涼子を恐れていたのだ。

このままでは非常にマズイ。

猫又は首根っこを掴まれたまま、そして如何にしてこの状況から逃れるか。

奇声に近い断末魔を上げながら必死でその方法を詮索した。

## 涼子の気持ち

主に物の怪達の溜まり場となっている居酒屋・猫目石の女主人である涼子は、すっかりマタタビを浴びてしまったことで気分が高揚し、すっかり泥酔状態となって猫又に甘えていた。

普段は姐御肌で気丈な女性として振る舞っていたが、季節のせいもあってか理性を失った彼女は猫の本能のままに猫又の温もりをひたすらに求めて来ている。勿論涼子の現状は全てマタタビのせいであると理解している猫又は、うつとりとした眼差しで自分を欲している涼子のことを無下にすることも、そのまま放っておくことも出来なかった。

いつも冷静な涼子が泥酔したことにより我を忘れ、このまま外へ出て行ったらどうなるか。

想像しただけでも恐ろしかった。

今は妖怪化、つまり人型をしている為に外見上は人間とさほど変わりはないが、元々彼女は猫である。

そんな涼子が発情したまま外出し、その欲求を晴らそうと本能剥き出しになった場合には、目標となる対象は当然オス猫相手になっってしまう。ただ単に両手で抱き抱え、愛でるだけならば愛猫家の人間でもよく見かける光景となるが、涼子の場合はそうではない。

確実にオス猫を襲っていることだろう。

人の姿をした涼子がこれらの猫を犯す姿……。

猫又は涼子に首根っこを強く掴まれたままそんな光景を想像しつつ、首を大きく横に振って事態の収拾に全力を尽くそうと決意する。しかし神通力の違いで言えば明らかに猫又の方が上であるにも関わらず、相手は猫又と違って人間の姿をしている。

思った以上に涼子の握力などが強く、掴まれた猫又はそれを振り解くことが出来ずにいた。

涼子をどうにかする前に自分がどうにかされそうな状況で、猫又

はほんの少しだけ泣けてきそうになる。

しかしこんな所で打ちひしがれている場合ではない、というよりそんなことを考えている間に自分が犯されそうな状況なので四の五の言ってられないのだ。

ずるずると引きずられるように猫又を引っ張る涼子は、いつになく女の表情になっていた。

涼子がこんな顔をするのは猫又が気まぐれで猫目石を訪れた時……、涼子と猫又が二人きりでお酒を酌み交わす時に時折見せる顔だった。穏やかに、嬉しそうに、どこか安心するような微笑みで注いでもらった酒はまた格別であつたことを猫又は思い出す。

この表情は違う。

ふと猫又はそう察した。

涼子がこんな表情をする時は、彼女が心から安心してゐる時だけだろう。

決して欲情している時の表情ではない、多少の強引さは見受けられるが決して猫又を手籠めにしようとしているわけではなさそうだと猫又は涼子の嬉しそうな顔を見て思った。

その瞬間涼子に引っ張られないように踏ん張っていた足の力を抜くと、そのままひょいっと体が宙に浮く。

両脇を抱えられながら猫又の脂肪たつぷりの体はだらりとぶら下がった状態になり、そしてすっぽりと涼子の胸に納まった。

ほんのりと白梅香の香りが猫又の鼻をくすぐる、その香りに一瞬間の中が麻痺したような感覚に陥る。

しかしここで自分までもが冷静さを失うわけにいかないと、猫又は必死になって甘ったるい状況に耐え忍んだ。

『り……涼子、苦しいから放せて！』

猫又は涼子に刺激を与えない程度にやんわりとした口調で注意した。

だが猫又を抱き締める力は緩まることなく、それどころか更に力を加えたように抱き締めるものだから猫又は圧迫感で息苦しくなってきた。身悶えたような表情で口を大きく開けながら何とか呼吸しようと思死になっていると、猫又の耳元で涼子が囁いてきた。

『猫又さん……、羽九尾はくびなんかにならないで……』

『　　っ！』

猫又は一瞬聞き間違えたのかと思った。

しかし確かに聞こえた、「羽九尾」と　　涼子は確かにそう

口にした。

そしてようやく気付く。

猫又を強く抱き締めながら、涼子は微かに肩を震わせ……小さな嗚咽が聞こえてくる。

泣いている。

猫又を抱き締めているので涼子の顔を確認することは出来なかったが、涼子は確実に泣いていた。

なぜ彼女が静かに涙しているのか、その理由がわからないまま猫又はどうしたらよいのかわからずただ大人しく抱かれていた。すると小さく、ぼつりぼつりと涼子が話し出す。

猫又は何も言わず、ただ黙って彼女の言葉に耳を傾けた。

『カナから聞いたわ。』

猫又さん……ついこの間、猫神化したんですってね。

猫又さんが猫神化する為に必死になっているのは、ウチにだってちゃんとわかってるつもりよ？

でも……あの時の猫又さんはまるで別の……全く異質な存在だったって、カナが言ってた。

まるで自分が知ってる猫又さんじゃないみたいだって。

ウチも……、この町に住んでる物の怪達だってそうよ。  
みんな猫又さんに居てもらいたいのに……、どうして今まで通り  
じゃ駄目なの？』

声を震わせながら懇願する涼子に、猫又は何も言えなかった。

そもそも猫又は精神的ショックによって一時的に猫神化したとい  
う事情もあり、その時の記憶が一切残っていないのだ。

猫神化した時の記憶がすっぱりと抜け落ちていて、気付いた時には  
君彦のアパートで寝ていた。

我を失っていたのか、それとも全く別物に変化してしまったのか、  
その詳細はわからない。

だからこそ猫又が猫神として神格化した時、その後どうなってし  
まうのなんて猫又自身まるで考えていなかったのである。

ただ猫又の目標はあくまで神格化することであつた。

そうなたらこの町が一体どうなるのか、物の怪達は、涼子は。  
今こうして改めて涼子から聞かされ、猫又は考えもなかったこ  
とを告げられ、途端に迷いが生じたのだ。

その迷いが猫又の言葉を詰まらせる。

あくまで猫又の最終目標は変わらない、それは何があつても決し  
て揺らぐことはない。

だがしかし自分の周囲の事まで視野に入れていなかったという事  
実を突き付けられ、改めて考えさせられた。

ここまで関わってしまったからには、とてもなかったことになん  
て出来そうにない。

回りは全て自分と深い関わりなんて持つ必要の無いものばかりだ  
と思つて接して来たつもりであつた、しかしこの迷いに気付いた今  
となつてはこれら全てが「必要の無いもの」だなんて到底思えない。  
その事実猫又の胸は突然、締め付けられたような痛みを感じた。  
この痛みは「あの時」の痛みに似ている。

この世で最も大切な者を失った時の痛み……。



『……涼子』

猫又は自分でも無意識に涼子の名を呼んだ。

自分を抱き締めながら静かに泣き続ける涼子、決してマタタビによつて本能を剥き出しにし発情していたわけではない。

マタタビによつて今まで堰き止めていた思いが一気に爆発し、思い悩んでいたことをこうして猫又にぶつけてきたのだ。

どれだけ辛かったろう。

涼子はこの町の物の怪達に頼りにされる存在、そんな涼子が弱みを見せられるはずもない。

だからこそ誰にも悩みを打ち明けることが出来ず、一人でずっと抱えて来たのだ。

そんな涼子の不安に気付いてやれず、今まで何も……深く考えることなく今日まで来た猫又は途端に申し訳ない気持ちで一杯になってきた。涼子の悩みに気付いてやれなかったことだけではない、どんなに懇願されようと猫又は自身が羽九尾猫又になることをやめるわけにはいかないということに、申し訳なさを感じていたのだ。

こればかりは誰に言われようと、それが例え君彦だったとしても猫又の願いを妨げることは出来ないだろう。

猫又は自分を抱き締める力を決して緩めようとしない涼子の頭を、優しく前足で撫でると消え入るような声で囁いた。

『……悪いな、涼子』

たった一言、そこには涼子の願いを聞き入れることが出来ない理由も、どうしても羽九尾猫又にならなくてはならない理由も、何も説明することなく、たった一言だけ謝罪の言葉を述べるだけにとどめていた。

それが猫又の答え。

どんなに自分が他人に慕われようと、必要とされていようと、猫又はそれら全てを捨てても成し遂げなくてはならない目的があった。猫又のことを慕う涼子の頼みであるうと、猫又はそんな彼女の制止を振り切つてでも進まなくてはならない。

たつた一言の中に、それら全ての思いを詰め込んだつもりだった。それ以上の言葉は必要ない。

多くを語らず、猫又は泣き続ける涼子に抱かれたままの状態で、彼女の頭を優しく撫でていた。

と、その時。

猫目石の硝子戸が勢いよく開けられると、そこには学ランにたくさんの猫の足跡を付けた君彦がぼろぼろの状態で現れた。

「猫又っ！ やっぱりここに      っ！」

一瞬の沈黙、少し眼鏡の位置がずれた状態で目の前に居る猫又に釘付けになる君彦。

猫又もまた涼子に抱き締められたままで、まずい場面を見られたと言わんばかりの表情になり全身の毛が逆立つ。

すると君彦は一瞬にして全てを察したのか気まずそうな笑みを浮かべながら、猫又に向かってまるで他人行儀のように軽く会釈すると、そのまま硝子戸を閉めて出て行こうとした。

そんな君彦の態度が明らかに何かを勘違いしているようだったので、猫又は咄嗟に声を張り上げ訂正する。

『ちよつと待てーい、君彦ーっ！』

そんなんじゃないからな！？    これはそんなんじゃないからなーっ！？

おいこら、聞いてんのか君彦！    戻って来いっつってんだ、このボケーっ！』

だがしかし猫又の必死の呼びかけも空しく、君彦が猫目石に戻って来ることはなかった。

同時に君彦が訪れたことにより正気を取り戻し、涙を払拭させた涼子は先程まで強く抱き締めていた猫又を無残にも床に放り出し、すつと立ち上がると何事もなかったかのようなしれっとした態度で接して来た。

『さ、君彦さんも心配してることだし早く行ってあげたら？』

その顔にはわずかに涙の跡が残っていた、それでも気丈に笑顔を取り繕った涼子の表情は気持ち悪く吐露する前とは打って変わって清々しいものへと変わっていたことに、猫又は気付いていた。

どうしてわかってくれないの？

猫の足跡の付いた学ランを手で払いながら君彦は足早に学校へと向かっていた。そんな君彦の後を追いかけるように猫又はコンクリートの塀の上を小走りに駆けながら必死になつて君彦に弁解している。

「だから聞けつて言つてんだろ、君彦！

あれはお前の勘違いなんだつて！ このオレ様が涼子みたいな娘っ子に手え出すと思つてんのか！？

涼子のヤツが頭からマタビかぶつて、酔っ払っちまったから介抱してただけだつて！

おい、ちゃんと聞いてんのかよ君彦！」

しかし君彦は少々迷惑そうに猫又を一瞥すると、足早だった速度を更に早めて殆ど駆け足状態になっていた。

それはまるで自分を追い掛けて来る猫又から距離を離すような、このまま出来ることなら撒いてしまおうという考えがはつきりとして取れたので、猫又もまたムツとした表情になるとだらしなく垂れ下がったお腹を左右に揺らしながら追いかける。

一向に自分から離れようとしない猫又に対し、君彦は堪らずその場で足を止めると塀の上にいる猫又を睨みつけるように見上げながら、声を荒らげた。

「お前何でオレについて来るんだよ！？

発情したメス猫達を追っ払うことが出来たんだから、もういいだろ！

いつもなら猫の発情期が来たら家で大人しくしてるクセに、どうして今日に限って一緒に学校に行こうとするんだよ？

普段より早く家を出たのに、お前を狙って追い掛けてきたメス猫にもみくちやにされて、この通りだ。

お陰で遅刻しないように走っても学校に行かなくちゃいけないわ、お前を追い掛けて来るメス猫達に怯えなくちゃいけないわでこっちは迷惑してんだぞ！？ お前こそそれわかってんのかよ！？ わかつてんならさつき涼子さんにかくまってもらったように、猫目石に隠れているか家で大人しくしてろって！」

君彦の言うことはもつともであった、確かに今まで通りで行くなればメス猫達に追い掛け回されないように君彦のアパートに立て籠もって大人しくしていたか、涼子の居酒屋で時間を潰したりしていた所であった。

しかし今回に限ってはそうはいかない猫又なりの事情がある。

猫又も全く予想だにしなかった自身の猫神化、咄嗟のこととはいえそれで猫又が今まで蓄積していた神通力を殆ど使い果たしてしまったことが原因で、猫又の力はかなり弱っていたのだ。

それを教えたのは君彦の実の祖父である猫又征四郎、そして少しでも早く神通力を通常の段階まで戻すには君彦の側に居続けることが必要だと教えたのもまた征四郎であった。

猫又はその言葉に従い、こうして出来る限り君彦の側に付き添っていたようとしていたのだ。

しかし普段から自由奔放、自由気儘、我儘放題で過ごしていた猫又が、今になって君彦の行く場所行く場所ぴったりとついて来ることに君彦は違和感を感じていたのである。

だが慶尚との一件があつてから、猫又のことを邪険にしているわけではない。

それ所か普段気に留めることのなかった猫又のことを、あの一件以来気に掛けるようになった君彦はむしろ猫又がどこで何をしているのか、自分の目の届く所で確認することが出来るから逆に有り難く思っていた。

しかしこれまで互いに一定の距離感を保って過ごしてきたせいもあってか、いきなりべつたりとした生活にすぐ慣れるはずもなく、君彦は猫又のだらしのない行動の数々、そして目に余る怠惰な生活態度に少々苛立ちを感じ始めていたのである。

手のかかる子供を叱りつけるような日々、しかしそれで素直に言うことを聞いてくれるならまだしも相手はあの猫又だ。

口の達者な猫又は君彦が注意する度にのりくらりとした返答をしたり、屁理屈で返したり、とにかくその度に今まで以上に喧嘩が絶えなかったのである。

そんな日々が毎日続けば、さすがに君彦にも限界が来る。

しかしそんな君彦の苦労など露知らず、猫又は反省するでもなく鼻歌を歌って上機嫌だったり、偉そうに命令してきたり、全くもって普段の猫又の態度とそう変わりなかったことに、君彦のストレスは更に溜まっていったのだ。

当然今も君彦は猫又に対して多少なりとも苛立ちを感じている、せっかく余裕を持って行動しているのにそれを崩すのが決まって猫又の不可解な行動であったり、はた迷惑なトラブルに君彦を巻き込んだりするせいだった。

今もこうして理由をつけて自分から遠ざけようと、猫又の自由にさせようと口出ししているのに猫又は言う事を聞いてくれない。

どうして自分にまとりついてくるのか、どうして自分の苛立ちをわかってくれないのか。

そんな思いが何度も君彦の脳裏を巡っては消え巡っては消え、延々と繰り返しているのである。

なぜか自分に対してイライラしている君彦の態度に、猫又もまた苛立ちを隠せなかった。

どうして君彦はこんなにも口うるさいのだろう。自分は自分のペースで生活しているだけだ、それを君彦に指図されるいわれはない。ましてや自分は他の猫とは違う異質の存在、猫又だ。人間の言う事

をはいはい聞く妖怪がいるわけがない。

（……ま、中には下僕みてえにへーこらしてるワンコもいるけどな）

ふと猫又は隣の部屋に越してきた犬神のことを思い出すが、自分に対して無利益な敵対心をむき出しにする犬神の顔を思い出すと胸が悪くなってきたのですぐに犬神の存在をまるごと削除しようと務める。

君彦の言う事もわからないではないが、何も事情を知らないくせに偉そうに言うなと言いたい自分の身にもなれと猫又は思っているが、それを決して口に出すことはなかった。

自分の力が弱まってると聞いたたら、君彦は一体どうするだろうか？  
そもそもあの猫又征四郎の孫とは言っても、霊媒の類には一切と言っていい程に関わりを持たなかった。

……否、猫又征四郎が君彦を悪霊と関わらせようとしなかったのだ。

そのせいもあって君彦は霊に関する知識はおろか、除霊や浄霊といった行為も一切経験したことがなかったのである。

だからこそ猫又の力が弱まってると聞いた君彦が一体どうするか、知識がないだけに過剰な心配をさせてしまうだろうか。

それとも全く関係ないのに自分のせいだと罪悪感を抱いてしまうのか。

お人好しな君彦の思考を完全に把握することが出来ない猫又は、そんな面倒臭いことになる位なら君彦は何も知らない状態の方が幾分マシだとそう判断したので、未だに真実を打ち明けていなかったのである。

ましてや説明の中でボ口を出して猫又征四郎の靈魂の存在を君彦に知られでもしたら大変なことになる、それだけは絶対に避けなければならぬという思いもあったので、猫又はそれらを一括して「

面倒臭い」と判断したのだ。

憎まれ口を叩くように猫又について来るなど、そう訴えてくる君彦に猫又は気怠そうな表情をわざと作って言葉を返した。

『オレがどこで何しようとお前に関係ねえだろ！』

大体君彦、お前ってばちょっと自意識過剰じゃねえか？

オレは別にお前の後を追いかけてるわけじゃねえ、こっちの方向に行きたいだけなんだよ！

なーんでこのオレ様がお前にベタベタしなくちゃなんねえんだ、うえーキモ！ 気持ち悪っ！』

そう言つて猫又は君彦の目の前でわざとらしく吐き気をもよおす仕草をする、それが演技だということは見てすぐにわかったからこそ猫又の憎たらしい言動の数々が余計君彦の神経を逆撫でしたようだ。

「はっ！ お前、それでこのオレを騙し通せると思ってたのか！？ 今の言葉が取ってつけたような嘘だなんて、とつくにわかってるんだぞ」

指をさし、塀の上の猫又を睨みつけながら不敵な笑みを作る君彦。先程の猫又の言葉が白々しい嘘であることを見抜いた君彦は相当自信があるのか、それ以上怒鳴りつけるようなことはせずあくまで自分の方が上なんだと示すように、威厳ある態度で仁王立ちしていた。

そんな君彦の自信たっぷりな態度が気に食わなかったのか、猫又もまたムツとした表情に逆戻りすると威嚇するように両前足の爪を剥き出しにして、見上げる君彦に見せつけるような状態で鉤爪をちらつかせた。



君彦は猫又の鋭い爪に怯えることなく、低い笑い声をあげると猫又の言葉が嘘である理由を説明する。

「ふっふっふっ……、どうやらお前自身は全く気付いていないようだな。」

お前があらさまな嘘を付く時、お前の二又の尻尾はくねくねと互いを螺旋状に絡ませる癖があるんだよ！」

そう、先程君彦が指さしていたのは猫又の二又の尻尾めがけてであつた。

君彦に指摘され、猫又が自分の尻尾を確認すると猫又自身も無意識だつたのか……。

言われたように二又の尻尾は螺旋状に巻き付いた状態で左右に揺れていたのだ、そうとは知らず猫又は君彦の指摘にそのまま動揺し、背中の毛が全て逆立つ程に驚いている様子であつた。

正直なところ、君彦にそう指摘されたからと言ってそのまましばらくくれることも出来たはずだ。君彦がそう勘違いしているだけで、二又の尾を絡ませるのは自分のいつもの癖なんだと言い換えることも可能だつたはず。

しかし普段からばうっとしている君彦に指摘された驚きでしらを切ることを天然で忘れてしまった猫又の態度に、もはや修正はきかなかつた。あまりの驚きように君彦の指摘が正確なものであると裏付けされてしまった為、君彦は勝利を確信した笑みを浮かべて猫又を睨めつける。そんな君彦の勝ち誇った顔を見て、猫又のはらわたは更に煮えくり返る思いであつた。

完全に言い換える機会を失つた猫又は悔しそうにあうあうと言葉に詰まつた状態になっている、普段君彦よりも饒舌であつた猫又にしてはとても珍しい光景だつた。それ程今の自分の失敗は相当に恥ずかしかつたことなのだろう。

しかしそんな猫又に追い打ちをかけることなく、君彦は勝ち誇つ

た笑みから苦笑気味な笑みへと変わると肩を竦め、静かな口調で猫又に告げた。

「もういいよ、お前が行きたい所に行けばいいことなんだ。

それがたまたま学校方面だったとしても、お前の自由だもんな。

だったらこのまま一緒に行こう、さっきのメス猫達が戻って来ない内にさ」

それだけ言つと君彦は猫又の返事を聞かずにそのまま学校がある方向へと駆け足になった、そんな君彦を見て猫又は「あっ」と短く声を上げると憎まれ口を叩く暇すらなく、塀の上をとてとてと走つて行つた。

## 君彦の暴言

君彦と猫又が駆け足で学校の校門前まで向かっていると、ちょうど校門に入ろうとしていた響子と出会でくわした。相変わらず響子にはべったりとまとわり付くように、花魁風の色情霊が取り憑いている。ちょうどその時、色情霊の力によって惑わされた男子生徒がラブレットを渡そうと、響子に近付いた瞬間に殴り飛ばされる場面を目撃してしまう。

しかしそれでも響子に猛アタックを仕掛けてくる男子生徒は後を絶たない様子で、他に四、五人程が響子に向かっていたので君彦は慌てて響子の側に駆け寄ると、挨拶を交わしながら響子の肩に手を触れた。

「おはよう、志岐城さん！」

君彦が響子に触れた瞬間に、取り憑いていた色情霊が表情を歪めながら君彦を睨み付けるとそのまま空高く舞い上がるように響子から離れて行った。響子には未だに鏡などの媒体を通さなければ色情霊の姿をその目に映すことが出来なかったが、君彦に肩を叩かれた瞬間に全身の重だるさが消え失せたので色情霊が自分から離れて行ったことを暗黙に悟ったようだ。

浮遊霊である力ナの姿が見えるのに色情霊の姿だけが見えないということに、君彦は少しばかり疑問に思っていた。何の違いがあるかよくわかっていないわけではなかったので、いつか猫又に聞こうとしてそのままずっと忘れていたことを思い出すが、しかしそのようなことを今ここで……しかも急がなければ遅刻するかもしれない状況で猫又に問いただす暇がないと察して、また機会がある時にでも聞こうと君彦はこの場で疑問を口にすることをやめた。

君彦が色情霊を一時的に追い払ったことによって、魅了されてい

た男子生徒達は正氣に戻ったようである。まるで催眠術にでもかかって、今さっき術が解けたような惚けた表情で周囲を見渡すと、それぞれ首を傾げながら校舎へと歩いて行った。ようやく鬱陶しい男達から解放された響子は、挨拶してきた君彦の方を振り返り、はにかんだ。

「お、おはよう……」

少しぎこちなく、だけれど素直に。大声を張り上げるでもなく、振り返り様に殴り飛ばすわけでもなく、響子は君彦に向かって手を上げずに挨拶を返してきたのだ。響子に出会ってから恐らくこれが初めてであろう、攻撃を受けることなく普通に挨拶を交わせたことに心から感動した君彦は、少し目を潤ませながら嬉しそうに微笑んだ。

そんな君彦の態度がとても大袈裟に映った響子は顔を真っ赤にさせると、突然いつもの素直になれない響子へと戻ってしまう。

「あのね！ 勘違いしないでよね、これはあんたが『友達』だから普通に挨拶しただけなんだから！ どうしようもない屑の『男』からほんのちょびっとだけ格上げしてやっただけなんだからね、ほんのちょびーっただけよ！？」

そう言って響子は親指と人差し指がくつつくかくつつかない位、ほんの一ミリ程度の隙間を空けて君彦にわかりやすくジェスチャーで説明しているつもりだった。あまりに小さな隙間しかない為、君彦は苦笑いを浮かべてよくわからない納得をする。

「そ……そっか、あんまり大差ないんだね……今までと。あ、でも一応友達として接してくれてるんだから、そこは感謝しなくちゃね。これでオレも志岐城さんの正式な友達になれたってことだし」

屈託の無い笑顔ではつきりそう告げると、更に響子は恥ずかしさの余り真っ直ぐに君彦を見ることが出来ず、視線を下に背けた先に猫又がいたので急に不機嫌な顔つきに早変わりした。

「なんだ、今日は一緒にいるのね……そいつと」

「誰がそいつだ！ お前に有り難い力を授けてやった大恩人に向かって失礼だろうが！」

二本足で立ち上がり、前足をぶんぶん振り回しながら反論する猫又に響子は胸の奥がむかついた。瞬時に猫又の首根っこを掴まえるどぶよぶよにたるんだ皮が伸び切って、猫又は皮のツツパリ感とわずかな痛みで全身金縛りに遭ったかのように硬直した。首根っこはつい先程も涼子に驚掴みにされて、まだジンジンしていた所である。猫又の恩着せがましい言葉と態度に響子もまた激昂して言い返す。

「誰が大恩人よ！ あたしがいつあんたにこんな力が欲しいって頼んだつてのよ！ お陰で鏡を見る度に不気味な女が背後に写って恐ろしいつたらないわよ、色情霊だけじゃないわ！？ 他の幽霊だつてたまに見えるようになってんだからどうしてくれるのよ！」

放っておいたら取っ組み合いの喧嘩にまで発展するのではないかと不安になった君彦が、猫又と響子の仲裁に入る。人間対猫の仲裁に入るという経験、一体どれだけの人間がするんだろう。

「まあまあ猫又も志岐城さんも落ち着いて！ その話はまた後でゆつくりしたらいいじゃないか、それより早く教室に行かないと遅刻になっちゃうよ！」

君彦の言葉に猫又は不服だったのか、シャツと威嚇して口喧嘩の続きをしようと万全であったが響子の方は割と素直に君彦の言う事を聞いて、猫又を掴んでいた手を放した。あまりに素直過ぎるので猫又は背筋が凍るような思いがして、まるで汚らしい物体でも見るような目付きで響子を睨めつけた。

当然猫又が気味悪がっている様子に気付いていた響子であったが、再戦はまた今度ということで無視しておく。一行が校舎へ向かう途中、君彦はいつものように響子を昼休みに屋上で弁当を食べようと約束を取り付けておいた。

君彦が教室に入ると近くの席である黒依が可愛らしい声で挨拶の言葉をかけてきたので、君彦は相変わずのにやけ顔で話しかけた。そんな君彦のいつも通りの反応に半ば呆れ返っている猫又は、もう一つ空いてる席に視線を送る。そこは犬塚慶尚の席であり、教室中見渡しても姿が見えないのでまだ来てないか、別の場所にいるかはたまた休みなのかはわからない。どのみち慶尚に付き従うように犬神も学校へ来るだろうから、このまま慶尚が休みであった方がいくらか気分が楽になれると猫又は考えていた。

そもそも慶尚は常日頃から犬神を連れ回しているわけではなく、必要でない時は屋外で自由にさせてるか姿そのものを消して、慶尚の呼び声と共に現れるようになってる。しかし猫又にとっては犬神の姿が見える見えないの問題ではなく、慶尚自身に犬神の『臭い』が染み付いていて気分を害するから極力近寄りたくなかったのである。

そうは言っても猫又自身の神通力が極端に弱まっている今では、君彦の身の安全を確保する為に慶尚と犬神を利用しなくてはならない。君彦の祖父である征四郎からも、何かあった時の為に常に君彦と慶尚は共に過ごすようにしろと言われていた。

だがしかしこの言葉に猫又は鼻で笑いそうになった、猫又が犬神のことを毛嫌いしているだけじゃない。君彦もまた慶尚に対して相性の悪さを遺憾なく発揮してるのだ。傍から見ればすぐにわかる、誰に対しても温厚に振舞う君彦が慶尚に対してのみあからさまな拒絶反応を示していたのだ。あれは明らかに慶尚との相性の悪さを表しているといっても過言ではない。

だからこそいくら猫又が遠回しに慶尚と密接な隣人関係を築かせてやろうとしても、きっと君彦の方から拒絶するだろうことは目に見えていた。しかし面倒臭いがするしかない、今の猫又に凶悪な物の怪を退ける力はないのだ。

猫又がしばらくの間慶尚の席を見つめていたことに気付いた君彦が、それまで黒依と楽しそうに喋って満面に浮かべていた笑みが一瞬にして消え失せ、言葉を喪失させる。じつと慶尚の席を見つめていると黒依もまたそれに気付き、話しかけてきた。

「犬塚くんならまだ来てないよ、そういえば君彦くんって犬塚くんと家が隣同士なのに一緒に登校して来なかったの？」

悪気も何もなく黒依が笑顔でそう訊ねると君彦は驚愕と共に嫌悪感すら浮かべた表情で振り返ると、両手を振ってその事実だけは絶対に実現することはないということを、力一杯に説明した。

「しないしない！ 何でオレがあんな奴と仲良く登校しなくちゃいけないんだよ、冗談じゃない！ あんな無愛想な奴と肩を並べて歩いていたら、こっちまで無愛想なのが伝染っちゃうって！」

圧倒的な否定に黒依は首を傾げながら、事も無げに言い放つ。

「確かにあまり感情の起伏とかがないけど……、結構面白い人だよね犬塚くんって」

慶尚に対する黒依の意外な好評価に君彦は、まるで死刑宣告を受けたかのようにとても衝撃的な顔付きになると、慌てて黒依に理由を聞いた。一体あの無愛想で無礼な男の、どこをどう取ったら「面白い人」になるのか君彦には非常に理解不能だった様子である。

あまりの慌てぶりに足元に居た猫又はまたいつもの病気が始まったと言わんばかりの呆れた表情になりながら、大きな欠伸をかいていた。君彦があんまり必死に理由を聞きたがるので、黒依は人差し指を口元に押し当てながら焦らすようになかなか話そうとしない。そんな黒依の勿体ぶった態度ですら、君彦は全く気にならない様子である。

「君彦クンも変なことが気になるんだね、どこからどう見ても面白い人なのに」

「だから、一体アレのどこが面白い人になってしまうのかその経緯を知りたいというかなんというかね？」

ねだるように続きを促す君彦の背後から、低く一本調子な声が聞こえてきた。

「このオレの面白さを理解出来ない様な面白味のない奴には、説明したって一生理解することは出来ないぞ狐崎」

その声と台詞を聞いただけで神経を逆撫でされたような不快感が君彦を襲う。明らかに顔を引き攣らせながらゆっくり後ろを振り向くとそこには君彦を見下すような目をした慶尚が、ウドの大木よろしく立っていた。

慶尚の姿を確認した瞬間に君彦は殆ど本能的と言ってもいいだろう、それ位の素早さで慶尚から距離を離すと当然のように、いきな



り邪険に扱う。

「誰が面白味のない奴だ！ それはお前のことだろう、この無愛想の陶片木とうへんぼくが！ それから黙ったままいきなりオレの背後に立つなよ、ただでさえお前の側にいたら全身鳥肌が立って気分悪いんだからなあ！」

「ちよつと君彦クン、一体どうしたの！？ 今のはちよつと言い過ぎなんじゃないかな」

君彦のあまりの暴言にさすがの黒依が珍しく仲裁に入った。その言葉に君彦はハツと我に返ると、慶尚に向けていた人差し指を見て怪訝そうな表情になる。まるでその人差し指が自分の指ではないかのような、そんな不思議な感覚に陥っていた。慌てて指を引っ込め、平然と立ち尽くしている慶尚に対して君彦は視線を不自然に逸らしながら小さな声で謝罪する。

「あ、その 悪かった、ちよつと……言い過ぎたかも」

「別に気にしてない」

奇妙な沈黙が流れた。明らかに言い過ぎた君彦は勿論の事、黒依も慶尚もそのまま誰一人として何も言わないまま時間が過ぎていくと、まるで救いと言わんばかりにチャイムが鳴る。まるで金縛りになってもなっていたかのように沈黙していた三人がようやく口を開く。

「もうすぐ先生来るね、席に戻った方がよいよ君彦クン、犬塚クン」

「あ……ああ、うん。そうだね黒依ちゃん」

「……」

黒依の一声に二人は賛同してそれぞれの席へと戻って行った。かくいう猫又はというと特に驚くわけでも呆れるでもなく、ただじつと席に着く君彦を見据えていた。まるで先程の君彦の言動に強く反応したように、どこか含みのある表情で、ただじつと君彦と慶尚を交互に見つめていた。

## 視線

今朝方、君彦が慶尚に発した言葉によつて三人の間には小さな亀裂のようなものが生じていた。しかしそれは三人を仲違いさせる程のものではなく、あくまで少しばかり態度がぎこちなくなる程度であつた。

自分で口にした以上、最も気にしているのは君彦である。元々小さな出来事にも敏感に反応する性質である君彦は、いくら毛嫌いしている相手であつても自分がある所まで他人を悪く言うことなんてそうそうなかつたはずだ。それがなぜか慶尚相手となるとそういった蔑む言葉を平気で口にしてしまう自分に、君彦自身が驚いている位であつた。

授業中も時折斜め前に座っている慶尚の背中を目で追つては、不快そうに眉をひそめる。なぜ慶尚の姿を目にするだけでこんなにも不快に感じてしまうのか君彦にもわからない。

ただ腹の奥底がもやもやと熱を持ったように不快な気分になることだけは確かであつた、原因こそわからないが君彦はどうしても慶尚という存在に嫌悪感に近いものを感じて仕方がない。

授業の合間にある休み時間、慶尚はクラスの女子に囲まれて面倒臭そうに應對するなどして時間を過ごしていたが、君彦はそんな無愛想な慶尚を再び目で追つては不快さを露にしていた。そんな君彦に声をかけ、まるで慶尚のことを頭から追い出そうとするように色々話題を降ってくる黒依。

君彦は黒依に話しかけられる度、瞬時に慶尚のことを忘れ、話に夢中になれた。それでも心のどこかでは自分が慶尚を嫌う理由を、気が進まないなりに探していることに君彦は気付いている。明らかに今朝の言動から態度がおかしくなった君彦を案じて、猫又は二人の様子を教室の端から眺めていた。

慶尚がこの学校に転校してきてからは、慶尚からちょっかいをか

けて来ない限り君彦が慶尚の存在に構うようなことはなかったし、今日のように度々目で追ったりはしていなかったはずだ。それが自分自身の異変に気付いた君彦が、意識的に慶尚の存在に気をかけるようになっていた。それが悪いことだとは言わない。むしろ猫又にとっては望ましいことだったのかもしれないからだから。

休み時間が終わり、次の授業の先生が教室に入ってくるとクラス中がバタバタと自分達の席に戻って行く。猫又は教室の後方にあるロッカーの上に陣取って、再び君彦と慶尚の様子を窺っていた。

やはり二人が近付いて会話などをしない限り、これといった変化は見られなかった。

猫又は大きなあくびをひとつすると、口をもごもごさせながら眠気に襲われていると突然声をかけられ、あからさまに嫌そうな目付きで下を向いた。そこには慶尚に呼ばれても居ない犬神が姿を現し

と言つても君彦や慶尚、そして黒依以外にはその姿は見えないままだが 猫又を睨めつけるように見上げている。

『猫又よ、お前の主は少々慶尚に失礼ではないか！？』

唐突な言葉に猫又はよく聞き取れなかったフリをしてわざとらしく聞き返す。依然ロッカーの上から降りる気はなさそうだ。

『あ？ 何の話だよ、犬っころ』

猫又の言葉使いに苛立ちを隠せない犬神であったが、慶尚の命令無しに出てきたことに負い目があるせいか、ちらりと慶尚を一瞥してから再び静かな声で猫又に話しかける。もっとも犬神がどんなに慶尚の視線を気にしようとも、その気配によって犬神が勝手に姿を現していることは慶尚に既にバレていることは明らかであったが。

『我が姿を現しておらずとも、慶尚の身の回りで起きたことは我も

見聞きしている。今朝方お前の主が慶尚に発した言葉のことだ。そもそもあの男……猫又君彦と言ったか。あいつは慶尚に対して無礼が過ぎるぞ。敬えとは言わぬがせめてもう少し対等な口の聞き方をすべきだと我は思うが……』

言いかけ、犬神は猫又から視線を逸らしてわざと憎まれ口を挟んだ。

『まあお前の主ならば、口が悪いのは仕方ないことか』

しかし犬神の憎まれ口など猫又にとっては蚊に刺された程度のものなのか、しれっとした態度でわざとらしく後ろ足で首の辺りを掻きながら適当に言葉を返した。

『へっ、犬っところが人間にお説教かよ。大体だな、オレ様は別にあいつの下僕でも何でもねえんだよ、勘違いすんな。君彦が誰と何をやらかそうがオレの知ったこっちゃないね。気になるならお前が直接君彦に言つてやんな。お前のご主人様の許可が下りればの話だけだな！』

犬神が猫又に攻撃出来ないことをわかっていてわざと馬鹿にするような態度と口調で猫又が言い放つと、犬神はぴくぴくと怒りを堪えながらも牙を剥き出しにして静かに威嚇する。しかしそれ以上は自重しなければいけない犬神は、これ以上猫又と言葉を交わしても苛立つただけだと察し、ふんつと鼻を鳴らしてそのまま姿を消してしまった。

負け犬め、と猫又がにやりとした時、ちょうど後ろを振り向いていた慶尚と目が合ったので、猫又は二又の尻尾をぱたと振りながら何事もないようにシラを切った。だが慶尚は特に何かを言いたげに表情に表すわけでも、言葉を発するでもなく、猫又と同じよう

に何もなかったように再び前を向いた。

君彦の意見に尻尾を振って賛同するわけではないが、やはり猫又も慶尚のことが苦手であった。何を考えているのかわからない表情、態度、そして猫又以上にしれっとした言動。どれをとっても慶尚が自分達の味方なのか、はたまた昔のような敵なのか、それはよくわからない。慶尚が君彦に危害を加えない限り、猫又も人間である慶尚に害を及ぼすわけにはいかなかった。

もしかしたら慶尚は何かを知ってるかもしれない、君彦が必要以上に慶尚を毛嫌いする理由を。ふと猫又は慶尚の背中を見つめながらそんな憶測を試みた。いや、もしかしたらそれは慶尚以上に征四郎が知っているかもしれない、とさえ思ってしまう。

（面白くねえな、オレの知らねえところで何かが起きてるなんぞ。とにかく君彦に出来ることと言えば、せいぜい悪口雑言を犬塚の野郎に吐き捨てる程度だから、特に大したことはないならねえだろうな。当面の問題は黒依と……色情霊に取り憑かれたままの色情女か）

ロッカーの上から授業風景を見つめながら猫又がぼんやり考えていると終業のチャイムが鳴り、遂に午前中の授業は全て終えることが出来た。君彦と黒依は早速いつものように昼の弁当を食べる為に移動を始めた、そこで弁当を持った君彦と慶尚の目が合う。

「おっ」と猫又は興味津々な眼差しで二人の様子を窺った。依然ロッカーから降りようという様子はない。

君彦は少しバツの悪そうな顔になりながら、ぷいっと慶尚から視線を逸らすと手に持っている包みを慶尚に向ける。

「お前の弁当だよ。どうせ今日もパンとパックの飲み物しか持って来てないんだろ？ 今日ちょっとたくさん作り過ぎたから余った分を別の弁当箱に詰めてきたんだよ」

照れくさそうに君彦が一気に台詞を言い切った。何も今朝の詫びのつもりで差し出しているわけではなかった。君彦が今朝、弁当を作った時からじっくり考え、用意してきた理由。慶尚が無理矢理グループに入った時から嫌々ながら一緒に弁当を食べていた時、いつもコンビニで買って来た弁当であったりパンであったり、どうにもそれが気になっていた君彦はついお節介だとわかっていながらも、慶尚の分の弁当もついでに作って来てやろうと考えていて、今朝遂にそれを実行したのであった。

慶尚は手渡された弁当包みを見て、眉ひとつ動かさずに見入っている。何も言わないし、笑みをこぼすこともない。そんな慶尚の態度に急激に気恥ずかしさを感じた君彦は、顔を真っ赤にしながら声を張り上げた。

「べ、別にお前の為に作って来たわけじゃないんだからな！？ いないなら別にいいぞ、オレと黒依ちゃんと志岐城さんとでたいらげるだけだからなあ！」

「別にいらんとは言っていないだろうが」

しかし慶尚はむすつとした表情のままではあるが、どこか今までは雰囲気の違い態度に変わっていたので君彦は目をぱくりさせながら、今までとどこが違うのか探すように慶尚を睨っていると君彦の視線に不快感を覚えた慶尚が表情をあからさまに歪ませた。

「なんだ……、オレにそんな趣味はないぞ」

「オ、オレだってそんな趣味ないわ！」

結局殆ど君彦による一方的な罵り合いが始まる結果となり、様子を見守っていた猫又が下らなさそうに再び大きなあくびをすると、

呆れた声で独り言を言った。

『なんか……、色情女とのやり取りと大して変わんねえなコレ』

ぎゃあぎゃああと文句を言い続ける君彦を無視する慶尚、そんな二人のやり取りを他人事のように笑顔で見守る黒依。その三人が教室から出て行き、隣の教室の響子を迎えに行つたので猫又はようやつとロッカーの上から飛び降りて後をついて行つた。

変わらず君彦が一人で怒りをぶちまけ文句を言い続けていると、響子の教室から大きな物音がしたので三人は途端に静かになり、開けっ放しになつていた教室のドアから中を覗いた。すると教室内にはまだ生徒が大勢残っているにも関わらず全員が呆氣に取られたように静かになっており、教室内は静寂に包まれていた。そこからは異様で不穏な空気が流れており、何が起きたのかわからない君彦達にでさえ異常な事態が起きていることが手に取るようにわかつた。

ゆっくり歩を進めて中を覗こうとドアに近付くと、先程聞いた物音は教室内に整然と並べられていた机が倒れる音であつた。列から外れるように斜めを向いている机や、倒れている机。そのすぐ横には男子生徒が倒れており、生徒の一人が手を貸している姿がまず目に入った。

それから更に中を覗いて行くと、そこには険しい表情をした響子が立ち尽くしている。響子右手は少し赤みが差していたので、恐らく机の間に倒れている男子生徒を響子が殴つた後なんだろうと君彦は瞬時に推察した。響子の背後に目をやると、今朝君彦が一時的に被つたはずの色情霊が戻つていて、薄気味悪い笑みを浮かべている。

「色情霊の色香に惑わされた生徒を殴つた後みたいだな……、志岐



城のやつ」

瞬時に事の経緯を推理した慶尚が口に出す、それを聞いた君彦もすぐ理解したがそれでもいつもと様子が違っていたことに違和感があった。確かに今まで何度となく色情霊に惑わされた男達をこの目にしたことがある。その男達から身を守る為に暴力によって自己防衛してきた響子の苦勞も知っている。しかし「それ」が今までと、今と……明らかに「何か」が違っていた。

静まり返った室内、中に居る誰もが響子と……殴り倒されてしまった男子生徒を見つめている。彼等の眼差しを見て、君彦は急に鳥肌が立った。色情霊とは何の関係もない、生きた人間達の姿を見て背筋が凍ったのだ。

侮蔑の眼差し、畏怖が込められた眼差し、そして嫌悪感を露わにした眼差し。

そんな悪意に満ちた視線が響子に集中している。その光景に君彦の胸に激しい痛みが走った。響子の表情だ。

響子は男子生徒を殴り倒し、当然それは故意の暴力ではなく自分の身を守る為のものであると君彦は信じているが、それでも響子は自分が相手に暴力を振るったことに少なからず罪悪感を抱いているのか、苦しそうな表情をしていた。

今にも泣きそうなの、この世に自分の味方なんて誰もいないのだとでも言うような、そんな孤独に満ちた表情だった。しかしそれは相手に暴力を働いたからそうなのではないんだと、君彦は少し時間がかかってから察する。

響子は周囲の冷たい視線に晒され、辛い思いをしているのだ。

彼女から笑顔が失われてしまう。

せつかく心を開きかけていたのに

！

君彦は事の顛末を全て把握することなく、頭で考えるより先に体の方が響子の元へと向かっていた。

## 10分前の出来事

登校途中で君彦と会い、ついでに色情霊を一時的にだが被つてもらった響子は心の中で感謝していた。思いのひとつひとつを言葉で述べることは響子にとつてとてもなく困難なことであつたが、それでも少しずつ響子は変わりつつある。

異性である君彦と教室前まで一緒に登校していることが何よりの証拠であつた。

もうすぐ始業ベルが鳴りそうだったからか、廊下には生徒の姿がまばらに見える程度で少々急がなければならないと、二人は言葉を交わさなくても十分理解していた。

「それじゃ志岐城さん、今日も昼休みになつたら迎えに行くから」

「う……ん、わかった……」

まだぎこちなさは取れなかったが、響子なりにとても素直に返事をしたつもりであつた。

君彦もまた慣れるのは少しずつでいいんだと、暗黙に促しているのか怪訝な表情になったりはしない。むしろ響子が異性に慣れる為の自分が練習台にでもなつたかのように、常に笑顔で接してくれていた。

今では本当に素直に、そんな君彦の心遣いが嬉しく思えた響子。

そのまま響子に背を向けて君彦が自分の教室へ入っていく様子を、教室のドアの前でじつと見つめる。

君彦や響子以外、霊を見ることが出来る人間以外には目にするこゝとが出来ない猫又と口喧嘩したり、怒りの余り拳を振りかざす仕草をする君彦の姿は、霊が見えない一般人の目から見れば「奇妙」と

言わざるをえない。

猫又の姿が見えなければ、君彦という青年のひとなりを知らなければ、恐らく響子も他の者達と同様に怪訝な眼差しで君彦のことを変人扱いしていたことだろう。

現にまだ廊下に残っている生徒の何人かは、君彦に目を配りながらこそそこそと何か小声で話したり、指をさして笑ったり、異様な者でも見るかのような眼差しで君彦を嘲笑していた。

そんな視線に晒されても、君彦は何も気にしていないのか、それとも気にしないようにしているのか、それは本人に聞いたわけではないからわからないが、君彦は何事もないように普段と変わりなく、足元に猫又という猫が「居る」前提で会話し、戯れていた。

その様子は開けっ放しだった君彦達の教室のドア越しからも、よく見て取れる。

教室内では君彦が猫又との会話を止め、朝の挨拶の為に話しかけてきた黒依にまず声をかけ、それから何人かのクラスメイトと挨拶を交わしている姿が目に入った。

いつまでも隣の教室の様子を見ている場合ではない。

ハッと我に返ったように響子は気を取り直して自分も教室へと入っていく。するといつものぴりぴりとした空気がまず響子を襲った、それまで教室内で他の生徒とお喋りしたり、生徒同士で遊んだり、喧騒に満ちていた教室内が一気に静寂に包まれたのだ。響子が教室内に現れてから……。

それまで君彦と一緒に登校していた時は照れながらも笑顔を保っていた響子であったが、一気に表情が曇る。

まるでこちらの顔の方が本来のものであるかのように、愛想良く笑顔を振りまくことなどせずに、どこか不貞腐れたような表情で自分の席へと真っ直ぐ歩いて行く響子。

しんとした教室内で席へ着く為に椅子を引く音が妙に大きく聞こえる、まるで教室内に響き渡るような感覚だ。

誰とも視線を合わせようとしていないが、教室中から響子へと集

中的に見られているのがわかる。まるで針のむしろだ、ピリピリとした妙な空気が響子の息を詰まらせる。

そんな時、何の前触れもなく一人の女子生徒の声が聞こえてきた。

「この男好きが」

響子の表情が凍りつく。

指名されていなくてもわかる、誰のことなのか、誰に向けて何のことを言っているのか、十分過ぎる程に理解出来る。

例えばそれが響子が意図していたことでなくてもこれまでの状況や出来事を見れば、そんな風に言われても仕方ないとさえ響子は思っていた。ただ「そうなる」ことが少し遅かったただけなのだ。

いつかはこうなると、響子自身が一番分かりきっていた。

中学時代がそうであったように。

そしてこの一言が教室内に居た生徒の心に火を点けてしまった。

「そうよねー、志岐城さんってすごくもてるものねー」

「なのに自分は興味ないって感じですましてさ、なんかそういうのって見ててすっごく腹立つんだけど」

「でも本当は男に媚びてんじゃないの？ でないと男子達があんなにちやほやしないでしょ」

「そうね、きっとそうだね。ああやだ、私はあんな風になりたくないわね！」

笑い声と共に聞こえてくる冷たい言葉、今まで心の中で思っていたことを一度口にする、もうその勢いは止まらなかった。

響子の抱えている問題を何も知らない彼女達は、響子が男にもっているという光景を目にせずと妬んでいたのである。男に言い寄られることを快く思っていないにも関わらず、響子のそんな気持ちを理解する者などこの室内には誰一人としていなかった。

ただただ悪意に満ちた眼差しで、一方的な思い込みで、歪んだ解釈で、彼女達は響子を批判する。

しかし響子は反論しなかった。

言っても無駄だから、それが主な理由であつたが何より響子はこれ以上誰とも揉めなくなかつたのだ。ただでさえ響子には敵が多い、色情霊に取り憑かれてる以上その色香によつて惑わされる男から逃れる術は護身術だけである。

しかし傍から見ればそれは響子による一方的な暴力として他人から捉えられてしまう、それがわかつてても響子は自分の身を守る行為は暴力でしかない信じ、男だけでなく同性からも距離を遠ざけられてしまうことを覚悟の上で防衛を続けていた。

そして今、それが多くの敵を作ってしまったっている。

彼女達の言うこともわからないわけじゃない、誤解であるのだが響子にとってはどうしようもないのだ。

『全て色情霊という悪霊のせい』などと説明出来るはずもない。

実際色情霊に取り憑かれている響子でさえ、君彦と初めて出会い説明されてもすぐに信じることなど出来なかつたのだから。

特に親しい付き合いをしてきたわけじゃない他人ならばなおさらだ、事情どころか弁明にすら聞く耳を持つてくれないだろう。

悪意に満ちた罵りは、なおも続いた。

朝のホームルームが始まるまでたつた数分だつたはずなのに、響子には数時間のように感じられる。

早く、早く始業ベルが鳴ってくればいいのに。

心の中で切実に願う。何度も何度も叫び続けた。声には出さず、心の中で呪文のように何度も何度も響子は繰り返した。

そしてようやく始業ベルが鳴り、しばらくすると担任が教室へとやって来た。

生徒達は何事もなかつたかのようにそれぞれが席に着いて、いつ

も通りの光景へと戻る。

しかし一部の女子の視線は未だに冷たかった。

刺すような眼差しで響子を一瞥し、それから近くの席に座っている女子は小声で「死ね」「クソ女」などと言う悪口雑言を繰り返し、やがてそれは授業中ずつと絶えなかった。

休憩時間になる度に響子は教室内に留まることがいたたまれなくなり、短い間ではあるが教室から出て行き一人で過ごそうとする。しかしすぐにまた始業ベルが鳴って教室に戻らないといけない為、ほんの数分しか響子に安らぐ時間は与えられなかった。

しかし本当の意味で響子に安らぎの場所などありはしない。

教室から出て行っても、クラスメイト達の視線と言葉が頭から離れず、廊下にいる他の生徒の視線でさえまるで自分を蔑むような眼差しで見つめているように感じられた。彼等にとっては響子とは全く関係の無い日常会話だとしても、すっかり心が傷付いてしまっている響子にとっては自分を侮辱する言葉に聞こえていた。

どこへ行っても一人きりになれる場所はない。どこへ行っても生徒や教師がいる。孤独になれる場所なんて限られていた。しかしすぐにまた教室へ戻らなければいけないので、あまり遠くへ行くことも許されない。

それならばこのまま体調不良を訴えて早退すれば良いのではないかと、ふとそんな考えが響子の脳裏をかすめたが、どうしてもそれは出来ない。もし早く帰宅するようなことになれば伯母（伯父？）の蝶野蘭子（志岐城則雄）に心配をかけてしまう、それだけではどうしても避けたかった。

よって早退することも出来ず、悪口雑言を浴びせる他の生徒から完全に離れることも出来ず、再び響子の耳に始業ベルの音が響いた。どんなに早く歩いても教室から遠く離れることは出来ない、歩いても歩いてもまたすぐベルによって同じ場所へと戻されてしまう。苦痛でしかない場所だとわかっていても、学校にいる限り響子が戻る

場所は地獄のようなあの教室でしかないのだ。

休憩が終わり教室へ戻ると、冷やかな視線が響子に集中する。そんな視線に耐えながら響子は自分の席へと向かう。

あからさまに響子の持ち物が無くなったり、机に落書きをされるというような苛めはなかったが、視線と言葉だけで十分ダメージは大きかった。孤独の中にいる響子にとって、唯一心を晴れやかにする存在のことを思い出す。

しかし今は会いたいとは思えなかった、少なくとも今は。

きつと今の自分は酷い顔をしているだろう、きつと彼を心の底から心配させるような酷い表情をしていることだろう。

彼とは笑顔で向き合いたい。

君彦とはお互い笑顔で会いたかった。

静かな地獄であつた午前は終わり、遂に昼休みとなつてしまった。昼休みになればきつと君彦達がいつものように自分を誘いに来るだろう、どうやって誤魔化そうか、どうやって会わないようにすればいいだろうか。そんなことを考えながら自身の手作り弁当をカバンから取り出し、そそくさと教室から出て行く為に席を立とうとした時、またしても心ない女子からの痛烈な攻撃が始まった。

「また男と逢引き？ もてる女は忙しいわよねえ」

聞こえないフリをする、響子は口元を一文字に引き締めながら浴びせられる言葉に必死に耐えた。出来ることなら女子に対して暴力を振るいたくない。自分は防衛にのみこの力を振るうだけなのだと、心の中で言い聞かせる。

しかしそれでも何もしてこない響子に対して慢心したのか、他の女子達もこぞつて響子を批判してきた。



「毎日毎日教室出てつて余所で昼ご飯食べるなんて、まるで私達が追い出してるみたいで感じ悪いわよね」

「私達のことを避けてるのはそっちなのにさ」

「どうせ私達女子と一緒に居ても楽しくないってんでしょ、だって男の方が好きみたいだし？」

「男の前でだけ媚びる女つてホント感じ悪い！ それならいつそ男子校にでも行けば？」

「あはははっ、女子は入学出来ないっしょそれ！」

「ほら、マンガとかでよくあるじゃない！ 男のフリして女子が男子校に入るっていうやつ！」

「シャレになんないわよ、それじゃ志岐城さん男子校の生徒みんなとヤッてんじゃない!？」

「うっわ、何それ不潔！ でも有り得ない話じゃないわよねー、今だって疑わしい位だし」

罵りは続く。少数のグループが何組かに分かれ、その誰もがたつた一人をターゲットにクラス全員に聞こえるようわざと響子のことを笑いにした。

早くこの教室から出て行けばいいのに、足が思うように動いてくれない。

いつの間にか響子の両足は小刻みに震えて、歩こうとしたら足がもつれて転びそうになる。同時に全身も微かに震えていた。この震えは自分のことが笑いにされているという怒りから来ているのか、クラス全員から除け者にされ世間で言うところの「苛め」を受けているという辛さから来ているのか、響子にはどっちとも言えなかった。

ただひとつわかることは、このクラスには誰一人として響子のことをかばうような人間がいないということだけだ。

全身の重だるさが取れていないので、鏡なしでその姿を確認することは出来ないが、恐らくまだ響子の背には色情霊が取り憑いてい

るはずである。にも関わらず教室に残っている男子生徒は誰も響子にすり寄って来たりはしない。

ただ男子生徒の全員が、女子生徒全員から非難を浴びている響子のことをじつと遠めに見つめて来るだけだった。

悪口雑言を浴びせる女子生徒に注意することも、響子を助けに入ることも、この現状を担任に報告しに行くことも何もせず、ただ黙って事の顛末を見守るように、じつとその場から動かない男子達。

響子は彼等の助けを待っているわけじゃなかった。

ただなぜ彼等が色情霊による奇行に走らないのか、それが少し気にかかっただけである。

しかしすぐにまたそんな気がかりは消えてなくなった。

静まり返った教室に女子の声だけが響いて来て、その場から逃げ出すことも立ち向かうことも出来ず、ただ自分の席で立ち尽くすだけの自分が情けなくて、悲しくて、どうしようもない状態で一人耐えていた時。

『助けが必要ならくれてやるわよ?』

全身に鳥肌が立つ程の囁き声が響子の頭の中で響いて、一瞬どきりとした。

それは耳で聞き取ったものではない。直接頭の中で声をかけられたような異様な感覚で、その声の持ち主が教室内の生徒達のものではなく、自分に取り憑いている色情霊のものであると、響子は誰に確認するでもなく瞬時に察した。

しかし後ろを振り向いたところで響子の目に映るはずもない、今まで一度も鏡ごし以外で色情霊を目視出来たことがないからだ。

嫌な予感がして、響子は思わず身構えた。

先程の言葉の意味が一体どういうものなのかわからないが、悪霊の一種でもある色情霊が自分を守る為に何かをしてくれるはずがな

い。あるとすれば悪意ある行為だけだと、それだけはよくわかって  
いた。

突然、まるで鋭い針で刺されたような視線と気配を感じた響  
子は周囲に立ち尽くしている男子生徒に、次々と視線を走らせた。  
それまで色情霊の色香に惑わされることなく正常を保っていた男  
子生徒達の視線が、明らかに変わっている。

しかしこれまでのように色情霊に取り憑かれている響子に対し、  
性的な何かを持った目ではなかった。性的なことが目的で惑わされ  
ているのなら、既に回りの視線などお構いなしで響子めがけて行動  
を起こしているはずである。

それがないということがかえっておかしい。

今までと全く反応が異なる為に響子は未知の恐怖に晒されている  
ような感じがした。

何が起きるかわからないこの状況で響子は警戒しつつ、すぐにで  
も教室を出て行く段取りにかかった。色情霊の一言で体の震えは止  
まった。まるで金縛りのように体の自由がきかなかったのが嘘のよ  
うに、今はどんな攻撃が待ち受けていようとそれに対処する準備は  
出来ている。変わらず女子達は響子のことを罵り続けているが関係  
ない、そんな悪口雑言なんていつものことだ。

これまで直接なかったのが不思議な位なのだ、中学の頃を思い出  
せば納得がいく。

あの苦境の日々を耐えてきた、吠えるだけの苛めなんて可愛い位  
だ。

問題は響子に対して直接いかかわしいことを迫って来る「男」な  
のだ。

響子の敵は口だけ達者で陰湿な苛め方を好む「女」ではない、一  
歩間違えば力で圧倒的に負けてしまう「男」の方だ。

冷徹な言葉をこぞって浴びせて来る女子生徒のことはお構いなしに、響子はただひたすら男子生徒の視線や動きに注意を払いながらその場から離脱しようとしたその時だった。

一人の男子生徒が響子に向かって歩を進めて来る。それを見逃さなかった響子は近付いて来る男子生徒から距離を離すような形で歩みを早めた。

その瞬間、きらりと何かが光ったような気がした。

それは刃物のように映った。

瞬時に「刺される」と判断した響子は反射的に、殆ど本能的に攻撃を避ける為向かって来た男子生徒の方へと身を翻し、そのまま得意の右ストレートをお見舞いしてやる。

響子が素早く回避したことで男子生徒の軌道は逸れ、ともに響子の攻撃を受けると整然と並んでいた机にぶつかり、床の上に突っ伏した。机にぶつかった時の大きな物音で、男子生徒が落としたカッターナイフが音を立てて床の上に落ちてても、誰一人として気付いていない様子である。

倒れた机の中から教材やノートがばさばさと床の上に放り出された時、男子生徒の手から落ちたカッターナイフはそれらに紛れて、完全に他の生徒の目から逃れる形となってしまう。

周囲から一斉に悲鳴のような絶叫がこだまする。

誰一人として男子生徒が響子を襲ったとは考えていない。

響子に近寄った男子生徒を、響子が突然殴ったように認識している様子だった。

教室内にいる生徒全員の目を見ればそれは明らかである。

今まで何度となく自分に危害を加えようとする男を殴り飛ばして身を守り続けてきた響子であったが、こんな風到大勢の人間が自分

に非難の目を浴びせたことはない。

怪訝そうな視線で、侮蔑を込めた眼差しで、畏怖を交えたように一瞥されたことはあっても、一方的に敵視されたのは初めてかもしれない。それもクラスメイト全員から、同時に、一斉に。

男子生徒が机にぶつかって倒れた時の衝撃音を最後に、教室内は水を打ったような静けさに包まれ、空気が張り詰めて行くのがわかる。悪口雑言の嵐から突然沈黙に閉ざされたからなのか、それとも今までにない状況に響子の心が動揺しているからなのか、きいんという耳鳴りと、どくんどくと心臓が激しく鼓動する音だけが響子の耳に響いて来る。

そんな中、くすくすと軽薄に笑う女の声が聞こえてきた気がした。

頭の中が真っ白になって、自分がどこを見ているのか焦点が定まらずに硬直していると、静寂に満ちた室内で若い男の叫び声が響き渡った。

「志岐城さん!!」

響子はその声に気付き視線を上げた時、目の前には自分がかばうような形で立ち塞がる君彦の大きな背があった。

## 10分前の出来事（後書き）

いつも拙作を読んでくださってありがとうございます

第一話からここまで読んでくれた方の中には既に気付かれてる人がいるかもしれませんが、最近「書き方」に迷いがあるせいかな…序盤の頃と比べて若干文章が固くなってるような気がしてなりません（  
^ー^；）

どうにか私の脳内にある情景を読者様にも伝えられるよう、日々勉強となっているのでまだまだ書き方にブレや迷いが出るかもしれませんが、少しでも文章能力が上達するように頑張っていきます。  
なのでこれからも「猫又と色情狂」を楽しんで読んでもらえたら嬉しく思います。

どうぞよろしくお願いいたしますです（\*´、\*）ノシ

## 気付く

響子は一瞬、既に今昼休みに入ってること自体忘れかけていた。だからかもしれない。今自分の目の前に他のクラスであるはずの君彦がこの場に居るのがとても不思議に思えた。

頭の芯がぼんやりとして思考が思うように働いてくれない。周囲から浴びせられていた冷たい視線はいつの間にか響子から、響子のことをかばっている君彦へと注がれていた。

響子が何も言えないまま君彦の背を見つめ続けていると、突然君彦は振り向き話しかけて来る。

「志岐城さん、大丈夫？ 怪我とかしてない？」

「あ……あたしは別に、平気……」

なぜそんな風に聞かれたのか一瞬わからなかった。これも思考が鈍くなっているせいかもしれない。それ以前に他人から自分の心配をされることなんて滅多になかったからなのかもしれない。

咄嗟に言葉を返したが、君彦の気遣いがとても不自然で違和感のような感じずにはいられなかった。なぜなら響子は目の前に倒れ伏している男子生徒を思い切り殴り飛ばしたからである。男子生徒がカッターナイフで響子のことを襲ったなんて、教室内の誰一人として気付いていないし、恐らく見てもないだろう。

クラスメイト全員が響子一人を悪者扱いするような眼差しで、侮蔑していたのだから。

周囲からすれば響子は一方的に暴力を振るうような乱暴者であり、クラス共通の「敵」であるのだ。

色情霊に惑わされていない男子生徒もその中に含まれる。色香に惑わされていなければ彼等は正気を保ったままで、響子の振る舞い

を目の当たりにするのだから、その暴力的な行動で一線引くのは分  
かりきっていた。

今まで身内である蝶野蘭子（志岐城則雄）以外、響子に手を差し  
伸べてくれる人物などただの一人もない。

ただここに来て初めて、響子に対して優しく手を差し伸べてくれ  
る人物に出会えたのだ。

その相手が今　　男子生徒に暴力を振るった響子のかばっ  
てくれている。

響子にはそれがとても嬉しくて堪らないはずなのに、急激な不安  
に襲われた。

なぜかはわからないが、とても嫌な予感がしたのだ。  
そしてそういう予感だけはなぜか当たってしまう。

「なんでそんな女をかばったりするのよ、普通逆じゃない!？」

今まで散々響子のことを罵っていた女子生徒が騒ぎ出す。それま  
で男子生徒を殴ったという驚きによって言葉を失っていた彼女達で  
あったが、余所の生徒である君彦の乱入によって敵意を蘇らせたの  
だ。

その言葉を皮切りに女子生徒がこぞって君彦のことを非難し出し  
た。

「あんたでしょ、志岐城さんと仲が良いっていう男は。」

今こっちは取り込み中なんだから余所者は引っ込んでくれない  
!？」

「あんた達もしかしてデキてんの!？　やっだキモイ!」

「てゆうかさあ、こいつってほら……あの有名な猫又って生徒じゃ  
ない？」

「ああ知ってる!　ここら辺じゃ頭のおかしい奴って有名よ」

「頭のおかしい男と暴力女か、最低のカップルね!」



猫又をターゲットに悪口雑言を浴びせ笑い者にする女子生徒達、下品な笑い声を上げて指をさす。その光景を、言葉を見聞きした時……響子の中で何かが弾けた。

体中の血液が逆流するように全身が熱くたぎってきて、腹の奥がふつつつと煮えたぎるような感覚だった。

気付いた時には響子のことをかばっている君彦を押しつけるような形で、響子が前に出て怒声を浴びせていた。

「あんた達、いい加減にしなさいよ！」

怒りに任せた怒声は教室中に響き渡り、一瞬にして静まり返った。今まで散々沈黙や無抵抗を貫いて来た響子がここで遂に怒りを露わにする。

この高校に入学して、このクラスに入って、自分に対して卑猥な行為を仕掛けて来る男子生徒に鉄拳を浴びせたことはあっても、それ以外の生徒に向かってこのように声を荒らげたのは初めてだった。

「今こいつのことは関係ないでしょうが、あんた達が貶めたい相手はこのあたしでしょ!？」

だったらこいつの悪口なんて言わないで!

こいつのことを悪く言っているのはあたしだけなんだから、誰一人としてこいつのこと悪く言うのはあたしが許さないわよ!」

照れ隠しでもなくそう言い放ったのは響子の本心であった。

性格の歪んだ自分が善良な君彦のことを悪く言うのは仕方がない、それは響子自身の性格が歪んでしまっているから悪いようにしてしまうのは不可抗力なのだ。ただし君彦が響子以外の他の誰かから悪く言われるような、そんな悪い人間ではないことは分かりきっている。だからこそ響子は自分以外の人間から、君彦が悪く言われるの

は堪らなく嫌でしょうがないのだ。

君彦が周囲から悪意ある言葉を投げかけられるような、悪い人間でないことは響子が一番わかっている。

響子のかばって味方してくれている良い人が、酷い扱いを受ける必要はどこにもないのだ。

こいつはとても軟弱で、お人好しで、いつもへらへら笑っていて、どこか頼りない男だ。

だから自分がかばってもらわなくてもどこにもない。

むしろ自分が守ってあげなくちゃ、危なっかしくて仕方がない。

本当は「守られたい」って思っても、守られるだけじゃ駄目なんだ。

今まで響子に集中していた冷たい視線が、一斉に君彦の方へと移って行く。響子をかばったことで響子一人に定まっていた敵意が君彦にも定められたと瞬時にわかる。君彦は関係ない、ましてや別のクラスの人間、巻き込むわけにはいかなかった。

響子は自分を守ろうとしている君彦の腕を掴んでこちらへ無理矢理向かせる。

その時、響子は初めて見た気がした。

真剣に自分を守ろうとする逞しい君彦の真剣な面差しを。

しかしそんなことで心が揺れている場合ではなかった。今はとにかくこの状況から君彦を追い出さなければならない。

「あんたもよ。

あたしのことは放っておいてちょうだい。一人でも全然平気なんだから！

大体あんたには関係ないことなんだし、いちいち首を突っ込んで来ないでよ。

前から言ってるでしょ、余計なことに自分から巻き込まれようとしなくて！」

そう告げる響子に、君彦はいつものような能天気な笑みを浮かべることなく、どこか不機嫌を思わせるような厳しい表情で響子を見つめ返して来た。こんな風に君彦が笑みの無い顔を見せたことは無い。怒っている風にさえ見えた。

君彦は自分の腕を掴んでいる響子の手を、逆に握り返す。ぎゅっと力強く握って来る君彦の手に響子は心が折れそうになった。

「放っておけるわけじゃないか。それこそ今まで何度も言うてることだ。」

友達が困ってるのに見て見ぬふりなんて出来ないよ。それに志岐城さんが泣いてる姿なんて、オレはこれ以上見ていたくないから」

そう言われて初めて気付いた。響子の頬に温かい雫が流れている。頬を濡らす涙に片手で触れ、それを目にしようやく気付いた。

周囲の人間に罵られ、罵倒され、敵意を向けられたことなんて今までに何度もあった。

その度に辛かったけれど決して人前で涙など流さなかった。それが今こうして次々と涙が零れ落ちて、止めようと思っても止まらなくて、次第に視界が歪んでしまう程に涙が溢れて行く。意外そうに涙を拭い続ける響子に、君彦は胸が痛くなった。

こんなになつてまで虚勢を張って来た響子、強くあろうとした健気な響子を見て、今まで響子が「何か」と一人で戦ってきたことに今初めて気付いた。

そういえば、初めて会ってからこれまで……響子が友達と一緒にいる所を見たことがあっただろうか？

一緒に弁当を食べることになった時、響子に躊躇いがなかったことになぜ自分は疑問を抱かなかったのだろうか？

クラスに友達がいたのなら、何かしらそういう素振りがあったはずだ。

今日はクラスの友達と弁当と一緒に食べるから行けない、とか。

一緒に食べる曜日を決めるとか。

そういったこともなく、自分が頼めば響子は何でも了解してくれると、どうしてそんな風に安直に思えたんだろう。

響子が抱えている問題は色情霊だったはず。それがなぜこうやってクラスの殆ど全員から邪見にされなければならないのか、それを何とかしなければ響子が本当に心からの笑顔を見せてくれるはずがない。

そう察した君彦がクラスメイト全員に向かって言葉を投げかけようとした時、先に行動したのは慶尚だった。

慶尚は勇んで言葉を投げかけようとした君彦の肩を掴んで止めると、相変わらずの表情でねめつける。

彼もこの者達と同類なのかと一瞬考えてしまったが、どうやら違ったようだ。

慶尚は君彦を片手で制したまま、響子のクラスメイト全員に向かって低い声で脅しをかける。

「何がどうなってるかよくわからないが、これ以上何かするようならこの変人が黙っていないぞ。」

こいつの影の噂を知っている人間ならある程度わかっているはずだからな。

妙なことになリたくなければ、もう志岐城にちょっかい出すのは止める……いいな」

言葉の半分以上が脅迫であつたことは間違いない上に、でたらめな部分も含まれているのは承知出来ることであつたがクラスメイトの全員が慶尚の外見と口調ですつかり萎縮してしまい、反論する者は誰一人としていなかった。

しん、と静まり返つた教室内であつたが黒依の黄色い声によつてようやく時が動き出したように、全員の視線が黒依に集中した。

「とにかく、これまでのことは一旦全部なかつたことにして。早くお弁当食べに行こうよ。

嫌つてゐる人間に向かつていつまでも醜い言い争いをしたつて時間の無駄だし、それこそ馬鹿馬鹿しいものね。

相手にするだけ自分が愚かしいって思えばいいじゃない。

だから早く行こうよ、君彦くん、志岐城さん」

その言葉に同意するように慶尚は掴んでいた手を君彦の肩から放すと、無言のまま教室から出て行つた。まだ刺すような視線がいくつがあるが、その視線から逃れるように教室を去るのはどこか釈然としないがこのままここに残つた所で自分に何が出来るのか、具体的なことがわからない以上、響子の状態を見て一旦この場から去つた方が得策かもしれないと思つた君彦は、響子の肩を片手で支えながら一緒に行こうと促す。

響子はまだ涙を抑えきれていなかったが、黙つて君彦に従い、手には弁当の入つたきんちやく袋を掴んだまま一緒に教室から出て行つた。昼休みが終われば響子は一人でこの教室に戻らなければいけない。それまでに何とか響子を宥め、対策を考えなければいけない。きつとこの昼休みはその話題ばかりになりそうだと思ひながら、君彦達は教室の戸をぱたりと閉めた。



## 慶尚の問いかけ

険悪な雰囲気を残したまま教室を後にした君彦達は、いつも弁当を食べている屋上へとやって来た。

慶尚も黒依も、涙が止まらない響子を気遣っているのか。小さく嗚咽を漏らす響子の手を君彦は強く強く握り締める。とにかく落ち着く場所へ辿り着かない限り響子をゆっくり宥めることは出来ないと思ったのか、時折声をかける程度でそれ以上は君彦ですら慰めの言葉を持たなかった。

しかしそんな微妙な接し方が逆に響子にとっては有り難かったかもしれない。今まで決して人前で涙はおろか弱みを見せたことのなかった響子が、今こうして三人もの人間に弱った所を見せてしまっている。これは響子にとって屈辱とも恥ずかしい行為とも言えた。

何より相性が悪いと響子が思っている黒依や慶尚にまで、こんな情けない姿を見られてしまっているのだ。今後どんな顔をして彼等と顔を合わせたらいいのだろう。涙が止まらない中、そんなことが頭の中を微かによぎるが、だからどうするのだという答えを考える余裕までは今の響子にはなかった。

一度折れてしまった心はそう簡単に修復してくれず、零れてしまった涙を引つ込める術もない。ただ今は少しでも長く、それが例えとても格好悪いことだとしても、君彦に手を握り続けて欲しかった。そうしてくれると涙を止められそうだと思えたからだ。折れた心の修復も早くなりそうだと思ったからだ。

屋上に着くまでの間、君彦達は殆ど無言で歩き続けていた。ようやく到着するなり先頭切って歩いていた猫又が声を上げる。

『あゝあ、割と一色即発だったなあ！』

能天気かつ無頓着な台詞を吐いた猫又に、カツとなった君彦が空

いている方の手で二又の尾を引っ掴むと軽く力を込めた。

短く醜い悲鳴を上げた猫又は掴んだ手をぱつと放された瞬間に駆け足となり、屋上の真ん中辺りまで逃げていった。

すると先程の猫又の悲鳴を聞いた響子は泣きながらもくすりと軽く笑い、これまで胸につかえていたものが少し軽くなったように気分までも随分とラクになって、自分から繋いでいた手を放した。

それに気付いた君彦がすぐに響子の方へと振り向くと、そこにはいつものぎこちない笑みが現れていた。

「もう、平気。本当にもう大丈夫だから……」

そう口にする響子のことがまだ心配だった君彦は、これもまた強がって言っているだけなんじゃないだろうかと思うようになっていた。今まで響子が自分達に弱みを見せたことがない所から、今も君彦達に心配をかけまいと平気なふりをしているだけなのかもしれない。しかしそんな風に勘繰った物言いをして彼女の気分を害してしまうとも限らないと思った君彦は、何て言ったらいいのか言葉に詰まってしまうていた。

そんな時、またしても黒依が明るい声で弁当を食べながらも話が出来るだろうと全員に告げる。その言葉には慶尚も賛成したように、早速屋上の真ん中に陣取ると君彦から受け取った弁当を広げて食事にありついた。

何事もなかったように、先程の出来事などお構いなしのように見えたが、それは逆だと君彦はすぐに悟る。変に響子に対し気を使つて、腫れものを触るように扱つかえつて響子に気を使わせることになるんだろうと、黒依と慶尚が取った行動はそうした配慮からであつたのだ。

今の君彦のように、何かにつけて励まそうと宥めようと気遣つても、それは勝気な性格である響子にとっては逆の効果をもたらしてしまう。それならいっそ、これまでのことは一旦白紙に戻したよう



な態度を取って、互いに気を使うのはナシということにしておけば、きつと響子も普段の響子に戻ってくれるだろうと黒依は考えたのだ。少なくとも君彦はそうであると信じていた。

四人それぞれ弁当を開けると、互いのおかずを見ては意見を言ったりして、少しずつではあるがわだかまりがなくなっていき、いつもの会話になりつつあった。響子も彼等の配慮を察して、心のどこかで情けないと思いつつも有り難いと感謝して、とても素直に食事をしていた。今だけは苦手であった黒依や慶尚相手でも、笑みをこぼすことが出来るような気がした。

そんな時ふと、重くのしかかっていたものがなくなっていることに今頃気付く。

重だるい感じがする時は決まって響子の背後に色情霊がべったりとまとわりついていてる時である。しかし今はまるで全身が羽のように軽くなつて空高く舞い上がりそうな程に、体が楽になっていた。

険悪な雰囲気だった教室からこの屋上に来るまでの間、色情霊に取り憑かれていた感覚を気にする余裕が全くなかった響子は、いっどんなタイミングで自分から色情霊が離れたのか、それはわからない。

君彦の登場で色情霊が離れたのか、慶尚が一時的に抜つたのか、はたまた猫又が気まぐれに抜つたのか。

ともかくあの邪悪な色情霊の存在がないことに響子は心にずっと付けられていた重い枷が外されたように、気分までもが晴れやかさを取り戻しつつあった。

弁当を食べている間は、響子に何があったのか……その話題には誰も触れようとはしなかった。

空気を読もうとしない黒依や慶尚ならば何かしらそういった話題を口にするかと思いきや、今日の二人は随分と空気を読んでいるのか、場を壊すような真似はしない。そんな二人の様子が少しばかり気にかかつてはいたが、たまにそんな日もあるんだろうと楽観視する響子。何より食事時にだけは、響子の普段の生活について触れて

欲しくなかったから有り難いことだと思った。

ここまで一緒に行動するようになるのだから、いつかは話す時が……明かす時が来るかもしれないという予測はしていた響子。それがいつなのか明確でなかったが、君彦という存在のおかげでそんな日は思っていた以上に早く訪れるのであると、最近になってよく思うようになっていた。

今まで他人に対して全く信用することの出来なかった響子がそんな風に思うようになったのは、殆ど奇跡に近かった。色情霊のせいで男性不信に陥り、男を誘惑しているんだと周囲から誤解され、同性から嫌悪されてきた響子にとって、伯父（伯母？）である蝶野蘭子（志岐城則雄）以外の他人は信用することが出来なかったのが本音だ。

それが今、響子自ら彼等を受け入れようとしている。

響子もそれを自覚し、自ら彼等に歩み寄ろうと努力するようになっていたのだ。

ほんの少しだけでもいい。今だけは虚勢を張るのではなく、そのままの自分で接したかった。

まだ心からの笑顔を上手く作ることは出来なかったが、懸命に微笑もうとする響子の気持ちを感じたのか、君彦を始め黒依も慶尚もぎこちなく微笑む響子に対してからかうことなく、自然体のままの態度で接する。

ぼつりぼつりと何気ない会話をしながらも初めて自分の為に手作り弁当を作ってもらった慶尚が、君彦に向かってダメ出しをしては君彦は怒り狂っていた。そんな二人の漫才のような喧嘩を笑いながら眺める黒依と響子。いつの間にか響子から固い微笑みがなくなり、自然な笑顔がこぼれていた。君彦達がようやく弁当を食べ終える頃には先程までの張り詰めた空気のようなものがなくなり、いつも通りの穏やかな雰囲気に戻っている。

随分とリラックス出来るようになったところで、猫又が綺麗なガラス玉の大きな瞳で響子を一瞥すると、今度は君彦へと視線を定め

て話しかけた。昼休みも長くはない。この場で和んでも意味はないのだ。昼休みが終われば響子は一人で自分の教室へ、響子のことを良く思っていない連中がいる巣窟へと戻らねばならなかった。

『おい、君彦。飯が終わったら話し合いとかするんじゃないのか？』

だけど今回の件に関しては、オレ達の出る幕ナシだと思うけどな』

それまで和やかな雰囲気になっていたが猫又のこの言葉によって、再び響子の教室での出来事が蘇った。しかし今はそれ程重苦しく感じることはなく、どこか仲間内で作戦を練る……といった雰囲気では話題に入ることが出来ている。これも恐らく君彦のこれまでの努力と、それに応えるように響子が心を少しずつ開こうとした結果なのかもしれない。

今回ばかりは黒依も余計な茶々を入れることなく大人しくしているが、慶尚は何とも表情の読めない仏頂面で何を考えているのかわからない様子である。

いつも適当でいい加減な態度ばかりの猫又がいつになく真剣に語った言葉に、君彦は首を傾げるような仕草をしながらオウム返しのように聞き返した。

「出る幕はないって……、それは一体どういうことだよ？」

とりあえず志岐城さんがこれ以上不利な状況にならないように、色情霊を何とかしないと駄目だって話のことだろ。

ここに居る四人で何とか意見を出し合ってたなあ

「

「だから今回の問題は色情霊が全ての原因じゃないかもしれないってことだろうが」

君彦が最後まで話をし終える前に慶尚が横から口出しをした。猫

又の言葉の意味をきちんと理解していないように感じられた慶尚が、少し苛立ったような口調で短く説明すると君彦はまたしても腑に落ちない表情で眉根を寄せている。

そんな君彦の鈍い反応に腹の奥が煮えたぎる思いがしたが、慶尚は心の内を表に出すことはなく、いつもの不機嫌そうな表情で君彦をねめつけた。普段から無愛想な顔でいた為に、今この瞬間慶尚が不快に感じていても誰もそうだと気付かない。それはまるで計算されたように、慶尚の本音を悟る者は誰一人として……慶尚の守り神である犬神以外に理解する者はいなかった。

いつもと何も変わらないように見えた君彦はまたしても慶尚が自分のことを馬鹿にしていると思い、憤慨したように言い返す。

「だから！ 志岐城さんのクラスメイト達は色情霊の邪気みたいなやつにあてられて、変な風になったんだろ！？」

そうでなければ同じクラスの生徒に向かってあんな酷いこと出来るわけじゃないじゃないか」

しかしその言葉はそのまま猫又によって否定されてしまった、実にあっさりと。

『君彦、あれが人間の本性ってやつなんだよ。』

今回こいつに取り憑いてた色情霊は、教室の奴等全員を操ってたわけじゃねえ。恐らく色情女に殴り飛ばされた野郎だけだろうな。事の顛末を全て見てたわけじゃねえからオレ様には何とも言えないが……。

だが他の生徒達は別に色情霊の邪気であなってたわけじゃねえみたいだぜ。

世間一般で言う所のいわゆるイジメってやつだ。人間の中じゃどこにでもある現象なんだろ、そういうの』

イジメという言葉に響子はぴくりと反応する。自分がいじめられていたという事実を知られることは、とても惨めで居心地の悪いものであったからだ。いつでも強く在り続けようとしていた響子が、実はクラスメイトから苛められていたなんて恥ずかしくて顔を上げていられなかった。自分自身がとても情けなくて、惨めで、恥ずかしい人間のように思えてくる。

しかしこの場の誰一人として響子のことを惨めないじめられっ子という目つきで見ようとも、扱おうとしなかった。そんなことよりも他に解決しなければならぬ問題がある。何が最も重要であるかわかってるような彼等の態度に、響子は安心半分不安半分でその場にいた。少なくとも黒依も慶尚も、響子のことを蔑む素振りを見せてはいない。

むしろ猫又や慶尚と君彦の間にある状況分析の相違に注目しているようであった。

猫又の言葉に「そんなことはない」と言い返してやりたかったが、その自信も今や君彦の中では揺らぎを見せ始めている。霊に関して特に詳しい知識を持っているわけではないので、響子に取り憑いている色情霊にどこまでのことが出来るのか君彦は何も知らない。

ただ「色情霊」と聞けば一体何をする霊なのか大体の想像がつくものの、それが人間の悪意を増大させるようなことまでも可能かどうかと問われれば君彦はその答えを持たない。

自分は余りにも無知で、余りにも非力であった。

それが浮き彫りにされたことで猫又への反論が躊躇われたのである。

そんな時、慶尚がふと、言葉に詰まっている状態の君彦に対して疑問を投げかけて来た。

「お前、本当は一体何がしたいんだ」

唐突な質問に君彦は怪訝な表情を浮かべ、またすぐに慶尚の質問

の意味がわからずに眉根を寄せて聞き返す。すると慶尚は無表情の中にも真剣さを帯びたような顔つきで再度繰り返した。

「お前は一体どうしたいんだって聞いているんだよ。

志岐城に取り憑いてる色情霊を何とかしたいのか、それとも志岐城の回りの連中をどうにかしたいのか。

お前達とはそれ程長い付き合いをしているわけでもないし、どういったいきさつがあるのかもオレにはわからない。だからオレが見た限りのことしか言えないがな。猫又　お前が一体何をしたいのかオレにはさっぱりわからないんだよ。最初はお前の立場を考慮して状況を窺っていたら、色情霊を祓うことを目的として志岐城のことを助けてやりたいのかと思ってた。だが黙って様子を見ていればいる程わけがわからなくなってくるんだよ。お前は仕切りにこう言っているよな。

『志岐城の力になりたい』、『志岐城を守ってやりたい』って。だがそれはどういう意味で助けようとしているんだ？　そもそもお前には色情霊を祓う程の力がないとオレは思っている。未だに祓い切れてないからきつとそうなんだろう。だが色情霊にまつわることで以外にでもお前は首を突っ込んで『何かしてやりたい』と躍起になる。そんなお前の行動を見ていたら苛立ってしょうがないんだよ。色情霊を祓うだけの力があるってんならオレは別に何も言わないし、余計な手出しをしたりもしない。好きにしたらいい。だがそんな力もないくせにお前は綺麗事ばかりを並べ立て、実現出来ないくせに妙に前向きで樂觀的に振る舞う。

そういうのを見ていたら腹立たしくてムカつくんだよ。結局何がしたいのか具体的なことは何も示さないし、悪霊を祓う力を身につける為の努力もしない。知識を深めようとしている様子もない。

だったらお前は何かから志岐城を守るつもりで、何を頑張っているつもりなんだ」

今まで慶尚が腹の中で抱えていた疑問や疑念、君彦にずっと抱いていた不快な感情や思い。それら全てを吐き出した慶尚はほんの少しだけ胸のつかえがとれたような気分になった。しかしそれは慶尚がずっと密かに思っていた言葉を口にただけで、君彦からその答えを得たわけではない。しかしようやく伝えることが出来たという開放感はとても大きかった。

今この状況であえて口にしたのは、これらをはっきりさせることも現状の解決への糸口に繋がるかもしれないと直感的に感じたからである。勿論その確証はどこにもない。もしかしたら話がただ脱線しただけで、現状打破にまでは至らないかもしれないかった。

それでも慶尚はこれらの問いかけをすることで、君彦に何らかの答えを求めることが出来るかもしれないと思い、こうして疑問を投げかけたのである。それらの疑問に君彦がどう答えるのか。それによつてはまた新たな道しるべが慶尚の前に現れるかもしれない。

何から響子を守るつもりなのか。

どうやって救うつもりなのか。

きつかけは何の関連性もないかもしれないが、これを機に君彦の中で何かが変わると　慶尚はそう信じたかった。

## 今はまだ見つからない答え

慶尚からの思いがけない質問に君彦は戸惑い躊躇った。

なぜ今この話なんだろう、というのが質問に対する最初の印象である。今は響子に起こった状況を何とかしなければならぬ時はずだ。なのになぜ今この時に自分が「何から響子を救うつもりなのか」と問われなければいけないのだろう。

どう答えたらいいのかわからない君彦が考えあぐねていると、君彦と同じように戸惑った響子が口を挟んでかばおうとした。

「ちよつとあんた、今はそんなこと聞いてる場合じゃないでしょ！？ そりゃそんなことあたしが言えたことじゃないかもしれないけど、とにかくその質問は今の状況から見て論点がズレてるんじゃないかしら！？」

響子の言葉に対してすぐ隣から聞こえるか聞こえないかという程度の小さな声で「確かに言えた義理じゃないわね」と黒依が呟いたのが微かに耳に届いた気がしたが、とりあえず今は黒依の言葉に対して突っ込みを入れている場合ではないと判断したので響子は無視して慶尚だけを睨み続けていた。横から割って入るように響子が絡んで来たので多少鬱陶しそうな態度をあからさまに出した状態で大きく溜め息をつく、慶尚は両腕を組みながら君彦や響子にもわかりやすく伝える努力を試みた。

「関係大アリだ。仮にさっきの状態が全て色情霊の仕業だとしたら、犬神なり猫又なりをお前の側につけて一時的にでも色情霊を排除しさえすれば今後何も問題ないだろう。だが今回の出来事は色情霊が強く関係しているようには思えなかった。少なくともオレの目にはそう映ったただけだな。悪霊関連とは全く関係のない問題



だとしたら、オレ達みたいな霊能者に何が出来ると思う？

オレも犬神達も悪霊や物の怪を浄霊、あるいは除霊することが専門分野だ。

生身の人間同士のいざこざなんて全くの専門外になるんだよ。それなら解決方法が全く異なるのは分かりきつてることだろうが。だからオレはこいつに聞いたんだ。どういう形で志岐城のことを助けるつもりなんだとな。

色情霊を何とかしたいのか、それとも志岐城の人間関係を何とかしたいのか。話し合うべき論点はそこだろう。

だがこいつの言うことは要領を得ない。だから話し合う内容を簡潔にさせる為に、今この質問をぶつけたんだ」

きつぱりと言い放つ慶尚に響子は言葉を失った。これ以上反論のしようもなかったのだ。確かに慶尚の言うことは的を射ている。間違っているとは思えない。何よりその問題の中心人物である響子自身がこれ以上何かを口出しすること自体、どこか躊躇われるものがあったのでそのまま身を引くしか他に方法はなかった。

響子が引っ込んだことにより話は再び君彦の方へと自然に戻る。慶尚の視線が君彦を捉えた。君彦は今言われた言葉を思い返すように何度も頭の中で反芻させ、誰もが納得いくような理由を探した。感覚だけで答えるものじゃない。今までは感覚で言ってた部分が少なからずあったのかもしれないという思いがあったからだ。

曲がったことは許せない。困っている人がいたら助けてあげたい。みんなを笑顔にしたい。そんな思いが強いくせに、具体的に何をどうするかまでの答えは用意していなかった。いつもその場のぎで解決させていた部分が大きかった。その時その時の判断でうまくいっていたに過ぎない。だからそれはあくまで「感覚」という形で行動していたに過ぎないと、君彦は判断していた。

しかし今回ばかりは事が大きいだけに感覚だけで答えを出すわけにはいかなかったことも自覚している。いや、慶尚の言葉によって

自覚させられたのかもしれない。これまで自分がしてきたことはとにかく答えがはっきりしていた。単純明快だった。

ほんの少し手を貸すだけで解決出来るような問題ばかりだったの  
で、これからもそれでいけば自分が何も困るようなことはないと思  
違った判断を下していたのだ。

しかし慶尚の言葉で君彦は目が醒めた気がした。自分がどれだけ  
甘かったか。深く物事を捉えていなかったか。そして悪霊関係に関  
しても、自分にさほど力があるような人間ではなくただ幽霊が見え  
るだけの存在でしかなかったことに、今更ながら痛感した。

自分は祖父とは違う。明らかに違い過ぎる。祖父である征四郎は  
とても偉大で聡明で、頼りになる男だった。しかし自分はどうかろ  
う。悪霊を祓う力がなければ知識も何もない。慶尚の言う通り自ら  
そういった知識を得る努力をすることも、力を身につけることもし  
なかった自分が、悪霊関連で困っている人間を救おうなんて無謀過  
ぎたのではないだろうか。

自分は祖父とは決定的に違う、全く異なる人間なのだ。祖父  
のようにはない。少なくとも今のままの自分では。

だが君彦は思う。今こうして自覚した所で一体何になるんだろう。  
響子は今この瞬間困っているのだ。助けてやりたい。しかし今回  
の問題は色情霊という悪霊が全般的に悪いせいではない。むしろ生  
身の人間同士の対立なのだ。幽霊が見えようと、知識を得ようと、  
力を身につけようと、それらは今抱えているこの問題に対して何の  
役にも立たないではないか。

今更ながらあまりにも的確過ぎる問題を指摘され、君彦は完全に  
返す言葉を失っていた。

どうすればいいのか、君彦自身わからなくなってしまった。これ  
が仮に悪霊関係が全ての原因だったとしたらそれなりにいくつか解  
決策が思い付く。

君彦自ら悪霊に対して言葉をかけ、説得し、改心させるよう試みるか。それが不可能であれば少々強引ではあるが猫又の力を借りて、力づくで悪事を食い止めるか。後者に限っては明らかに他の者の力を借りているが、悪霊を力づくでどうにか出来ない無力な君彦には猫又の力を借りること以外に思いつかない。悔しいがそれだけではどうにもならないと半ば諦めている節もあった。

しかし今回は猫又の力を借りた所でどうにもならない。相手は生きた人間なのだ。生きた人間に對することが出来るのは同じように生きた人間である君彦が何とかするしかない。しかし一人二人相手ならまだしも、見た限りクラスメイトのほぼ全員に對して働きかけなくてはいけないと把握した時点で、そんな多人数相手に自分一人の言葉が届くんだろうかという疑問がどうしても拭えない。

友達である響子を救いたいと思っている君彦が弱気になっていた。自分は決して凄い人間ではない。超人でもなければ饒舌な人間というわけでもない。どこにでもいる普通の、ただの高校生だ。あれ程たくさんの悪意ある視線に晒されて、臆さない人間などいるだろうか。

どうにか自分を奮い立たせようとする。守ると口にした人間の心が真っ先に折れてどうするのだ。慶尚に指摘され目が覚めてから、君彦は今までに感じたことのない焦燥感に襲われ、そしてそれを懸命に払拭させようとしていた。ここにいる者達に自分が臆病で情けない男だと思われなくなかったから。何があったとしても、自分はいつでも明るく元気で前向きな男なんだとそう思われたかった。

頼り甲斐のある男だと、そう捉えて欲しかった。だからこそ今こうして何の策もないのに必死になって響子を救う手立てを見つけようと、どうしても気持ち焦ってしまっているのだ。

慶尚の指摘により黙り込んでしまった君彦のことを、黒依も響子も心配していた。問題の中心である響子は先程と同様に何も言うこ

とが出来ず、手をこまねいて見ているしかなかった。いつもならここで虚勢を張って自分一人で何とか出来ると口から出まかせを言つて、その場を乗り切っていたところであつたが、響子が置かれていた状況や立場を一番見られたくない人物に見られたことによつて、気持ち之急激に萎んでしまつていたのだ。気の利いたことが言えない。言える立場じゃないかもしれない。そんな思いがある為に、無理してでも君彦をかばおうとする言葉が出て来なかつたのだ。

黒依に関しては状況を見守っているという感じであつた。心配そうに君彦と慶尚を交互に見つめているが、そこで響子のように割つて入るような真似はせず、静かに事の顛末を窺っている様子だ。しかしその瞳の奥ではここぞという展開になつた時、容赦なく君彦の応援に入ろうとする意思が込められていた。例え慶尚が全てにおいて正しい言葉を述べていたとしても、黒依は君彦側に付く氣でいる。そして自分はその手助けをしようとして心の中で既に決めている。

黒依の心は最初から既に決まつているものなので、どのような展開に陥ろうとも慌てることなくただ黙つて静かに見守ることを貫いているのだ。

『別にそんなもん放つときやいいじゃねえか』

沈黙の中、猫又がどうでもいいというような口調で言い放つた。その一言に全員の緊張の糸が切れたのか、君彦に至つては真剣に思い悩んでいたこともあつてその衝撃は他の者の比ではない。必死になつて答えを探している自分のことを馬鹿にされたような気持ちになつて、今にも猫又に向かって怒声を上げそうになつた。

しかし君彦が一人で勝手に怒り狂う姿を見慣れている猫又はそんなこと露知らずといった風に無視すると、全員を見据えながら更に言葉を重ねて行く。

『こいつが浅はかなのは今に始まつたことじゃねえし、それ位わか

つてこっちは放置してんだ。今更どうこう言つて足掻くようなネタでもないだろうが。もし君彦にそんな思慮深さがあつたんならこちとら最初から苦労はしてねえんだよ。それにいじめやらなんやらっていう問題に関してはテレビでもよくやってる内容だろ？ 外部の人間が何か訴えかけたつて、いじめてる側に届くとは限らねえ。むしろ届かないまま、表面的には和解したつもりでも、腹ん中ではこっちのことを馬鹿にしてるつてのがオチだ。今この場でソッコー解決出来るような問題じゃねえんじゃねえかってことなんだよ、こういうのはな』

「でもそれじゃこれから先、志岐城さんはどうしたらいいって言なんだよ！？ 今何とかしないとこれからまたお昼休みが終わったら教室に戻らないといけないんだ。あんな険悪な場所に一人で戻らなくちゃいけないんだ！ その辛さ、お前にわかるのかよ！？」

『お前だつて全部わかつてるわけじゃねえだろうが』

「　　うつ」

すかさず返され、怯む君彦。猫又は構わずに続けた。

『何でもかんでも今すぐ解決しようと思うなつて言つてんだよ。どうせお前の力なんてたかが知れてんだ、犬塚の言葉でそれはもうわかったことだろうが。だったら今は我慢するっきゃねえだろ』

完全に言い負かされている君彦であつたがどうにも猫又の言葉の全てに納得がいかないのか、悔しそうに唇を噛みながらどうにか解決策が思い付かないか躍起になっていると、溜まりかねた響子が声を上げた。

その声音はどこか無理にでも明るく振る舞おうとしているように

も聞こえる。

「もういいわよ猫又……、もういいってば。考えてみればこいつの言う通りよ、あたしが我慢すればいいだけの話。でもこれはあんた達のことを信用してないから一人で耐えるって意味じゃないから勘違いしないでよね？ 色情霊以前の問題だとしたら、この件はあたしに原因があるってことにもなるんだし。だからどうしたらいいのか、あたし一人で悩むんじゃなくて猫又……。あんたにもこれから一緒に考えてもらうことにするから、だから今はそんな風にあたしのことで思い詰めたりしないでよ。何だかあたしが悪いみたいじゃない！ わかった？ とりあえずはこのまま我慢してやるって言ってるの！ だからあんたもそんな顔してないで、何かいい案思いつきなさいよね！」

力強く人差し指を君彦に突き付け、宣言する。口では強がっているものの、その言葉の意味は君彦に向かって助けを、救いを求めていた。もう一人で戦ったりしないと、響子はそう言っていた。

その言葉に君彦の方が救われた気がした。勿論響子が一人で我慢するということに対して納得したわけじゃないが、響子の口から自分を頼っているという言葉を聞いたことに、君彦は喜びを感じずにはいられなかったのだ。

まるで喝を入れられたかのように君彦の顔に少しだけ笑顔が戻ろうとした時。

「さっすが、それでこそ志岐城さんだね！ ほら、志岐城さんもこう言ってるんだからあんまり君彦くんが深く考え込む必要なんてないよ、なるようにしかならないんだから元氣出して行こう？ 犬塚クンの言葉もこれからゆっくり考えていけばいいと思うし」

「ま、別にこいつがどんな答えを出そうがオレはどうでもいいんだ

けどな。ただあまり矛盾したことを軽いノリで言わないで欲しいだけだ。オレがイラつくから」

「結局はそっちが本音ってわけね、あんたの場合……」

慶尚もまた答えを保留することにひとまず合意したのか、軽口を叩くことでその意を表した。響子がすかさずその言葉に突っ込みを入れたのは、すっかりした所を君彦に見せる為だ。

半ば強引にも見て取れたが普段の風景に戻りつつある三人のやり取りを見ながら、君彦は改めて自分に大きな課題が与えられたことを実感する。

慶尚が言ったことは、悔しいけれど正しい。

いずれはそれと正面から向き合い、自分に何が出来なのか、何をすべきなのか、その答えを見出さなくてはならない日がきつと来るだろう。それまでは彼等と共に、いつもの日常を送りながら見つけて行こうと思う。

確かな答えが出たわけではなかったが、君彦は口元を緩め、静かに微笑んだ。

その笑顔を見た猫又もまた、手のかかる子供をあやすような様子で誰にも悟られることなく柔らかな笑みを浮かべた。

## 未解決

昼休みが終わってしまった。結局話し合いは慶尚による詰問で時間を取り、この後響子が教室に戻った後どうするべきかの問題解決にまでは至らなかった。君彦にとって今後の身の振り方を改める重要な問題だっただけに、時間を割く原因となった慶尚に対して文句を言うことはなかった様子だ。

それは問題となった君彦自身が一番わかっているからなのか、いつもならば慶尚に向かって文句のひとつも言っているはずであったが、さすがにそれを口にするにはなかった。しかしわかっているがらも視線だけは慶尚のことを恨めしそうに見つめる君彦。

ひとまず広げてあった弁当などを全て片付け、始業ベルが鳴る前に教室へ戻る一行。この後どうしたらいいのか何ひとつとしてアドバイスすることが出来なかった君彦は、響子のが心配で仕方ない様子で申し訳なさそうに平謝りする。

「ごめんね志岐城さん。結局志岐城さん一人に我慢させることになっちゃって……。オレにもっと何か出来ることがあれば何でもしてあげられたんだけど、こんなに自分が無力だっと思って思い知らされたことはなかったよ、本当に甘かった。これじゃ犬塚の奴に言い返す言葉もない。クラスも別だし、志岐城さんを常にかばうことが出来なくて、本当にごめん」

そうやってまるで自分のせいだと言わんばかりの態度に響子の胸の方が痛み出す。こんな風に謝られても嬉しくない。むしろ彼には自分を支える意味も含めて、笑顔で背中を押してもらいたかった。響子はそんな思いをうまく言葉にすることが出来ず、いつもの憎まれ口で君彦を励ますことしか出来ない自分をもどかしく思う。



「ご、ごめんごめんうつさいのよ！ そんな風に謝られたらまるであたしが悪いみたいじゃない！ あたしは今までと何も変わりなく我慢すりゃいいだけなんだからあんたが気に病むようなことじゃないわよ。だから……そうやって自分のせいばかりしないでよね。これからどうしたらいいか一緒に考えてつてくれるんでしょ？ だったらそれでいいじゃない。あたしはそれで何も文句はないわよ」

顔を真っ赤にさせながら、君彦のことを真っ直ぐに見つめることが出来ずそっぽを向いたまま言い放つ。不器用な中に素直な一面を見せている響子の優しい言葉と心がちゃんと君彦にも伝わったのか、君彦は安心したように柔らかく微笑むと響子の言葉に頷いた。

確かに響子の周囲に対する何かが変化したわけではない。好転したわけでも改善されたわけでもない。それでも確かに響子の心に変化が見られた。響子に対して関わりうと近付き、親切にしようとする人間に対して一方的に拒絶することがなくなった。それだけでも確かな進歩に変わりない。口では相変わらず憎まれ口に近い言葉を発しているが、その中に優しさを見つけることが出来るようになった君彦自身にも進歩が見られている。そんな風に感じる事が出来て、君彦は心から嬉しくて堪らないのだ。

「まるで」ではなく、本当の友達となれたことを喜ばずにはいられなかった。

気持ちとは裏腹な言葉を口に出していたとしても、気持ちはなぜか通じ合っているような気がする。君彦と響子はそんな不思議な感覚に、少しだけ胸が熱くなるような、むずむずするような、そんなくすぐったい感じを喜んでいるかのようだった。

そんな中、二人の距離が目に見えて近く感じられる様子をずっと隣で見ていた黒依からは、時折作り物の笑顔が消失していた。口角を上げて笑みを作ってはいるものの、心から微笑むことが出来ず、複雑な気持ちで二人を見つめる黒依。

胸の奥はもやもやとし、君彦へ向ける響子の笑みを目にするとお

腹の辺りが高熱を持ったように熱くなつて来る。しかしそんな不快な感情を表に出すまいと黒依は懸命に笑みを作り続けた。

響子のことか心配で、響子のことでも頭の中が一杯になっている君彦が、黒依の変化に気付くことはない。

ただ一人、不機嫌そうな黒依の態度に気付いていたのはこの場では慶尚一人だけであつた。

君彦達が屋上から校舎内の廊下へと出て来た時、すでに殆どの生徒は教室へと戻っており廊下にはほんの数人の生徒しか残っていなかった。そろそろ始業ベルが鳴って昼休みが終わってしまうということもあり、廊下で喋っている生徒はいつでも自分の教室にすぐさま戻れる準備だけは出来ている様子だ。

君彦達の足取りは決して軽くはなかったが、だからといって教室に戻らないわけにもいかない。君彦達にこれ以上心配かけまいと務めて普段通りに振る舞おうとする響子の態度がより一層君彦を不安にさせた。何も思いつかないまま遂に教室の前に辿り着くと、響子は君彦達の方へと向き直つて礼をした。

「今日は……その、色々ありがと。なんだかんだ言つてさ、結局毎日のように一緒に屋上で弁当を食ってるから今更つて感じがするけど……一応ちゃんと言つとくね。あんた達と一緒に弁当食べるの、悪くないわよ。結構楽しい。だからさ、明日も明後日もこれから先も……一緒に弁当を食べても、いいかな？」

「当たり前だよ！ 明日もちゃんと誘うからね、志岐城さん！」

「うん、全然OKだよ！」

「確かに今更だな」

遠慮気味に、恥ずかしげに問う響子に対しその場の誰もが拒絶しなかった。むしろ当然だと言うように全員が声を揃えて受け入れる。

響子にとってそれは何より心強い言葉だった。

君彦達は教室のドアの前で一旦足を止めて、響子の背中を見送るようにつめ続けていた。その視線に気付いた響子が振り向き、片手を振って大丈夫だと合図する。満面の笑みとまではいかなかったが、気丈に振る舞う響子の姿に君彦は足元にいる猫又に頼み事をしようと思った。猫又の姿は靈感の強い者にしか見えない。猫又が響子を守ろうとするかどうか自信はなかったが、少なくとも響子の様子を見守る程度の情はこの猫にもあるはずだ。助けるに至らなければ隣の教室に居る自分に伝達するという役割をさせることも可能だと思ったが、やはり猫又に頼むにはあまりにも心許ない。

気乗りしないことには一切関わろうとしない猫又が、響子の身を案じて行動してくれるはずがない。少なくとも君彦はそんな風に猫又の気性を認識していた。せめて犬塚が従えている犬神と同じ位、生真面目で忠実であれば任せることも出来たはずだが。自由気ままをモットーにしている猫又にそんなものは望めない。

むしろ君彦自身が響子を守る為に教室までついて行きたいと思っていた位なのだから、君彦の過保護ぶりも相当なものである。それを把握して響子は君彦に対して気丈に振る舞って見せていたのかもしれない。そう考えると響子より自分の方がよっぽど回りに心配をかけているようで、情けない気持ちになって来た。

とにかく事情がどうであれ全く異なる教室の生徒が、響子の教室までついて行けるはずがない。ここは涙を飲んで堪えるしか道はなかった。君彦の心の葛藤に気付いていたのか、それとも単に後がつかえていたからなのか。

ドアの前で立ち止まっている君彦の背中をぐいぐいと慶尚が押して、まだ開いてもいない教室のドアに君彦を押し付けてきた。

「うぐっ！ この……っ、痛いだろうが犬塚っ！」

「さっさと入れ。もうベルが鳴ってるだろ」

慶尚にそう諭され意識を響子から外して周囲へと向けると、確かに始業ベルが鳴っていたので君彦は最後に響子の姿を見ることもなく急いで自分の教室へと入って行った。

始業ベルを聞いていたのは響子も同じで、君彦達が教室に入って姿が見えなくなると深く深く、深呼吸をする。昼休み直後の光景が思い出される。教室中から注がれる悪意ある視線、侮蔑の眼差し、明らかな敵意。今までずっと友人を作ることが出来ず、一人でいることが多かった響子であったが、あれ程の敵意を向けられたことは今までに一度としてなかったのかもしれない。

一時的に仲間外れにされたことはあっても、ここまでクラス全員から徹底的に排除されそうになったのは初めてである。このまま教室に入って本当に大丈夫だろうか？

もう君彦はいない。猫又も犬塚もいないから色情霊が戻って来ても、被うことが出来なくてまた先程と同じように誰かを操って響子を襲わせるかもしれない。そう考えると怖くて仕方がなかった。今度同じようなことが起こればもう二度とこの教室に戻ることは出来なくなってしまうだろう。ここで問題を起こしてしまったら唯一の身内である蝶野蘭子（志岐城則雄）に心配を、迷惑をかけてしまう。何より自分が学校で仲間外れにされていることが知られてしまう。弱い自分は見せたくないかった。そんな情けない人間だと思われなくなった。そんな思いが強いからこそ、今まで強気に振る舞って来た心がいともあっさりと折れてしまい、教室のドアを前にしただけで恐怖で足が竦んでしまっている。

本当ならこのまま逃げ出してしまいたい。そうすればこんな怖い思いをしなくて済むではないか。しかしそんなことをして一体何になると言っただろう？

逃げ出した後にどうなってしまうのか、容易に想像出来る。午後の授業が始まって教室に戻ってこない響子に対し、訝しんだ教師はそのまま家族に連絡をしようだろう。そうしたら何があった

のか、教師はともかく伯母（伯父？）は黙っていないだろう。

事情説明を求められ、遅かれ早かれ事態を知られてしまう。それは最も避けたいパターンだ。だからこそ響子は逃げる選択肢すら選ぶことが出来ない。最悪の事態を考えれば、このまま険悪な雰囲気を残したままかもしれない教室に戻って、周囲の視線に晒され耐える方が万倍もマシに決まっているではないか。

そう結論付けた響子は思い切り吸った空気を口からゆっくり吐き出して、それから口元を一文字に引き締めた。

完全に恐怖心を払拭出来たわけではないが、このままここで立ち竦んでるわけにもいかない。最悪のパターンを頭の中で何度も反芻させることで、自分の背中を無理矢理押したのだ。教室のドアを横にスライドさせ、響子が教室内を見渡したと同時にそれまで雑談していた声が一斉に静まり返り、沈黙が訪れる。その沈黙がやけに響子の心臓の音を大きくさせたような気がした。怖くて心臓の音がどんどん大きく高鳴って行き、まるでこの沈黙の中にいるクラスメイト全員に聞こえてしまうのではないだろうかという程、響子の心臓は早鐘を打っていた。じわりと嫌な汗が背中を伝うような感じがする。

ドアを開けたほんの一瞬、それぞれのグループ内で楽しそうな笑顔で喋っていた女子や男子がこちらを見た途端に、まるで異物が出現したような顔つきへと早変わりした。一瞬にして笑顔がなくなり、会話も途絶え、冷やかな態度だけが残る。

それでも響子はまだマシな方だと思った。このまま酷い暴言を叩きつけられるよりよっぽどマシだと考えるようにした。てつきりそうなると思っていたのだ。しかし響子の予想とは裏腹にクラスメイト達は冷ややかな態度のまま、悪口雑言を浴びせることも乱暴な扱いをすることもなく、ただ黙って響子を見つめているだけである。

それを救いだと思うようにして、響子は自分の席へと移動した。もうひとつ想定していたことがある。響子が昼休みに屋上で弁当を食べている間、もしかしたら自分の机や荷物がクラスメイト達にと

うにかされていなかったかひやひやしていた。

響子の机がそのまま教室の端か、はたまた教室から出された状態にされていないだろうか。机の上に暴言が書かれていないだろうか。はたまた教室に置いて来た私物が壊されたりなくなったりしていないだろうか。

しかしそれはただの杞憂で終わって響子はほっとした。自分の席に着いて次の授業に必要な教科書やノートを机の中から取り出すフリをして、他の教材や私物が無事かどうかこっそり確認してみる。

するとペンケースも教材もカバンも無事で、どこか変わった様子もない。何もされてはいなかった。響子は安心したせいで小さく安堵の溜め息を吐く。

午前中、そして昼休みに入った直後にあれ程響子一人に対して悪口雑言を浴びせて来たクラスメイトであったが、いじめの定番とも言える行動を起こすまでには至らない様子だったので、これならまだなんとかやっていけると響子は思えた。陰口など以外で私物に手を出したりあからさまで陰湿な行動を起こされたら、さすがに響子も我慢出来る自身がなかったのだ。

だがそれがない以上、ただの悪口を叩かれる程度のことならばすっかり慣れてしまっている響子、一人の寂しさにすっかり慣れてしまっている響子にとって、このレベルで済んだのは不幸中の幸いであつた。

色情霊が関わっていようとなかろうと、この問題は響子の問題。クラスメイトと打ち解け合う必要はないとしても、学校生活を普通に過ごすにあたって今の状態では少し窮屈なのは確かである。何より今後何度か聞かれることだろう。本人に悪気はなかったとしても、あれからクラスメイトとの雰囲気や関係はどうなったか、響子は大丈夫なのかと色々心配してくる君彦がいる限り、このまま完全な孤独であり続けるには限界があつた。

二年生に進級する際にクラス替えがある。それまで平穩無事に過ごせていなければ。ほんの少しでいいからもう二度とあのような陰

悪な雰囲気には陥らないように、響子はどうかしてクラスメイトとの距離を縮める必要があった。

せめて、窮屈に感じない程度に。君彦に色々と心配をかけない程度に、学校生活を送る必要が響子に課せられた。

## 雨の日の記憶（１）～サプライズ訪問～（前書き）

ちょっと表現が違いかもしれませんが、新章突入です  
今までのサブタイと少し趣向を変えてみました。

このサブタイを見ただけで誰がメインの話になるのかすぐにわかった方、しっかり読んでくださってありがとうございます（ノ、  
\*）



## 雨の日の記憶（１）～サプライズ訪問～

### 雨。

季節は梅雨の時期を迎え、じめじめと肌にまとわりつくような湿気が毎日のように降りしきる雨と共に憂鬱な気分させる。空はここ数日ずっと曇天であり、分厚い雨雲で覆われたせいで降り注ぐ日の光も久しく浴びていない。朝から晩までだらだらと降り続ける雨の中、遠くから蛙の鳴き声が合唱のように聞こえて来て、より一層雨が止む日は遠いのだと思い知らされるような気持ちになった。

湿気のせいで全身がびったりと何かが張り付くような感覚を鬱陶しく思いながら、それでもガラス窓の向こうに見える中庭の紫陽花に雨水がかかって水滴を零す光景は、どこか涼しげで鬱陶しい気持ちごはんのわずかに和らぐのを君彦は感じていた。

今は猫又がガラス窓の側で丸くなって寝ている為、テレビの音が邪魔にならないように朝からずっと消したままにしてある。何よりせっかく猫又が大人しく寝ているのだ。テレビの音で起こしてしまい、メシを作れたの、遊び相手になれたのと五月蠅く言われる位なら、外から聞こえる雨音を聞きながら静かに宿題をしている方がずっと良いと君彦は思った。

雨が降っているからといって、猫又が家の中でただ大人しくしているというわけでもない。猫は水に濡れることを嫌う。現に猫又も少し獣臭くなったら君彦がお風呂へ入れようとするのだが、まるで猛獣の檻の中にでも押し込まれそうになると言わんばかりに猫又は力の限り暴れ回る。奇声を上げ、無遠慮に爪を立てて抱き抱える君彦の腕に思い切り鉤爪を食い込ませ抵抗しようとする。

それ位水に濡れることを極端に嫌がる癖に、なぜか雨だけは違っていた。同じ「水」なのに雨が降る日は妙に大人しく、好んで外出しようとするのを君彦が止めた。水に濡れるのが嫌な癖に、雨の場

合は態度を一変させる。猫又は雨に濡れることだけはあまり気にしないようで、それを知らなかった頃の君彦は知らぬ間に猫又が雨の中の散歩から帰って来た時には悲鳴を上げたものだ。

全身ずぶ濡れの泥だらけ。ぼたぼたと水滴を畳の上に落としながら意気揚々と部屋に戻って来た時、もう絶対雨の日に外出なんてさせまいと誓ったものである。

そして今は運よくぐっすり眠っている様子だ。これなら物音を立てて起こしさえしなければ平穩無事に一日をやり過ごすことが出来る。そう捉えた君彦は丸くなって眠っている猫又の大きな背中 に時折視線を向けながら、静かに微笑んだ。今日はバイトも休みで、一日中好きに過ごせる。起こしさえしなければ猫又の邪魔は入らないから、宿題が終わったら次は何をしようか。掃除は大きな物音を立てる恐れがあるから今日は止めておこう。そんな風に穏やかな一日を過ごすと思っていた矢先、君彦の部屋のインターホンが鳴った。その音で猫又が目覚めるのかと少しひやりとしたが、猫又は背中をわずかにぴくぴくとさせただけで、特に起きる気配はない。ほっと一息ついた君彦は音を立てないようにゆっくり立つと、忍び足で玄関へ向かう。

「はい、どちら様ですか？」

微妙な声の加減。後方に居る猫又を起こさない程度の、ただし玄関のドア一枚向こう側に居る人物に聞こえる程度の声のボリュームで君彦は訪問者へ声をかけた。君彦の部屋のインターホンは玄関の外側に取り付けてあるボタンを押すだけのもので、音声を伝える機能は備わっていないかった。よって訪問者がインターホンを鳴らした時には、わざわざ玄関の前まで行ってドア越しに声をかけるか、鍵を開けてドアを開けるかしなければいけない。

玄関のドアには大体覗き穴が付いているものだ。魚眼レンズのよくな覗き穴から外を窺うことが出来、大抵はそこから外の様子を窺

って訪問者の姿を確認するようになっていた。しかし君彦はドアにある覗き穴を故意に使わないようにしていた。

以前は誰か来た時そこから誰が来たのか覗いたものだが、そんな時は決まって君彦が見たくないもの。頭から水をかぶったようにずぶ濡れになった黒く長い髪はまるでわざと隠すように顔を覆っており、その髪の間からは充血した瞳を大きく見開き、覗き穴から君彦が覗くことがわかってるようにじっとこちらを睨みつけて来る女の霊。または全身火傷で肌が爛れ、歯ぐきも目も剥き出しになって、がちゃがちゃと君彦のドアを無理矢理にでもこじ開けようと、始終ドアノブを回し続ける男の霊。

そんな訪問者を覗き穴で確認しなくなかった君彦は、それ以来覗き穴を使うことはやめてしまったのだ。ではどうやって生きた人間と幽霊を分別するのか？ ドア越しに声をかけた所で、それが生きてる人間とは限らない。

君彦は覗き穴を使わない代わりに、誰が来たのか声をかけるようにした。生きた人間の場合、すぐさま自分がどの誰で、何者で、どんな用事で来たのか答えてくれる。勿論答ええない人間もいるが、そんな時は生きた人間であろうと幽霊であろうと、ドアは開けないひとまずそこで自分が知っている者であった場合、用件によって君彦は生きた人間、知り合いだと判断しドアを開ける。

姑息な霊の中には知り合いのフリをして声真似してくる輩がたまにいた。そしてそんな輩と、質問に答ええない者とは共通点が必ずあった。それは君彦だからこそわかるものである。悪意ある霊ならば、必ず君彦は「察知」出来るのだ。

悪意ある霊には悪寒を感じる。仮にその霊が君彦の知り合いのフリをして訪問してきた場合、君彦が誤ってドアを開けようとする瞬間には、決まって必ず悪寒が走るのだ。射竦むような感覚、殺気、嫌な予感、尋常じゃない気配。それは鋭い者なら靈感のない人間でも本能的に備わっているものである。

そんな状態に陥った時、意を決して 心の準備をしてから覗き

穴を使用するのだ。前もって気を取り直しておけば、覗き穴の向こうにどんな姿の者が映し出されようとも恐ろしさは半減される。それでも恐怖は感じるが……。君彦の場合はそうやって訪問者を分別しなければならぬ面倒な部分があった。

君彦が声をかけた時、ドアの向こうでは何人かの声が聞こえてくる。それは聞き覚えのある声ばかりで、君彦は傍と止まった。

今日は何か会う約束とかしてたっけ？

そう思いながら君彦は躊躇なくドアノブに手をかけ、ゆっくりとドアを開けた。その瞬間に君彦は覚悟した。静かで穏やかな一日はこれで幕を閉じた。騒がしくなることで静寂さは失われ、それによって猫又を起こしてしまうだろう。そうしてまた慌ただしくも賑やかな時間を過ごすことになるのだろうと思いつながら、反面そんな状態も割と楽しいから構わないという両方の思いが込み上げていた。

「黒依ちゃん、志岐城さん！………そんで犬塚か。えっと、今日は一体どうしたの」

見ると目の前には黒い髪をポニーテールに結った黒依と、右側に髪をひとまとめにしてある響子。二人ともシンプルではあるがとても涼しげな格好をしていた。水玉のワンピースを着た黒依は梅雨の季節に合った雰囲気でもとても愛らしく映っていたし、響子は無地のインナーに青いパーカー、ネイビー色のカーゴパンツというスタイルは、目鼻立ちの整った響子にしてはとてもボーイッシュに感じられる。ファッションにさほど興味が無いのか、慶尚は普段着と言っても過言ではないただのスウェット姿であった。

三人とも手には何やら教材のような冊子が入ったバッグを手にしており、このまま図書館へ行って勉強でもしに行こうというような格好である。しかしそんなこと君彦は何も聞いていない。そもそも三人が君彦の家を訪ねるというようなことは何一つ聞いてい

ないのだ。まるで一人だけ置いてけぼりにされたような状況で、目をぱくりさせている君彦の表情を見るなり響子が慶尚に向かっていきなり文句を言い出した。

「猫又のこの顔……、犬塚……あんたまさか。こいつに何も言っていないんじゃないでしょうね？」

「ああ、そういえば家が隣だからいつでもいいかと思って、そのまま忘れてた」

何となく状況は飲み込めた。つまり君彦がいない所でまたしても三人で何かの計画を立てて、それを君彦に伝える役割を担った慶尚が伝言し忘れたと、そういうわけらしい。君彦への伝言係が隣近所である慶尚だったことはまだ良しとしよう。そして慶尚が例の如くその伝言を君彦に伝え忘れたことも、とりあえず目を瞑っておく。しかし君彦にとってどうしても理解し難いことがあった。

（何でいつもいつもオレのいない所で何かの計画が立てられるんだ？ え、何？ もしかしてオレ、さり気なく除け者にされてるのか？ いやいや、それなら最初から一緒に遊ぶような感じで三人が訪ねて来るなんてことないだろうし。それなら何でいつもサプライズなわけ？ どうしていつもいきなりな訪問なわけ？）

どうにも腑に落ちないという感じが拭い切れない君彦に構うことなく、響子は犬塚の手抜きに延々文句を言っていた。話が見えてこない君彦が玄関先で固まっていると、ようやく事態を把握していない君彦に黒依が声をかけた。

「ごめんね、君彦くん。別に君彦くんに内緒で遊ぶ約束してるわけじゃないんだよね。ただ君彦くんって平日でも夜間のバイトがあ

るから、いつも早く帰っちゃうでしょ？ 一人暮らしだから家のことも全部自分でしないといけないみたいだから、とつても忙しそうだしなかなか一緒に居る機会もないし。学校でいつも一緒に楽しく居ても、やっぱりどこか違うじゃない。だから君彦クンのバイトがない時にみんなで一緒に遊べないか相談してたの。君彦クンは忙しいみたいだから話し合いをする時はどうしても帰り道だとかになっちゃって、本当は君彦クンも交えて相談したかったけど。一緒に居る時って他の話題になることが多いでしょ？ だからってわけじゃないけど、一応決まったことは全部犬塚クンに伝えてもらうことにすれば、君彦クンとの連携にも繋がるかなって思ったんだけど。なんか使えないみたいだし、ごめんね」

最後の最後で毒の混じった台詞が聞き取れたが、君彦はその部分には激しく同意するものが含まれていたのであえて突っ込むような真似はしなかった。響子から散々お叱りを受けている慶尚にはどうやら先程の黒依の言葉は聞こえていないようである。

つまりはこういうことだ。学校の休み時間や弁当を食べる時間に一緒に居ることがあっても、その時は決まって響子の色情霊に関する話題になることが多かった。響子自身もそれが悩みの種であることに変わりはないし、君彦もどうにか救いたい気持ちがあるということもあって、飽きることなく解決策を論じることには時間を費やしていたのだ。

しかしそれではせっかくの高校生活を楽しく過ごせないのではなか？ 響子の状況も大切だが、それ以上に楽しい出来事を自分達で作らなければ勿体ないのではないか。だからこそうした休日、それも君彦のバイトが出来るだけない日にみんなで集まって高校生らしいことをする、という計画を練っていたのだ。

天気の良い日ならばどこかへ出掛けたりレジャーを楽しむ為に遠出したりすることも出来なくはないが、梅雨の時期と高校生の所持金では限度があった。何より雨の日は出掛けるのが億劫になるとい

う傾向に陥りやすいので、屋内で楽しむ他ない。ならば誰かの家に遊びに行つて宿題を一緒にしたり、ただ何も無いことを話題にして盛り上がったたりするしか遊ぶ内容が思い付かなかったのが現状だった。そして今回決まった内容は、君彦の部屋で宿題をする、というものらしい。

それで三人は手に宿題や教材の入ったカバンを持っていたのである。他に用事があるわけでもないし、一人でいるよりみんなと楽しく過ごした方がきつと良い一日になると思った君彦は、とりあえず今回立てられた計画に反対することなく、彼等の訪問に快く応じた。ただ気になることは、この会話の中でも部屋の奥で眠っている猫又の存在であった。

今は大人しく寝ているが起きたらきつと騒がしい事この上ない。いつもならどこかへ行けと言う所だが、外は終始雨が降っている為、猫又を追い出し帰つて来た際には「お風呂に入れる」という面倒臭い儀式が待ち受けていることは目に見えていた。

よつて猫又を追い出すことは出来ず、かといって猫又が眠りから覚めて君彦達の宿題が終わるのを大人しく待つているのかと問われれば、君彦ははっきりノーと答える自信がある。

ひとまず君彦の部屋に集まつて宿題をするという話を聞いていなかったとはいえ、このまま雨降る中を家に帰すわけにもいかないの  
で君彦は伝言をきちんと伝えなかった犬塚のことは無視して二人を中へと招待した。君彦がわざと無視しようとも犬塚は自ら一緒に部屋に入つて来ることは承知の上だったので、あえてそれ以上何も言うつもりはない。そもそも君彦が怒鳴り声を上げたことでせつかくすやすやと眠りに落ちている猫又をわざわざ起こしてやることもないだろうと、少なからずの配慮からしたものであった。

どうせしばらくすれば起こしてしまうとわかっていても、ほんの数分、数十分だけでも静かなひと時を君彦は保ちたかったらしい。雨の中歩いて来たせい  
か、隣から移動してきた慶尚は別として黒依

と響子は靴を脱ぐなり少し湿った靴下のことが気になってる様子だ。君彦自身はそんなことを気にするようなタイプではないが、そこはやはり女の子だから気になってしまつんだらうと心の中で呟いた。

「うわ、靴もびしょびしょだったから仕方ないけど……。このまま上がるのはちよつと……」

見ると響子が履いて来たスニーカーはずぶ濡れになっていた。明らかに黒依の靴とは違い、響子の靴から徐々に水が染み出してセメントで出来た玄関口を濡らしていく。

「そついえば志岐城さん、来る途中で大きな水たまり踏んじやつたもんね。そのせいかも」

それならこれだけ濡れてもおかしくないと思った君彦はすぐさま箆笥からタオルを取り出し、それを響子に手渡す。

「志岐城さん、はいタオル。とりあえず濡れた靴下を脱いで乾かしておいた方がいいよ。帰りもどうせ濡れるだらうけど、このまま放っておくよりマシだと思うし」

君彦にそう促され、響子は情けない思いでタオルを受け取ると黙って靴下を脱ぎ始めた。白い靴下を脱ぐと君彦が手を差し出す。響子は慌てて脱いだ靴下を君彦から隠すように後ろ手に回すと、君彦に向かってこれだけは譲れないと断言した。

「じ……自分で干すから触らないで！　で、どこにこれ干したらいいの？」

脱ぎたての濡れた靴下に触れられなくなかった響子は咄嗟にそう



叫ぶ。響子の声で一瞬猫又が起きてしまったのかと思ったが、それを気にしてる素振りを響子に気付かれないようにしつつ、君彦は玄関口のすぐ側にある風呂場を指さして答えた。

「えっと、一応風呂場で干そうと思ってるんだけど……」

「わかったわ、ごめん……」

そう言つて響子は君彦から手渡されたタオルで一通り濡れた部分を拭き取ると、案内される程の広い室内ではなかったが風呂場へ君彦と一緒に向かう。二人が風呂場で靴下を干してる間、黒依と慶尚は無遠慮に「お邪魔します」と一声かけて部屋に上がった。君彦が住んでるアパートはワンルームなので、玄関から入るとすぐに生活感溢れる一室が丸見えであつた。その部屋は非常に質素で、男の一人暮らしに必要な物だけが置かれている。祖父母の仏壇、テレビ、箆笥、テーブル。洒落た物は何一つない実に簡素な部屋であつた。

君彦自身に物欲がないのだろうと思わせる室内に娯楽道具はテレビのみ。部屋の片隅に古めかしいラジオが申し訳なさそうにぽつりと置いてあつたが、もう長年使用していないのだろう。埃こそ被つていないものの、電源プラグの付いたコードはコンセントに挿し込まれることなく、しっかり丸められた状態で納められていた。

箆笥もそれ程大きな物ではなく、五段抽斗ひきだしがひとつきり。元々衣服を多く取り揃えていないのか、それとも季節ごとに衣替えをするので他の季節の衣服は押し入れにしまわれているのか。それは黒依達にはわからない。一般的な高校生男子の荷物がこれだけとは思えない。少なくとも慶尚は洒落た衣服に興味があるわけではないが、今の季節に必要な衣服は恐らく君彦の箆笥の中に全てを納めることは出来ないだろうと思つた。慶尚の感覚では高校生男子にしては物が圧倒的に「少ない」と感じた様子である。

慶尚が君彦の隣の部屋に引越してからそれ程日は経っていない

が、以前君彦の部屋に入った時も自分より明らかに物が少ないように感じていた。無趣味なのか、自分と違って物に興味がないのか。同じ間取りでありながら君彦の部屋と慶尚の部屋とでは明らかに空間スペースに差があった。慶尚の部屋には所狭しとAV機器で埋め尽くされており、自由なスペースは殆どベッドの上だけと言っても過言ではない位、慶尚の部屋は物で溢れ返っていた。それに比べると君彦の部屋はどう鼻肩目に見ても必要最低限の物、無駄のない物しか取り揃えていないのだと慶尚はほんの少しだけ感心していた。感心するだけで羨ましいとも尊敬するとも言い難い。むしろ自分にはこんな生活は絶対に無理だ、という程度にしか頭にないようだ。

そう手間取ることもなく直に君彦達は戻るだろうと思いつながら、黒依と響子は何度も足を運んだように適当に席を陣取った。荷物を置いてテーブルの側に座る前に、黒依がアパートの裏手となる硝子戸の方へと目を向けると、丸くなってる物体に気が付く。二又の尻尾をぱたぱたとさせながら寝入っている姿を見るなり、猫又だとすぐに理解した。

黒依は猫又に声を掛けなかった。そもそも黒依は猫又の姿が「見えないこと」になっている。少なくとも慶尚以外の人間の前では。黒依が寝たまま起きる気配のない猫又をじっと見つめている様子を慶尚が気付くと、風呂場の様子に耳を傾けながら小さく問いかけようとした。しかし黒依がそれを遮るように先に口を出す。

「何もしないってば。今日はみんなで宿題をしに来たんだから、大人しくしてるわよ犬塚くん」

黒依の言葉を聞いた慶尚はそれ以上何も言うことなく、まるで何事もなかったかのように適当な場所に座った。黒依はテーブルを挟んだ向かいに座り、君彦達が戻って来るのを待っている。テレビは消したままの状態。一瞬勝手にテレビを付けてやろうかと慶尚は考

えたが、そもそもリモコンが見つからなかったのですぐに諦めた。それからちらりと猫又の方へ視線を向けると、これだけの人数が部屋に入り込んでいるのに全く起きる気配のない猫又の様子を見て、少しからかうように口をついた。

「眠ったように死んでるな……」

「嫌だなあ犬塚クンってば。それを言うなら、死んだように眠ってる……でしょ？」

とりあえず観客はいないがボケとツツコミが成立したところで、早く二人が戻ってこないものかと手持無沙汰な状態になりながらも、二人はテーブルの上に次々と宿題をする準備を進めた。

猫又は深い眠りに落ちていた。

周囲が多少騒がしくなろうとも、それに気付かない位に深く。

喧騒の中、それより猫又の耳に届くは 雨の音。

懐かしい水音、深く耳に刻まれた雨の打ち付ける音だけが、猫又を更なる深い眠りへと誘って行く。

雨の日の記憶（1）〜サプライズ訪問〜（後書き）

お分かりいただけたでしょうか？（笑）

ハイ、私がこの「猫又と色情狂」を思いついた時に、絶対書きたいとずっと思っていた話、猫又ちゃんが主役のお話です！

「雨の日の記憶」が全何話になるか今はまだ未定ですが、とても大切な部分の話になるのですごく長くなってしまおうと思います。

ですがそれだけ深い話として書き上げていくつもりなので、どうぞよろしくお願いいたしますm（　　）m

## 雨の日の記憶（２）自由を得た猫

さむい……。

おなかもすいたし、すごくさむいよ……。

何が起こったのかわからない。ここがどこなのか、自分に何が起こったのか。何もわからない。

ただわかってるのは、とてもお腹が空いてることと、ものすごく寒いということだけ。

「彼」の目はまだよく見えていない。足を動かして移動しようにもお腹が減り過ぎて、もはや立つことすら出来ない。なので鼻を動かし周囲のにおいを嗅いでみた。何かの湿った臭い。それが何の臭いなのか、幼過ぎる「彼」にはまだ理解することが出来なかった。

「彼」がいる場所は小さな箱の中。無情に降り続ける雨によつて古びたダンボール箱はこれでもかという程水分を吸収し、湿った臭いを放っていた。ダンボール箱の隙間から水が漏れているので、箱の中に水が溜まって「彼」が溺れるということだけは幸いにも免れたようだ。箱の中にいるのは「彼」だけではなかった。「彼」より少し体が大きい三毛猫と、右目を怪我した黒猫が一匹ずつ。

三毛猫も黒猫も生後三ヶ月は経っていたのだらう、「彼」とは違い心身ともに発達していたせいか、自分達の置かれている状況をきちんと把握、理解している様子だった。

自らの運命を憐れんでか、溜め息交じりに三毛猫がぼやく。

『あゝあ、これでオレ達も終わりか。考えてみれば短い命だったな……』

悲觀的に呟く三毛猫に対し、黒猫が黄金色の凜々しい瞳を向けて叱咤する。

『まだ終わりつて決まったわけじゃない。自由を手に入れたつて思えばいくらか気が楽だろう』

『そうは言っても、オレ達これでも飼い猫だったんだよ？ 基本的な餌の捕り方なら、まあ何とかなるかもしれないけどさ。ここは人間社会なんだよ？ 最近じゃ野良猫や野良犬を捕まえる人間までいるって言うじゃないか。捕まったら二度と助からないつて。オレやだよ、そんな危ない生き方するの。……怖いよ』

『な……ん』

今にも泣きそうな声で弱音を吐く三毛猫に、「彼」は小さく鳴いた。二匹の猫が何の話をしているのか「彼」にはよくわかっていない。だけど一匹は明らかに怖がっている。「彼」と同じように不安で仕方がないのだ。「彼」が鳴いたところで何の慰めにもならないかもしれないが、同じように不安に思っている自分がいるんだと鳴いて知らせることで、少しでも励ましになるんじゃないだろうか？ もしかしたらそれを求めていたのは「彼」自身かもしれないが、そこまで自分の心情がわかる程「彼」の心は成長していない。

少しでも自分と同じ者が欲しくて、「彼」自身が擦り寄りたかったのかもしれない。

「彼」の弱々しい声を聞いた二匹は、小さく震える珍しい毛色をした子猫を見下ろした。彼等も猫の毛並みの種類の全てを把握しているわけではない。多くを知っているわけではないが、それでも灰色をしたキジトラ猫を見るのは珍しかった。

まだ目も開き切っていない、生後間もない子猫が雨に打たれ、寒

さと空腹に苦しんでいる。きっと自分がどんな状況に置かれているのか何もわかっていないんだろう。そう思うと自分達よりこの子猫の方がどれだけ不憫か、とても哀れに思えた。

すると黒猫が雨でずぶ濡れになった「彼」の顔を優しく舐めると、顔を摺り寄せ「大丈夫だ」と安心させようとする。

『見る、こんな小さな子もいるんだ。オレ達がすっかりしなくてどうする？ この子はまだ自分の足で立つことすら出来ない子猫なんだぞ。餌の捕り方だって、自分の状況だって何ひとつ理解してない哀れな子猫だ。オレ達で守ってやらなくてどうするんだ』

せめて子猫がこれ以上雨に打たれないようにと、黒猫は自らを雨避けにするように子猫の上に覆いかぶさった。その姿はまるで母猫が子猫を抱き締めるかのようだ。黒猫の言うことは一理ある。猫としての先輩だ。何より置かれた状況を子猫よりは理解している。この先どうすればいいのか全く見当がつかないが、ここで弱音を吐いていても雨は止んでくれないし、餌だって与えてもらえない。

『じゃあさ、どうする？ ここから離れる？ もしかしたらオレ達のご主人様の心が変わって、またオレ達を連れ戻しに来るかもしれないって思ってたさ、あれからもう随分時間が経ったよ！？ 朝が二回も来た。それでもご主人様は来てくれない。代わりにオレ達のことを汚いゴミを見るように通り過ぎる人間ばかりが来るだけだったじゃないか。大体ここからどこへ行ったらいいんだよ』

三毛猫の言いたいことはわかる。確かに黒猫がここを離れようとしなかったのは、三毛猫が言ったように飼い主が戻って来てくれるかもしれないという、淡い期待を捨てられなかったからだ。しかしその期待は裏切られた。自分達は飼い主の手によって捨てられたのだ。もはやここでいつまで待っていても飼い主が来てくれることは

ないだろう。

『それにそいつ、お腹が空き過ぎて自分の足で立てないならさ……。オレ達で連れて行くしかないじゃない。きつとさ、凄く大変だよ？ 自分達のことだけで精一杯なのにさ。一体どうすんのさ？』

それも確かにその通りだ。今から当てもなくどこか安住の地を探し回る為にこの箱から出たとして、子猫を啜えながら移動するのは大変過ぎる。途中で何者かに襲われないとも限らない。かと言って子猫を箱に残したまま移動するのも危険だ。子猫の面倒をみる為にどちらか一匹が残った所で効率も悪いだろう。それじゃいつまで経っても安住の地を発見出来ないどころか、自分達の分の餌にだって在り付けるかどうか……。

『一回この周辺のパトロールしてみたじゃない？ どこも他の猫の縄張りになってたよ。あいつら、オレ達が捨てられたばかりの猫だからせめてもの情けで襲わずに放置してやるって言ってたけど、こうも言ってたじゃない。放置してやるのは箱の中だけだって。箱から出て縄張りをうろつけば、子猫だって容赦しないって』

捨てられた当日、夜間に一帯を縄張りに行っているボス猫に襲撃されたことがあった。その時に右目を鋭い爪で引つ掻かれ、黒猫は右目を失った。今も傷は完治しておらず膿んだ状態である。雨で傷口がズキズキと痛むが、その傷と自分達の置かれた立場のおかげで何とか殺されずに済んだのもまた事実である。

捨て猫の末路は悲惨なものだ。捨てられた直後に心優しい人間に拾われるならまだマシだろう。しかし多くは野犬に襲われるか、戦う力がなければカラスの餌にされてしまうか、人間の子供によって面白半分に虐待されるか、はたまた人間の大人によって命を弄ばれるか。最近よく聞く噂では「保健所」というものが率先して野良猫



を回収することが増えたという話。そのどれにも属さなかった場合、自分の力が及ばなかった際に待っているのは、凄惨な死　つまり餓死である。

それだけは御免だ。せつかく小さな箱庭のような場所から出るこ  
とが出来、自由を得たというのに。確かに飼い主に飼われている頃  
には餌に困ることなどなかった。自分専用の寝る場所だつて与えら  
れた。ただし自由と引き換えに。外を出歩くことさえ許されず、生  
活出来る場所は小さなケージの中。好奇心でケージから出て行こう  
と脱出したら鞭で打たれた。よく見れば他のケージに入っている猫  
達は皆、どこかに傷を負っていた。ご主人様に逆らえば体罰が待っ  
ている。皆、外への憧れを捨ててしまった。ただ生きるに不自由し  
ない環境さえあれば、それでいいのか？　違う。そんなのは猫の生  
き方じゃない。猫は自由であつてこそ、猫なのだ。

『猫は自由であるべきなんだ……』

『え？』

黒猫は箱から出た。それを慌てて止めようとする三毛猫。

『ち……ちよつと待つて！　どこ行くの？　オレも行った方がいい  
の？　でもこいつどうするの？　それにここから出て行ったらボス  
猫が黙つてないよ！』

半ばパニック状態に陥っている三毛猫は足元にいた子猫に気付か  
ず、後ろ足で軽く蹴り飛ばしてしまっていた。しかし空腹でもう声  
を出すことすらままなくなっている子猫は、「痛い」と言いた  
くても言えない状態である。

箱の中の状況にまで目が行き届かないせいで黒猫もそれに気付か  
ない。ただ三毛猫の方へと振り向き、伝えた。

『オレはとにかく何か食べる物を探して来る。何か腹に入れなきゃどこにも行けないからな。この辺を縄張りにしてる連中の目を盗んで行動するなら、一匹で行動した方がやり過ぎしやすいかもしれない。だからお前はここに残って子猫を守っててくれ』

『ええっ！？ オ、オレが！？』

突然大きな役割を任され驚愕する三毛猫。子猫を守れと言われ足を見た時、箱の端で子猫がぐったりしている姿を目にした。守れと言われた矢先に死なれたら困ると思った三毛猫は慌てて子猫の体を舐めた。するとぴくりと反応があったようなので一安心する。しかしほっとしている場合でもなかった。三毛猫は今度こそ子猫をぞんざいに扱わないように、子猫の首根っこを咥えて自分の懷に寄せてから再び黒猫の方へ視線を戻す。

黒猫は言った。まだ傷を負った右目の激痛が治まっていないはずなのに、三毛猫と子猫を気遣うように黒猫は言い放った。

『その箱から動かなければ安全だと、そう言ったのは奴等だ。だからお前達が奴等に襲われることはない、安心しろ。ただしクラスや人間共に限ってはその理屈は通用しない。そうなたらその子を咥えてひたすら逃げる、いいな。オレも早く戻るようにする』

三毛猫が声をかける暇もなく、黒猫は走り去ってしまった。雨の中、全身ずぶ濡れになったまま箱の中に取り残された三毛猫と、寒さで小刻みに震える子猫。餌が手に入らなくてもこの際構わない。だからどうか無事に戻って来て欲しい。自分と子猫だけがここに残されるなんて寂し過ぎる。いや、もしかしたら体力のない子猫はもう持たないかもしれない。もし子猫が死んでしまったら自分一匹だけになってしまう。そんなのは嫌だ。だから早く戻って来て！

三毛猫は必死に心の中でそう祈った。

### 雨の日の記憶（3）～雨から守る壁～

黒猫がダンボール箱から出て行ってどれ位経っただろうか。餌がなかなか見つからないのか、それともよっぽど遠くまで捜しに行ったのか。最悪縄張りを荒らしたと、ここら一帯を取り仕切る猫に因縁をつけられ、襲われているのだろうか？

上を見上げると子猫の毛色と同じ色をした雲が空を覆って、そこから細かい水がずぶ濡れになった自分達を更に打ち付ける。何度体を振って乾かそうとしても、次々と上から雨が降って来るのだ。乾かそうとする行為自体が無意味に思えたが、かといってずぶ濡れのままでもいても全身を濡らす水に体温を奪われ寒くなる一方である。

猫の毛は水を弾かない。雨を凌ぐ場所もなく雨に打たれ続ける現状はまさに死と隣り合わせの最悪な環境にあった。体力のない子猫ならなおさらである。すぐに体温を奪われ、寒さと空腹で死んでしまいかもしなかった。

黒猫が戻った時に子猫が死んでいたら合わせる顔がないと思った三毛猫は、黒猫がしていたように子猫を抱き抱えて少しでも雨から身を守るようにしてやった。体温を奪われないように自分の舌で子猫の全身を舐めてやり、自らの体温もさほど高くなかったがそれでも互いに寄り添うことで温め合えないかと思い、黒猫が戻って来るまでずっと子猫を抱き締め続けた。

それから更に一晩が経ち、夜が明けるが雨は変わらず降り続ける。いつそのダンボール箱から出て行って雨風を凌げる場所を子猫と共に探し歩こうかと考えてみたりしたが、自分達がこの場所を離れたらどうなるかわからない程、三毛猫は愚かではない。

今自分達が居る場所を縄張りとしている凶暴なボス猫を敵に回してまで、ボス猫に対して唯一の安全圏と成り得るこのダンボール箱から出て行く勇気を、三毛猫は持ち合わせていなかった。

かといってこのまま雨に打たれ続け、所在も生死も不明となった黒猫を待ち続ける行為も利口だとは思えない。もし黒猫が無事だったとして、自分達がこの場所を黙って離れてしまったら。帰りを待っていると思っている黒猫が戻った時、自分達の姿が見えなかったら黒猫はどう思うだろうか。

自ら危険を冒してまで自分達の為に餌を探しに行つた黒猫を裏切るという行為は、三毛猫にとってそれはとても大きな罪のように思えた。その罪は黒猫を待たずして、子猫と共にダンボール箱を抜け出して他の場所へと移る行為よりも、ずっと重いもののように三毛猫は捉えていた。

例えば血は繋がっていないなくても、同じ母猫の腹から生まれて来なくとも、自分達は自由の無い箱庭のような世界から放り出された、唯一無二の同志であつた。それは何よりも強い絆のように三毛猫は感じていた。

だからこそ三毛猫は無慈悲に体を打ち付ける雨にも負けず、もう一匹の同志である子猫を抱き抱えたまま、いつ戻るかわからない黒猫の帰りを待ち続けることが出来た。

辺りが薄暗くなり、再び夜がやって来る。

それでも雨は全く止む気配を見せずに降り続け、着実に三毛猫と子猫の体温を奪っていった。ダンボール箱から出て行くことも敵わず、三毛猫は出来るだけ体を温めようと全身をまん丸にし、腹の部分に子猫を押し込むように抱いて縮こまっていた。

空腹で互いの腹の虫が鳴り、打ち付ける雨によつてもう殆ど体が温まることなく寒さで震えが止まらない。がたがたと全身を小刻みに震わせながら、今か今かと黒猫を待ち続ける。

最後に食事をしたのは、もういつのことだろう？

ふとそんな些細なことが三毛猫の脳裏に浮かぶ。寒さと空腹で殆ど意識は朦朧とし、まるで激しい睡魔に襲われているかのように薄

目を開けてぼんやりと考え込んだ。

最後に食べた餌は確か固いドライフードだったような気がする。外気に晒され少ししけたそれを、三毛猫は何も感じることなく食べていたような記憶が思い浮かんだ。檻の中で生活していた時は、飼い主が定期的に餌をくれた。毎日毎日同じ時間に、同じ餌を他の猫達同様に与えられた。それに何の疑問も不満もなく、当たり前のように受け止めていたあの時。

食べても食べなくても決まった時間が過ぎれば飼い主はドライフードの入った受け皿を、再び檻から回収して行く。それは一種の作業であり、そこに何の愛情も感じられなかった。だから三毛猫も、恐らく他の猫達も皆、それに何の違和感を抱くこともなく受け身の生活を続けていた。

それが毎日の日課であり、当たり前前の光景であり、疑う余地もない自然な出来事だった。だから最後の食事の時、あまりお腹が空いていなかった三毛猫はドライフードを全てたいらげることなく、半分位残して食べるのをやめてしまった。

今食べなくてもどうせまた決まった時間に餌が与えられる。それは毎日毎日繰り返されてきた日常の中で確定されたことだから。だから心配なんてしなくても餌に不自由することなんてないのだ。

それが今ではどうだろう。あの時残したドライフードのたったひとかけらだけでもいい。そのたったひとかけらを自分と、腹に抱き抱えている子猫と、黒猫が餌を回収出来ずに戻ってきたら当然黒猫にも、小さく碎いてみんなで分け合うことが出来ただろうに。

どうしてあの時自分は餌を残してしまったんだろう？

どうして自分は「それ」が当たり前前のものだと思ってしまうんだろう？

そう信じ込んでいた自分が今となっては愚かで堪らない。悔しくて堪らなかった。今ではたったひとかけらのドライフードですら、二度と目にすることが出来ないような、とても貴重で大切に豪華なご馳走のように思えてならなかった。

最後の食事を残した自分を恨みながらうつすらと、虚ろに開いている三毛猫の目から雨とは違う雫が零れ落ちて行く。ゆっくりとまばたきをし、降り続ける雨と目から零れ落ちる涙とが混じり合い、三毛猫の顔を更に濡らして行った。

守らなきや。

薄れゆく意識の中、三毛猫のお腹の辺りで微かに動く命の息吹を感じながら、自分が今何をすべきかを改めて実感する。それまでもっと受け身で生きて来た自分。言われるがままこの場に留まり、言われるがまま子猫を死なせないように嫌々頑張ってきた。

自分の命の灯火があと少しで消えるかもしれない。

激しい空腹と、凍えるような寒さと、ダンボール箱の中に取り残された絶望と、かつての自分の愚かさに気付いた三毛猫は、ここに来てようやく自分が今一番何をするべきなのかを悟ったのだ。

ここに残れと言われたから残ってるわけじゃない。子猫を守れと言われたから守ってるわけじゃない。この子には今自分が必要なのだ。今まで何も出来なかった自分は、今こうして子猫を生き長らえさせることが出来ている。本当ならもうとくに寒さと空腹で死んでいたかもしれない小さな猫を、ここまで生き延びさせることが出来たのは自分の努力あってなのかもしれない。傲慢かもしれないがそう信じることで消えかけていた命の炎が再び灯されるような、そんな不思議な活力が戻るような気がしていた。

せめて黒猫が戻って来るまで。いや、もし戻ってこなかったら？それでも親切な誰かに拾ってもらえるまで、この子が生き延びられるようにしなくちゃいけない。生まれたばかりで、まだろくに話すことも出来なくて、か弱い不幸な子猫。

この哀れな子猫に生を感じさせてやりたい。自分は幸せだったのか不幸だったのかよくわからない日々を過ごしてきたけれど、せめてこの子だけは幸せに生きる権利があるはずだ。

何もわからず、何の為に生まれてきたのかもわからないまま死ぬなんてあまりに不憫過ぎる。自分が無為な時間を過ごして来た代わりに、この子には有意義な毎日を送って欲しい。そんな風に自分以外の者のことを真剣に思ったことなど、これまでただの一度もなかった三毛猫が今初めて自分以外の誰かの幸福を心から願っていた。

お前ならきつと、幸せになれるからな。

子猫の幸せを願った時、三毛猫は今まで感じたことのない程の充足感を得られた。こんなどうしようもない自分でも、こうやって命を張れることが出来るんだ。それがわかっただけでも、自分はきつと幸せになれたに違いない。

三毛猫の両目は、そのままそつと閉じられた。

ざあざあと降り続ける雨の中、三毛猫は子猫を抱えたまま動かない。それまで呼吸をする際の腹の動きで子猫は安心することが出来たが、今はもうぴくりとも動かない。

息を引き取って抜け殻となった体でも、雨を遮る壁の役割なら出来る。

三毛猫は死してもなお子猫を守る壁となつて、子猫の側に居続けた。



### 雨の日の記憶(3) ～雨から守る壁～ (後書き)

更新が遅くなって申し訳ありませんでしたm(\_\_\_\_\_)m  
これから先も定期的に月曜更新出来ないかもしれませんが、どうぞ  
見捨てないでやってくださいまし。

きちんと完結目指して頑張るのでよろしく願います。そしてこ  
こまで読んでくださって本当にありがとうございます。

## 雨の日の記憶（４）名もなき英雄

ざあざあと音を立て降り続ける雨。道端に置かれたダンボール箱の周辺をカラス達が仕切りに騒いでいる。耳障りな鳴き声を上げながら飛んだりダンボール箱の中にあるものを突いたりを繰り返していた。

そんな時数匹の猫を引き連れた貫禄ある風体の野良猫がカラス目がけて飛びかかる。ダンボール箱の中身に夢中になっていたカラスは突然の襲撃に更なる声を上げながら、襲いかかって来た猫達に狙いを変えた。

しかしそこに現れた猫はこの一帯をナワバリとして牛耳っているボス猫だと悟ると、カラス達は捨て台詞さながらに鳴き声を上げ空高く飛んで行った。カラス達は民家の屋根の上でボス猫達が去るのを、距離を置いて様子を窺うという選択肢を取ったようだ。

ボス猫はカラス達に傷一つ付けられる所か激戦を繰り広げることなく勝利すると、すぐさま視線はカラスからダンボール箱へと移る。従属するように従っていた一匹の猫が、カラスの反応に目を与えることなくダンボール箱へと近付き中を覗いた。

するとそこには先程のカラス達に突かれ、体のあちこちの肉を食いちぎられた三毛猫の死骸が横たわっている。カラスに襲われ死んだのか、それともそれ以前から既に死んでいたのか。どちらかそれはわからないが、少なくとも最近自分達のナワバリの中に捨てられた捨て猫の内、「もう一匹」が今目の前で死んでいることを確認する。

『ボス、こいつはもう駄目だ。オレ達の忠告を無視しないで、そのままこの中でくたばったみたいですよ』

同情する含みもなく、吐き捨てるように手下の猫がそう言うたボ

ス猫は何の情を示すことなく淡々と返した。

『ふん、そいつはただのクズ猫だったってわけか。少なくともオレ達の忠告を無視して餌を探し回っていたあの黒猫の方がまだ骨があったってわけだな。大人しくオレの言うことに従っておけば、生かしてやったものを……』

ボス猫は数日前の黒猫の奮闘を思い返す。空腹と体力を削られた状態で食い扶持を探し回っていた黒猫。最初は威嚇のつもりで黒猫の右目を奪ってやったが、忠告をした後は容赦することはなかった。ボス猫は黒猫を試すかのように条件を出した。一緒に捨てられた猫を殺してその死体を持ってくれば、黒猫だけなら無条件でボス猫の手下にしてやってもいいと。

しかし黒猫はあっさりその条件を蹴り、こともあろうかボス猫に戦いを挑んだのだ。

当然勝敗は見えていた。弱った黒猫がこの辺一帯を支配するボス猫に敵うはずもない。黒猫は無残にも返り討ちに遭い、そのまま帰らぬ者となった。雌雄を決した場所は河原、黒猫は殺された後に川に投げ捨てられたのだ。

ダンボール箱に捨てられた猫を発見してから数日、黒猫が戻らないことを訝しんで何か行動でも起こしているかもしれないと思ったボス猫は、残された捨て猫の様子を見に来たという次第であった。

しかし結果はあまりにあっけなく、制裁を下すまでもなかったと悟ったボス猫は今頃になって黒猫を殺したのは少々勿体なかったかもしれないと、ほんの少しだけ後悔の色を示した時。

ダンボール箱を覗き込んでいた手下の一匹が何やら叫んだ。

『待ってください、中にまだもう一匹いますぜ！』

その声にボス猫はあまり気乗りしない様子でのしのしとダンボール箱に歩み寄って、中を覗いた。するとカラスに肉を突かれ血だらけになっている三毛猫の死骸の下から、もう一匹　毛色の異なる子猫の存在を確認する。

ぴくりとも動かなかったのでその子猫も死んでいるのかと思いきや、雨の音で聞き逃しかけたが確かにか弱い鳴き声がしたので、死骸の下にいた子猫はまだ生きているのだと発覚した。

ボス猫達の存在に気付いたのかそうでないのか、彼等にはわからないが子猫は自分以外の存在。竦むような鳴き声を上げる恐ろしいカラスとは違う別の存在を感じ取って、それまで動きのなかった前足が微かに動き、辺りを探るように弱々しく湿ったダンボール箱を掻いていた。

その様子を見た手下の一匹が囁くような小さな声でぽつりと呟く。

『この三毛猫、もしかしてこの子猫をかばって死んだんじゃ……？』

そんな何でもない一言にボス猫の興味は、一心に子猫へとそそがれた。ボス猫は必死に、しかし弱々しくもかく子猫の「生きよう」とする姿に感化されたのか。このままダンボール箱の中に残された三毛猫の死骸などは放置し、カラス共にくれてやるつもりでいたボス猫が、突然手下達に思いも寄らない指示を出した。

『その三毛猫の死骸を河原まで運んでやれ』

ボス猫の言葉に手下達は一瞬耳を疑った。元々制裁を下すつもりでここまで様子を見に来たはずなのに、ましてや自分達のナワバリの中に捨てられた猫如きに情をかける筋合いもない。手下達は一匹残らず全員が、捨て猫をこのまま放置するものだと思っていたのだ。自分達が想像もしなかった命令を下され、行動が遅れてしまった手下達にボス猫が先程より少しばかり苛立ちを込めた物言い再度

告げた。

『どうせならこいつの兄弟猫ともいえる黒猫の、奴を葬った河原まで運んでやるんだ。聞こえなかったのか！？』

ドスのきいた声でそう命令すると手下達は慌てて三毛猫の死骸を数匹がくわえて、ダンボール箱の中から連れ出した。ずるずると引きずるように河原へ向かって運ぶ中、残りの手下がボス猫の指示を仰ぐ。

『ボス、こいつはどうします？』

ダンボール箱の中でうつ伏せになっている灰色の子猫。雨を凌ぐ役割をしていた三毛猫が運び出された為に、子猫は遮るものを失って直接雨に打たれる形となっていた。ボス猫は上から見下ろすように弱っている子猫を眇める。

『オレ達に子猫を養う程の余裕はねえ。このまま一思いに殺してやった方がこいつの為になるかもしれないが、それじゃあこいつを命かけて守ろうと戦ったあいつらの恨みを買っちゃまう』

ボス猫の言ってる事を理解してるのかしてないのか、手下達はただだボス猫の指示を待っただけで、ダンボール箱の中にいる子猫とそれを見つめるボス猫を交互に眺めるだけだった。

『あいつらが命張って守ろうとしたこいつの運に賭けてみようじゃねえか。それこそ酷な選択かもしれないが、元々オレ達の助けを求めるわけでもなく、自分達で生きようとあがいてきた連中の形見だ。ここで死んじまえばそれまでのこと。だがな……』

ボス猫はそれ以上の言葉を口にすることなく、言いかけた言葉をそのまま飲み込んだ。

今は亡き黒猫や三毛猫の生き様を、結局は想像でしかないかもしれないがボス猫は脳裏に思い描いてみた。どんな運命でこんな場所へ捨てられたか知れないが、それでも彼等は彼等なりに必死に生にしがみつこうと生きて来た。

ナワバリから退けようと威嚇しても決して怯まず応戦し、負傷してもなお三毛猫や子猫の為に自ら危険を顧みず、ボス猫の忠告を無視してまで餌を探しにダンボール箱の外へ出て行った黒猫。案の定ボス猫による制裁で死に追いつてしまったが、それでも黒猫は自らの信念を曲げることなく最後まで戦い、そして散って行った。

三毛猫に対しても今では黒猫同様にその生き様を見届けたことで、三毛猫なりの信念を見た気がした。子猫よりはまだ体力があつた為にその気になれば子猫を見捨て、自分だけ安全な場所へと逃げることも可能だつたらう。もしかしたらボス猫の忠告に怯え、ダンボール箱から出て行く勇氣すらない臆病者だつたかもしれない。

しかし三毛猫のなれの果てを見た限り、ただの臆病者には見えなかった。そこにはか弱い小さな命を自分の体を使って必死に守ろうとした姿が鮮明に映し出されているように、ボス猫の目にはそう映つたのだ。

そうまでして二匹が守ろうとした命にボス猫は興味が沸いた。この子猫には何かがあるかもしれない。それは単なる思い過ごしかもしれないが、自分の勘を信じてみたくなった。

『名もなき英雄へ、せめてもの手向けだ。こいつに手を出すことはこのオレが許さねえ、いいな』

それだけ言い残すとボス猫はそれ以上取り残された子猫に一瞥も

くれることなく、背を向きこの場を後にした。やっと下された命令に手下達は呆気に取りながらもボス猫に黙ってついて行く。何度もダンボール箱へ視線を送りながら、後ろ髪引かれるようにボス猫同様この場を去る手下達。

たった一匹残された子猫は雨の中、必死で生きようとあがいていた。

もはや体力は殆ど残っておらず呼吸するだけで精一杯、前足を動かすことすら今はもうままなくなっている。それでも子猫は微かに瞳を開け、鳴いた。

名前も知らない。

本当はどこ誰なのかもわからない。

だけど彼等から確かな絆を子猫は感じていた。

必死に生きようとする姿を子猫に示した黒猫と三毛猫。

彼等の姿をぼんやりとしか確認出来なかったが、それでも彼等の思いは十分子猫に伝わっていた。

子猫ながらに彼等の生き様をその身に感じて、それをきちんと受け止めようと思った。

いきなくちゃ。

けどどうしたらいいのか、子猫にはわからない。

ほんのちよつとだけでもいい。

少しでも長く、彼等が望んだ通りに生き続けなくちゃいけない。

子猫はただただ眠気に負けないように、必死になって両目を開ける努力をした。

少しでも寒さを凌げるように本能的に体を丸めて、体温が外に逃げないように工夫してみた。

寒さと、空腹と、襲って来る睡魔と戦いながら子猫は彼等の思いに  
応えようと必死になって生き続けた。

いつまで続くかわからぬ雨に打たれながら、……ずっと。



雨の日の記憶（4）～名もなき英雄～（後書き）

更新が遅くなって申し訳ありませんでした。

そしてここまで読んでくださってありがとうございます。

今後も更新は遅れるかと思いますが、完結目指して執筆活動は続けますのでどうぞ見捨てないでやってください。よろしくお願いいたします～！m（ー）m

## 雨の日の記憶（5）〜運命の出逢い〜

一体どれ位経ったのか。

子猫にとっては数日の感覚であっても、実際には数時間のものであつた。

がたがたと震えながら必死に生き続けようと子猫がダンボール箱の中で体を丸めて縮こまつてしていると、突然雨が止んだ。それまで延々自分の体を打ち続けた雨粒が、子猫の体を打たなくなったのだ。ようやく濡れずに済んだ。

そう思つた子猫であつたがとても不思議な感覚に囚われる。雨が止んだ？

いや、違う。そうじゃない。「雨はまだ降り続けている」のだ。なぜなら子猫がいるダンボール箱の外は未だに雨を打つ音が聞こえてくるからだ。雨音は今も子猫の耳に届いている。しかし、子猫の周囲だけなぜか雨は止んでいたのだ。

訝しげに子猫がそつと顔を上げて周囲の様子を窺おうとした時、すぐ側で声が聞こえてきた。

「まあ、こんな所にいると風邪を引いてしまうわ。

良かったら私の所へ来る？　ねえ、可愛い子猫ちゃん」

少し声音の高い声、しかし愛らしくさえ感じる幼い口調。かろうじて開いていた両目を、子猫は声をかけて来た何者かに向かって一心に注いだ。

目の前に現れたのは淡い桃色の平服に身を包んだ黒髪の少女。

髪の上半分を結び上げかろうじて見える大きな赤いリボンを付けている。片手には黒い柄の先に弧を描くような形で開かれ、骨組みの間の部分には紙が張られていた。それを子猫の真上にかざしてい

た為に子猫は雨を凌ぐ事が出来ていたのだとようやく理解する。

その代わり雨を凌ぐ道具　傘を子猫の真上にかざしていた為に、それを持っていた少女は雨に濡れていた。

子猫は目の前に現れた優しい眼差しをした見知らぬ少女をじっと見つめ、それから精一杯力の限り声を出した。今にも死にかけていた子猫にとって、一鳴きすることがどれだけ困難だろう。

それでも子猫は必死の思いで目の前の少女に救いを求めた。

すると子猫の願いが叶ったのか、少女はにっこり微笑むと傘の柄の部分を上手い具合にダンボール箱の角の部分に引っ掛けて、少女が柄を持たなくても子猫が濡れないように工夫して置いた。

傘が倒れないように慎重に、ゆっくり手を放すと今度はその手を子猫へと伸ばしていく。すっかり濡れになっていた子猫の体を優しく撫でてやる。

それからふと思い出したかのように右手の肘に下げていたきんちやく袋から、一枚のハンカチを取り出すとそれを広げて子猫の体を覆うように、まるで壊れやすい陶器でも扱うかのような丁寧な手つきで子猫の体を撫でるように拭き取った。

全身を柔らかいハンカチで拭かれながら、子猫は少女が自分の体から水気を取ってくれているのだと察する。

なぜそんなことをしてくれるのか子猫にはわからなかったが、少女の微笑む姿を見ているとそれまで寒さで震えていたのが嘘のように、心がぽかぽかと温かくなっていくのを確かに感じた。

それまでずっと寒さに震え、辛く、苦しい思いをして来た子猫。

自分を守ってくれた黒猫と三毛猫の気持ちに応えようと今まで必死になって生に執着してきたが、そのあまりの苦しさには本当は何度も何度も心が折れそうになっていた。

生まれて間もない子猫にとって、「生きる」ということが。

それがどれだけ苦痛に満ちたものであったか。

過酷な環境に打ち捨てられ、食べる物も何もない箱の中でたった一匹で生き続けることが、どれだけ辛いものだったろう。

そんな時に突然舞い降りた幸運。

何の前触れもなく、突然子猫の目の前に現れた人間。

手を差し伸べられ、温もりを与えてくれたこの少女が清浄なものに思えて心が震えた。

きらきらと輝くような微笑。

その笑顔を目にするだけでこんなにも心が安らかになれる。

子猫にとってこんな気持ちは生まれて初めてであった。

自分の命を掬い上げてくれた可憐な少女に、子猫は自分が生きることをもう一度告げたくなった。

嬉しさの余り、子猫は自分の体が衰弱しきっているにも関わらず少女に向かって自分の存在を訴えた。

震えるような弱い声でまた一鳴き、子猫は精一杯の思いで少女に向かって今の喜びを表現してみた。

それが少女にきちんと伝わっているのかどうかかわらないが、それでも何かお礼をせずにはいられなかったのだ。

懸命に生きてる事を少女に伝えることで、子猫は約束を果たせそうながした。

自分の側からいなくなってしまった黒猫や三毛猫への恩返しにな

るような思いで、子猫は自分が生きる事で彼等への思いに応えようとしたのだ。

少女は子猫を抱き抱えながら傘を拾い上げると、優しく声をかけ続けて歩き出す。少女の温かい胸の中で子猫はすっかり安心したのか、全てを少女に委ねるようにそっと両目を閉じて、少女の鼓動に耳を傾けた。

トクン、トクンと少女の心臓の音が、命の音が子猫の耳へ、全身へと伝わる。

その音がまた子猫にとって心地良く、記憶としてはつきりとは残っていないが、まるで母親の腹の中で感じていた胎動を彷彿とさせるような感覚であった。

少女の温もり、生を感じながら子猫はどこへ連れて行かれるのか全くわからないまま、それでも少女にその身を任せていつの間にか子猫は極度の疲労と空腹で、ようやく我慢していた眠りへとついた。

共に捨てられた黒猫と三毛猫のおかげで、子猫はこの世に生き続けることが出来た。

彼等のお陰で子猫は少女とこうして出会っことが出来たのだ。

もし彼等が身を呈して子猫を守ってくれなければ、きっと生後間もない体力のない子猫はすぐに死んでしまっていただろう。

彼等の命が、子猫の命を救ったのだ。

そして命の灯火が消えかけていた時に、再び子猫は命を取り留めることが出来た。

この少女の救いによって子猫の運命は大きく変わろうとしている。

子猫の心を揺さぶった愛らしい少女、ハル。

この出会いが子猫にとっての本当の始まりとなった。

雨の日の記憶(5)く運命の出逢いく(後書き)

相変わらず更新が滞ってしまい、申し訳ありません。

不定期更新になってもこうして読んでくださる読者様がいることは、私にとってとても有り難くてとても幸せなことです。

猫又ちゃんの過去編、もう少しだけお付き合い願います。

## 雨の日の記憶（6）君の存在はあたしにとっての喜びだから

ダンボール箱から救ってくれた少女ハルの腕の中で子猫は安堵し、いつの間にかすやすやと眠りに落ちていた。

それから心地良い眠りから覚めた時、子猫は回りの様子がピリピリしていることに気付く。

うつすらと両目を開けるとまず自分の置かれている状況に目を瞠った。温かい両腕に抱かれた状態、これはダンボール箱から救い出された時と同じように、少女の腕の中に包まれている状態であった。それから上を見ると、初めて出会った時に子猫に向けていたハルの柔らかい微笑は消え失せ、まるで無理矢理笑みを作っているような引きつった表情をしているハルの顔が目に入る。

何かに怯えているような、必死になっているような、そんな張り詰めた表情。

子猫に救いをもたらした少女が一体何に怯えているのか？

子猫はわけもわからないままに、どこか腹の奥が熱くなるような感覚に襲われた。

それは、  
怒り。

自分の命の恩人である少女の笑顔を奪う輩は一体誰なのか、何者なのか？

子猫は不安と怒りに押し潰されそうになりながら、ようやくハルの顔から周囲へと視線を移した。

ハルが立っている場所は広く大きな旧家の前。

木造の二階建てで見渡せる限り見渡してみると、旧家をぐるりと囲う木製の塀が子猫の目からはどこまでも続いているように見えて、



それ位広く旧家の周囲を囲っている様子から、ここがとても広大な敷地であることが容易に想像出来る。

旧家の脇の方には草花が丁寧に入入れされており、綺麗な紫色をした花々　たくさんの紫陽花が雨に打たれていた。

ハルを取り巻く環境、場所は子猫が居たダンボール箱とは比べ物にならない位に過ごしやすそうに見えた。

最も生まれたばかりの子猫にそれを判別する知識などはまだ十分に備わっていないのだが、ダンボール箱という比べるには分かりやすい過酷な環境を知っていただけに、ぼんやりとだが子猫にはそう感じ取れたようだ。

それでは自分の救い主を怯えさせる存在はいかなる者なのか？

子猫はようやくとハルの目の前に立ち塞がる存在へと視線を走らせた。

旧家の大きな玄関先、左右に開閉させる硝子戸が開いており、その先の玄関内には一人の女性が厳しい表情で立っている。

上質な素材で出来た着物を着こなした黒髪の女性。

滑らかな黒髪はぴつちりと頭の上で結い上げられている。白くどこか蒼白にも見える顔色にキレ長の瞳。口元は一文字に結ばれているせいか、上品で美しい容姿とは裏腹にどこか威圧的な雰囲気醸し出している様子がこの女性の象徴としてよく現れていた。

ハルに向かって見下すような、侮蔑を込めたような眼差しで一心にハルの抱き締めている「もの」を睨みつけている。

「ハルさん、『それ』は一体何なんですか？」

威圧的な女性の口から、まるで汚らしいものに対する口調で詰問した。

ハルは反射的に、本能的に両手で抱き抱えている子猫を守るように力を込めて、わずかに女性から距離を離すような形でぐいと横へ逸らす。どうにかして少しでも女性の目から子猫が見えないように足掻いてるようでもあった。

そんなハルの態度が気に食わないのか、それとも一度した質問に答えなかったことに苛立っているのか。

女性は再度訊ねた。

その口調は先程よりも更に刺々しく、苛立ちを隠す様子は微塵もない。

「ハルさん！？ その手に抱えている物体は何なのかと聞いているのです！」

明らかなる敵意。

それに怯えるハル。

子猫は瞬時に察した。

「これ」が少女を怯えさせる原因なのだと。

その「敵」に向かって少女を守る為に威嚇したかったが、情けないことに弱った体ではそれすらも敵わなかった。

ただひたすらに、ハルの代わりに睨みつけるだけが精一杯であった。

ハルは女性の顔を窺うようにもじもじとしながら、そして子猫を隠し通すことが無理だと悟ると、諦めたように白状する。

そつと両手の力を緩めて、ほんの少しだけ子猫が女性に見えるようにするとハルは質問に答えた。

「子猫……、さっきそこで拾ったの」

「汚らしい、さっさと捨ててきなさいな」

即座に返された辛辣な言葉にハルの心臓の音が加速した。

「でも……っ！ 可哀想……」

愛おしそうに子猫を抱き締めながらハルが必死に女性へ懇願する。しかしその女性にとって子猫という存在は汚らわしい獣以外の何物でもないらしく、子猫を可哀想に思っているハルの言葉に耳を傾けるような気配は微塵も感じられなかった。

むしろ女性の怒りは子猫だけに向けられてるわけではないらしく、そもその怒りの矛先はハル個人に突き付けられてるように見える。それをハルは最初からわかっていたのか、本能的に女性を避けるような体勢で今もびくびくと怯えている様子であった。

憎しみと怒りに満ちた冷たい瞳をハルに向けて、それから両腕に抱き抱えている子猫を奪い取るうと手を伸ばした瞬間、子猫は渾身の力を込めて前足を振りかざした。

子猫の爪が女性の手を引っ搔く寸前、あわやという所で誰かの手が伸びて来て女性の手を掴み、子猫の攻撃は空振りする。

しかし子猫が自分を攻撃したことをしっかり見ていた女性は、口元を歪めて更に憎悪を増したようにねめつけた。

だが女性の怒りを鎮めようとするように、先程手を掴んで子猫の攻撃が当たらないようにした人物が、女性とハルの間に仲裁に入るように立ち塞がる。

「まあまあ母さん、それ位にしときなって！」

学生帽を目深に被り、ハルより身長の高い青年が笑みを浮かべながら軽い口調で諭そうとする。

真っ白なカッターシャツに黒いズボン、この時代の学生服を身に纏った十五歳の青年と、いつの間にかハルの隣に立っていざとなっ

たら自分がハルを守る盾となるように寄り添っている十二歳の少年。彼はハルのように着物を普段着とした格好で、頭は殆ど坊主頭といつても良い位に短い。

二人は実の兄弟で、ハルの前に立ち塞がる女性の実の息子である。元々この家の主はハルの実の父親であり、目の前にいる女性はハルの実の母親ではなく、ハルの父親の再婚相手であった。二人の息子を連れて父親と再婚した為、ハルをかばうように現れた二人の兄弟はハルにとっては血の繋がりのない義兄弟だ。

しかし二人の兄弟は母親の再婚によつて義理の妹となったハルを非常に可愛がつており、まるで実の兄妹のように仲良く暮らしていた。しかし父親と二人の兄弟の愛情を一心に受けるハルのことを毛嫌いするように、継母となった女性だけは兄弟がハルの味方することを快く思っていなかったようだ。

その度にハルは二人の兄弟の目の届かない場所で執拗に折檻せつかんされるようになっていた。

わけもわからず憎まれ、体罰を受けるハルは女性の事を継母だと認識しつつも本能的に彼女に怯え、避けるようになっていた。何も知らない父親の代わりに、この二人の兄弟が継母からハルを守るという役目を自然と請け負うようになっていた。

二人の兄弟の登場により、継母はそれ以上文句を言うのを諦めてしまう。なぜだか継母は実の息子達に逆らうことが出来ずにいた。それはこの家で唯一本当に自分の味方と成り得る人物は、自分と同じ血が流れたこの二人の兄弟しかいないことを理解していたからである。ゆくゆくはこの旧家を自分の長男が継ぐと信じて疑っていないので、その長男の機嫌を損ねるといふことは自分が一生この家で安泰に暮らすという約束が出来なくなるかもしれないということとも重々承知していた。

自らの安寧を優先する余り、継母は自然と長男に表立って逆らうことは出来なくなっていたのだ。

タイミング悪く二人の兄弟が現れ、これ以上は自分の思い通りにすることが出来ないと悟った継母は鼻を鳴らしながら何も言わず家の中へと引っ込んで行った。

継母が去る背中を見送って、ハルはようやく安堵の息を漏らした。それから自分を助けてくれた二人の兄に礼を言う。

「ありがとう、お兄さん。でも……お義母さんのあの様子だと、この猫ちゃんは……」

言いかけたハルに長男が平然と言い放った。

「母さんの言うことなんて気にするなよ！ この家のことは義父さんが決めるんだ。だから母さんじゃなく義父さんに頼んでみな。義父さんはハルの言うことなら何だって聞いてくれるって！ こんなに可愛い猫なんだもん。きっと飼うのを許してくれるさ！」

「そうだよ、それにこいつ凄く珍しい品種かもしれないし。回りの奴等に自慢出来るかも！」

次男も続けてハルを慰め、それから三人で仲良く炊事場へ足を運ぶと、子猫が食べられそうな物が何かないかこの家の炊事係に聞いてみることにした。

ハルは子猫を抱き締めながらほっと溜め息をつく。二人の兄弟の手助けにより、ハルは子猫に食事を与えることが出来、それから父親が仕事から帰って来るまでの間、家政婦の助言により念の為子猫を獣医師に診せに三人で雨の中、動物病院まで子猫を連れて出掛け、子猫を診察してもらった。

幸運にもこの獣医師とハルの父親は旧知の仲であり、診察代などは後で父親に話を通すということで、ハル達はこの場で子猫の診察

代を払わずに、そのまま帰宅して獣医師に教えてもらった通りに子猫の世話をする事が出来た。

子猫はかなり衰弱していたようだが、体力は既に回復傾向に向かつており、このままミルクを与え続け、体温調節もしっかりして安静にしておけばすぐに元気になると獣医師に言われ、ハルは心の底から喜んだ。

その間も継母はハル達のやり取りを遠目に眺めながら面白くなさそうにツンとし、見て見ぬ振りを決め込んでいた。

家政婦の手助けもあり、ハル達は父親が帰って来るまでしっかり子猫の面倒を見ていたが、すっかり疲れていたのか子猫はそのまま気持ち良さそうに目を閉じて、ぬくぬくと心地良い眠りにつこうとしていた。

そんな時、遠くの方でハル達の声が耳に入りながら子猫はじつと無意識に耳を傾ける。ハルの声はとても心が安らぐ。まるで子守唄のように自然と耳に入ってきて、子猫の気持ちを和らげてくれる。ハルの声にはそんな不思議な力があつた。

「お父さん、猫ちゃんを飼ってもいい？」

懇願するようにハルが父親に頼み込んでいた。それに倣うように二人の兄弟も一緒に頭を下げて許しを得ようとした。

父親はちらりとそっぽを向いている継母を、それから奥にあるハルの部屋で寝ている子猫とを交互に見つめ、それからハルの泣きそうな顔を見て判断した。

「仕方ないな、お前がそこまで必死なら飼ってもよろしい。だが子猫の面倒はちゃんとお前達が見るんだぞ？」

父親の了承に喜び叫ぶ三人の子供達を余所に、継母は夫の言葉に

驚愕し表情を歪めて悔しそうにしていた。

嬌声を上げていたハル達はハツと子猫に気付き慌てて口元に両手を当てて、すぐに沈黙する。それからハルは愛しそうに子猫の側に寄り添うと、優しく子猫を撫でつけ囁いた。

「良かったね、今日からお前はあたしの家の子になったんだよ？  
そうだ、お前に名前を付けてあげなくちゃね」

まどろみの中、子猫は薄眼を開けてハルを見つめる。天使の微笑みとはまさにこのことを言うんだろう。ハルの笑顔、大切そうに触れてくれる小さな手、その全てが子猫を幸せで満たしていた。

「お前との出会いはあたしにとってすっごく大きな喜びになったから……、そうね。これからもあたしが喜びのを助けてくれる？ お前の存在があたしにとっての喜びだから、きつとお前はあたしにとってとても大切な存在になれるわね。だからお前の名前は……、喜助。そう、今からお前は喜助だよ！」

喜助。

それが自分の名前。

これから先、ずっとハルの側に居て、ハルの笑顔を守る為に、そしてハルが喜んでくれる為に。

自分はずっとずっと、永遠にハルと一緒にいるんだ。

雨の日の記憶（6）君の存在はあたしにとっての喜びだから（後書き）

いつもいつも更新が遅くて申し訳ありませんm（――）m  
そしてそれでも拙作を読んでくださって誠にありがとうございます。

今回ようやくハルの家族の一員となって、なおかつ「名前」をもらった猫又。

猫又にとって「喜助」という名前がどれだけ大切なものだったか、ずっと前に「名前」について猫又がマジギレしてたのを、果たして何人の読者様が覚えてらっしゃるでしょうか（笑）

一応序盤から色々伏線みたいなものを散りばめてきてるので、色々上手い具合に回収出来たらいいなと思ってます。

それでは今後も「猫又と色情狂」をよろしくお願いいたします。



## 雨の日の記憶（７）～宿命の好敵手との出会い～

『ねえハル、これはなに？』

全身に灰色の縞模様があるキジトラ猫、喜助は興味深そうに雨で濡れた地面の中へ潜って行こうとするミミズに鼻先を近付けて一鳴きする。

びくびくしたように前足でちょんちょんとミミズを突くように、前足の先が少し触れたら瞬時に引つ込めるという仕草を繰り返す喜助の行動を見たハルは、くすくすと楽しそうに笑っている。

「あんまりミミズさんを苛めては駄目よ、喜助」

『みみず？ こいつ、みみずっていうのかハル！』

勿論ハルには喜助の言葉など理解出来ていない。それでも彼等はまるで意思の疎通が出来ているように一緒に中庭を駆け回っていた。まるでこの世に存在する数多の物事をハルに教わるように、喜助は色んな物に興味を示してはそれが何かをハルに訊ねた。

『これはなに？』

『ねえ、これは？』

『なんだこれ、へんなの！』

『ねえハル！ おしえて、おしえて！』

自分が知りたい事をハルは笑顔で教えてくれる。喜助は最初、ハ

ルには自分の言葉が通じているのかと錯覚していた。しかし細かな内容がハルに伝わっていないことから、ハルは自分の所作を見て勘を働かせ察してくれているのだと理解する。

はつきりと言葉が通じているわけではなかったが、喜助にはそれで十分であつた。

あの地獄のようなダンボール箱の中での時間が嘘のように、あれがまるで質の悪いただの悪夢だったかのようになり、今では何もかもに喜助は満たされていた。

温かい寢床、毎日ちゃんと食事を与えてもらえ、大好きなハルと一緒に過ごすことが出来る。

喜助は今、心底満たされていた。

しかし問題が何一つなかったというわけではない。

ハルを毛嫌いする存在、継母のことが喜助は大嫌いであつた。

何かにつけてハルに文句を言つては叱り、酷い時には体罰も辞さなかった。その度に喜助は小さな体で必死に継母を威嚇したが、それは全くの逆効果となつて更にハルを窮地に追いやる助けとなつてしまつたのである。

自分にもつと相手を恐れさせるだけの力があれば、あの継母からハルを守つてやれるのに。それが喜助にとって唯一の悩みの種であつた。それでもハルには味方がたくさんいたことに変わりはない。

どういつた経緯があるのか喜助にはわからなかったが、継母の実の息子である兄弟は自分達の母親よりむしろハルに味方することが多かったのだ。喜助の手に余る事態に陥つても、この兄弟 特に長男を連れて来さえすればハルが守られる事を喜助は知っていた。

『くそ……、ぼくだってハルをまもつてやれるのに。ただちよつとちからがたりないだけなんだ……』

そうぼやいたところで小さな猫が大の大人に立ち向かつたとして

も全く歯が立たないことは、喜助にも十分理解出来ていた。でも喜助が人間の言葉を話せたなら、それで継母に文句を言ってやる事が出来たなら自分にだってハルを守る力になれるのだと、喜助はそう信じていたのだ。

ハルの父親に関してはあまり戦力として喜助は考えていなかった。確かに父親はどちらかといえばハルの味方になることが多かったが、それでも継母がハルを毛嫌いしていることを認知していながらも、そのことに関して少し注意をするだけで殆ど放置しているに過ぎなかったからだ。

ハルが苛められているのを知っていて、それで継母に罰を与えない父親の事が喜助は好きになれなかった。

人間社会のことはまだよくわからない。

この家の主はハルの父親だ。それに逆らっている継母を糾弾して縄張りから追い出さない辺り、人間というものは犬とも猫とも全く異なる価値観を持っているのだと喜助は勝手に理解した。

月日は流れ、喜助もハルも成長した。

継母による確執があったものの、喜助もハルも幼い頃と全く変わらぬ愛情を分かち合い、そして互いになくてはならない存在へと関係を育んで行った。

そんな時だった。喜助の前に「敵」が現れたのは。

『ハル……、こいつ誰？』

喜助とハルが出会ったのは、ハルがまだ五歳かそこらの頃。

今や十五歳という年齢を迎えたハルはこの地区で最も優秀な学院の女学生へとなるまでに成長していた。

そんなハルが、ある日一人の男を家に招いたのだ。

黒髪の短髪、ほんの少し日に焼けた肌をしており、瞳は聡い雰囲気

気を醸し出している。体つきは軍人として数年前に家を出た頃の長男とさほど変わらず、割としっかりしていた。

だが男の顔には無愛想といってもよい仏頂面の面が張り付けられており、その顔つきが更に喜助を不快な気分にした。

そもそもハルが見知らぬ男を家に招くことは非常に珍しいことである。ハルがまだ十かそこらに通っていた学校の同級生で、喜助がハルと出会う前から幼馴染みであった犬塚呂尚以外に、この家に他人の男が出入りすることは滅多になかったのだ。

玄関前で喜助は座り込んで、喜助が居ることではなかなか家に上がれないままの男と睨み合いのようなことが続く。

喜助の機嫌が悪くなっている様子に真っ先に気付いたハルは仕方がないわねと言ったような笑みを浮かべると、これまで何不自由ない生活を送り過ぎたせいであつぷりと体中に脂肪を蓄えてしまった喜助を両腕で抱き抱えた。

抱き抱えた時、ハルの腕には喜助の柔らかい肉が乗っており、それを横目でちらりと見た男はわずかに表情を緩ませる。

それを嘲笑と捉えた喜助は完全に頭に来て、男に向かって牙をむいた。

「ほらほら、そんなに怒らないで喜助」

自分を嗤った男になぜそんな寛容でいられるのか理解に苦しんだ喜助は、全身の毛を逆立てたままハルを仰ぐ。

『なんでっ？ どうしてこんな男をかばうような言い方するのさ！ こいつオレを見て嗤ったんだぞ？』

ハルの腕の中で暴れる喜助を見て、男は少し驚いた風に口を開いた。

「ハルさん、この猫……まるで俺達の言葉がわかっていっているような様子ですね」

『わかつてるような、じゃない！ わかつてるんだよ！』

会話が出来ないことは喜助も十分にわかっていた。しかし初対面の他人にこんなことを言われたのは初めての経験であった。これまでも何度かハルと一緒に居る時に他人に出会ったことはあったが、誰も猫が人間の言葉を理解しているようだと言った者は一人もいなかったのだ。しかも今回は遭遇してまだ間もない。たったこれだけの様子を見ただけでそんなことを言い出したのはこの男が初めてであった。

まるで自分とハルのことを何もかも知り尽くしているような、喜助のことを悟っているような、そんな不快な気分がより一層強くなっていく。腹の奥に何か別種の生き物がもぞもぞとうごめいているような奇妙な感覚、すっきりとしない不安のようなものが喜助の中に広がって行った。

この男の真つ直ぐではあるがどこか見透かすような瞳に、喜助は自分の存在を脅かされているような感覚に襲われた。

男の目を見ているとまるで自分よりずっと強大な化け物と対峙しているような威圧感に気圧され、本能的に萎縮してしまう自分にまた腹が立つ。だが本能には勝てない喜助は、そのまま勢いが萎んでしまつて大人しくなってしまう。

ようやく喜助が落ち着いたのだと勘違いを起こしたハルは、喜助の機嫌を取るように優しく頭から尻尾の付け根までを何度か撫でつけないが、目の前の男の紹介をした。

「この人はね、学院で仲良くさせてもらつてる猫又征四郎さんっていうの。猫又だなんて、変わつてるでしょ？ 私には喜助がいるか

らなぜだか妙に親近感がわいてしまつて。それで今日は家で一緒にお茶を飲みませんか？とお誘ひしたのよ。だから喜助も仲良くしてあげてね、お願い」

そついうハルに喜助はただならぬ雰囲気を感じ取つていた。

ただ仲良くしているだけの男友達ならば餓鬼臭い犬塚呂尚である程度どういったものか理解はしている。ハルにとってはそれ以上でもそれ以下でもない、ただの「友達」だ。

そんな感情の中に「喜助以上の感情」をハルは持ち合わせていなかった。だからこそ犬塚呂尚がどんなにハルに対して下心を持つて近付こうとしても、ハル自身にそんな感情は一切なかった為にこれといった不安も心配も呂尚に対して持つていなかったのだ。

しかしハルの猫又征四郎に対する態度、  
表情。

それを目にした瞬間、いや……正しくはハルから醸し出される柔らかな雰囲気から。

喜助の中に芽生えた不快な感情が、まず何が原因で発生したものなのかを今更ながらに理解した。

猫又征四郎を紹介する時のハルの声音が一気に変わった。それはハルの父親に対するものとも、兄弟に対するものとも明らかに異なる。声音は非常に柔らかく、優しく、これまでずっと喜助にのみ与えられるものだと思つていた「愛情」そのものだった。

愛情を込めた口調に喜助は不安にならずにいられたかった。

他の男と接する態度と明らかに違う。そこには乙女特有の恥じらいと嬉しさ、喜び、照れ。そのどれもが入り混じつており、そのどれもが猫又征四郎に対する愛しさの表れであるように見て取れた。

ますますもつて喜助は戸惑う。これまでになかったことだ。そんな日が来るとも思つていなかった。

喜助はハルと猫又征四郎という名の男の顔を交互に見つめ、だんだん頭の中の整理がつかなくなつていく。

『え？ え？ ハル？ まさかそんな……っ！』

それからようやく理解する。

二人の目と目が見つめ合い、互いに目で会話するように、楽しそうに微笑み合う姿を。喜助には到底入り込む余地のない二人と自分との大きな溝を見つけてしまった。

ハルの腕の中で、ハルの鼓動が聞こえる。とくんとくんと聞こえる音は徐々に早くなって行く。

喜助は焦った。このままではこの男に大切な飼い主を取られるかもしれないと。そんな危機感を抱いたのだ。

そして決断する。

ハルと楽しそうに接するこの男、猫又征四郎を力の限り、精一杯の憎しみを込めて。それは世間で言うところの「嫉妬」であったが、今の喜助にそんな括りは必要なかった。

男を「敵」だと認識する理由が例えば嫉妬から来るものであっても、そんなことは関係ない。

事実さえあればそれでよかったのだ。

とにかくこの男は、喜助にとって最大最悪の敵となることを今ここで認識した。

『こいつは敵だ！ オレからハルを奪おうとする奪略者なんだ！』

嫉妬に燃える喜助と、それが猫又征四郎との出会いであった。

## 雨の日の記憶（７）～宿命の好敵手との出会い～（後書き）

皆様、おはこんにちばんはでございます。

もはや一ヶ月更新になってるのでは？という疑いを拭い去れない今日この頃。

本当に申し訳ないです、執筆しようにも全く筆が進まないということとを世間では「スランプ」と呼ぶのでしょうか。

話の大体の構成は出来上がっているのですが、細かな部分にまで思考が行き届かず全く執筆に集中出来ておりません。

しかし作品をこれ以上劣化させるわけにもいかないので、とりあえず調子の良い時に書き上げ、また休む……ということを繰り返させてもらってます。

ただの自己満足な趣味で始めた執筆活動に、ようやく「他人に読ませる」ということを意識して書くという努力を心掛けるようになってからというもの。

脳内の物語を形にするということがこれ程大変なこととは思いませんでした。苦勞しながらもそれをやつてのける他の作家さん達は心から尊敬に値します。

まだまだ文章や表現方法、描写、何から何まで未熟ですが「猫又と色情狂」という物語の世界を少しでも楽しんでいただけたらと思っております。

そして熱中症にはご注意ください

ここまで読んでくださりありがとうございました。



## 雨の日の記憶（８）―忠告―

猫又征四郎との出会いから喜助にとって災難の日々が続いた。

災難といっても彼から直接何かをされたわけではない。あくまで喜助がそう思い込んでいるに過ぎなかった。その中でも最たる内容といえやはり、ハルとの関係が一番問題となる点だった。

喜助の感覚からいってもやはりハルと遊ぶ時間が極端に減っていたのだ。ハルが勉強に励む為に毎日学校へ通わなければいけないので、当然喜助と一日中一緒にいるわけにはいかず自然と共にいる時間がなくなってしまうのは当然であつたし、それはハルが学校へ通うようになった日からずっと変わらず続いていたことであつた。

しかしそれでもハルは学校から帰ったら必ず喜助を構つてやつたし、学校で起きた出来事などを喜助に話して聞かせたりもしていた。ハルと離れている時間が増えてしまった喜助にとって、ハルと一緒にいる時間がより一層貴重で大切なものになつていったのも無理はなかつたし、そんな時間が喜助にとって最も待ち遠しい時間になつていたのも当然といえは当然であつた。

喜助にとって最も大切な飼い主と共に過ごせる時間、最も幸せな時間。

それはハルが喜助に、猫又征四郎を紹介した後にも忘れず続けてくれたのは確かであつたが、明らかに以前とは異なつていた。喜助にとつて一番幸福に感じられる時間に、あの男の話題ばかり提供させられることさえなければ……。

「ねえ喜助。征四郎さんってね、とても面白い方なのよ。今までこんな男の人に会つたことがないわ」

『それだけの変態？　ハル、特殊な男つてのはただの変態って言うんだぜ』

勿論喜助の言葉などハルに理解出来るはずもない。

喜助の厭味たらしい悪口などハルに届くわけもなく、ハルは笑顔のままなおも征四郎について語り続けた。

「征四郎さんのお家って代々陰陽師の家系なんですって。喜助、陰陽師って知ってる？ 私はよく知らないんだけど、占いか妖怪退治をしたりする人なんだって。征四郎さんにもその力があるみたいな。私は幽霊とかお化けなんて見たことがないから、そんな存在を見たり話をしたり出来る征四郎さんがなんだか羨ましいって思う気持ちと、征四郎さん自身は怖くないのかなって不思議に思う気持ちとが入り混じって……だからかもしれないわね。征四郎さんのお話を聞いていると私の知らない世界を知ることが出来るみたいで、とても興味深いの」

ハルはまるで自分がないものを征四郎が持っていることに強く惹かれてるように語っていた。ハルには霊を見るとどこか気配を感じることも出来ない、そういった霊感が全くないごく普通の少女だった。だからこそ自分には到底触れることの出来ない世界に直接触れることが出来る征四郎に興味を抱き、好意を抱いたのかもしれないと喜助に話して聞かせる。

ハルは霊界自体に興味を抱いたわけではなかったが、今の喜助に不安を抱かせるには十分な内容だった。

ある日、ハルが学校から遅く帰宅した際に夜道は危険だと征四郎がハルの家まで送って来た。ハルの帰りが遅いことを心配していた喜助は、ハルが通う学校から家までの直線の道を何度も何度も往復してはハルを探していた時、二人一緒に夜道を歩いている場面を目

撃してしまった。ハルが何者かに襲われたりしないよう、安全の為に征四郎が付き添っていたわけだが喜助にとっては征四郎自身も危険人物に変わりない。それでもハルは征四郎に完全に気を許し、呑気に会話をして歩いている姿に喜助の胸はざわめいた。

『ハル……、オレがどんなに心配してたか…… お前にはわからないのかよ。いつもなら真っ直ぐに家に帰って来るはずなのに。もしかしてこんな遅くまでそいつと一緒にいたんじゃないだろうな？』

喜助の嫉妬は止まらなかった。相手はハルと同じ人間であり、自分分はただの猫…… 飼い猫に過ぎない。だが喜助にとってハルは自分と同等の存在であると同時に、かけがえのない飼い主に他ならなかった。いつしかそれが独占欲に繋がっていることに気付いていない喜助は、人間である征四郎に対する憎しみを抑えることが出来ずにいたのだ。

やがてその思いはハルへも向けられていることすら、喜助は気付いていなかった。

喜助は他人の家の屋根伝いから二人を睨りつつ後をついて行く。二人は楽しそうに会話をしながら真っ直ぐにハルの家に向かっていく様子だ。時折聞こえてくるハルの笑い声が更に喜助の心を揺さぶる。

その微笑みは自分だけのものはずだったのに。

自分以外とこんな風に楽しそうにするなんて、許せない。

そんな思いが喜助の心を支配していた時、ふと征四郎が喜助のいる方へと振り向いた。その刹那、喜助は思わず身を隠してしまう。こんな夜遅くに、猫が屋根の上を歩いていたところで何を不思議がる必要があるのだろうか。しかもこんなに暗い夜道、わずかな月明かりで猫の目が反射して征四郎に存在を知られることもあるだろうが、それが喜助だと断定出来るとも思えない。

確かに喜助の毛色は珍しかったが、光の乏しい闇夜の中で果たし

て喜助の毛色をはつきりと見分けられるだろうか。そう、征四郎が振り返ったところで二人を見張り、後をついて行く猫がハルの飼った猫だと彼がはつきりと断定させることは殆どないはずだった。それならば彼が喜助の姿を見つけたところで、相手はただの猫だ。人間である征四郎がそんな「ただの猫」を訝しんだりする必要があるだろうか？

そう、そんな必要はないはずだ。

なのに喜助は反射的に征四郎の視線から逃れようとした。それも咄嗟に、どこか怯える程の勢いで。

征四郎はじつと上を見上げ、何者かの姿を探した。その時ハルがどうしたのかと声をかけ、ようやく屋根の上から視線を外すと再び二人は帰路を急いだ。

喜助の心臓は今にも胸を突き破るような勢いで高鳴り、動悸がかなり激しくなっていた。二人がやっと歩きだしたことを確認すると、喜助は今度は更に慎重に二人との距離を大きく取りながら、それでも見失うことのないようにゆっくりと後をつける。

喜助は初めて征四郎に恐怖していた。

圧倒的な力で威圧されてるような、そんな恐怖感が治まらない。

征四郎という男は明らかに他の人間とはどこか異色だった。それは見た目とか態度とか、そういった表面的なものではなく、喜助自身にもうまく表現出来ないが、それは目に見えない力のようなもので自分の存在すら圧倒するような、そんな圧力を感じたのだ。

言うなればこの世で最も最悪な天敵に出会ったような、対峙するような、そんな感覚に近かった。

やがて喜助は理解することになる。喜助にとつてとても最悪な運命が、この後待ち受けていることに。

ハルが家に戻った時、喜助は自分が家にいないといけない。

喜助は二人が家まで近付くと先回りして家に辿り着き、何食わぬ

態度で玄関先に待機した。ハルが学校から帰宅する際、喜助は玄関先でハルを出迎えるのが通例となっていたのだ。

喜助にとってそれが飼い主であるハルへの礼儀でもあったし、それが自分自身のハルへの愛情表現のひとつであった。

やはり現れたのはハルの姿だけではなかった。そこには猫又征四郎の姿もある。喜助は先程の恐怖心を払いのけるように心を強く持つて、精一杯平然を装った。

ハルが喜助の姿を見つけ、ただいまと声をかけるとそのまま抱き抱える。喜助は嬉しそうに甘えた声を出しながらごろごろと喉を鳴らした。その光景を目にしながら、ふと征四郎がハルにあることを訊ねた。

「ハルさん、そういえばこの猫……喜助は今年で何歳になるんですか？」

征四郎の突然の質問にハルは一瞬目を丸くした。喜助もまた自分に興味を持たれたことに怖気を感じる。

しかしそのすぐ後にハルは征四郎が喜助に興味を持ってくれたのだと思うと、快く答えた。

「喜助は拾い猫だから正確な誕生日はわからないんだけど、私が見つけた時は生後数日って感じだったわ。だから今年で大体十歳は迎えてると思うの。猫にしてはとても長生きでしょう？ このまま喜助にはもっともっと元気でいてほしいけど」

ハルは笑顔でそう言うと、心から喜助の健康と長寿を願い、喜助に頼ずりする。頼ずりするとハルの頬に喜助の毛が付いて来たが、それに慣れているせいかハルは喜助を抱っこしながらも何とか片手で顔についた毛を振り落としていた。

ハルが喜助を愛しく撫でている光景を気にすることなく征四郎は

しばし考え込んだ後、奇妙なことをハルに告げる。

「……ハルさん。喜助はよく外を歩き回りますか？ 時間帯など関係なく」

「え？ ええ……、基本的に喜助は放し飼いにしてるから。猫は縛られるのがよくないみたいで、自由に家を出入りさせてるけど」

それからまた征四郎は少し考え込むと、重い口を開くように話した。

「そう……ですか。ハルさん、喜助はもう放し飼いにしない方がいいかもしれないです。奇妙な事を言ってるかと思うでしょうが、その。喜助は猫の年齢でいったら高齢の部類に入りますからね。どんなに元気そうに見えても、十年を超えた猫は老齢なんです。外にはどんな危険があるかわからないですから、室内で飼うようにした方がいいですよ。喜助は不満に思うでしょうが、不慮の事故が起きるよりずっとマシだと思いますし」

忠告するような口調で征四郎が告げる。ハルはそれを聞いて少し怪訝に思った。しかし征四郎の言葉にも一理あったのは確かである。ここ最近では自動車というものが流通していて、自動車が道を走ることが珍しくなくなっていた。それによって道を歩く際には十分注意するように周囲からよく言われていたのだ。

それは人間だけでなく自動車という存在を理解出来ない犬や猫の類の方がもっと注意しなければいけないことだろう。征四郎はそれを懸念し、忠告してくれているものだとはハルは察した。

少し唐突のように聞こえたのも確かであったが、それに逆らう理由もハルにはなかった。

まだ完全に鵜呑みにしたわけでもないがハルは征四郎の言葉に礼

を言い、今後喜助を一匹で歩き回らせないようにすると誓う。

その時、家の中から次男坊がハルを心配し玄関まで急いで出てきた。

外出してる際の連絡手段が少ない為、帰宅が遅くなることを告げられなかったことは仕方ないが、それにしても遅すぎると次男坊から説教をされている時、ハルから解放されていた喜助の側に近寄る存在があつた。

玄関先で説教されているハルの背中を見つめている喜助に、征四郎が声をかける。猫に向かつて話しかけるといふ光景は実に奇妙なものだった。ましてや喜助と征四郎は全くの他人、何の関係も関連もない者同士だ。

「喜助、お前に俺の言葉が理解出来ているのなら是非聞いて欲しいことがある」

その言葉に喜助は違和感を覚えた。今まで他人が猫である喜助に向かつて真剣に話しかけてきたことなんてただの一度もなかったからだ。それは初めての経験であるし、何より気持ち悪いものだった。この人間は喜助が人語を解するという事実を理解して、その上で話しかけている。

その事実があまりに不気味で、喜助は思わず反抗する態度を忘れてしまい、その場に固まつた状態で征四郎を見上げていた。

「これから先、お前は選択を迫られる。それはお前の一生を左右する大きな選択だ」

唐突にそう告げられ、喜助はわけがわからないままオウム返しのように聞き返す。

『選択？ 一体何の選択を迫られるってんだ？』

相手は猫又征四郎、しかし喜助は征四郎の神妙な面持ちから何か重大なことを知らされているのかという緊張感が芽生え、つい相手が敵であることを忘れ素直に問うていた。しかし征四郎はそんな喜助の問いに答えることなく、そのまま話を続けた。

まるでハルがいない間に、この瞬間にしか告げることが出来ないともいうような様子で、征四郎の視線は真つ直ぐと玄関の方で次男坊と話をしているハルから逸らさぬよう注意しながら、喜助に向けて言葉を発する。

「お前は近い内、残酷な選択をしなければいけない。だがそれは選択次第で回避出来るものだ。お前が本当に心の底からハルさんのことを大切に思っているのなら、そして残酷な選択を回避したければ、しばらくの間外出するのを控えた方がいい。俺から言えるのはこれだけだ」

無表情の中に切羽詰まったような焦燥感を漂わせた征四郎の横顔から、それが真実味を帯びた言葉だと理解した喜助は不安に駆られた。突然敵だと認識している人間から意味不明な言葉を投げかけられ、その詳細を説明されることもないままあしろこうしろと言われたところで素直に従えるはずがない。

むしろその言葉の真意を、理由を話してもらわなければ納得出来るわけがなかった。

不安が増している喜助は自然と声の音量が上がって、追いすがるような形で征四郎に詰め寄る。

『おい、わけわかんねえぞ！ お前は一体何の話をしてるんだよ！ ハルが何だって？ 選択って一体どんな選択なんだよ！ それを言ってくれなくちゃどうしようもねえだろうが！ なあおい！』



どうにか征四郎から詳しく聞いてやろうと詰め寄った喜助であったが、傍から見れば大きな鳴き声を上げて征四郎を威嚇している光景にしか映らず、玄関先から喜助の鳴き声を聞きつけたハルが慌てて戻ってきた。

「まあどうしたの、喜助！ 征四郎さんにおいたをしちやいけないわよ」

喜助が野生の本能を剥き出しにして征四郎に襲いかかろうとしているように見えたハルが、征四郎から喜助を引きはがすように抱き上げると、まるで人間の赤ん坊を宥めるように「よしよし」と言いながら、優しく背中や頭を撫でつけて落ち着かせようとしていた。

しかしそんなことで喜助が落ち着くはずもない。征四郎からまだ何も真相を聞き出していないのだから。

せめてこれから自分の身に何が起きるのか、誰から何を選択させられるのか、ハルと何の関係があるのか。

何か知っているであろう征四郎からそれらを聞き出さない限り、喜助が落ち着くことなど不可能だった。

『言えよ！ 言えつてば！ お前はオレに何が言いたいんだ、答えろよっ！』

一向に落ち着く気配を見せない喜助に対し、ハルは困ったような表情で征四郎を見つめると、ひとまず家まで送ってもらった礼を言うところのまま帰ってもらおうと促した。

征四郎もまたハルというより喜助を気遣うような眼差しで何度か振り返りながら、一礼すると門外へと消えて行った。

残酷な選択？

ハルを大切に思うなら？

そんなことをお前に言われる筋合いなんてない。

オレはお前なんかよりずっとハルを思ってる！

大切に思ってる！

だから何を言ってるか知らないが、お前に心配される謂われなんかねえ！

このオレがハルを襲うとでも言うのか。

そんなことをこのオレがするはずない！

ハルを傷付けることなんて、このオレがするわけないんだ！

他の奴等にもそんなこと絶対させない！

このオレが絶対にさせないんだ！

オレがハルを守るんだから、この先一生！

あいつの言う通りになんかならないんだ、絶対に！

やっぱりオレは、あいつのことが大嫌いだ！

## 雨の日の記憶（8）～忠告～（後書き）

毎度のことながらトトロ口更新ごめんなさいです。

スランプというわけでもないのですが、どうにもプライベートが忙しく執筆する為の十分な時間が取れず、集中力も長く続かないという状態がずっと続いてこんな体たらくになってしまってます。楽しみにしてくれてる読者様には大変心苦しいです。

完結だけは必ずお約束しますので、どうぞ長い目で見守ってください。ありがとうございました。

今後も一ヶ月更新、あるいはそれも叶わない月があるかと思われませんが、今後も「猫又と色情狂」をよろしくお願いいたします。

重ねて、ここまで読んでくださり本当にありがとうございますm（

ー）m

## 雨の日の記憶（9）ハルの気持ち（前書き）

あとがきに謝罪と更新が遅れた理由（言い訳）を綴っています。  
読まなくても構わないですが、気が向いたら……どうぞ（^| ^ ;）

## 雨の日の記憶（9）ハルの気持ち

喜助は後悔していた。

なぜハルの言う通り、外出することを避けなかったのか。そのまま言うことを聞いていればこうして「彼等」に捉まることもなかったはずであった。

いや、もしかしたらそれを見越した上での「忠告」だったのかもしれない。

まさかとは思うが、これが偶然であるとは到底思えなかった。

ハルの言葉を見無視したことは喜助にとって飼い主の言いつけを破る行為であったが、それ以上に猫又征四郎へ対する抵抗の表れであったと言った方が正しかったかもしれない。

「外へ出るな」という言葉は飼い主であるハルからの言葉ではなく、征四郎に従った言葉であると喜助は捉えていた。だからこそその言葉に従うということは征四郎を認めたことになってしまう。喜助はそれが最も苦痛であった。自分にとって最大の好敵手である相手の言う事を聞く義理はない。

その言葉の裏にどんな意味が隠されていようと、喜助はハルの言うことしか、自分が唯一認めた、愛した飼い主の命令にしか絶対服従しないということを貫こうと思っていたのだ。

しかしそれも結局は矛盾した行為になる。

忠告の出所が征四郎であったとしても、それをハルが口にしたことで飼い主の命令となる。

そこにどんな意味が、意図が、含みがあるうともそれが覆ることはない。

喜助はそれに逆らったのだ。

だからこそ、これは報いかもしれない。

愛するハルの言葉に従わなかった、これが喜助に対する罰なのだ。

ハルが征四郎に忠告されたその日から、喜助は外出することを禁じられてしまった。

厳密に言えば喜助一匹で家から出ることを禁止されていた。ハルと一緒にいる時ならば一緒に家の外まで出歩くことも出来たが、基本自由を好む猫にとって飼い主の監視付き、しかも出歩く距離が限定されてしまうとなると非常に窮屈な生活と言わざるを得なかった。

ハルも暇ではない。四六時中喜助と一緒にいるわけでも、片時も目を離さないというわけには当然いかず、どうしてもハルが喜助の側を離れなければいけない時は、喜助の首輪に細い紐を付けて家の縁側にある柱に括り付けておいた。

晴れの日ならば縁側で日向ぼっこが出来る。縁側を下りた側には喜助専用のトイレがこしらえてある。ハルが面倒を見られない時の為にわざわざ準備したものである。継母が特に気に咎めていた猫の糞尿の処理、これだけはどうしても継母を煩わせるわけにはいかない。ただでさえ未だに喜助の存在を否定してる継母だ。

これを理由に喜助を家から追い出しかねないと思ったハルは、次男に相談し、簡易的ではあるが喜助専用のトイレを作ったのである。とはいっても凝った造りではなく、ただ単に縁側の側に底が浅いボールがひとつきり。その中には砂をたくさん入れてあるだけだ。数日放ったらかしにするわけではないので、ハルが帰宅した時にこのボールの中に喜助が用を足した物をハルが毎日片付けるのだ。

喜助の面倒は自分が見ると言った。その言葉を違えることなく、ハルは喜助の餌やりも糞尿の後始末もきちんと愛情持ってこなしてきたのだ。

「ごめんね喜助、こんなトイレで。お前も色々不満があると思うけど、我慢してね」

ハルは喜助に謝り、いつものように優しく頭を撫でる。

喜助にかかればトイレの場所などいくらでも確保出来るのだが、

こう紐で拘束されては行動範囲が限られてしまう。確かにこのトイレはない、と喜助は思った。

ぶくぶくと肥えた喜助の体にこのボールは心許ない広さである。これでは用を足した後にちよつと砂を掻き出しただけでボールの外に砂を散らす結果になるのは、喜助の目から見ても明らかであった。これも継母の手を焼く必要のないようにと作つたものであるとわかつてはいたのだが、これでは砂を掻き出す喜助自身もかなり気を使わなければならない程だった。

これはこれでハルが喜助の為に思つて作つたものなんだと無理矢理納得させ、甘えた声で鳴いてみせたが、自分でもどこか虚しい声に聞こえたのはきつと気のせいではない。

一匹で歩き回るといふ自由が無くなつただけで、こんなにも不便な出来事が増えてしまう。それならいつそ征四郎の言うことなんて聞かなければいいのにと喜助は思ったが、ハルに言葉が通じない時点でそれを伝える術はなかった。

とにかくハルの為にも我慢するしかない。

最初はそんな風に思えた。

しかしそんな思いは数日経たない内にすぐさま消えてなくなつてしまった。

そもそも理由がいまひとつよくわからない。

今までずっと自由に過ごして来たのに、ぱつと出てきた人間の男の言葉一つでどうして自由を奪われなければいけないのか？

その理由をきちんと説明し、納得いくようなものであつたなら喜助も理解し、大人しく従つていたかもしれない。

しかし実際はどうだろう。

意味深な言葉を言われただけで、その具体的な理由は何もわかつてはいない。

ただわけもわからず自由を奪われ、行動範囲を制限され、外界から閉ざされたような気分を味わっているだけだ。

やがて喜助の胸の奥底からふつふつとした怒りが湧いて来た。

むかむかとやるせない怒りに、喜助の気性は荒くなる。やがてその怒りはハルの家でお手伝いをしている者達にまで及んだりした。実際に怪我をさせることはなかったが、喜助に何もしていないのに威嚇したり、引つ掻く素振りを見せたりしたおかげで、お手伝いの者達が喜助を怖がるようになってしまった。

その凶暴さに継母がヒステリーを起こしたりしたが、それ以上の粗相をしたわけじゃないのですぐさまハルの父親や次男に宥められ、その場を収めることは出来たが、ハルだけはそうはいかなかった。外出出来ないことによほどストレスが溜まっているんだろうと思ったハルは、その日から喜助の側にいる時間が増えたりした。

それでも根本的な解決には至らない。

ハルの口から征四郎の名が飛び出す度に、喜助はハルであろうと容赦なく不機嫌な態度を取るようになってしまった。

（一体どっちが大切なんだ？ 征四郎か、オレか。オレが大切なこんな紐、取ってくれよ！ オレは外を出歩きたいんだ！ 前みたいに自由に歩き回りたいんだよ。ハルは知らないかもしれないけど、オレにだって友達はある。悪友ばかりだけど、適当な会話をしたり一緒に昼寝したり、近所にいたずらして遊んだり。オレにだって猫同士の付き合ってもんがあるんだ。だからお願いだよ、ハル。あんな奴の言う事なんて聞いてないで、オレからこの紐を取ってくれよ）

しかし喜助の思いとは裏腹にハルが喜助一匹を自由にすることはなかった。

ハルもまた辛かったのだ。日に日に喜助が不機嫌になっていくのは飼い主としてずっと見て来たハルにだってよくわかっていた。それでも征四郎に言われた言葉が頭から離れずにいたのだ。



喜助同様に言葉の全てを理解したわけじゃない。核心を語ることなく、どこか遠回しに話していた征四郎の言葉の半分も理解していなかったのだらう。それでもハルにはある光景が目に見えようだった。

もし喜助が自動車に轢かれてしまったらどうしよう。

無機質な物体が無情にも愛する飼い猫を轢いてしまったら。

ゴムで出来た素材で、ハルも触れたことがあるが思っていた以上に固かったあのタイヤ。地面の上を走るあのタイヤに喜助が巻き込まれてしまったら、それはどれだけ無残な光景なんだろうと。

想像しただけでも恐ろしかった。それを征四郎から教わったような気がした。最悪の事態を招く前に飼い主がそれを事前に阻止しなければいけない。それが出来るのはハルだけなんだと思った。

そして皮肉にも征四郎からそれを教わってから、ハルはこれまでに何度か自動車に撥ねられた動物の死骸を目にするようになった。

その殆どは野良猫で、悠々と道を歩いていた猫が猛スピードで走る車に轢かれ、死んでいる姿が大半だった。

ある猫は車にぶつかった衝撃で体が弾んで道の端に転がっていた。ある猫は車のタイヤに踏みつぶされ、かろうじて猫だと判別出来る程度にぐちゃぐちゃになっていた。

そんな事故が車の普及と共に後を絶えず、死体を片付ける市役所の職員はうんざりしていると誰かが話しているのを聞いた。

そう、これは喜助の為なんだ。

ハルはそう自分に言い聞かせ、少しでも喜助の機嫌を取るようと、更に甘やかして育てるようになってしまった。

しかしそんなハルの思いとは裏腹に甘やかされている喜助は更に増長し、ハルに牙をむく行為こそしないが少しずつ付けを破るようになっていた。喜助自身ハルに忠実でありたいと思う気持ちがまだ残っているのか、ほんのささいな抵抗のつもりでわざとハルに怒られるようなことをやり始める。

最初は用意された餌を決まった時間に食べずに残し、後になって台所で食べ物を拝借して困らせてやるうかと実践したが、喜助は自分の首輪から伸びる紐が縁側の柱に括り付けられたであることをすっかり失念しており、結局夕食の時間までひもじく鳴く羽目になってしまったのは言うまでもない。

これまでハルの言いつけ通りに生活してきた喜助にとって、ハルの定めたルールに逆らうことが思っていた以上に困難であることを今頃になって悟る。しかし喜助は諦めなかった。先程の作戦は浅慮過ぎた。せめてこの紐が届く範囲で出来る抵抗を示さなくてはいけない。そう考えた喜助が取った行動はやはりトイレの中で用を足さず、わざと縁側の周囲あちこちに糞をばらまく程度しか思い付かなかった。

猫の糞が縁側周辺に散らばっているのを先に発見したのは家のお手伝いさんである。ほぼ悲鳴に近い声を上げるや否や真っ先に縁側へやって来たのは継母だった。継母もまた奇声を発するとお手伝いさんの手に持っていた箒を取り上げ、喜助を殴りにかかる。

紐の範囲は限られていたが、重たい体を揺らしながら継母の攻撃を回避する喜助。激昂した継母がこれでは埒が明かないと喜助の首輪に付いた紐を掴み取り、それをぐいぐい手繰り寄せてあっさりと喜助を捕獲した。

さすがの喜助も自由を奪われた状態では成す術がない。継母の怒りに狂った般若のような顔が間近に迫り、恐怖におののいた喜助が断末魔のような鳴き声を上げた時、ハルが駆け寄り継母から喜助を救出した。

縁側に散らばった喜助の糞を指さし怒鳴り散らす継母にハルは始終平謝りしている。そんな飼い主の姿を見てさすがにこれはやり過ぎてしまったかもしれないと反省の色を見せる喜助。結果的に喜助は自由を取り戻すどころかハルの信用度を格下げしてしまっただけに終わった。

ハルを困らせたところで自由を得られるわけではない。そんなこ

とは最初からわかっていたはずなのに、やるせない怒り、不平不満、征四郎への嫉妬、それらが喜助の心を一杯に満たし、冷静な判断を下すことが出来なくなっていたようだ。

ようやく落ち着きを取り戻した喜助は、縁側に散らかした喜助の糞を懸命に後処理したハルを見やる。その顔からはいつもの屈託のない笑みが消え失せ、どこか悲しみの色を浮かべていた。

そんなハルの沈痛な面持ちに胸が痛んだ喜助はその場から逃げ出したくなった。しかし紐によって行動範囲を制限された喜助がハルから逃げることは敵わない。ただただハルの方を見ないように、視界に入らないように背を向けるだけだった。

その間にもハルが鼻をすすする音が聞こえてきた。

泣いている？

自分が泣かせてしまった。

それに気付いた途端、喜助の胸に激痛が走る。

いたたまれない気持ちに襲われた喜助は、紐を食いちぎってでもその場から逃げ出したかった。

しかしそんなことをしてもハルを更に悲しませるだけだ。

ハルは自分を必要としてくれているはずなのだから。

喜助だってハルがいなければ生きてる価値もない。

この命はハルからもらった大切な生命なのだから。

やがて喜助は逃げ出そうとする気持ちを捨て去った。

申し訳なさそうにゆっくり後ろを振り向くと、月の光を浴びたハルがこちらを見て優しく微笑んでいる。

少し泣き腫らした瞳がやけに痛々しかった。

ハルはゆっくりと両手を広げ、喜助を迎える。抱っこを求めている。

あんな酷いことをした喜助のことを抱き留めようと、ハルは両手を広げて笑っている。

いつもの優しい微笑、喜助が大好きな笑み、とてもとても大切なハルの両腕の中へと喜助は歩み寄った。

少し震えた声で鳴く。

殆ど涙声に近い声で鳴きながら、喜助は精一杯ハルに謝った。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

そんな喜助をハルは優しく抱き締め、頭を、背中を撫でる。

耳元では囁くような細かい声でハルが「喜助」と名を呼んだ。

そして消え入るような小さな声で、最後にこう言ったような気がした。

「ごめんね、……喜助」

## 雨の日の記憶（9）ハルの気持ち（後書き）

かなり更新が遅くなって申し訳ありませんでした。

ここから先は見苦しい言い訳です（笑）

実はこの話をパソコンで書いていた時、突然エラーになってしまい、保存どころかバックアップもとっていなかったたので、全文失う羽目になってしまったのです！

そしてまた最初から書き直すことに……（´；；´）

まあ全文書き直す前に、あまりのショックにしばらく執筆する気力を完全に失ってしまつて放心状態。そのまま数カ月が過ぎる結果となつたのです。

とりあえずこうして無事に書き上げることが出来たので、即日更新と相成りました。前回からかなり日数が経つてしまつてるので、この話の内容どころかこの作品自体忘れ去られていないことを切に願つております（笑）

本当にお待たせしました！

そしてごめんなさいm（―――）m

今後もよろしくお願いいたします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3216j/>

---

猫又と色情狂

2012年1月10日20時26分発行